
運命の人

まる。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の人

【Nコード】

N8936U

【作者名】

まる。

【あらすじ】

クリスマス夜の夜、平凡な会社員の彼女の前に、突如現れた中性的な顔立ちの紳士。積極的で、大胆で、Going My Wayな彼に彼女は翻弄されつ放し！

惹かれあっているのに、色々な弊害が邪魔をして、中々前に進むことが出来ない二人。

1枚のCDがもたらした二人の出会いを果たして、『運命』と言えるものなのだろうか？

30代の女性が主人公のじれったくて、切ない大人のラブストーリー

—
です。

第1話〜運命の始まり〜（前書き）

かなり軽めではありますが、性的な愛情表現、又、合意ではない行為が含まれる描写がありますので、そういった類が苦手な方は、お引取り下さいますよう、宜しくお願い致します。

第1話〜運命の始まり〜

深夜の繁華街を、足を引きずるようにして歩く。

いつにも増して今日は人通りが多く、辺りを冷静に見渡せば、仲睦まじいカップルばかりで、現在、一人身の彼女には、結構堪える状況だ。

横目でそれを見てはため息が次々に出てくる。

世間は誰かの誕生を祝って浮かれていて、その誰かの事を全く知らない者までもが、ここぞといわんばかりに盛大にお祝いするのである。

ああ、もうこんな所から早く抜け出したい。

そんな気持ちを抱きつつ、彼女は家路を急いだ。

ふと、頬に何か冷たいものを感じ 反射的に空を見上げると、ポツリポツリと次第に強くなって行く雨足に目を開ける事が難しくなり、すぐに上げた顎を引き寄せた。

しかし、まあ、こんな日に雨とは・・・思わずほくそ笑んでしまふ。

ひとときわ明るく賑やかな店を見つけ、彼女はそこに飛び込むと、その店内も又、多くのカップルでひしめき合っていた。

雨が落ち着く迄の我慢、と自分で自分を慰めながら、沢山並んでいるCDを見つめていた。

「？」

ふと、一枚のCDジャケットに目が留まった。

誰のCDなのかは全くわからなかったが、彼女は思わずそれに手を伸ばす。と、同時に大きくて綺麗な手がもう一方から伸びたのが判り、彼女は慌てて手を引っ込めた。

「あ、すみません」

俯きながらそっぴい残し、そのCDを手にする事を諦めてその場を立ち去ろうとすると、

「 待って」

透き通る様な声に呼び止められ振り返ると、中性的な顔立ちのその人が、申し訳なさそうな顔をして立っていた。

“ わぁ・・・綺麗な人”

思わず見とれてしまう程、手足が長く、黒くて肩まである綺麗な髪。

大きな目に長い睫毛とスツとした鼻筋が印象的で、カチツとした全身黒のスーツに身を包んだその人が男性なのだと、次に発せられた言葉でやっと気付いたほど、美しい人であった。

「あの、‘僕’の方こそごめんね。コレ一枚しかないみたいだし・・・どうぞ」

「あ、いえ、いいんです！ただジャケットが素敵で、ちょっと見てみたかったです・・・」

そう言つと何故か彼の顔がみるみる笑顔に変わっていく。初めて会ったのに、こんな表情をする彼に一瞬心が奪われた。

「僕も・・・僕もそう思ったんだ！ジャケットが素敵だなんて。彼にそう言っても『何処が？』って言われちゃって」

彼が親指を立て少し離れて立っていた、恰幅のいい男性を指差した。

『そうですか。』と、彼女は愛想笑いを浮かべると軽く会釈をし、その場を立ち去ろうとしたが、また呼び止められてしまった。

「あ！待って待って！コレ持ってって」

そう言っつて、彼女の手を取ると、CDを強引にその小さな手にのせた。驚いた彼女は、又手を引っ込めて、二度と渡される事の無いように、手を身体の後ろに回す。

「ほ、本当にいいんです！又買いに来たらいいだけですから」

一瞬触れた彼の手がとても暖かくソフトで、恥ずかしくて手を振り解いたと言っつた方がいいかもしれない。

次第に顔が熱くなるのを感じて、激しく動揺した。

そんな彼女の態度を見た彼は、アゴに手を置き困つたと言わんばかりの顔をしている。

次の瞬間、何かいい事を思いついたような表情を浮かべ、

「わかった。じゃあコレは僕が買うよ、ありがとう。」

そう言っつや否や、足早にレジへと向かった。

彼女はなんだかそこにいるのが居心地悪くなり、雨が降る中外へ出た。

“ なんだか今日はついてないような気がする ”

信号はことごとく全て赤。

雨の中、傘も持たずに信号待ちをしている彼女にはため息しかない。

ふと、さっきのCDショップの彼の事を思い浮かべ、

“ 素敵な人だったなあ。連絡先とか聞けたらなあ・・・ ”

と、不謹慎な事を考えてしまった自分が恥ずかしくなり、煩惱をかき消すように頭を左右に振った。

しばらくして、後ろから誰かが走ってくる水音が聞こえ、それがだんだん彼女の方へと近づいてくる。

「・・・あの！」

振り返ると、近づいてきた足音の主は先ほどのCDショップで会った彼だった。

吐く息は白く、鼻の頭が赤くなっている。

この寒さの中、コートも着ずに追いかけてきたのだ。

「え？何か・・・？」

彼は何も言わず、買ったばかりのCDと自分が今さしている傘を彼女に差し出した。

彼女は自分が置かれている状況が把握できないでいると、彼が痺れを切らして彼女の手を取り、傘とCDを無理矢理渡した。

呆気に取られている彼女に向かって、ニッコリと微笑みながら、

「メリークリスマス」

「……あ！え？……ちよっ」

そう言うと、彼は手で雨をよけながら、急いで引き返していった。信号が青に変わっても、彼の後姿を見えなくなるまで見つめていた。

「……うそ。」

彼の姿が完全に見えなくなっしてから、ふと袋の中を見てみると、神秘的な森にたたずむ小さな少女が描かれたジャケットのCDとともに、どうやら彼の名刺と思われるものが入っていた。

その名刺の裏を返すと、慌てて書き留めた風な走り書きがあることに気付く。

<聞き飽きたら返してね>

ついていない日だと思っていたのに、一気に幸せな一日に逆転する。

この時、二人の運命の針が動き出したとは、当の本人は愚か、誰も気付くはずも無かった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第1話〜運命の始まり〜（後書き）

こんにちは、まる。と申します。

現在、こちらで連載中の「青空の下で君を想う時」とあわせて、「運命の人」もく毎日1話更新！>を目指して掲載して行くつもりです。

「運命の人」はR15指定に設定はしておりますが、ごくごく軽い内容となっております。（多分・・・）
では、今後とも宜しく願います。

更新時間は今のところ23時頃となっております。

第2話〜待ちわびて〜

良く晴れた日曜日の朝、ベランダのプランターに水を上げながら、彼女はあの日の事を思い出し出していた。

誰も一緒に過ごす人がいない彼女に、突如降って沸いたプレゼント。
ト。

あの時、一瞬触れた彼のぬくもりが、まだ手の甲に残っているように感じる。

部屋から流れ出るあの時のCD。

彼女は、ベランダに置かれた木目調の椅子に腰掛け、温かいミルクティーに手を伸ばした。

両手でそのぬくもりを感じながら、あの日起こった出来事を、何度も、何度も思い返す。

あの日から2週間ほどたっている。

このCDは明らかに<借りている>ものなんだから、そろそろ返さなくては・・・そう思いつつ、部屋の中を振り返っては、電話をじっと見つめた。

マグをテーブルに置いて部屋の中へと入ると、電話の横に置いてある名刺を手にとった。

<小田桐 聖人>と書かれた、おそらく彼であろう名前、思わず笑みが零れ落ちる。

「聖人・・・かあ。なんか名前とピッタリな人だなあ。」

初めて会ったのは、奇しくもクリスマスの夜で、そして見ず知らずの自分に、成り行きとはいえ、雨の中わざわざ追いかけてきてま

で、クリスマスプレゼントを渡してくれたのを思い出し、心がほんわかとなってくる。

名前の右下に書いてある電話番号を確認しようと、見ればメールアドレスが記載されている事に気付いた。

“今日は日曜日だし、職場に電話してもきつとこないよね？万が一、居たとしても、お仕事の邪魔になるといけないから、メールを出した方がいいのかな・・・それともこの住所に送り返す方が・・・”

そんな事を考えながら、しばらく電話の前をウロウロと行ったり来たりして、人生初めての経験に、彼女は どうしていいものかと、頭を悩ませていた。

ただ、一つ言える事は、“彼にもう一度会いたい”と強く願っている自分が居ること。

会ってどうなるわけでもないとは思っているが、その気持ちが、日に日に彼女の中で大きくなってきているのは確かなことだ。

受話器に手を伸ばしては離すを繰り返し、拉致があかない彼女は自分に目標を掲げた。

“12時になったら電話してみよう！”

で、もし電話に出なかったら・・・郵送しよう。”

12時までまだ少し時間がある。

そう思うと、落ち着かなかった気持ちが、すっと軽くなるのがわかった。

彼女はベランダに戻り、すっかり冷え切ったミルクティーを手に

取り、部屋の中へと入った。

緊張を解きほぐす為に、残っていた仕事を片付けようと、PCの電源を入れたが、どうしても時計が気になってしょうがない。

予定の時刻に時計の針はおかまいなく進んでいく。

もういつその事目標を取り消そう、何度もそう思った。

10分前になると、彼女はもうたまらなくなり、又部屋の中をウロウロと歩き回りだす。

“き、今日は日曜日だし・・・きつとこないよね”

会いたはずなのに、矛盾にも彼が電話に出ない事を願っていた。

とうとう時間が来て、彼女は覚悟を決め受話器を手にする。

震える自分の指先を見て、余計に心臓の音が激しくなったのに気付かない振りをして、大きく深呼吸してからダイヤルした。

でも、最後の番号を入れる前に、どうしても番号が押せなくて、慌てて受話器を下ろしてしまう。

「ああー どうしよう・・・緊張するよー」

チラリと部屋の時計を見れば、12時から5分過ぎていた。

「もし彼が仕事だったとしても・・・もうこの時間ならランチに出ちゃってるかな？って、ああ私何考えてるんだら・・・」

今度こそ！という気持ちで受話器を取り、最後のボタンまでぐっと押し込んだ。

「お、お、押しちゃった……」

プルルル……と呼び出し音が鳴り、彼女の胸の音も最高潮を迎えていた。

ガチャツ

つ、繋がった……！

「あ、も、もしも……？」

彼女はハツとして思わず息を呑んでから、声を出す。
が、思いも寄らず、機械的な音声が受話器の向こうで流れ出し、
彼がやはり不在だと言う事を確信する。

「ああ やっぱりお休みか……」

緊張の糸がプツリと切れ、大きく肩で息を吐く。

しかし、不思議なもので、あんなに電話に出たらどうしようと思
っていたのが、いざ、いないとわかると一気に落胆するなんて。
勝手な自分に半ば呆れつつ、あきらめて、受話器を耳から離そう
としたその時、機械的な音声が途中でかき消され、あの時の柔らか
い声が、受話器の向こうから聞こえだした。

(Hello?)

彼だ！彼に違いない！そう確信した。

「うあつ！あ、あの、すいません……」

” “英語?!ど、どうしよう、びっくりして変な声でちゃったよ・

(. . . . あ、はい。もしもし?)

日本語に変わってホツとしたのも束の間、彼女は困惑した。英語で電話に出た彼にもおののいたが、それより何より、電話を掛けるまでにかなり時間があつたはずなのに、セリフを全く考えてなかつたのだ。

「あ、えつと、その・・・」

(.)

きつといたずら電話だと思われているに違いない。

そんな事を想像する余裕はあるのに、肝心のセリフが全く思い浮かばない。

震えた手で、頭の髪をくしゃつと握り締め、目をギュツと瞑りながら、なんとか言葉を搜す。

「私、あの・・・その、CDを・・・」

(. あー!あの時の?)

覚えていてくれた!

そう確信して、一気に彼女の緊張がほぐれた。

「あの・・・ごめんなさい。お仕事中に電話してしまつて。」

(ううん 大丈夫だよ。電話くれてありがとう。)

「その・・・お礼が遅くなつてすいません。CDありがとう。」

ます。そろそろお返ししなければと思って。」

(返す?)

「え? ええ。 頂いた名刺に『飽きたら返して』って……」

(ああ、あれは冗談だよ。そのCDは君が持っていていいよ?)

「冗談?」

(うん。)

「あ、でも傘も……」

(それも別に返さなくていいよ、傘なんていくらでも持ってるから。)

「そんな……見ず知らずの人にそこまでしてもらうのは……」

(あれは僕からのクリスマスプレゼントだよ?)

「……はあ。」

彼とはもう会えないんだ。

その気持ちが彼女の中で大きくなってきた。

あの日から、今の今までわくわくした気持ちが、やはり自分だけだったのだと痛感した。

「じゃあ お言葉に甘えさせて頂きます。……ありがとうございます。ありがとうございました。」

(いえいえ。)

「では……。」

一気に脱力感に襲われて、そのまま受話器をおろそうとした時、

(あ! ちょっと待って!)

と慌てた彼の声が聞こえ、急いで受話器を戻した。

「は、はい???」

(あ……、そう。うん、やっぱり返してもらおうかな?)
「え?あ……はいっ!」

明らかに彼女の声のトーンが上がる。

(僕、あの後ね 自分のプライベートフォンの番号を書くの忘れちゃったなあと思って、引き返したんだけど、もう君の姿は当然見当たらなくなってる……。

職場の電話番号しか書いてなかったから、きつともう電話もらえないと思ってたんだ。

……だから電話もらえて嬉しいよ)

彼と又、会えるかもしれない。

そう思うと、勇気を振り絞って電話したかいがあったと、自分を褒めてやりたかった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第3話〜欲望〜

もう会えないと諦めかけていた彼女に、一筋の光が差し込んだ。

あの後、彼とは1時間も電話で話をしてしまい、彼のランチタイムは無情にも終わりを告げた。

不思議だ。

初対面の人とこんなに話が弾むとは思っても見なかった。

彼の透き通るような柔らかい声、まるで包み込まれて居るような優しい話し方に、いつしか夢中になり、肝心な話は後回しになっている。

（あつと、あつと、・・・もっと話して居たいけど、そろそろ仕事に戻らないと。）

「あつ、ごめんなさい！お昼食べてないんじゃない・・・」

（ああ、平気。こんな事しよっちゅうだからね。）

彼としては、彼女への気遣いで言った言葉だが、既に彼の事が気になって仕方が無い彼女は、『君と話すのに、夢中になってしまった。』と欲して欲しい気持ちが心の奥底にあつて、少し息苦しくなる。そんなだから、‘女’と言う生き物は、煩わしいわづらひと言われるの
だろうな、と一人納得した。

何故、こんなに心が揺れるのか

何故、こんなに気持ちが落ち着かないのか

何故、こんなに彼に会いたいのか

心の奥底では判っているはずなのに、彼女はその自分の気持ちを

まだ受け入れる事ができないでいる。

まだ一度しか会っていない人なのに、そんな気持ちになるなんてありえないと、理性が彼女の邪魔をするのだ。そんな事、生まれてきて一度も経験した事がない彼女は、それを認めると今まで生きてきた人生を否定するような、そんな気がしたのだ。

（とりあえず、そうだな・・・19時にウェリントンホテルのロビーで）

「あ、はい！ わかりました」

待ち合わせ場所はホテルのロビー。さすがに普段着では行けそうに無い、いやホテルでなくても・・・だ。

彼女は今日とこの日の為に、新しい服を新調した。

履き慣れないピンヒールを履き、雨も降っていないのに紳士物の傘とCDを持って颯爽と出かける。

周りからどうい風映っているだろう？

紳士物の傘が、なぜだか誇らしげに思えた。

約束通りの時間にホテルのロビーにつくと、辺りをキョロキョロと見回しては、彼がまだ到着していない事を確認する。

ドキドキする気持ちを落ち着かせるように胸の前で両手を組むと、何処からか甘い香りがふわっと漂った。

この香りは・・・

そう思った瞬間、肩をトントンと叩かれ彼女は笑顔で振り返る。そこにはあの日のあの彼が、あの日と同じ笑顔で立っていた。

「お待たせ」

やはり綺麗な人だ。

彼女は見惚れてしまって声が出せず、ただ首を左右に振った。

「じゃあ、行こうか」

彼女の胸の前で組まれた手を彼がおもむろに掴むと、後ろも振り向かずどンドン歩いて行く。

歩くスピードについていけず、彼女は少し小走りになるほどだった。

あの日触れた暖かい彼の手はソコには無く、冷たい感触だけが彼女の手の甲に伝わってきた。

「ど、何処へ？」

問いかけても彼は見向きもせず、黙々と足を進めている。

エレベーターホールでボタンを押した。

箱が到着するまで、まるでせかしているかのように 指をパチンパチンと何度も鳴らしている。

“ な、何だろう・・・？ 前会った時と印象が随分違う様な・・・。

”

この時によぎった彼女の不安は的中した。

エレベーターは最上階で止まり、通い慣れてるかのようにどんどん進んでいく。

大きな2枚扉の前にたどり着くと、彼はカードキーを差込み、その重そうな扉を片手で開けた。

部屋に入って彼女を解放すると、すぐに扉を閉め、まるで何者かに追われているのかの様に、覗き穴から廊下の様子をチェックしている。何も異常が無いことを確認すると、ドアを嚴重にロックして彼女の方を振り返った。

。

その時に見せた、冷たい顔に身体がパキンツと硬直した。

長い前髪の間隙から覗く、生気が感じられない目は、まるで小動物を捕食しようとする様子を伺っている肉食動物の様にも見え、腕を組み片手を顎にやりながら、彼女を頭のとっぺんからつま先まで舐める様な視線を向けてくる。

「な、何ですか・・・？」

「・・・なにポーっとなつたつたつてんの？」

「え？・・・」

「僕とつてもお腹がすいてるんだよ」

「は、はあ・・・？」

「ねえ・・・君を味見させてよ・・・。」

「・・・っ!!」

彼女に向かってゆっくり近寄りながら、ジャケットを脱ぎ捨てた。

首もとのネクタイを取ると、男らしい喉元が顔を出す。

舌なめずりしながら距離を縮めてくる彼に身の危険を感じながらも、まるで蛇に睨まれた蛙の様に 彼女は動けなくなっていた。手足はガタガタ震えだし、だんだん近づいてくる彼に恐怖で声も出ない。

“ や、やだ・・・！そんな人だと思わなかった・・・のに・・・ ”

やがて彼女の目の前で彼が止まった

「 両手を出して。 」

断ると何をされるか判らない 。 そんな雰囲気がそこはかとなく漂い、彼女は言われるがまま小刻みに震える手を差し出した。彼は怯えた彼女の様子を見ると、大きな両手で彼女の手を包み込み

「 かわいそうに、こんなに震えて 」

そつとその手の甲に口付けた。チュツチュツと何度も何度も位置をずらしては、口付けを落としていく。手のひら、指の腹、指の背まで余す事無く彼の唇が触れていく。

「 あ、あの・・・や、やめてください・・・、 つ！！ 」

恥ずかしくて、下を向きながらその行為を受けていた彼女の指の先を、チロリと生暖かいものが触れ、彼女は一気に息を吸い込んだ。顔を上げると、自分の人差し指の先を赤い舌が艶かしく蠢もよほいている。赤い舌を辿っていくと、彼女の指先を味わいながらも、視線は彼女

に向けている欲望で満ち溢れた彼と目が合い、それはまるで彼女の表情の変化を愉しんで居るかのようだった。

手を引き戻そうとしても、びくともしない。中性的なルックスをしていてもやはり男だ。どんなにあがいても、男の力には敵わないのだと、もがけばもがくほど自分に知らしめる事となり、更なる恐怖を生むだけだった。

「やあっ！や、止めてー!!」

と、彼女が叫ぶとその舌はそれ以上進むことは無くなった。ホツとしたのも束の間、手にしていたネクタイをおもむろに彼女の両手首に巻きつけていく。

「なっ?!・・・にを?」

「大丈夫。怖がらなくていいからね」

彼の口元に舌が這う。

ゾクリ 。 目にした光景に身体力が抜け、手にしていたCDがカシャンと床に落ちた。次の瞬間、彼が視界から消えたかと思うと彼女の体がフツと宙を舞い、片方の肩にかつがれながら、そのまま奥の部屋へと突き進んでいく。

パキンツとCDを踏みつける軽い音が響き、これから行われようとしている事を察した彼女の目から、涙がポツン、ポツンと零れ落ち、床に染みを作る。

片手で彼女のピンヒールを一足づつ脱がせては放り投げ、ドサツと乱暴にベッドへ下ろされると同時に彼が襲い掛かって来た

「・・・やめっ・・・」

激しく抵抗すると彼女の肩を両手で掴み、挑発的な顔をした。

「何言ってるの？こうなるって君も望んでたからホイホイついてきたんじゃないの？」

「そんなっ！ 私はただ・・・」

「ただ・・・なあに？」

「・・・ただ、あなたにもう一度会いたくて・・・」

彼女の言葉に一瞬彼の表情がハツとなった。しかし、すぐに元の冷たい表情に戻り、

「クククッ」

「?!」

「もっと素直になりなよ 顔にはちゃんと書いてあるよ？僕が欲しくてたまらないってね。」

「っ！そんなことっ！」

「いいさ 君がそうやって意地張るんなら、僕が解き放してあげるからっ！」

そう吐き捨てると同時に、彼女の服に手を掛けた。

ビリビリビリッ・・・彼女の新調した服を勢い良く破りだし、現れた白い肌に荒々しく唇を這わせた。

彼の手が彼女の膝元から太ももまでをゆっくり撫で回す。しばらくすると、直に肌に触れられている感触があり、その事がストッキングが破かれた事を示していた。

顔の下で蠢く彼の頭、次第に大きくなる彼の息遣いに彼女は恐怖のあまり声が出ない。

“誰か！助けてっ！！”

脳内で何度も助けを呼んでみても、当然助けがやってくるはずもない。

このまま彼のなすがままにされるしかないのだろうか？

第一印象で何の疑いも持たずに信用し、誘われるがままついて来てしまった彼女が、受けなければいけない罰なのだろうか？

噛み締めた唇のせいで、口内に鉄の味が広がる。

少しでも恐怖から逃れようと視線を横に移した時、ベッドサイドに大きな花瓶を見つけた。

彼に気付かれない様にそっと花瓶に手を伸ばし、縛られた両手でしっかりとそれを握ると次の瞬間、目を瞑りながらおもいきり彼の頭めがけて振り下ろした。

「やめてー！ーっ！！！！」

胸元と太ももに感じていた嫌な感触がピタッと無くなり、瞼をゆっくりと開いていく。

目の前にあるのは、いつもの見慣れた天井でカーテンの隙間から差し込む光は、もうすぐ夜が明けるのを知らせている。

全身びっしょりと汗だくになった彼女は体を起こし、自分の体に異常がないか確かめた。

「ゆ、夢・・・？」

ほっとしたと同時になんて夢をみてしまったんだと、恥ずかしくなり両手で顔を覆い、

「へ、変な夢見てごめんなさいっ！」

思わず声に出して、彼に詫びた。

LOVE IS MAGICAL

第4話 くはやる気持ち

カーテンの隙間から柔らかな陽が差し込み、鳥のさえずりが聞こえた事が、朝が訪れたのだと告げていた。けたたましく目覚まし時計が鳴り響き、ベッドから白くて細い腕がそれに伸びる。

「はい、はい、もう起きてますよ！」

何か不満でもあるかのように、目覚ましを思い切り叩いた。

「……てゆうか、あんな変な夢見ちゃったら眠れないし……。」

上体を起こし、両手で頭を抱え髪をかき乱す。

さっき見た夢を思い出してしまい、彼女はどうにも落ち着かない様だ。

“今日……か……”

這い出るように、あたたかいベッドから抜け出ると、部屋中のカーテンを開けて腕をぐんと伸ばす。

今晚、彼に会うまで彼の事は極力考えないようにしなければ。でないと、仕事が手につかない。伸ばした腕をパタンと下ろし、

「……さ、仕事行くかな。」

睡眠不足な頭をリセットさせる為に、無理矢理気持ちを切り替えた。

新調した服、履き慣れないピンヒールに傘とCD。
あの夢と全く同じスタイルだが、彼女は構わず出かけた。

「社長」

「社長」と呼ばれたその人は、大きなため息をつきながら俯いていた頭をあげた。

「もう、その呼び方やめてよ。」
「でも……」

そこは譲れない！とでも言いた気な秘書を見て、諦めて両手を広げて肩をすくめた。

「で？今日の予定を教えてくださいかな？」

大きなガラス張りのオフィスで、黒い革製のすわり心地のよさそうな椅子にもたれ足を組んでいる。
窓の方に椅子を回転させて、聳え立つビル群を見つめながら、ため息混じりにそう言った。

「あ、はい。今日は10時から、社内にて戦略会議、11時30分にリッチホテルにてMr. Emersonと会食、その後は、」

いつもの朝のお決まりの儀式だが、相変わらずびっしりと組まれているスケジュールに思わず大きなため息が出る。

こんなに毎日働き詰めだとその内、過労死するんじゃない？ そう考えると恐ろしくなって、頭をブルブルツと震わせた。

「……、それが済みましたら、18時に社に戻り本日の業務は終了となります。」

「え？それ以降は？」

彼が振り返り不思議そうな顔をした。

いつもは21時頃まで予定がびっしりで、それから社に戻って書類に目を通したりしていると、帰宅時間は夜中の0時を過ぎる……って毎日なのに？

まるで心の中を見透かされたのかと思い、少し焦りの表情を浮かべた。

しかし、秘書から返ってきた返事は意外なもので、

「いえ、19時に約束がおりとの事でしたので、スケジュールリングしておりませんが？」

「……。」

「では、失礼します」

ボタンと扉が閉まり秘書が退出した。彼は瞬きを忘れ、広いデスクの上に肘をつき手を組みながら考え込む。

“・・・約束・・・？　、・・・！！！！”

思い出したと同時に、勢い良く立ち上がった。

はっと我に振り返りを見回す。

アゴに手を置き部屋の中を行ったり来たり・・・。

“ああ、そうだ、今日だった・・・どうしよう？何も考えてなかったよ”

コートハンガーの横にある鏡に、自分が映りこむのが見え、慌てて近づいて何処がおかしい所が無いが、全身をじっくりと見る。

“服は・・・これでいいか・・・”

又、部屋の中をウロウロしだすと、突然大きな声を上げた

「あー！どうしよう！場所は決めたのにレストラン予約してなかったー！！」

慌てて扉に近づいていくと、勢い良く扉を開け、秘書の名前を呼んだ。

「ジュデイス！今日の19時ウエリントンのフレンチ2名で予約して！」

「は、はい 社長」

又、呼ばれたく無い名称を言われ、眉間にしわを寄せ秘書をじろつと睨む彼を他所に、秘書は顔をひきつらせながら、その事に触れないように話を進めた。

「あ、えーつと・・・お連れ様はお煙草は？」

「あー・・・吸わないね。」

「かしこまりました。すぐ予約入れておきます。」

「ありがとうございます。」

部屋に戻り、大きなソファーに腰掛けると彼のデスクにある電話が目に入る。

あの日の事、あの後くれた電話での会話。思い出しては顔がほころんでいた。

“初対面であんなに話せた人って初めてだなあ”

彼女だけでなく彼も又、再会を楽しみにしていて、その事が彼の顔を自然と笑顔にさせた。

「し、社長・・・?!」

ハツとして声がする方を見ると、秘書が変わったものを見るような

目で彼を見つめている。
思わず彼は両手で顔をこすりながら、ほころんだ顔を抑えようとした。

「ちょ！入る時はノック位してよっ！」

「何度もしましたが・・・」

顔を真っ赤にした彼は、窓際へと向かい 秘書に背を向けて窓の外を見る振りをした。

「もう！何?!」

「あっ、はい。ウェリントンのフレンチ、19時に2名、禁煙席でお取り出来ました。」

「あ、ありがとうございます！」

秘書が不思議そうな顔をしながら、いつもと違った彼の様子が気になりつつも、ドアをパタンと閉めた。

秘書が出て行ったのを確認して、大きく深呼吸して心を落ち着かせる。

「・・・ふう・・・」

窓ガラスに手を置き、もう一方の手はポケットに突っ込みながら窓の外を眺める。

遠くの空を眺めると、綺麗な青空が広がっていて、今の彼の気持ちを表して居るかのようだ。

もうすぐ会えるんだ。

そんな気持ちが、この同じ空の下もとにいる、彼女にもあればいいのにと、切に願うのだった。

LOVE IS MAGICAL

第5話〜再会〜

「ねえ。この間あんたが言った、新しく出来たあの店。今日この後行つて見ない？」

そう言いながら、彼女のデスクに両手をついて、同期のアイコが彼女宛の荷物をわざわざ届けてくれた。

あの店の話をした時は、一切関心を示さなかったのに、いつもと何処か違う彼女の様子を察して誘いをかけてきたのだった。

恐らく彼女がしきりに時計を気にしたり、いつもと出で立ちが違うのが気にかかったのだろう。

同期と言えども、入社してからやたらと対抗意識を勝手に燃やしていた彼女のことだ、きつと妨害したくてたまらないのだと、彼女は既に感じていた。

「あー、ごめん。今日は用事があるから、又今度ね」

キーボードを弾く手を止めずに、チラリと横目で見ながらアイコに微笑む彼女の態度が、どこか余裕を感じさせられる。アイコはソレが気に食わないのか、まだ何か言いたげな表情で彼女を見つめていた。

「へえ。何処行くの？」

「あ、ちよつとごめん・・・あ、もしもし？」

そう聞かれると思い、アイコが言うよりも先に受話器を取って、取引先にダイアルしながらなんなくやり過ごす。

そんな彼女の態度に、明らかにむすつとした表情を浮かべながら

も、アイコは諦めて自席へと戻っていった。

あと少して彼に会えると思うと、電話の声がいつもより自然に1
トーン高くなり、いつもは人前で鼻歌なんて歌わない彼女が、電話
の保留音に合わせて、弾けもしないピアノを弾いている振りをしな
がら、自然と鼻歌を歌っていた。

気がつけば窓の外はすっかり暗くなっていて、既に約束の時間が
迫っている。

アイコに見つかつたら又しつこく尋問されると思った彼女は、気
持ち頭を低くしながらオフィスを後にした。

都会の冬の夜はとても寒い。

ビル風が容赦なく彼女を吹きさらし、あつという間に体温を奪い
去って行く。

吐き出す息は白く、手袋をしている指先も氷の様に冷たくなるの
には、そう時間は掛からなかった。

“あの日もこんな感じだったなあ。”

そろそろ彼の事を思い出してもいいかな？と、自分の抑えつけて
いたものを解き放つかのように、あの日初めて出会った時の事や、
電話で話した事を思い返しては顔をほころばせる。

あの角を曲がれば約束の場所。
近づくにつれ彼女の鼓動が早くなる。

“ 彼が来たらなんて言おう？ ”

『 一緒に食事でも・・・』とか誘ってもらえるのかな？

『 わざわざありがとう、じゃあ』・・・だったら・・・寂しいなあ
”

彼女が笑ったり落ち込んだりしながら歩いている様は、傍はたから見るとなんだか楽しそうに見えるだろう。すれ違う人の視線を感じ、慌てて口元を正した。

コツンコツンとピンヒールの音が静かなロビーに響く中、彼女は辺りをキョロキョロと見回しながら彼らしき人物を探している。

“ まだ・・・来てない・・・かな？ ”

コートの袖をめくり、時計の針を確認した。

「・・・あの！・・・」

あの時の甘い香りが広がり、慌てて振り返ると、そこには息を切らした彼が立っていた。

あの時と同じ優しそうな彼の瞳を見つけ、彼女の鼓動が更に激しく鳴り始める。

「 ああ、良かった、間に合った！ 」

彼は大きな手の平を胸に当て、自分を落ち着かせるようにふーっ
と息を吐いた。

「あ、あの、そ、その……」

又思うように言葉が出てきてくれない。

“ああ、もう私何言ってるの！さっき台詞考えたじゃない！”

混乱する彼女の表情を見て、彼はニツコリ微笑むと、

「……こんばんは。」

そう言って右手を差し出す。

「あ……こ、こんばんは」

濁りの無い澄んだ瞳に、吸い込まれそうな錯覚に陥りながらも、
彼女は努めて冷静に振舞おうとしたが、指先が彼の手に触れた途端、
驚いた表情を見せた彼が、彼女の手を両手で包みこんだから、たま
らない。

「えっ?!まさかこの寒い中、歩いてきたの?手が凄く冷たくなっ
ているよ?!」

その出来事で、彼女の胸が又、どくんっ和一際大きな音を立てて
いる。

見ず知らずの男性に、手を握り締められる事はまずないし、こん
なに温かく柔らかい男性の手も触れた事が無かった彼女は、一気に
頬に熱を帯びだしたのが判ると、ますます胸の鼓動が早く鳴り出し

た。

「ちっ！、近いので！」

紅潮した頬を見られないようにと、下を向いてしまった彼女。その仕草を見て察したのか、慌てて手を離すと、彼も又気恥ずかしそうにしている。片方の手をポケットに突っ込み、もう一方の手で唇を触りながら、

「あの、電話で言うの忘れてたんだけど・・・良かったら今から一緒に食事でも・・・？」

「・・・・・・・・・・っ。」

うつむいている彼女の顔が見る見る笑顔に変わり、この後に続くかもしれない未来に、少しばかり期待を寄せるのであった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第6話　貴方をもっと知りたくて

寒かった心も、温かい風が吹き込んできたような感覚に襲われた。初めて会う人に、こんなに簡単に心を許していいのだろうか？頭の片隅にある、彼女の警戒心がいつの間にか消え去っていたことに自分自身が一番驚いている。

食事でも、と言われて思わず両手を天に振りかざしたい位に、気持ちが昇りつめたが、そこをグツと我慢してゆっくりと顔を上げ、嬉しそうに口をすばめてコクンと小さく頷いた。

「良かった。・・・じゃあ　行こうか」

「はい！」

そう言うや否や、彼は長い足をフルに活用してスタスタとロビーを歩き出す。

慌てて駆け出して彼の数歩後ろをついて歩いた。

彼の後姿。

華奢だと思っていたが、明るいところでよく見ると結構がっしりしているように見える。

歩きたびに弾む彼の柔らかかそうな黒髪。

その髪のでっぺんにキューティクルを発見すると、思わず何のシヤンプーを使って居るのかと聞きたくなった。

そして何より、この彼の甘い香りが鼻孔をくすぐり、こうやって彼の後ろを歩くだけで彼の香りに包まれた気分になるのだ。

“　いい香り・・・なんの香りだろう”

ほんの少し目を細め、彼の香りの元となる成分を分析していると、彼が突然立ち止まり、あるう事が、彼の背中にボスツと顔を埋めてしまった。

「きゃっ、ごめんなさい」

彼は背中に埋もれた彼女をチラッと見て少し微笑んだ後、彼が急に立ち止まった原因となる方向に向きなおした。

「こんばんは。今日はどうされたんですか？」

「やあ、こんばんは。今日はソコのディナーを予約したんだ。」

「そうですか。今度うちにもいらして下さいね」

「ああ、じゃあ来週伺いますよ。又秘書から連絡入れます。」

「ありがとうございます。では来週お待ちしております。」

髪をきつちりと整え、皺一つない黒服に身を包んだホテルマンが、深々と頭を下げ、彼は片手を上げて又歩き始めた。

彼女も軽く会釈して通りすぎようとすると、

「じゅっくりどうぞ」

と笑顔で返された。

彼がここの常連だという事は、この一連のやり取りでよく判る。

“ 凄いなあ・・・会社からこんなに近いけど、私はトイレしか利用した事ないのに ”

感心しながらも足を進めると、ロビーの隅にレストランの入り口らしきものが見えた。

入り口に立っているスタッフが彼を見つけ、すぐさま声を掛ける。

「こんばんは。お待ちしております。」

「やあ、こんばんは。」

「どうぞ、こちらへ。」

“うっわぁ・・・又もや顔パス？名前も何も言っていないのにあっさり入れるなんて、経験した事ないよ・・・”

ちよつとした感動を味わいながらも、案内されて店内に入ると、更に彼女を感動させるモノが視界に入った。

白亜の壁一面に飾られている大きな絵。

彼女は思わずそれに見とれてしまい、歩く歩幅が徐々に狭くなつていった。

そんな彼女の様子に彼が気づき、

「この絵 凄くいいよね」

「ええ、何と云うか・・・本当、凄い・・・って、ごめんなさい、大した感想も言えなくてっ。」

「いやいや、言葉だけで聞くとそうかも知れないけれど、君のその感激した様子を見ながらだと、本当にこの絵は凄いんだなって良く判るよ。」

彼は、何だか嬉しそうにしている。まるで、自分が書いた絵を褒められたかのような言いつぶりに思わず、口角が上がった。

彼女が絵を見ながら再度足を進めだすと、前方を歩いていた彼が又、ピタッと足を止めたが、すぐに気配を察知した彼女は、今度は彼にぶつからずに止まることが出来、ホッと胸を撫で下ろした。

ギリギリの所でぶつかるとを回避できた彼女を振り返り、彼も笑っている。

「ん？そつち？」

「あ、はい。個室をお取りしておりますが？」

「あー、今日はプライベートで来てるからこつちでいいよ。こつちの方が景色が楽しめるからね。」

「あ、はい。かしこまりました。お席は禁煙席で聞いておりますが・・・」

「うん。・・・あーっと、君、煙草吸わないよね？」

「あ、はい。」

なんで煙草吸わないって決め付けられるんだらう？

そんな話電話でしたっけ？

彼女が不思議な顔をした。

案内された席は彼の言ったとおり、硝子張りの向こうは綺麗な庭園が広がっていて、無数のイルミネーションが施されており、それは目を見張るものであった。

斜めにセッティングされたテーブルの一边に椅子を引かれ、庭園を見るようにして座ると、彼が彼女の横に同じく椅子を引かれて座った。

“と、隣に座るんだ・・・恋人同士みたい。”

彼女の口元が意思とは反して勝手に緩んでいく。

そんな事になっている事も知らずに、彼はなおも彼女に少し近づきながら、

「もう少しあったかくなるとね、ココにリスが来るんだよ」

そう言っただけに見えやすいように、硝子の向こうを指差した。近すぎて彼の顔を見る事が出来ずに、彼の指差す方を必死で見ようとする。

「こ、こんな都会なの？」

「そう、ここで飼ってるらしいんだけど、たまに逃げ出すらしいよ」

だろ？

と、椅子を引いてくれたスタッフに話を振っている。

ニコニコとあどけない表情を見せる彼に、彼女の不安は一欠けらも無くなっていた。

「あ、何がいい？嫌いなものある？」

「えっと、・・・そうですねえ・・・」

彼は明らかに今まで出会ってきた男性と違う。

彼の事をもっと知りたい。

ただ、漠然とそう思うのだった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第7話〜接近〜

楽しい時間はあっという間に過ぎ去り、無情にも別れの時間を告げる。

店を出たところでお会計をしながら、スタッフと談笑している彼を見て、もうこの人と会う事は叶わぬ願いのだろうか、ふと頭をよぎり、気持ちが悪く落ち込んだ。

「ありがとう、ご馳走様。」

スタッフへの気遣いも忘れず鼻にかけるそぶりも一切ない彼は、きつとココの上得意であるに違いない。現に、シェフまでもが彼を見送りに出てきて居るのだから。

そのシェフと2、3言、言葉を交わすと、彼女の方へチラッと視線をやった。途端、じゃ。とスタッフ達に片手を上げながら、待たせている彼女を気にかけるかのように走って戻ってきた。

「ごめん、お待たせ。」

彼女は、頭を左右に振って答える

「あの、本当にお金・・・いいんですか？」

頑かたくなに自分が払うと言う方が、相手に失礼だと感じ、控えめに尋ねてみたが、返事は思っていた通りで、

「うん、勿論。女性にお金を使わせるなんて、僕のモットーに反するからね」

そう言ってウィンクして見せた。

彼のその口ぶりが、今まで数々の女性を虜にしてきたであろう事は、はいても簡単に推測でき、それがなんだか微妙な気分させられる。

「では、お言葉に甘えて・・・有難う御座います。」

「どういたしまして。」

ニッコリと微笑んだ彼はとても満足している様子だった。

「本当に送って行かなくていいの？」

正面玄関から出て、冷たい風にあたる。

彼は、コートに袖を通そうとする彼女にさりげなく手を貸した。

「あ、ありがとうございます・・・あ、はい、すぐソコなので。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・そっか。」

彼女がコートから長い髪を出すと、後ろに立っていた彼に、髪の毛の香りがふわっと漂う。

彼は思わず伸びていた手を止め、慌てて軽く握りこぶしを作った。

“何、考えてんだ・・・”

握りこぶしを見つめて居る彼に、くるりと振り返った彼女の頬は

赤く火照っていて、酔っているのだと誰もが推測できる。本当にこんな状態の彼女を一人で帰らせていいのだろうか？でも、しつこく送るって言って怪しまれても困るし・・・どうするか、はつきり決め兼ねていると、彼女が別れの挨拶を始めてしまい、彼は結局言い出すことが出来ずに居た。

「・・・あの、色々とありがとうございました・・・じゃあ私はコレで。」

深くお辞儀をすると、すぐに背中を見せるのは気が引けるのか、彼の方を見ながら駅へと向かう道を歩き出した。

見るから危なっかしい足元に、思わず手が伸びる。

その時、側道に駐車していた車のドアが突然開き、後ろを見ている彼女はその事に気付かず、おぼつく足元で歩き続けている。

咄嗟に、

「 危ない！」

「 え？・・・きつ・・・。」

彼が飛び出して彼女の腕を掴み、ぐつと抱き寄せた。

彼女の体がフワツと彼の胸に吸い込まれ、居場所が判らない彼女の腕は、頼りなくただぶら下がって居るだけだった。

彼の香りと体温を全身で感じ、息も出来ずにただ彼の腕に抱かれている。

一気に酔いが回ってきた気がして、ありえないスピードで心拍数が上がっていくのがつぶさに判る。

コレは・・・・・・夢？

今おかれている現状が信じ難く、何度も自分に問いかけていた。

車中から出てきた人物は、彼がじつと睨み続けているのにも気付かず、足早にホテル内に消えていくと、彼女の頭上から「チッ！」と舌打ちする音が聞こえた。

彼が視線を戻して我に返ると、彼女が腕の中にいる事に気付き、慌てて手を離す。

「ああ、・・・ごめん。」

「い、いえ こっちこそ、ボーっとしちゃって・・・」

一歩下がりをうつつむいている彼女は、先ほどより明らかに赤くなっただ顔をしていた。

ポケットに手を通り込み彼も又、照れくさそうに鼻をこすっている。

「あ・・・やっぱり危ないから、送っていくよ」

彼女は小さく頷いた。

LOVE
IS
MAGICAL

第8話〜加速する想い〜

暖かく暗い車内。

わずかに感じる揺れが、少し酔った彼女をいとも簡単に眠りの淵へと誘う。^{しざな}

誘惑に負けてはダメ！

そう思ったのも束の間、彼女は深い眠りへと落ちていく。

最寄り駅の名前だけ彼に告げると、この間のCDショップで一緒にいた恰幅の良い男性に、彼がそのまま伝えた。

あつという間に彼女の意識が朦朧^{もろう}としてきて、何度も落ちてくる臉を手で押さえては必死で耐えている。

肘掛に手をつき顎をのせて窓の外を見ていた彼は、そんな彼女の様子に気付き

「眠い？寝てていいよ、ちゃんと着いたら起こしてあげるから。」

まるで母親の様な笑顔でそう言うが、初めて会う人の横でいきなり眠れるわけがない。

いや、眠いのは事実だが、この時間を寝て過ごしてしまうのは、どう考えてももったいないと思った。

「だ、大丈夫です。」

彼に見えないように小さくあくびをして、目を赤く潤ませながら彼にそう言っていると、彼はクスツと笑ってまた外の景色に目をやった。

車の窓ガラスに映る彼を横目で盗み見しながら、落ちてくる頭を何度も持ち上げる。

酔いも手伝ってか彼女の頑張りも空しく、あっさりと眠りの地に着いた。

肩に何かに触れるのを感じて振り向くと、彼女の頭が何度も倒れてきては起き上がるを繰り返している。

“……………”

困った人だ。

と、決して悪い意味ではなく、遊び疲れて眠る無邪気な子供の様な……そんな意を込めてポツリと呟いた。

彼はそつと彼女と距離を縮めると、次に彼女の頭が落ちてくる瞬間を狙って、そつと手を彼女の頭に添えた。

すると、自然とここが落ち着く場所なんだと理解したかの様に、そのまま彼の肩に頭を埋めて、膝の上に組んでいた彼女の華奢な手がポトリと解けた。

彼女の髪の毛の香りが鼻につく。

さっきは手を伸ばして慌てて引っ込めたが、今度はなんだか許し

てもらえるような気がする。　なんて、彼も又、酔っているのかもしれない。元々、我慢と言う事が苦手な彼は、この衝動を抑えることが出来ず、ゆっくりと指先を伸ばし始めた。

彼女の指先にそつと自分の指を触れさせると、車の揺れにあわせて、その指を少しずつ這わせていく。

ピクリと彼女の指が動くと彼も又動きを止め、ゆっくりと、決して起こしてしまわないように、そつと彼女に触れていった。

「・・・・・・・・」

彼の大きくて暖かい手が、小さくて華奢な彼女の手にピッタリ重なる、彼は満足気に微笑んだ。

車の揺れが感じなくなった事で、うつすらと意識が戻ってきた。

目の前に現れた景色が見たことのないものというのはいすぐに気付いたが、右手に感じる暖かいものが何なのかを理解するのに少し時間を要した。

頭を上げて横を見ると、ぼんやりした景色の中で自分を見つめている誰かを感じた。

やがてその輪郭がはっきりとし、その誰かが彼だという事に気付く。

「おはよう。」

満面の笑みで彼が言う。

「あ、ごめんなさ……、いつ?!」

言いかけて手元へ視線を落とすと、彼の手をしっかりと自分の手が握り締めているのを見て、慌てふためいた。

「あわわ……」「ごめんなさい!」

てっきり、寝てる間に自分から握ってしまったんだと勘違いして、慌ててその手を振りほどいた。

眠ってしまったのと無意識とはいえ、勝手に手を握ってしまったことを思うと、恥ずかしくて居ても立っても居られない。

ああ!もうこの世から消えて無くなりたいたい!って思うほど彼女にとっては恥ずかしく、とても破廉恥な出来事に思えた。

そんな彼女と対照的に、彼はきよとした表情で彼女を見つめている。

やがて彼女が謝った訳を理解して、

「ああ……手?」

その言葉を聞いて又、体が一気に熱くなる。

軽い女だと思われているに違いない。彼女はずっと自分がした失態を責めていた。

そう、次の彼の言葉を聞くまでは。

「……これは、僕が君と手を繋ぎたくなつたから、僕から握つたんだよ?」

「……はい?」

“い、今なんておっしやいました??”

目を丸くして彼を見ると、彼は変わらずニコニコしている。

あまりにも彼女の反応がないので、心配になつた彼は困つたなど言う様な顔をして、

「もしかして、迷惑……だつた?」

「……っ!」

赤い顔をした彼女は、やっとコトの事態を理解して、すぐさま頭を左右に激しく振つた。

「良かった。」

「……」

ほつとしたような顔で微笑んだ彼を見る度、彼に夢中になつていくのがよく判る。

どんどのめり込んで行く自分が、なんだか怖くも感じた。

「あ……っ、そう。もう着いたんだつた。」

「あ……」

キョロキョロと車の外を見渡すと、いつもの見慣れた景色が見え、今度こそお別れの時間ときがやってきたのだと知る。

切なく甘い時はそれも長くは続かないものだ。

「今日は本当に、ご馳走になってしまって……。しかも、送ってまで頂いてありがとうございます。」
「いえいえ。」

彼女が車から降りると、彼もさも当然の様に降りて、彼女側に回りこんでくる。

彼が何か言いた気にしているのが判って、ふとCDと傘を返していない事に気付き、慌ててバッグから取り出した。

「あ、コレ返さなきゃ。」

CDを差し出すが、何故か彼は受け取ろうとしない。

「ああ……。うーん。」

この期に及んで、腕を組みながらしばし何か考えている様子だ。今日の目的はこのCDを返すことだと言うのに、彼は一体何を渋って居るのだろうか？彼女が頭を傾げていると、

「今日は見なかったことにするよ。」
「え？」

「又、今度返して。」

そう言つと胸ポケットから名刺とペンを出し、スラスラと何か書き出した。

それを手渡されて見て見ると、そこには彼の携帯番号らしきものが書かれていた。

「もし良かったら、電話してくれるかな？」

「ま、また会えるんだ！」

そう思うと冬の寒さなんてどこかに行ってしまった様に、ほかほかと体が暖かくなってくるのを感じて嬉しさで溶けてしまいそうになる。

「……はい。」

「じゃ、……待ってるから。」

おやすみ。

そう言つと、黒塗りの高級車に乗り込み、その車は静かに動き出した。

窓を下げ、彼が中から手を上げているのに応えるように、彼女も小さく手を上げる。

彼女は彼の車のテールランプの明かりが見えなくなるまで、その場を動く事が出来なかった。

LOVE IS MAGICAL

第9話〜謎〜

朝からけたたましく電話が鳴り響くオフィスで、昨日もらった名刺を取り出し、昨晚の出来事を思い出していた。

“素敵な人だなあ。”

にやついている彼女の手から、名刺が取り上げられ我に返る。

「何コレ？」

よりによって、一番見られたくない相手に見られてしまった。

「ちよつと、藍子！返してよ！」

名刺を奪い返すと二度と取られないようにすぐにバッグにしまった。

「あんた、その人と知り合いなの？」

「え？」

さも、彼の事を知っているかのような口調の藍子に、思わずドキツとした。

藍子が彼女のPCのマウスをおもむろに掴み、何やら検索を始める。

彼の会社名を検索窓に打ち込んでいくのを、ただひたすら息を呑んで見つめていた。

最後にバチンツ！とENTERキーが押され、ずらっと彼の会社名が表示される。

その中の一つをクリックして、

「やっぱり。ほら、その名刺の人ってこの人でしょ？」

画面に食い入る様に覗き込むと、彼の写真と詳細が事細かく書いてあり、驚きのあまり声が出せない。

驚いた表情で画面を見ている彼女を見て、藍子は返事を聞かずとも名刺の人物と同一人物だと判った。

「あんだ凄いじゃん。こんな大物とどうやって知り合ったのさ？」

「ど、どうやって・・・って」

「ね、ね、この人とどういう関係？・・・もしかして付き合ってたの？」

デスクに両手をつけて私の顔を覗き込みながら、小さな声で聞いてくるゴシップ好きの藍子の顔は、言うまでも無く興味深々な様子。

この子に話すと会社中に広まるのが目に見えている。・・・それだけは避けなくては。

「そ、そんなわけないでしょ！た、たまたま取引先で会って・・・ご挨拶しただけだよ。」

目を泳がせながらとっさについた嘘は、藍子に更なる興味を与える事になってしまった。

「ふん・・・」

デスクにしていた手を離すと、腕を組み見下ろすように見ている

る。

嗚呼！なんて恐ろしい！

早くこの話を終わらせたくて、ブラウザを切り替えると又仕事に取り掛かった。なのに、藍子はまだ動く様子は無い。

「あのだ、」

ピクツと肩がすくみ恐る恐る顔を向けた。と、同時に、遠くから藍子を呼ぶ声が聞こえて、それがまるで天の助けが来たかのように感じた。彼女はここぞとばかりに、

「ほ、ほら、呼んでるよ？」

「……。。はい、何ですか？」

横目で彼女を睨みつけながら、声のする方へ気の無い返事をする。

「……ふう。危なかった……」

藍子が立ち去ったのを確認した後、こっそりブラウザを切り替えると、そこには彼女がまだ知る事の無い彼が沢山あった。

彼のプロフィール欄はく不明の記載が殆どだったけど……。

“何者なんだろう……”

謎が多いほど人は知りたくなるものだ。

「……。。。。。。。」

藍子の事を、'ゴシップ好き'なんて、私が言えないかもしれいな、と頭をよぎり、スクロールする指を止め、ブラウザを閉じて仕事に戻った。

“ 会いたいなあ。 ”

その気持ちだけが彼女の頭の中を支配していた。

L O V E I S M A G I C A L

第10話 確かな想い

「……………です。以上で本日の業務は終了となります。」

真つ暗なオフィスの扉を両手で開け放ち、ソファーに上着と書類を無造作に投げ捨てた。

首に絞まるものを片手で緩めると、少し疲れた表情で秘書のジユデイスに^{うわ}勞いの言葉を述べた

「はい、お疲れ様。遅くまで悪かったね。」

そう言いながら振り返った瞬間、彼女は肩をすくめ両手に抱えた彼の鞆をきつく握り締めた。

「お、お疲れ様でした！……お荷物こちらに置かせて頂きます。」
心なしかジユデイスの顔が赤くなったように見えるなど思ったら、それを悟られたくないのか、彼女は逃げるようにして、扉へ向かった。

「あ、明日は私はお休みを頂きます。」

「と、なると明日はカレンかな？」

「はい、そうです。」

「了解。 ゆっくり休んでね。」

彼女は深くお辞儀をすると、静かに扉を閉めた。

ソファーに腰を落としてテーブルの上に足を組んでのせる。部屋の

時計に目をやると時は既に‘今日’が終わりを告げ、‘明日’に変わっているのを知り、大きな溜息を一つついた。

仕事をして居る時は全く気にならないが、一段落ついた時に必ずと言っていいほど、デスクの上にある電話に自然と目が行ってしまう。

“あれから1週間かぁ・・・”

シャツの胸ポケットから携帯を取り出し、着信履歴をチェックする。

「嫌われちゃったかなぁ・・・」

ボタンと片手で携帯電話を折りたたみ、そのままパンツと向かいのソファーに放り投げた。手を頭の下に組みながら身体を横たえろと、あの日の事が自然と頭をよぎる。

辛いものが苦手な事。

笑い上戸で感情移入が凄まじく、まるで自分の事の様に一喜一憂してくれる事。

そして・・・彼女に触れた事。

彼女に触れた手を見つめると、彼女の笑顔が目の前に浮かんでは消えを繰り返し、彼は彼女を捕まえたくて、思わず手を軽く握る。

「はぁ〜失敗しちゃったなぁ〜。・・・待ってらん無いよ。」

あの日、電話番号を聞かなかった事を激しく後悔した。

「 会いたいよ。」

一言つぶやいて、ゆっくりと目を閉じると、いつの間にか自分の頭の中が彼女で一杯になっている事に笑みがこぼれた。

LOVE IS MAGICAL

第11話 偶然は必然

「はい、これで最後ね。コレ仕上げたらもう帰っていいから。」

ドサツとデスクの上に書類が置かれ、たちまち彼女の視界が狭くなる。書類の山から顔を出すように、

「ええ?! これもですか??」

と、不満な声をあげた後、時計をチラッと見て大きな溜息をついた。

“ ああ・・・毎日毎日こんなに残業ばっかじゃ、電話すら出来ないじゃない!”

自然とキーボードを叩く音が大きくなる。

「じゃ、俺は今日、息子の誕生日だから帰らせてもらっぞ? お前達もデートの一つ位したらどうだ?」

ブーイングが飛び交う中、ボスは振り返りもせず、わざと部下を煽る様な台詞を吐き捨てて、あっという間にドアの向こうに消えていった。

一人、又一人。

次々と事務所を後にし、気付けば彼女一人だけが取り残されていた。

“ ったく、デートの一つでもしろって・・・”

誰のせいで毎日残業してると思ってたのよ！ああ〜もうっ！世間の人は週末を楽しんでるはずなのに、私ときたら・・・”

ハアーツと特大のため息を吐き出すと、頭を左右に振って頬を叩いた。

愚痴を言えばきりが無い。

時々ある、さっきの様な理不尽な現実を除けば、とてもやりがいがある楽しい仕事なのだ。

手を抜こうと思えば抜けるが、そうするとおのずと結果となって返ってくる。

“ちゃんと、やんなきゃ！！”

ヨシッ！

っと意気込んで、スパートをかけた。

「ふう〜、終わったー・・・。」

もう動けないとばかりにデスクに突っ伏した。横目でチラリと時計を見ると、もうすぐ日が変わろうとしている。

“もう、寝ちゃってるよね・・・”

今日も彼に電話が出来ないんだと言う事実を突きつけられたのと、仕事をやり切った感で一杯になり、一気に気が緩んで自然と瞼が

閉じて行く。

終いには自分の寝息が聞こえて来て、

「しゅ、終電!」

慌てて立ち上がり急いで帰り仕度を始めた。

バッグをデスクの縁に広げて、片手で一気に荷物を流し込んだ。一緒にポストイットやら、クリップやらも入ってしまったが、そんな事、この際お構いなし!と言わんばかりに、デスクの埃と一緒にバッグに仕舞い込む。

その勢いでオフィスを飛び出し駅へと向かっていると、夜の宴を楽しんだ後なのか、陽気なおじさんに声を掛けられたりもするが、彼女は振り返りもせず一心不乱に駅へとひたすら走り続けた。

「・・・まっ、・・・ハアハア、・・・まじで?・・・ハアハア・・・
ンゲッ。　、ダァーッ・・・。」

彼女の必死の走りもむなしく、最後の電車は大きな音を一つならして目の前で小さくなっていった。

「ど、どうし・・・よ?・・・ハアハア。」

おて、ど、どうしやう??

乱れた息と予想外の出来事に混乱している頭を整えるため、とりあえずホームのベンチに腰掛けた。

風除けがある待合室は、5人分の座席に対して1人の割合で座席を独占しており、終電に乗れなかった酔っ払い達のホテルと化している、とりあえず、あの中で寒さをしのぐ事は出来ないのだということとは良く判った。

真冬の風が容赦なく吹きさらし、思わずコートのポケットに手を突っ込んだ。

「……？」

コートのポケットに入っていた携帯電話を手に取ると、途端に彼女の心臓が早く音を立て始める。

“電話……してみようかな”

時間も時間だし、5回コールして出なかったら切ろう。そう自分の中でルールを決めて、思い切ってボタンを押した。

ピッピッピッピ……ピッ。　、ブルツ……

繋がるまでのこの時間は、数秒なのに数時間にも感じる。

- - - プルルルルルツ - - - プルルルルルツ - - -

呼び出し音が聞こえると、ますます鼓動が早まる。

彼が電話に出てくれるのか、出ないのか。ただそれだけを知りたくて思わずダイヤルしてしまった。

だから、何も言葉を用意もしていないし、以前程心臓が破裂しそ

うにもならず、比較的リラックスしてボタンを押すことが出来た。
それが功を奏したのか、

プツツ・・・) はい、もしもし)

あっけなく彼が電話に出た。

・・・しかし、電話に出た彼はひどく疲れた様な声に聞こえ、やはりこんな時間に電話すべきではなかったと彼女は後悔する。

「あ、あの・・・こんばんは。」

(・・・)

「・・・。」

(・・・あ！こ、こんばんは！)

急に元気になった彼の声を聞いて、少しホツとした。

「ごめんなさい、こんな時間に。」

(ううん、大丈夫だよ。まだ会社だし。)

「そうでしたか。・・・お仕事お忙しそうですね。」

(まあ、いつもの事だけどね)

「すいません、特に用事があった訳じゃないので。又・・・かけなおします」

(いや、もう帰るところだから大丈夫。)

「や、でも、もう遅いですし・・・。」

その時、終電が終わったとのアナウンスがホームに流れだし、二人の会話も途切れてしまった。

(え？今どこにいるの?)

「あ、私も仕事で遅くなって・・・今、駅にいるんです。」
（駅って、・・・・・・・・もう終電終わってるんじゃない？）
「そのようです。」

彼女は笑いながら答えた。

ホームに駅員が巡回し出したので、慌ててベンチから立ち上がり、彼の言葉を一言も逃さないよう、耳に携帯電話をギュッと押し付けながら、タクシーを拾う為にホームから出ようと改札口へ向かう。

（送ってくよ。）

「え？」

思いも寄らない彼の提案に驚きつつも、胸がトクンと大きな音を立てた。

（あのホテルの近くって言うってたよね？君のオフィス。）

「あ、いえ、大丈夫！タクシーで帰りますから！」

そういつつ、タクシー乗り場に目をやると当然長蛇の列が出来ているワケで・・・。

“ああ、どうしよう?!こんなタイミングで電話したら、送ってくれって遠まわしにアピールしてるみたいじゃない!!なんで気付かなかったんだろう?!”

どうやって言い訳をしようか?彼女は鯉の如く口をパクパクとしていると、彼はもう既に彼女の話など聞く気もないのか、

（だとしたらあの駅だね。えーっと10分で行くから。君は暖かく

て安全な所・・・あっ、コンビニがあるでしょ？そこで待ってて。）

「いや、あっ・・・の・・・？」

（ツプー、ツプーツプーツプー・・・）

次の瞬間には、既に電話は切れていた。

あまりの急展開に少し戸惑いながらも、彼に会える嬉しさがこみ上げて来る。こんな事になるんだっいたらもっとましな服、着てくれれば良かったなあ、と両手を広げて自分の服を見下ろした。

コンビニで暖を取っていると、両手で大切に包み込んでいた彼女の携帯電話に、彼からの折り返し着信があった。

「もしもし？」

（あ、今着いたよ）

急いで外に出ると、いつもの車の横でコートも着ずに背中を丸めている彼が、笑顔で小さく手を振っていた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第12話 少しづつ縮まる二人の距離

彼女がとった行動が、あっという間に二人を引き合わせた。

勢いでかけた一本の電話。どうせ出ないだろうとたかをくくっていたのが、驚く事にあっさりと繋がった。

そして、タイミングよく彼女の終電が無くなったアナウンスが流れ、丁度仕事が終わったばかりの彼がその雰囲気察して、『送ってくよ。』と言ってくれたのだ。

これらのうちの一つでも欠けていれば、今日、二人は会うことは無かっただろう。

そう思うと、単に『タイミングが良かった』の一言で終わらせるには少し軽々しいのかも知れない。

「 こんばんは。」

白い息を吐きポケットに手をつ込みながら、笑顔の彼が目前にいる。会いたくて、声を聞きたくて仕方なかった彼が今、実際に目の前にいるのだから、信じられない。

「 じ、こんばんは。」

それでも彼の笑顔を見ると、彼女も自然と笑みがこぼれてしまう。数段ある階段をこけない様にそろりと降り、彼に近づいて行くと、

車にもたれていた身体を起こし、慣れた手つきで助手席のドアを開け、彼女をエスコートしてくれる。

そんな紳士な振る舞いにうっとりしつつも、一つの疑問が彼女の頭を横切った。

“ 助手席？ ”

開け放たれたドアの向こうを覗き込むと、いつもの恰幅のいい男性の姿がそこには無い。

あまりにも彼女が不思議そうな顔をしているので、

「ああ、彼はもう帰ったよ。流石にこんな時間返つき合わすことは出来ないからね。」

そう言われて彼女は納得し、助手席へと腰を沈めた。助手席のドアをそっと閉めた後、ボンネットに手を這わせながら、足早に運転席側に回り込む。運転席のドアを開けると、先に長い足がにゅっと入り込んできた。

そしてドアが閉められる事で、車は単なる‘移動手段の一つ’と言う事だけではなく、‘密室’という‘部屋’を兼ね備えたものに変わり、うるさく騒いでいる心臓に拍車をかける。しかも、彼の甘い香りを車中に封じ込め、その香りに彼女の思考までもが、溶けて無くなってしまっただけだ。

シートに座り、両手でハンドルを握っている彼は、彼女がそんな事で苦しんで居るとは露知らず、一旦間を置いて何か考えている様な素振りを見せると、彼女の方へと振り向いた。

「えーっと……お腹空いてない？」

「あ、はい……ペコペコです。」

照れているのか、喜んでいるのか。
とにかく彼女は笑顔で答えた。

「良かった。・・・実は僕もなんだ。でも、こんな時間だとお酒飲む所しか開いてないかなー・・・」
「何処でもいいですよ、私明日休みですし。」

車中での彼との距離が近過ぎて、彼の顔をまともに見る事が出来ず、握り締めたバツクを見つめながらそう言った。

「・・・じゃあ、僕の家に来る？」
「?!」

い、いきなりっ?!

彼の提案を聞いた彼女は、瞬きをするのも忘れるほど目を大きく見開いて、思わず彼の顔を見た。

そんな彼女の表情を見た彼は慌てて、

「い、いや、僕運転しなきゃだからっ。お酒飲む所行けないって言うか・・・い、家に帰ったら食事作って貰えるから!」

とか言いながら、彼はハンドルに向かってずっと言い訳をしている。

変に取り乱した彼を見ると、とてもかわいく見え、こんな人が下心があつてそんな事を言つて居る様には到底思えないと思つた彼女は、

「クスクス・・・は、はい。貴方がその方が良ければそれでいいですよ?」

口元を手で押さえ、笑いをこらえながらそう言うと、彼は自分に向けられた疑いの目が晴れたのを感じ、ほっとした表情で胸を撫で下ろした。

話がまとまると車はゆるりと動き出し、やっとの事で駅のロータリーから移動する事が出来た。しばらく行くと携帯電話を胸ポケットから取り出し、何やらどこかへ電話をかけ始める。

「あ、僕だけど・・・うん。今から帰るから。ゲストと一緒にだから2人分用意しておいてくれる？うん・・・あっ辛い物は避けてね。はい、じゃあよろしく。」

電話を切った彼は、電話の内容には特に触れず、さも当たり前かのように真つ直ぐ前を向いて運転している。さっきの電話の内容を聞き、彼女が辛いものが苦手だと言う事を覚えていてくれていた事が、彼女には嬉しくてたまらなかった。

その反面、妙に女性慣れしている風なのは否めなかったが、ここは素直に喜んでおいた方が身の為だと、自分に言い聞かせた。

車中で繰り広げられる他愛も無い会話達。

やれ正月番組は似たような物ばかりで面白くないだの、今年はお餅を何個食べただのと、おそらく彼にはどれもが無縁であろう事は薄々感じてはいたものの、かといって気の利いた会話が出来ない彼女は必然と日常、自分が思った事を語る事しか出来ない。この時ほど自分のボキャブラリーの無さに嘆いた事は無い。

けど、優しい彼は彼女のそんなどうでもよさ気な話でさえも、乗っかってくれる。

「お餅かあゝ。そう言えば食べた事ないなあゝ」

「ええ?! そうなんですか?」

「うん、僕の生まれた国では無かったからね」

「あ、やっぱり外国の方・・・ですか?」

佇^{たたず}まいは確かに日本人離れしているが、黒い髪にブラウンの瞳。流暢な日本語と名刺の名前を見ると判別しにくいものがある。

「うん、アメリカ人の父と日本人の母とのハーフなんだ」

「わあかつこいい・・・」

「格好良くななんて無いよ。小さい頃良くそれでいじめられたし・・・」

一瞬静まり返った車内。自分の発言に　しまった!　と思った彼は、とつさに違う話題を振った。

「あ、お、お餅って柔らかいんだよね?」

「え? ええ、柔らかくってびよ〜んって伸びます。」

「へえ?」

赤信号の交差点を車がゆっくりと止まり、サイドブレーキがかかった音がする。

次の瞬間、進行方向を向いて、手で餅が伸びる感じを表現している彼女の頬に、暖かいものが触れた。

“　　?”

ゆつくりと彼の方を向くと、

「これくらいやわらかいの？」

そう言つて、彼女の頬を軽くつねりながら、全く悪気はないような顔で彼は微笑んでいた。

「……………」

その無邪気な笑顔を見せ付けられ彼女が言葉を失っていると、彼女が痛がつている思ったのか、動揺した彼が慌てて彼女の頬を撫で、又彼の手の暖かさに触れる。

「ごめん！……痛かった？」

信号が変わり、慌てて車を出すか、何度も彼女を気に掛けて様子を見ながらハンドルを握っている。そんな彼とは対照的に、彼女は彼につねられた頬に手をあてながら、ドキドキしている胸元をぎゅつと掴んだ。

「い、いいえ……」

前方に連なる沢山のテールランプが、彼女の顔を照らし、そのお陰で彼女の顔色の変化は彼には悟られずに済んだ。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第13話〜長い夜の始まり〜

まだお互いの事を良く知らないのに、簡単に家に行くって言うてしまった。

本当にそれで良かったのかな？

でも、彼が悪い人には全く見えない。

“うん、大丈夫”

心の中でそう呟き、自分を、そして彼を信じる事にした。

『あんたはバカ正直だから、すぐ騙されるのよ！』

頭の中に藍子の顔が浮かび上がり、以前言われた事のある台詞を吐いている。

休日のある日、家のチャイムが鳴って丁度荷物が届く予定だったと言うのもあり、てっきり宅配便の業者だと思い込んだ彼女は、何のためらいも無く玄関の扉を開けてしまったことがある。幸い、目の前には、小さな子供とお年寄りだった為、難を逃れる事が出来たと思っただけれども実際はそうではなかった。

今思うと、このご時世、チャイムが鳴ったからと言って、

何の確認もせず玄関の戸を開けてしまった自分が未恐ろしい。

相手も急に扉が開いてびっくりした様子だった。そりゃそうだろう。きつと今までは、居留守を使われるか、インターホンで無下に断られていたに違いないだろうから。それこそ、扉が開いた時点で小さくガツポーズまで作って居たかも知れないのだ。

その証拠に、その子供と老人は驚いた顔をしてはいたが、口元がわずかに上がっていたのだった。

なのに、扉を閉められる前にと思ってたか、急に泣きそうな顔に変わり、

『これが最後なんです、これが売れないと困るんです。』

とか、それこそ、‘落とし文句’的なセリフを、つらつらと畳み掛けるように言い放った。

その時は冷静な判断が出来ず、二人の話を鵜呑みにし、これも人助けだと思って買ってしまった、<願いが叶う>と言われる硝子細工。給料日前にしては結構な値段の買い物だったのを良く覚えている。

そんな話を藍子にすると呆れた顔で冒頭のセリフを吐かれたのだ。

そんな事があったのを急に思い出した彼女は、なんだか自分の判断が果たして正しいのかどうか、少し不安になって来ていた。

「着いたよ。」

「あ、はい！」

そうこうしてる間に、どうやら彼の家に到着したようだ。流石にココまで来て、気が変わった。なんて事、いい大人が言えるワケがないと思った彼女は、腹を括る事にした。

視界に入りきらない程の大きな門の前で車が止まり、フロントガラスから思わず上を見上げる。

「こ、ここですか？」
「うん。」

ゆっくりと門が開くと、目の前に‘家’と呼ぶには、申し訳ない程の大きなお屋敷が目に入る。屋敷の前にはお金持ちの象徴の一つとも言える大きな噴水が、誰も眺める者が居ない中でも、カラフルなイルミネーションと共に、ザバーツザバーと噴出していた。

「す……すご……」
「ちよつと嫌味っぽいよね？ココまで来ると。」

彼女が思わず零した言葉も彼は聞き逃さず、何故か自虐っぽい事まで言って笑っていた。目を皿のようにして辺りを見渡していると、彼が車のパワーウィンドウを開け、

「お帰りなさい。」
「ただいま。遅くなって悪いね。」

と、警備の人に人差し指と中指を立てて、敬礼の様な仕草をするのと、警備の人も同じ仕草をして応えて居る。

“け、警備の人も居るんだ……そ、そりゃそうよね？こんな大きなお屋敷なもの。に、しても……”

彼は何者？

お抱え運転手も居るし、高級ホテルは顔パス。それなりにお金持ちなんだろうとは薄々感づいてはいたが、自宅に連れて来られて見て、いやはやここまでとは……。

“きつとプールなんかもあるんだろうな！毛の長い大きなワンコとかも絶対居るはず！”

そんな貧困な発想ばかりしていると、車は既に大きな屋根のある玄関前へと止まっていた。

すぐさま車から降りた彼は助手席のドアを開け、

「どいぞ。」

と、満面の笑みで迎えてくれた。

「あ、ありがとうございます」

車から降りてみると、見るもの全てが映画の中の様な光景であった。これが個人の家なのかと言われると、まことしやかに信じがたいものがある。

ホワーンとなっている頭で、彼に導かれるように後ろをついて行く。彼が大きな扉を開けると明かりが無くても平気だろうなと思える程、煌びやかな装飾品達が出迎えた。そして、

「Welcome back! Jack!」

どこからともなく聞こえた声と共に、ブロンドの綺麗な女性が駆

け寄ってくる。その女性はそのままの勢いで彼に抱きつき、頬にキスをした。外国人が良くやる挨拶の表現にしては、やけに親密そう
だ。

驚いた表情の彼は、

「カレン！こんな時間にどうしたの？」

「どうしても貴方に話しておきたい事があつ……………」

そう言い掛けて女性は彼にしがみついたままで、彼女を見つけた。

「あら？この子猫ちゃんはどなた？」

彼はその女性を引き離すと、襟元を正しながら彼女に紹介した。

「こちらはカレン。僕の秘書をやってくれてるんだ。」

「よろしく、子猫ちゃん。」

引き離されたのが少し不満気だと言った表情を浮かべると、腕を
組み、顔を横に少し傾けながら、口元だけをくつと上げた。

「は、初めまして。」

“子猫ちゃんって…………これってバカにされてる？”

「で、こちらが……………」

彼女に向けられた彼の手が止まり、一瞬、間があいた後、その手
が彼の顎へと移動した。

「名前…………聞いてなかったね？」

そうだった！

今の今まで名乗っていなかった事にお互いやつと気付く。

「あ、私 カナ・・・カナコって言います。」

「カナ・・・」

そんな二人のやりとりを見るに見かねたカレンは、

「ねえジャック。貴方名前も知らない人を家に呼んだの？相変わらず無用心ね。」

そう言っって両手を広げて肩をすくめている。

「ジャック・・・？」

さっきからジャック、ジャックって一体誰の事だろう？

彼女の目が説明して欲しそうにしているのに、彼が気付くと、

「ああ、そうか。名刺には日本語名しか書いてなかったね。えっと、
‘小田桐’は母方の姓で、‘^{せいと}聖人’はミドルネームなんだよ。一応、
日本では日本語名の方を使うようにしてるんだけど、何故だか皆、
フーストネームで呼ぶんだよね。」

‘そりゃそうか’と苦笑いをしながら、彼がすつと手を差し出した。
‘？’と、なりながらも釣られて彼女も手を伸ばすと、

「改めまして、僕はジャックって言います。宜しく・・・カナ。」

しつとりと耳に残る様な声で囁きながら、ニッコリと微笑んだ紳士は彼女の手を取ると、少し屈んで手の甲に軽く口付けた。

火が出そう。

もう、本当にリアルに顔から火が出るかと思う。

<天は二物を与えず>って言葉があるけど、彼に至っては二物どころか何物あるのよ?! って位、パーフェクト過ぎませんか?! さっきまで、ちよつと疑っていた自分が本当に情けない! 人を見る目が本当に無いんだなって、これでもかって言うほど思い知らされた気がする。

「あ、あ、あ、あの、よ、よよよよ、よろしく、お願いします・
・」

真つ赤になつてどもっている彼女と、下唇を少し噛んではにかんでいる彼の様子を見て、ちよつとばかり置き去りにされつつあるカレンが、天井を見上げながら目をクルクルと回していた。

「呆れた、今頃自己紹介してるなんて。」

カレンは皮肉を込めて言ったのに対し、二人はさもその通りだと言わんばかりに、目を合わせて笑い出したではないか。

そんな二人を見たカレンは、やってらんないとばかりに肩をすくめながら玄関へと足を向けた。

「　　つと。カレン? 話があつたんじゃ?」

「もう馬鹿らしくて話す気が無くなったわ。」

後ろを振り返らず手をひらひらさせながら、扉に手を掛けた。

「おやすみ。」

ボタンと扉が閉まると、二人で顔を見合わせ又、大笑いした。

「あははっ……つとごめん……行こうか……クククッ」

「はっはい……フフフッ……」

長い廊下を並んで歩き出す。

コツコツと二人の靴の音が鳴り響き、天井の高い廊下はその靴音さえも大きく反響し、それがまるでリズムを取っている様にも聞こえる。

「あ、ねえ、カナコってどんな字書くの？」

「えっと、‘叶う子’って書いて叶子です。」

「叶う子かぁ……素敵なお名前だね。」

「あ、ありがとうございます……。」

「じゃあさ……。」

今宵の二人は何処までお互いを知る事が出来るだろうか？

朝を迎える頃にはわざわざパソコンで検索しなくとも、全部頭に入ってしまうほど、沢山話がしたい。と、彼女は思っていた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第14話 彼の過去

レストランに引け目を取らないおいしい食事を味わった後、ジャズが流れる暖かいリビングでワインを飲みながら談笑している二人。時が経つのを忘れるほど、会話に夢中になっている様だ。

いつもならとっくに眠りにについている時間だと言うのに、あくびすら出てこないのだから。

「でね、その後・・・」

コンコンッ

彼の話話をを遮る様に、訪問者が現れた。

「はい、どうぞ」

開かれた扉の向こうには、ナイトウェアにナイトキャップを被った小さくて小太りの初老の女性が立っていた。

「おや、やっぱり。お帰りなさい、坊ちゃん」

「ああ、グレース。起こしちゃったかな？ごめんね」

「ほほほ。いえいえ丁度目が覚めただけですよ」

「そう？ならいいんだけど・・・あと、客人の前で僕の事をそういう風と呼ぶのを止めてくれる？」

「そういう風には？」

「その・・・子供みたいな呼び方だよ・・・」

口を尖らせて不満気な顔をしている。なんだかその様子が可愛ら

しくて、この女性に子ども扱いされているのが良く判る。

「ほほほ。と言う事はそちら様は坊ちゃんの人ですか？」

「ちがつ！・・・何言ってるの！もう彼女に失礼だよっ！」

顔を真っ赤にした彼は、このグレースと言う名の女性にもてあそばれているのか そのやり取りからして彼との付き合いの長さが感じ取って見える。

「ほほっ 邪魔者は退散しますかな。ごゆっくりして行って下さいませね」

彼女になっこり微笑んだその女性の顔はしわだらけで、そのしわが今まで歩んできた彼女の人生を物語っている様だった。

「グレース！」

パタンつと扉が閉まると彼は間が持たないと言った感じで、ワイングラスにワインを一気に注いだ。

「もうっ！グレースはいつもあんなだから」

「凄く優しそうな人ですね。貴方の事を良く判ってらっしゃるみたいだし。」

コトンッ

ワイングラスをテーブルに置き溜息を一つつく。少し乱れた髪とお酒が入って目がトロロンとしている彼は、どんな仕草一つ一つも様になるなぁと思わず見とれてしまう。

「彼女はねグレースって言って僕の乳母なんだ。僕の父も彼女に育

てられたんだよ」

「そうなんですか」

そう言つと先程子供扱いされたのが、余程悔しかったのか、

「未だに僕が小さい子供だと思つてるんだよ！」

と、彼女から視線を逸らすと、長い両手を広げてソファアの背にもたれながら足を組んだ。

又、口を尖らせて顔を赤くした彼は本当に子供の様だ。

そんな彼にいつしか彼女は夢中になっていた。

少なくとも次の言葉を聞くまでは。

「僕はもう3人の子供を持つ父親だつて言つのに」

“えっ？・・・・・・・・・・・・・・・・今なんて言った？・・・・・・・・”

彼女の表情が変わつたのを察して、彼女の方を向き直し、組んでいた足を解くと肘を膝について、真剣な表情で彼が話し出す。

「あの・・・僕には子供が3人居てね。実は結婚に2度失敗してるんだ」

「そ、そうなんですか」

平静を装つたつもりだったが、彼女の顔は明らかに動揺している。子供が3人？2回結婚に失敗？

そ、そりゃそうだ！

これだけの男の人を世の女性が放つて置く訳がないよね？

何でそんな事も思いつかずに、彼に夢中になつていたんだろう。

彼に子供がいるって話を聞いて痛んだ胸が、何かしら彼とのこれからを期待していたのだと思いと、身の程知らずな自分が滑稽に思える。どう考えても、彼と自分では身分もルックスも釣り合わなさ過ぎるのに。

上手く息が出来なくて苦しい。

手にしたワイングラスの中の液体が小刻みに波打っているのをただじっと見つめて、心の痛みを逃がす術をさがしていた。

「もうこれ以上、辛い思いはしたくないって思ったんだ。だから・・」

彼が何かを言いかけて、慌てて口を手で塞いでいる。

「・・・?」

「い、いや・・・うん。・・・なんでもない」

「。。。」

彼の過去を知り少し動揺したけれど、ちゃんと目を見て話している彼を見ると、隠していた訳ではないと判り、改めて彼の誠実さが垣間見えた様な気がした。

彼の事をもっと知りたいのに、知らなくていい事まで知ってしまっいそうで少し怖い。

でも、彼女はもう自分ではどうにも制御出来ない所まで来ているのを、薄っすら感じていた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第15話 突然の

あれから色々な話を聞いた。

彼の最初の奥さんとは愛し合っていたけれど、子供を欲しがらない彼女とうまがあわなくなった。どうしても子供を持つことを諦めきれない彼は、2番目の奥さんと結婚し子供をもつけたが愛の無い結婚生活は長続きしなかった。

2人を足して2で割れば

彼は今頃、奥さんと愛する子供達に囲まれて、幸せに暮らしているかもしれない。

と、そんなくだらない事を考えてしまった。

話の種にするには重い内容。彼は何故こんな話を私にするのだろう？

彼は、当時の感情を思い出してしまうのか、何度も涙ぐみながら目を真っ赤にして話続けている。

「ごめんね、こんな話聞きたくないよね？」

「いえ、そんな事・・・」

内心、聞きたくなかった。でも、なぜか訴えかけるかのように一生懸命話す彼を見ると、なんだかいたたまれない気持ちになり、話題を変えるなんてとても出来ない。

とにかく、彼が落ち着くまで話を聞いて上げようと、耳を傾けていた。

「はあ。本当にごめんね。こんな話するつもりじゃなかったんだけど・・・」

「いえ、こちらこそ・・・私で良かったんでしょうか？」

「・・・」

彼が「えっ？」って顔をして彼女を見つめている。彼女はそんな彼の表情をすぐに読み取る事が出来ず、しばらく見詰め合ってしまった。

「え？・・・あっ！そういう意味じゃなくて、赤の他人の私がそんな大事な話聞いちゃって良かったんでしょうか？って意味で！！」

やっと彼が驚いている意味が判り、両手をブンブンと振りながら顔を真っ赤にして慌てて否定した。

彼はそんな彼女がかわいいと言わんばかりに優しい表情で彼女に微笑んでいる。

“ ああ、やっちゃったあー！恥ずかしい！どんだけ自惚れ？！
って思われてるよね・・・”

はあ。とため息を吐いて、ふと随分長い時間ここに居るなと言うことに気がついた。手首の時計をぐるりと回してみると、文字盤の上を短い針が指し示めている数字が4を通過していることに、思わず息を呑んだ。

「やだ！もうこんな時間！帰らなきゃ」

「あ、本当だ。もう4時過ぎちゃってるね」

慌てて立ち上がり、彼に背を向けながら身支度を始めると、

「……………泊まっていけば？」

背後から聞こえた信じられないセリフに、身支度する手をピタリと止め、ゆっくりと振り返った。

そんな彼女の顔を見た彼は、プツと思わず噴出している。

「もう……………又、そんな顔して僕を困らす……………」

少し酔っている彼の目はトロンとしていて、目はさっきまでの彼の身の上話のせいか、うるうると潤んでいて、男性だと言うのについて見とれてしまう。

自分が彼に見とれて居ることに気付いた彼女は、又頬を赤らめて下を向いてしまった。

「……………だ、だって貴方が、そんな事言うから」

彼がすくつと立ち上がった気配がして、彼の方に目を向けると、ゆっくりと彼女の側に歩いてきた。彼が手を伸ばし、彼女に覆いかぶさるように、黒い影に包まれた時、彼女の心臓がより一層音を大きくする。

“え？な、何？何？”

息をする事も忘れ、うつむいて肩をすくめると、彼女の期待も虚しく、その手は彼女の後ろに置いてあるバッグへと伸びた。

「この家の隣にゲストハウスがあるんだ。もう部屋は用意してあるから、泊まって行って」

そう言うのにこりと微笑んだ。

少し拍子抜けしてしまった自分の気持ちを急いでかき消す。

「いえ、流石にそれは・・・」

「僕は明日・・・といっても今日か。仕事で居ないから、帰る時スタッフに言ってくれば、家まで送るように伝えておくからね」

そう言うのと、彼女のバックを持った彼がスタスタとリビングの扉を開け、こっちだよと言わんばかりに顎で合図した。

長い廊下を又二人で歩く。

来た時と違うのは、もうすっかり廊下の明かりが落とされていた事だった。

「今日は楽しかった、有難う」

「いえ、こちらこそ・・・、私も凄く楽しかったです」

“ はあ、時間経つの早いなあ。 ”

少し前に行く彼の後ろをついて歩く。

背中を向けながら話し出した彼の顔は見えないが、声のトーンが

先程までとは少し違った感じに聞こえる。なんか、何処か、寂しそうな、そんな感じ。

“もしかして、同じ事思ってくれてる？・・・ワケ無いよね。”

まだまだ話し足りないと思っていたのは、彼女だけだと思っていたが、

「又・・・会えるかな？」

そんなセリフが彼の広い背中から聞こえてきて、ぱあっと顔が明るくなる。

“え？嘘？本当に？やだ・・・嬉しいよ。”

「は、はい・・・」

嬉しさの余り、顔がほころんで今、彼に振り向かれたら確実に変な目で見られる！そしたらさっき言ってくれた言葉も取り消されちゃう！と感じた彼女は口元を手で覆いながら下を向いて彼について歩いていった。

突然ピタツと彼が止まり、気付くのが遅れた彼女は又、彼の背中にぶつかってしまった。

「つつ！？ ごめんなさつ・・・！」

慌てて後ろに下がろうとした時、彼が振り向きざまに彼女の腕を掴んでぐっと引き寄せた。移動しようとしていた方向とは逆の方向に引っ張られた事で足元がおぼつき、いとも簡単に彼の胸元に飛び

込む形となった。

いつもの彼の甘い香りと、アルコールの香りに包まれる。そして、体全体で彼の体温を感じると、彼女は一步も動けなくなってしまった。

「あ、あの・・・」

彼女の問いかけを遮るように、

「会いたかったんだ・・・とても」

と彼が切なそうな声で耳元で呟いた。

と、同時にぎゅっと抱き締められて、彼女の長い髪に彼の鼻先が埋まる。

彼の甘い吐息が、彼女の髪を通り越して容赦なく首元を刺激する。それだけで彼女は膝が震え、立って居るのがやっとの状態だった。

「あ、・・・の・・・」

自然と彼の胸に置く形となった手は、彼の鼓動を、体温をつぶさに感じている。ほんの少し早く刻んでいた彼の「音」は、次の瞬間、更に早まったのを手を通して伝わった。

「君は？・・・僕じゃダメ？・・・かな」

「・・・え？」

彼は少し距離を取ると、彼女の両肘を持ち、じっと彼女の目を見つめている。

時折窓から差し込む月明かりだけが、お互いの顔をうかがい知る

唯一の明かりだった。

「僕は、君の恋人にはなれない？」

「・・・っ?!」

彼女は言葉を無くしたまま、目を左右に泳がせている。

「最初の奥さんは本当に愛してた、素敵な人だった」とか、そんな話を散々聞かされ、これはきつと『俺に惚れるなよ?』って遠まわしに言ってるんだと思っていた矢先に、こんな事を言われるなんて全く想像していなかったからだ。

彼女からの返事を待っている彼の瞳を直視する事が出来ず、うつむきながら髪を耳にかき上げて言葉を捜す。

「あ、あの・・・。」

「・・・。。。」

「、っ。」

彼女が困り果てているのを察したのか、彼は彼女の手を取ると又、長い廊下をお互い無言で歩き出した。

繋がれた手をどうこうするよりも、彼女は彼に言われた事に対してどう答えればいいのか、ただそれだけを考えていた。

ゲストハウスへ着き、彼は振り返ると彼女の両手を握り、

「突き当たりの部屋が君の部屋だから好きに使っていいよ。あと・

・さっきの返事はゆっくりでいいから。時間をかければかけるほどいい返事が貰えるなら、何日・・・何年だって待つからね」

そう言うと彼女の頬に軽くキスを落とし、‘おやすみ’と言って手を振りながら元の所へ戻っていった。

「おやすみ、なさい。」

彼の唇が触れた頬に手をあて、次第に小さくなっていく彼の後姿を彼女は見えなくなるまでずっと眺めていた。

L O V E I S M A G I C A L

第16話 裸の心

唇がほんの少し触れた頬を手で押さえながら、用意された突き当りの部屋へと入っていった。

部屋には既に明かりが点されていて、暖房も入れられている。

先ほど迄居た家とは違って、ゲストハウスはアンティークな作りになっている様だ。

火は点されていないが小さな暖炉、天蓋のついたかわいらしいベッド、部屋の隅には蓄音機と彼女の腰ほどある大きなオルゴールが設置されてあって、それらが物凄く存在感を醸し出していた。

ドレッサーには化粧水はもとより、使いきりタイプのコスメが一通り取り揃っている。

“女性が良くココに泊まるんだ”

鈍い彼女でもすぐに判る。

少し胸が詰まる思いを感じつつ、ドレッサーのストールに腰掛けて、大きな溜息を一つついた。

肘について顔を両手で塞ぎ、

「はぁーっ……どうしよう……」

『時間をかければかけるほどいい返事が貰えるなら、何日……何年だって待つからね』

さっき聞いた彼の言葉が、頭の中をリフレインする。

「まだたったの3回しか会ってないのに、話が急展開過ぎて頭がついて行かないよ」

自分の顔が映し出された鏡を見つめ、頬にそつと触れる。

“こんな私の何処がいいんだろうか”

特別美人でも可愛いわけでもない。一般的な顔立ちで、人込みに紛れるとすぐに同化してしまつて、簡単には見つけられなくなるほどだ。一流の会社に勤めて居るわけでもなく、お金持ちのお嬢さんでもない。性格だつて内向的で友達もそんなに多い方ではない。やっぱりどう考えても彼に見合う女性だとは思えない。

彼はとても素敵な人だけれども、彼の隣を歩く勇気が出ない。だつて、どう考えても比べられるでしょ？

え〜？あれ彼女？

絶対、そんな声があちらこちらから聞こえてくるだろう事は、既に目に見えているんだ。

「はあ。。。」

時間をかければかけるほど、悪い方向へいつてしまつ。早
いうちに決着をつけよう。

そう心に決めると、立ち上がりおもむろにバッグの中の携帯電話を探した。

「あれ？無い？」

バッグを逆さにして中身を全部出すが、何度探しても彼女の携帯電話は見当たらない。

「リビングに置いてきちゃったかな・・・」

流石に携帯電話が無いと、色々と困る。そう思い、再び彼の家へと向かうことにした。

コン、コンツ・・・

リビングの扉をノックするが返事は無い。そーっと扉に手を掛けて中を覗き込むと、部屋の中はもう既に真っ暗になっていた。

“もう寝たかな？入っていいよね？”

「お邪魔しまーす・・・」

彼と鉢合わせると、言いたい事もいにくくなると思い、見つかる前にさっさと帰ろうと、部屋の中に滑り込む様にして入っていく。ペタペタと壁伝いにライトのスイッチを探していると、

「！」

カチャツと扉が開いた音が背後で聞こえ、彼が入ってきたと思っ
て慌てた彼女は、怪しまれる前に何故自分がココにいるかを説明し
ようと、その音がした方へと振り返った。

「あ、ご、ごめんなさい。携帯電話を忘れち……。」「

振り返った彼女の目の前に現れたのは、もわもわと沢山の湯気と共に頭をタオルで拭きながら、彼女がいる事を全く気付かずに立っている彼が居た。

「っ……。！！！！きっ、きゃあああああっ—————！！！」

その声には彼はビクッとしながら顔を上げ、暗闇の中の声の主を探すが、当の彼女はと言うと、大急ぎで部屋を飛び出してしまった。

「……………。」

残された彼は頭を拭いていた手もピタッと止まり、硬直している。

「叫びたいのは僕の方だよ………」

と呟くと、ソファに腰を落とし、頭を抱え込むようにして大きな溜息をついた。

LOVE IS MAGICAL

第17話 話をさせて

……タッタッタッタ、バタンツ！

勢い良く閉められたドアは部屋に圧力をかけ、壁にかかっていた絵が浮き上がり、カタンと音を立てた。息を整える間もなく急いでドアの鍵を掛けると、部屋の中央にある一人用のソファに飛び乗った。

膝を抱え込みながら今しがた起こった事を改めて考えると、徐々に顔が青ざめていく。

今日一日、彼女には驚きの連続だった。

彼と突然会う事になったと思ったら、彼の家招待され、おいしい料理をご馳走になり、ワインを傾けながら彼の身の上話を聞いて少しシヨックを受けた。

え〜とそれから……

彼に……『恋人になって欲しい』と言われて……

携帯電話を取りに行ったら、彼の……
x@* ;+!

「あーっダメだ！もう寝ようっ！」

そう叫ぶと急いでバスルームに飛び込み、彼の事は考えないように無我夢中でシャワーを浴びた。

用意されていたガウンに袖を通し、飛び出す様にバスルームから出ると、備え付けの冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、ソファアの上でそれを口に含んだ。

「はあく、おいしつ。」

気が緩んだのか、考えないようにしていたのに、ふと、脳裏にさっきの場面が浮かんできた。

真つ暗闇の部屋の中、バスルームのオレンジ色の淡い明かりをバックに彼の影が映る。

「っだあああああ・・・」

見てはいけないものを見てしまったと激しく後悔し、これからどうやって彼と顔を合わせたらよいものか頭を悩ませた。

少なからず、彼女が彼に対して抱いていた‘王子様’的な勝手なイメージ。それは今でも勿論変わっていないのだけれども、物語に出てくるような王子様は、決して‘裸’の姿なんて描かれていないのだ。いや、勿論人間で有る以上、誰しも裸の上に服を着たりするのだけれど、初っ端から、気品溢れる王子様に対して一糸纏わない姿を想像する事など、まともな女性ならしないだろう。彼女もそのまともな女性の一人だったからこそ、突然訪れた裸体のお披露目に心の準備が足りなくて、もう完全にパニック状態に陥ってしまった。

“落ち着け！落ち着くのよ！”

心の中で何度も呟きながら、テーブルの上に置いたミネラルウォーターのペットボトルを、ゴクゴクと音を立てるほどの勢いで喉に流し込んだ。

コンコンッ

「!?!」

ドアをノックする音がして、思わず、誰にも見られていないのに、胸元のガウンの乱れを整えた。

“だ?!誰?!”

恐る恐るドアの側へ行き、

「は、はい」

と、少し怯えた様な声を出すと、

(……僕だけど)

今、一番この世で顔を合わせづらい相手が扉の向こうに居ることが判った。

「っは!はい?」

(リビングに君の携帯電話があつて……さっきコレ取りに来たんだよね?)

「あ……はい……」

“ ああ、そうだ。肝心の携帯を取ってくるのを忘れていた”

(あの・・・開けてもらっていいかな?)

先程までとは違って、気弱な彼の声が強んだか苦しくて、胸を締め付ける。

「あ、ち、ちょっと待って下さい」

急いでガウンを脱いで服を着た。そして扉に向かい鍵を開けて少しだけ扉を開くと、そこには俯きながら上目遣いで彼女を見つめる彼が居た。

シャワーを浴びたせいか、ほんの少し頬を赤らめた彼の髪はまだ濡れていて、シャンプーのいい香りがした。

「あの・・・中に入れてくれない？」

「だ、だ、ダメです!!」

一方的に彼女が断ると、彼は少しむっとした表情になった。

「な、なんで?!」

と、理由を問い立たされた彼女は、少し間をあけて、

「も、もう・・・寝る所なんですっ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、その場を取り繕うとする。その返答に納得してない風の彼の表情に気付かない振りをしてしながら、

「携帯、ありがとございますっ！」

少し開けていたドアから彼女が手を伸ばすと、彼は携帯を後ろへ引き離れた。

「入れてくれないなら、渡さない！」

「・・・っは、はいっ!?」

“何なの?! その交換条件は?! こ、こんな夜遅くに女性の部屋に入れるだなんてっ! (・・・彼の家だけど) しかも、携帯を届けに来ただけのはずなのに、渡さないなんて! (・・・わざわざ持ってきてくれたんだけど)”

「・・・お願いだから、少し話しをさせてよ」

「っひ! ひきようものお〜!」

思わず口走ってしまった。

「卑怯者って!・・・そんな言い方・・・」

少し傷付いた様な顔をして、彼は俯いた。

「あっ・・・ごめんなさ・・・」

彼女が言い出すと、心なしか彼の口角が片方上がった様な?・・・と思っただ頃には時既に遅く、

「あっ・・・ちよっ!・・・」

彼女の気が緩んだ隙に、少し開いていた扉に手を掛けて、強引に部屋の中に入ってきた。

ズンズンと一目散にソファーに向かう。ソファーにボスツと腰を沈めると足と腕を組んで、指で彼の目の前のソファーに座るように彼女に指し示した。

もう逃げられないのだなと、半ば諦めた彼女は言われた通り、一人用のソファーに姿勢を正して座った。

お互い目も合わさず何も言わずただ座っている。

カチコチと時計の針が進む音がやけに大きく聞こえて、かなり居心地が悪い。

「・・・・・・・・・・。」

彼がふーっと深呼吸をすると、思わず彼女が身構えた。

「あかさ・・・・・・・・」

「み、み、み、見てませんからっ！！！」

「・・・・・・・・・・。」

彼の言葉を遮り、目を瞑りながら俯いてそう言い放った。

「・・・・・・・・・・やっぱり見たんだ・・・」

彼女が言ったのとは逆の事を言うので、訂正しようと彼女が顔を上げると、思っても見ない光景が待っていた。

「み、見てないって言って！……る。……つ?!」

彼はソファアールで小さくなって顔を両手で塞ぎ、耳の先まで真っ赤になっているではないか！まるで彼女が彼をいじめている様なこの構図に、思わず慰めるかの様に彼にもう一度言っただしなめ様とする。

「あ、あの、み、見てませんって……」

彼は塞いでいた両手を取ると、彼女と視線を合わせないように斜め下に目を向けた。その顔を良く見てみると、目が少し潤んで鼻の頭が赤くなっている。

そうだった。恥ずかしいのはきっと彼の方だ。それでも、

「いや、見たね」

と、どこからその自信が湧いて来るのか、彼女の言葉を否定する。ココまで来ると、彼女も負けていられない！

「見てないです」

「見た」

「っ?!見てないってば!」

「いや!絶対見たね!!」

しばらく、そんな堂々巡りが繰り返された。

「だ、だ、だ、だって部屋の中は真つ暗で・・・その・・・だから全然見てませんってば！」

「じゃあ何で何も見てないのに、大声で叫んで逃げてったのさ？」

「ぐっ・・・」

言葉に詰まった彼女を見て、彼は頭を抱え込んでしまう。

「ああ、もう僕死にたいよ・・・気持ちを伝えたその日に、裸を見られるなんて」

彼としては、それはそれは腑に落ちない出来事だったのであろう。家に誘い、食事や色々な話をして、思いを打ち明ける所までは完璧だったのだ・・・そう、裸を見られるまでは。初めて見せた自分の裸体が、彼女の合意を得てから見せる雄雄おおしい裸体ではなく、完全に無防備な状態で見られたのだから、相当ショックだったに違いない。

そんな男の繊細な一面をこれっぽっちも理解していない彼女は、彼のその言葉を聞いてふと我に返った。

“ そうだ返事しなきゃって思ってたんだった ”

思い立ったら吉日。

「あの、そのお返事なんですけど」

彼の思いも他所に、彼女は自分が今、成すべき事を実行しようと、口を開いた。

LOVE IS MAGICAL

第18話 言い訳

「あの、そのお返事なんですが」

頭をがばつと上げて目を丸くした彼が、彼女を見つめる。

「え？もう？」

「ええ、早い方がいいと思って」

「あ、うん」

彼が姿勢を正すと、ふうつと息を吐いて、心の準備をした。たった数秒の待ち時間でも、何時間、何日間の様に思えるほど、長く感じってしまう。

「えと、……凄く嬉しかったんですが……ごめんなさい！」

膝におでこがつくほど、彼女は深く頭を下げた。再び頭を上げ、彼の顔を見ると今にも泣き出しそうになっているのが判る。

「ええっ?!……ちよっ……」

「もう……僕、最悪じゃないか……」

あんな事があつた後の返事だから、彼も少し覚悟はしていたが、流石の彼も堪えたのか、恥ずかしくて情けなくて涙が出そうになっている。

「いや……あなたが悪いんじゃない……」

しどろもどろになって何か言葉をかけようとするが、いい言葉が
思い浮かばない。

「じゃあ、他にいい男性ひとがいるの？」

「いいえ」

「だったら、僕の何処がいけないか教えてよ」

彼は何処も悪い所なんてない、悪いところかいい所ばかりだ。でも、それが彼女には負担に思えたから、彼のせつかくの申し出を断ったのだった

「えっと・・・」

彼が身を乗り出して耳を傾けている

「すごく私と違って大人な所とか」

「それと？」

膝の上に組んだ自分の両手を見ながら、一呼吸置いて深く息を吸
うと、彼女は堰せきを切ったように、<彼の悪い所>を話し始めた。

「えっと・・・こーんなおつきなお屋敷に住んで、運転手さんや
メイドさんが一杯雇える程のお金持ちで・・・あ、それに美人な秘書
さんもいるし」

眉間にしわを寄せ、彼が不思議そうな面持ちをしている。

「気遣いも凄くて、優しいし、紳士だし・・・それに、ほらっ！凄
くカッコイイし・・・」

「。。。」

彼女の話聞いてきよとした顔になる。やがて、全てを理解したかのようにフツと微笑むと、ゆっくり彼女の椅子へ近づいてそいつと肘掛に腰掛けた。

「手も足も長くて、声も透き通るような綺麗な声で、初めて声掛けられたとき驚いちゃった」

自分では気付いていないようだが、彼の事を話している彼女は、何故だか笑顔になっている。それが何を意味するのか、鈍感な彼女は気付かない。

「あと、。。。？」

ふと、俯いていた顔を上げ、前を見るとそこに座ってたはずの彼がいない。その事にやっと気づいた時、

「それが・・・」

突然頭の上から声がして、びっくりして声のする方を見上げた。夢中で話続けていたので、彼が肘掛に座っていたなんて全く気付いていなかったのだった。

「それが、僕が君に振られた原因？」

「え？」

「そんな風には全然聞こえないんだけど」

彼は軽く握った手を口元に持って行き、もう一方の手でお腹をお

さえて笑うのを我慢している。

彼の言った事がごもつとも過ぎて、今度は彼女が顔を真っ赤にして小さくなってしまった。

「だからっ！・・・私なんかとは全然釣り合わないって事ですっ」

彼の良い所ばかりを列挙してしまい、思わず「しまった」とばかりに彼から目を逸らした。彼はそんな彼女がかわいく思え、もっと良く彼女の顔が見てみたい衝動に駆られると、彼女の顔にかかった髪に手を伸ばした。

「・・・？・・・濡れてる」

「っ？！だ、だから、本当に寝ようと思って、さっきシャワー浴びた所だったんです！」

たちまち落ち着かなくなった彼女を見て、彼がクスリと笑う。

彼の手の甲が髪を撫で付けた後、指の背でツーツと彼女の頬を滑らせて、顎のラインをなぞると、反対側の頬を彼の大きな手のひらが優しく包む。彼女はこんな事をされているだけでもビクビクしていると言つのに、彼はそんな彼女の様子を知ってか知らずか、次の瞬間には彼女の頬を包んだ手に少し力を加え、彼女の顔をそっと彼の方に向けさせた。

「釣り合う、釣り合わないって一体誰が決めるの？」

ねえ、教えて？

そう言つと、少しづつ彼の顔が近づき始める。

さっきまで泣きそうになっていた、子供の様な彼はそこにはおらず、あっという間に立場が逆転していた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第18話〈言い訳〉（後書き）

こんにちは、まる。です。

いつもご訪問頂き有難う御座います。

そして温かい拍手とお気に入り登録も沢山頂き、感無量でございます。

ココの仕組みがまだはつきりとは判っていないのですが、冷やかしかじやないですよね? ;

今回のお話、少し（かなり?）短めになってしまいました。時折、こんな事が多々ありますが、お話の区切りの関係でこんな事になってしまってます。決して手を抜いている訳ではありませんので、ご了承願います。

そして、少しお知らせです。

同時更新しております、『青空の下で君を想う時』ですが、一旦更新を停止させて頂きます。

ご覧頂いていた方には大変申し訳ありませんが（殆どいせんが ;）、又時期を見て更新していきたいと思えます。宜しく願います。

第19話 戸惑い

彼女の並べ立てた彼と付き合えない理由。

それは到底彼の納得のいく内容では無かった。

彼の話をする彼女の表情は誰が見ても、<恋する女性>の顔なのにも関わらず、付き合うことは出来ないと言う。

彼の周りをうろつく女性達は皆、彼のルックスやリッチなところを見て言い寄ってくる女性ばかりだと言うのに、彼女はソコが嫌だと言う。そんな彼女に益々興味が沸き、一度は諦めかけていた恋心だったが、まだ自分にもチャンスがあると感じた彼は、じっとしている事など出来なかった。

彼女の頬に優しく手を掛け、ゆっくりとその距離を縮めていく。唇に触れそうになる瞬間、その手は頬を滑り後頭部を包み込むようにして場所を移した。

もう少して彼女に触れる事が出来る。そう思ったとき、

「……………」

手にかすかな振動が伝わり、そっと目を開けた彼は、目を硬く瞑って口をぎゅっと閉じている彼女を見た。膝の上に置かれた手はぎゅっと握り締められて、まるで何かに耐え忍ぶ様にも見える。

震えて怯えきっている彼女の様子を目の当たりにし、自分の感情だけで強引に奪ってしまうのは不条理というもの。

ましてや、理由に納得はいかないが、彼女は彼を拒んでいたのに。

彼の目じりが下がり口元が緩んだ。唇へと向かっていた彼の唇は、ソコを通り過ぎると、彼女の耳元に近づいて、

「ちゃんと、ゆっくり考えてって言ったじゃない」

そう耳打ちすると、彼女がパツと目を見開いた。

うるさく波打つ心臓の音を落ち着かせるかのように、胸の前で両手を重ね、

「あ、あの・・・時間かけると余計に悪い方向に行っちゃいそうで

そんな彼女に両腕を回し、優しく抱きしめた。そつと壊れ物を抱くように・・・。

頬に触れる彼の髪が冷たい。自分と同じシャンプーの匂いだと言うことに気が付くと、それがいらぬ妄想を書き立てて、勝手に胸がドキドキとします。

「さっきの返事以上に、悪い方向なんてないよ」

彼女の手が彼と彼女の間にわずかに隙間を作る。その手に触れる彼の心臓は、彼女と同じくらいの早さで音を刻んでいた。

「あの・・・」

「とにかく・・・もっとじっくり考えて見て？さっきのは聞かなかつた事にするから」

頭のとっぺんに軽くキスを落とすとゆっくりと離れた。

彼女の目をじっと見つめた彼は、

「おやすみ」

一言そう言つと、名残惜しそうに部屋から出て行った。

わずかにある意識の中でボタンっとドアが閉まる音と、車のエンジンがかかる音が遠くで聞こえる。

『いつてらっしやいませ』

屋敷の主を見送る声で完全に目が覚め、ベッドサイドに置いた携帯電話を手に取り、時間を確かめた。

「7時半か・・・早いなあ」

昨晩は結局一睡も出来なかった。眠ってしまうと実は夢だったなんて事になりそうに思えたから。

もっとじっくり考えてみて？

シーツを頭まですっぽりと被り、彼に与えられた課題を考える。

笑ったり、泣いたり子供の様かと思うと、急にセクシーな男の顔になる。

そんな彼に昨日は終始ドキドキしっぱなしだった。

彼の顔が近づいた時、キスをされると思った自分がある。しかも直前に彼を振っておいて、何故かそれを拒絶出来ない自分が居て。

唇を彼が通り過ぎた時、少し拍子抜けしたのも感じた。

「好き。なのかなあ・・・」

彼女は自分の唇を指でなぞりながら、ひとりごちた。

ゲストハウスを出て門迄歩く。

後方から車が来たのを感じ、少し横にずれるとその車は彼女の横でゆっくりと徐行を始めた。

「あら？何、あなた泊まったの?!」

車の窓が開き、カレンがげげんそうな顔で運転席から覗いている。

「あ、はい」

やれやれと言った顔をし、車を止めると、

「乗って」

そう言っつて助手席のドアを開けた。

「あ、いえ、大丈夫です」

「どっちにしるあの門をそのまま出る事は出来ないわよ？ジャックがあなたを送るように言付けてるでしょうからね」

門を見ると警備員がこちらをじっと見ているのがわかる。これ以上、世話を掛けたくないと思った彼女は、門を潜り抜ける所まで乗せてもらう事にした。

「あ、じゃあ、お言葉に甘えて。」

彼女が助手席に乗り込むと、車は静かに走り出した。

「すみません、今日はお仕事じゃないんですか？」

「ええ、今日はもう一人の秘書が出てるわ。私は別の仕事、どちらかと言うところちが本業だけどね」

「そうなんですか」

他愛の無いやり取りにカレンが飽きたのか、突然核心をつく様な事を言い放った。

「ところで彼と寝たの？子猫ちゃん」

「っ?!・・・って、そんなんじゃないやありませんからっ!!」

「なあんだ、まだなの？」

フフフツと笑うカレンの横顔がなんだか意味深に感じる。

不安気な彼女の表情を見抜いたカレンは、しめたとばかりにニヤリとほくそえんだ。

「・・・ジャックにしてはめずらしいわね」

「え？」

「一晩泊めて何もしないなんて」

「・・・」

色々な思いが頭の中を交錯する。

カレンは普段の彼ならば、すぐに女性に手を出す様な軽い男だと言う事を、遠まわしに言っているのだろうか？

それとも、自分にそれ程魅力が無いのだと言う事を言いたいのだろうか？

いずれにせよカレンが放った一言は、今の彼女を混乱させるのに十分すぎるものであった。

「本当にここでいいの？」

「はい、どうもありがとうございます」

なんだかんだと車を降り損ねて、結局駅まで送ってもらってしまった。彼女は深くお辞儀をすると、駅へと向かって歩き始めた。

「ねえ！」

呼び止められ振り返ると、カレンが手招きをする。

「？」

車にもう一度近づき、腰をかがめて中を覗き込んだ。

「傷つきたくなかったら、彼の事は忘れる事ね。貴方なんかはどうこう出来る相手じゃないわ。」

「わ、判ってます。・・・そんなんじゃないですからっ」

「・・・なら、いいけど。じゃあね、バイ」

彼女の返答を聞いて安心したのか、カレンは最後に微笑むと、すくなく車を走らせた。

LOVE IS MAGICAL

第20話 天使の休息

「・・・であるからして、我が社における・・・」

その男性は会議室中に響き渡る程の大きな声で、意気込んでプレゼンをしている。聞いている社員は皆、土曜日の朝の会議にうんざりといった様子だ。

「あゝあ、たまんねえよなあゝ、土曜日に会議なんて」

「仕方ないだろ？この業界に土曜日も日曜日もないんだからさ」

「お前よく言うよ！ついこの間俺と同じ事言ってたくせに」

どうしても、前で話している男性の話に興味が沸かず、思わず若手社員同士で愚痴を零しあっていた。

「しかし、社長はタフだよなあゝ。ほぼ休みなしで仕事してんだぜ？」

「そうなの？」

「あれじゃあ女が出来てもすぐ逃げられるよな？」

「言えてる。」

無駄話に花を咲かせた男性社員一人は、そう言つと会議室の中央に座っている社長に目をやった。

「・・・？！」

「・・・！！」

「と言う訳で、是非ともここで社長のご意見をお伺いし・・・」

発表していた男性が途中で発言を止め、どうしたのかと下を向いていた社員が一斉に顔を上げた。どうやら発表している男性は、社長の姿を見て言葉を失ってしまったのだった。

窓から差し込む数本の日差しの中で、椅子の背もたれに体をすっぽり預けて、すやすやと寝息を立てて寝ている彼。

その姿は何処か神聖なものを見ているかの様な錯覚に陥らせる。そんな彼の姿を見て瞬く間に、会議室内がざわつきだしたのは言うまでも無い。

「お、おい・・・社長・・・寝てるのか？」

今、目の前で起こっている事が、今一理解出来ないのか、眠って居る彼から視線を離すことが出来ずに、肘で隣の男性社員をつついた。

「あ、ああ。そうみたいだな・・・」

「う、嘘だろっ？！あんな仕事の鬼の様な人が会議中に寝るなんて・・・俺、今まで見たことないぜ？」

「あ、ああ、俺もだよ・・・しかし・・・」

「綺麗だよなあ・・・」「綺麗だなあ・・・」

同時に同じ事を言っけししまい、思わず二人は目を合わせてぶつと吹き出した。

「お、俺達ストレートだよな？」

「お前は知らんが、俺は少なくともストレートだよ」

「男でこんなだから、女だともっとすげーんだろっな」

二人は会議に出ている女性社員を見渡して見ると、予想通り皆恍惚とした表情で彼を見つめていた。中には、

「お、おいあの子見るよ!」

「ん?ちよっ・・・ 流石に写メはやばいだろ!」

珍しい社長の寝姿を写真におさめようとしている勇者も居て、二人は流石に驚いた。

「・・・俺も撮っところ」

「お前、何に使うんだよ!?目覚めちゃったのか?」

「馬鹿!これをネタに女の子を誘うんだよ!」

「あーなるほど!頭いいなお前!・・・俺も撮ろっかな。売れるかもしれないし」

ざわつく会議室の中で、皆の注目を浴びて居ることも知らずに、すやすやと寝息を立てている彼は、まるで天から舞い降りた天使が、地上でその羽を休めているかの様に、穏やかな表情で心地良さそうにしていた。

会議が中断するのも無理もない程、珍しく、美しい光景であった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第21話 ただ会いたくて

勢い良く開け放たれたドアから、真っ赤な顔でふくれつつらをした彼が飛び出してきた。

「つたく！みんなどうかしてるよ！」

ドアの横のデスクに座っていた秘書のジュデイスは、慌ててデスクの上の書類をまとめ始めた。

「社長？会議はもう終わりですか？」

彼は足を止めることなく後ろを振り返りながら、

「ああ、終わり終わり！話になんないよっ！」

と、珍しく怒っている様子にジュデイスは何事かと驚いた表情をしている。

「……………」

ふと、彼が何か思い立ったかのようにピタッと足を止め、顎に手を置きながらゆっくりとジュデイスの方へと振り返った。

「ジュデイス、次の予定は？」

「あ、はい……会議が午前中一杯の予定にしておりますので、次は13時から例のプロジェクトの打ち合わせになります」

手元の時計を見るとまだ10時30分を過ぎた所。

「ふむ・・・」

さっきまでふくれつつらだった彼が、急に雲が晴れたかのようにぱっと明るくなった。

「ジユデイス、ちょっと出かけてくるよ」

「え？あ、私は・・・」

「昼寝でもしてればいいよ、じゃあ後はよろしくね」

そう言うと足早に去っていった。

首をひねりながら、ジユデイスは残りの書類を片付ける為にデスクへ向かうと、開いている会議室のドアから中の様子が見え、中では何故か、多数の社員が携帯とノートパソコンを手に列を作っている。

「写真を撮った奴は先に申告する事！さもないと給料50%カットの2階級降格だぞ！いいか、今から片っ端から調べるからな！」

と、恐ろしい内容の話が聞こえたと思うと、パラパラと沢山の手が上がっている。

一体これは何なんだと、又ジユデイスは首をひねった。

部屋に戻り、ジャケットの内側のポケットから携帯を取り出すと、おもむろに電話を掛け始めた。

呼び出し音が鳴っている間、彼は自然と溢れ出る笑顔を抑えることも無く、その声の主を待ち続けるが、無情にも留守番電話のメッセージにより彼の笑顔はかき消された。

途端、彼はじっとしていらなくなり、移動しながら何度も電話をかけてみるが、何度掛けても繋がらない電話に、もどかしい気持ちが進んでいくだけだった。

エレベーターに乗り、地下駐車場に停めてある車に飛び乗った彼は、再び電話を握ると電話に出た相手に早口で話した。

「あ、もしもし？僕だけど。彼女、もう帰ったよね？・・・そう・・・あ、いや、いいんだ。うん、じゃあ」

もうとっくに帰ったと聞き、繋がらない電話に少し心配になった。片手でハンドルを握りながら、無意識に親指の爪を噛んでいる。

“今日休みだと言ってたけど、まだ帰ってないのかな”

気付けば、以前送った事のある彼女の家の近くだという駅に車を走らせている自分が居た。

サイドブレーキを踏み、彼は車から降りると、又彼女へ電話を掛けた。

「・・・？」

背後で携帯の鳴り響く音が聞こえ、振り返ると駅の改札口からバツグの中をこそこそと探しながら、こつちへ向かって歩いてくる彼女がそこに居た。

やっと見つけた。

安心感と彼女に会えた嬉しい気持ちで一杯になり、彼の顔がみるみる笑顔で満たされる。昨日・・・、具体的に言うとはんの6時間程前に会っていたと言うのに、何日も会っていないかの様な自分の気持ちに驚いた。初めて昼間に会う事が、彼を浮き足立たせてしまったのかもしれない。

さつき会ったばかりだと言うのに、自分がココに居たら彼女驚くだろうな。そんな少年の様な悪戯心が湧いて来て、顔の緩みを戻す事が出来ないでいた。

彼女が携帯電話を手に取り、ディスプレイ画面を見た瞬間、彼女も又笑顔を浮かべていて、その表情をばっちり見届けた彼は、今すぐ彼女を抱きしめなくなる衝動に駆られる。

歩きつつ、慌てて電話に出た彼女を見つめながら、彼はそのまま彼女に声を掛ける事無く、携帯電話を通して話を始めた。

「もしもし?」

(もしもし、僕だけ)

「あ、はい・・・どうしたんですか?お仕事じゃあ?」

(うん、近くまで来たから寄ってみたんだ)

「え?近く?・・・って」

「一緒にランチでもどうかなって思って」

電話の向こうから聞こえる彼と同じ声が、近くから聞こえる。

「……………」

ふと、顔を上げると、ポケットに手をつ込みながら車にもたれかかり、片手で携帯を握り締めている彼が、彼女を見つめて笑顔を浮かべていた。

呆気にとられている彼女に構わず、片手で携帯電話をパタンと閉じると、

「おかえり」

そう言って、彼女に手を差し出した。

LOVE IS MAGICAL

第21話 ただ会いたくて (後書き)

こんにちは、まる。です。いつもご訪問有難う御座います。

前話と今回のお話は続いているのですが、個人的に好きなシーンの一つだったりします。(あ、誰もそんな事聞いてませんね、ハイ。)
さて、またまた再会した、二人の今後の展開をお楽しみ下さい。

第22話 見透かされる気持ち

差し出された右手を見て、笑顔で一杯の彼の側へと近づくと、その手を彼女の腰に回し助手席の扉を開けた。

「え？何でここに？」

朝早くに仕事に行った筈の彼が、何故か彼女の家の近くの駅に居る。まるで夢でも見ている様な気分させられた。ココに居る理由を知りたくてそう尋ねたのだが、それに対し、彼から返ってきた答えは彼女が思っていたものでは無かった。

「会いたくなつたからだよ」

さも、当然かの様に、しれつと言つてのける彼。

普通なら恥ずかしくなってしまう様な齒の浮きそうな科白も、彼が言つととても心地良いものに聞こえる。

科白だけならまだしも、蕩ける様な甘い顔、柔らかい物腰でそう言われると、頭がボーっとして意識が何処かにすつとんでしまうのも無理も無い。助手席のドアを開けた状態でその場で立ち止まっている彼女に、『乗って？』と頭を曲げながら車に乗るように促され、そこで初めて意識が戻ってきた。

あつ、と彼女が慌てて車に乗り込むと、すばやく彼も運転席側に回りこみ、すぐさまエンジンをかけて、ハンドルを握った。

「で、何か食べたいものある？」

「えつと・・・」

“ああ、そうだ、お昼食べようって言われてたんだっけ。こんな

事なら、寄り道するんじゃないかなあ。”

彼女の心の中を読まれたのか、はたまた顔に出て居るのか、

「お腹空いてない？」

と、彼に言われてしまった。 何ではれたんだろう？と思いつつ、

「あ、・・・ええ。帰りに少し寄り道したので」

「そっかあ」

残念。といった顔をしたのも束の間、すぐに額に手を置き何か考えている様子だった。しばらくして、額から手を離して彼女の方へと振り向いた彼の顔はニツコリと微笑んでいる。・・・と言うより、ニヤリとほくそえんでいると言った表現の方が最適な気がする。とにかくいやゝな予感のする笑顔を見せた。

ツーツと背中を何かが滑っていくのを感じた直後、

「じゃあさ、今から君の家に行くってのはどう？」

美しいその顔が見る見る悪魔の化身の様な顔に変わる。

彼は彼女の反応を楽しみたいが為にそんな事を言ったのだが、彼女は彼の思惑通り、顔を真っ赤にして慌てた。

「だっだっダメダメ！え、え、えと・・・ち・・・そう！散らかつてるからっ！」

「じゃあ散らかつてなければいいの？」

「ええっ?!」

はう！墓穴掘った！

首を傾げて、悪戯っぽい笑顔で彼女に問いかける彼に、あ、やっぱり冗談？冗談よね？ちよつと顔が真剣だったから思わず騙されちゃったよ……なんて言えそうも無い空気に愕然とする。この場をどう切り抜けようかと四の五のしていると、彼が一気にたたみかけて来た。

「じゃあ今晚、又来るからそれまでに部屋片付けといてよ」

「ちよつ……！」

『だって僕の家はもう来たでしょ？だから今度は君の番』真顔でそう言われると、そうよね、確かに自宅訪問して、豪華な食事も頂いたし、素っ敵なゲストハウスにもタダで泊めさせてもらった。同じレベルのもてなしは出来ないけど、ご招待しなきゃ悪いよね？なんて気分になってしまう。そもそも海外ではそういうしきたりかも知れないし？なんて言うんだらう、ホームパーティー的な？……いずれにせよ、

ああ、もう終わったな……と肩を落としていると、この場面で聞こえる筈の無い、癪かんに障る笑い声が聞こえてきた自分の耳を疑った。

「………プッ」

彼女の顔が真っ赤から真っ青に変わって行く様を存分に見せてもらった彼は、耐え切れず大笑いした。自分の言葉一つ一つにわかり

易い反応をしてくれる彼女が、おもしろく、そしていとおしくてたまらない。

「……………!?!もっつ!ふざけないで下さい!?!」

やっと気付いた彼女は、少し口を尖らせてそう言い返すのが精一杯だった。

「クククツ…………ごめんごめん。だってあまりにおかしくて…………ブツ」

プイツと拗ねて助手席側の窓の向こうを見つめる彼女は、顔は見えないが耳の先まで赤くなっている。いい年して彼の冗談も見抜けず弄ばれてしまった自分が恥ずかしくてたまらない。

ようやく彼の笑いが収まったと思うと、急に真剣な声になり、

「でもね…………本心だよ」

疑いの眼差しで振り返る彼女に対し、今度は何の含みもない笑顔でにっこりと微笑んだ。

彼女は何も言わずただじーっと彼の様子を伺っている。その顔から「どうせ又騙されてるんだ」と思っ居るのがありありと判る。

そんな彼女を見て、彼が眉間にしわを寄せて肩をすくめた。

「もう、又そんな顔して。とことん信用ないんだな、僕って」
「だって!」

「…………まあいいや、時間も勿体無いし、とりあえず行くこうか」

車がゆっくりと駅のロータリーから出て行く。そう言えば何処に行くんだろっ？何気なく聞いた問いに帰ってきた言葉は更に彼女を慌てさせた。

「何処へ行くんですか？」

「ん？僕の家だよ」

「ええっ?!」

「嫌？」

「嫌って言うか、今ソコから帰ってきた所だし・・・」

頭の中に昨晚の出来事が浮かぶ。

・・・バスルームから出てきた彼も・・・

思い出して、又顔が赤くなるのを感じ、手で妄想をかき消すように動かすと、

「だ、ダメダメ！家は行かない！」

「なんで？」

断る理由を探している間に、車が側道に寄せられる。ギアをPに入れて、体ごと彼女の方へ向いた彼は、もじもじしている彼女を見て、ははんと察しがついた。

「・・・もしかして。僕に襲われるって思ってる？」

「お、おそわ・・・っ!？」

彼の発言には驚かされっぱなしだ。

周りに居る男性でこんなにストリートに思った事を口にしたたり、行動に移す人は、今まで見たことがない。

カッチカッチとハザードの音が静かな車内を強調していて、意図せず緊張を連れて来る。

ハザードが出す音の速度より、彼女の心臓の方が早くリズムを刻んでいるのに気付かない振りをしたくても、それ程器用ではない彼女には、それすら難度の高い技だった。

返事に困っている彼女を見て、彼は口元を緩めながら溜息を一つ吐いた。

「君は本当に正直な人だな。そんな所に僕は惹かれているのかもしれないね」

腕を伸ばし彼女の頭に触れた。

その姿はまるで小さな子供をあやす母の様に、愛に包まれたやわらかな笑顔を浮かべていた。

「……まあ君の思っていた事は、あながち間違っていないけどね

」

彼女は一体、何処まで振り回されるのやら。

LOVE IS MAGICAL

第23話 悪夢

「・・・・・・・・・・・・・・・・ナ・・・・カ・・・・ナ」

徐々に戻っていく意識の中、誰かが自分の名前を呼んでいる。

目をうつすらと開けた途端、彼女の目に眩しい光が差し込んだ。

「・・・・誰？誰なの？」

手で目を覆いながら声のする方へと問いかけたが、ぼんやりと人影が映っているのは判るが、逆光でその人影が一体誰なのかは確認する事が出来ない。

誰？誰が私を呼んで居るの？

「僕・・・・僕だよ・・・・ジャックだよ」

「ジャック・・・・ク？」

途端に眩しかった光が収まり、そこに居る彼の姿が徐々に浮かび上がってきた。彼はいつもの様に笑顔を浮かべて、彼女の顔を覗き込んでいるが、なんだか様子がおかしい。

「やっと目を覚ましたね」

「・・・・・・・・こは？」

何処？

上体を起こし辺りを見回すと、彼女は真っ白なベッドの上に寝そべっていて、壁も窓もない真っ白な空間の中に居た。今、自分が置かれている状況がまだ飲み込めなくて、放心状態になる。

彼女のベッドに腰掛けて居る彼が、きよとんとしている彼女の手

を取ると、甲にそつと口付けた。

「あのね、カナ。よく聞いて」

「……え？」

「僕はもう行かなくちゃならないんだ」

「何処へ？」

「遠い所さ」

「……」

「しばらく会えなくなるけど、僕は君のそばにいるからね」

彼は、彼女の返事も聞かずにベッドから立ち上がると、彼女の頬にそつと触れた。名残惜しむように、ぎりぎりまで彼女の温もりに触れていきたいのか、最後に指の先でそつと触れた後、そのぬくもりは離れていく。

待って、まだ私、貴方の事何も知らない。こんな状態で放置されたら、苦しくて息が出来なくなるよ。

途端、今、彼を行かせればもう二度と会えなくなる。と直感的に感じた彼女は、いてもたっても居られなくなった。

「……イヤ」

ポツリと呟くが、彼は構う事無く彼女に背を向け、歩き出していく。

「何処へ行くの？私も行く！置いていかないで！！」

伸ばした手を何かが邪魔をする。いつの間にか彼女の手首には鉄の鎖が何重にもかけられていて、それを解こうとした所で、全くびくともしない。

“ 待つて！お願い！”

段々と小さくなっていく彼の後姿を夢中で追い求めた。どれだけ引つ張つても手首に巻き付いた鎖はびくともしない。

彼女の願いも空しく、彼の背中に大きな白い羽が姿を現したかと思つと、バサバサツと2、3度羽ばたき、再び眩しい光が彼女の目を襲った。

「……………」

そして、光が収まった頃には、既に彼の姿は忽然と消えていたのだった。

「行かないで！」

彼が消えた途端、自由になつた手を目一杯伸ばし、夢中で彼を探した。

……ルルルル……プルルルル

機械的な音が鳴り、彼女がゆっくりと瞼を開けるとそこは真つ暗な自分の部屋の中だった。

彼は何処に行ったのだろうか？

キヨロキヨロと辺りを見渡してみても、ココに彼が居ない事に動揺した。

いつまでも鳴り響く携帯電話。

手にとってディスプレイを見てみると彼の名前がそこにあった。受話ボタンを押し、恐る恐る声を出す。

「……もしもし」

(あ、もしもし？僕だけど今日はごめんね)

「……今……何処？」

(え？まだ会社だけど)

「……嘘」

(う、嘘じゃないよ！)

「……。。。」

(……???)

「どうして、私を置いて行ったの？」
（え？いや、急な仕事が入って・・・仕方なく・・・？）

「・・・。」
「？？？？？？」

「・・・行かないで」

「・・・。」

「お願い、何処にも行かないで・・・」

「・・・何処にも行かないよ」

「本当？」

「本当か、誓ひよ」

彼は何処にも行かない、それを確かめる事が出来ると、彼女は安心しきつた表情を浮かべて、そのまま静かに目を閉じた。

閉じた^{まなじり}瞼からは、一筋の涙が頬を伝っている。

「もしもし？」

(……………)

電話の向こうからは、彼女の寝息だけが聞こえている。それを聞いて、彼女は眠ってしまったんだと言う事が判ると、クスリと微笑みながら彼は携帯電話をパタンと閉じた。

「……………かわいいなあ……………」

今日の昼、彼女とランチタイムを一緒に過ごそうと彼女の家の近くの駅で彼女を待ち伏せた。せつかく会う事が出来たというのに、突然胸元で鳴りだした携帯電話に出してしまったせいで、会社に呼び戻された彼は、一緒に過ごせなかった事を詫びる為に電話をした筈だった。

なのに、詫びるところか、思わぬ拾い物をしたかの様な気分させられて、その後の仕事が手につかない程、彼の頭の中は彼女で一杯になってしまった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第24話　すれ違い

「はぁー……………」

大勢の人が行き交う街中でシヨウウインドウにもたれながら、大きな溜息をついて肩を落としている。小さい頃、ため息を一つ吐くたびに幸せが一つ逃げていくと、母に言われた事を思い出し苦笑いが出る。気がつけば彼の事で頭が一杯で、彼の事を思うため息が出てしまうと云った無限ループ地獄に陥っている。

こんな事じゃ、いつまでたっても幸せになれないな　と、自分で自分を皮肉った。

「？」

コツコツとヒールの音が近づいてくるのが聞こえ、顔を上げると笑顔の彼女が小さく手を振っている。

「カナ！久しぶり」

友人の笑顔に触れて彼女の顔が思わず緩んだ。

「……………それでさ、彼なんて言っただと思っ？」

久しぶりに会う友人は、最近出来たと言う彼の話を嬉しそうに話している。

幸せそうな彼女を見ると、まるで自分の事のように嬉しくなるものだ。

運ばれてきたアイスティーにミルクとシロップを入れて、ストロ―でくるくる回しながら彼女の話に耳を傾けていた。

「・・・ねえ」

「うん？」

「カナ、もしかしていい人出来た？」

「いつ!?!」

「なあんか綺麗になつたよね？」

「そ、そう？」

長年付き合っていると、微妙な変化にもすぐに気付かれてしまったのか、自分から話し出すつもりが、先に言われて戸惑ってしまった。彼女が話し始めるのを待ち構えて居るような友人のわくわくした顔を見ると、思わず笑みが零れ落ちる。

「もう、絵里香にはかなわないなあ」

「やっぱり！ね、どんな人？」

彼女は初めて会った時の事から順に話し始めた。

目の前の友人は、とてもびっくりした様子で彼女の話に黙って耳を傾けている。

「……………て言う事なんだ」
「……………。」

上目遣いで様子を伺う様に友人を見ている彼女は、何て言われるのだろう？と内心びくびくしていた。

「……………ちょっと……………いいじゃない！」

「……………あ、え？そう？」

「なんですぐOKしないの？」

「うーん、自分の気持ちがまだよく判らなくて」

「なんで判らないのよ！」

「だって、私には釣り合わないさ過ぎるよ」

「あなたね……………初めて恋愛するってワケじゃあるまいし、今までだって恋愛の一つや二つして来たんでしょ？もうちょっと、こっ……貪欲になってもいいんじゃない？」

「……………」

肩を落とし手元のアイスティーをストローでくるくるとかき回している。その様は「迷ってる」と言う自分の気持ちを表しているかの様にも見えた。

「私は……………」

彼女が重い口を開くと、小声で話す彼女の声を聞き漏らさないように、絵里香は身を乗り出して聞いている。

「私はちゃんとく好き……って思える様になってからじゃないとイヤ

なの」

そうポツリと呟くと、一際大きなため息を吐いた。

「。。」

彼女の言葉を聞いて安心したように、少し微笑んだ絵里香が彼女の頭をなでながら、

「カナの頭の中は彼で一杯なんだね。なら大丈夫！じきに自分の気持ちの答えが出るよ」

「そう・・・かな？」

「うん！」

この子に相談してよかったと心から思う。絵里香は無理強いするような事は言わない。手を差し伸べて答えを導く手助けをしてくれる。何よりも、自分の事を良く理解してくれている絵里香には本当に頭が上がらない。

「あり、がとね。」

彼女の溜息も底をついたのか、この時以降、彼女の口から吐き出される事は無かった。

「ジャック。書類ここに置いておくわよ」

「ああ、ありがとうカレン」

彼は脇目も振らず、デスクに向かって全てを片付けるかのように仕事をしている。

カレンは彼のデスクの上に軽く腰を掛け、少し不機嫌そうな声で話しかけた。

「何をそんなに焦ってるの？」

「ん？ああ、この仕事さっさと片付けたいんだよ」

「そうじゃなくて、・・・あのカナって言う子猫ちゃんの事よ」

書類に走らせていたペンをピタッと止め、彼はカレンの顔を見上げた。

「・・・今日これから会うのね？」

「いや、まだわからないよ。約束してるわけじゃないし」

そう言うと又書類に目を向けた。

会う約束はしていなくとも、会おうとしているのだと思ったカレンは、心の中で何か熱く煮えたぎるものを感じた。

「あんな小娘の何処がいいの？」

「・・・やめてくれないかな」

彼の頬にカレンの手が触れる。彼はその彼女の手から逃げるよう

に、くるりと椅子を動かして窓の外を見る振りをした。彼のその態度で自分を拒否していると言う事がわかると、悔しくなりカレンは思い切った行動に出た。

彼の椅子の側へと回り込み、椅子を自分の方に向けると、彼の頭を両手で掴み強引に彼の唇を奪う。片膝を彼の椅子の上に乗せ、全体を押し付けるようにして、彼の唇を貪くわっている。硬く閉じられた彼の唇を無理にこじ開けようと、歯列をなぞるが彼は招き入れる所か、顔を背けてカレンの舌を拒絶した。

「っカレン!？」

カレンの肩を持ち、自分から引き剥がそうとすると、次にカレンの手は彼のシャツのボタンに手を掛けた。

「なっ何を・・・?!どうしたんだ？」

彼女の両手首を捕まえた彼は、突然起こった出来事に困惑していた。

カレンの顔を見ると涙で目が潤んでいて、いつも強気なカレンの事を思うと、そんな弱ったカレンの表情は簡単に彼の胸を締め付けた。

次第に彼女の力が弱まっていくのを感じ、彼も手首を掴む手の力を緩めると、カレンがゆっくりと話し始める。

「私は・・・ずっとあなたを思ってきたのよ?・・・ジャック。」
「・・・カレン」

カレンの突然の告白に驚いた彼は動揺を隠し切れない。カレンが自分の事をずっと思ってきた?まさか・・・と言った面持ちだ。

「貴方の2度の結婚も私は祝福してきたのよ。貴方が幸せになるのなら・・・とね」

「僕は、」

「次は私が幸せになる番だっと思ってたのに・・・なのに・・・あの娘が急に現れて・・・。横から貴方をつかさらって行くのを、もう指をくわえてただ黙って見ているのはイヤ！」

「カレン・・・」

顔を塞ぎ泣き崩れてしまったカレンに、椅子から立ち上がりそっと近づくと、震える彼女の肩にそっと触れ、そのまま胸に引き寄せた。

デスクの上で彼の携帯電話が音も無く光っている。

彼女からの着信とも知らず、二人はただ静かに抱き合っていた。

第25話 行動

冷えた空気が漂う冬の朝。彼女は冷たくなった自分の腕に気付き目を覚ました。冷たくなつた手には、携帯電話がしっかりと握られていて、昨晚、彼からの電話を待ちつつベッドにもぐりこんだまま、気付けば朝を迎えていた。

急いで着信履歴を確認してみるも、結局彼からの着信はない。その事実が、寝起きの頭を無理に起こし、いかに自分にとって彼の存在が大きいものなのか、今やっと気付かされる。

“ 仕事、忙しいのかな・・・夜にもう一度かけ直そう ”

会えないと思うと会いたくなる。

声を聞けないと思うと、途端に声を聞きたくなる。

繋がらない電話が、彼女の気持ちを明確にさせる事となった。

「ジャック? グレース、ジャックはどこ?」

「ほ?坊ちゃんなら血相変えてバルコニーに飛び出して行きましたよ」

グレースが片手で腰を叩きながら指差した方を見ると、バルコニーの手すりに肘をついて携帯電話で話をしているジャックを見つけ、

カレンはバルコニーにそつと近づき窓を少し開けて、彼の様子を伺った。

「あ……うん、ごめんちょっと忙しくて」

（いえ いいんです。あの……少しお話があるんですが、時間作ってもらえませんか？）

「あ、うん。僕も……話があるんだ」

会話の内容でカナと話をしているのだと悟ったカレンは、思い切り窓を開け放つと、ジャックの背後から両腕を巻きつけて抱きつき、空々（そらぞら）しく彼に話しかけた。

（ジャック？ 食事の準備が出来たわよ。今日は貴方の好きなものばかり作ったわ）

「……」

電話の向こうから<チュツ>と言う音が聞こえ、鈍感な彼女でもただならぬ雰囲気を感じ、体中から血の気が引いていくのが良くわかった。電話の向こうにカレンが居る。そして、カレンはきっと彼の事が……。

（わかった。後で行くから先に行つて）

受話器を手で押さえながら話してるようだが、会話は筒抜けだった。

(あ、ごめん。えっと・・・今日、今から行ってもいいかな?)

彼女が部屋の時計に目をやると、もうすぐ今日という日が終わりを告げる程の時間になっていた。明日は朝早くから大事な会議がある。そう脳裏にすぐ浮かんだが、彼女は彼に会いたいが故にその申し出を断る事が出来ない。

「・・・はい」

(じゃあ、すぐにそっちに向かうから)

電話を切ると、急いでバルコニーから戻り、コートハンガーから上着を剥ぎ取るようにして、リビングを後にする。追いかけてきたカレンに、

「ちょっと出てくるよ・・・食事は帰ったら食べるからね」

と告げると、血相を変えたカレンが噛み付いた。

「あの娘のトコに行くのね?! そうなんですよ?! ジャック!」

カレンの問いかけに即答出来ず、しばらく無言になる。そして、何処か割り切れた様な態度に変わると、

「・・・ごめん」

ただ、一言その言つと、コツコツコツと革靴を鳴らして、長い廊下を走り出した。

夜の闇を切り裂くように無我夢中で車を走らせた。ハンドルを握る手が少し汗ばみ、これから起こりうる事態に少し戸惑いを感じている。

カレンの気持ちと思うと、感情の赴くままに走らせてしまつて良いのか、自分の中で葛藤する。

彼女の方も話があると言っていた、きつと返事をくれるのだろうか。遅かれ早かれ今夜、何かしらの決着が着くのだと感じた。

部屋のチャイムが鳴り、ゆっくりと玄関の扉を開けると、そこには少し疲れた表情がとって見える彼が、申し訳なさそうに立っていた。

「ごめんね、こんな夜遅くに」

彼のソフトな声が耳に染み渡る。

「いえ、こちらこそ・・・どうぞ」

彼女は体を斜めにして、部屋の中に彼を招き入れようとした。あんなに家に入れるのを拒絶していた事を思うと、今、自分が言ってる事がなんだか信じられないが、この寒い中こんな時間に玄関先で話し込むのもなんだからと、気を効かせたつもりだった。が、彼のびっくりした様な表情を見て、いらぬ気遣いだったのかも後悔しかけた時、

「いや・・・ここでもいいよ」

って案の定拒絶されてしまった。

「でも、ここだと寒いし・・・」

いつもの様な、彼女を慌てさせて楽しむ彼はソコにはおらず、先程の電話でのカレンとのやりとりからして、今から聞きたくない様な事を言われるんじゃないかと、珍しく動物的感が働いて、なんとかそれを食い止めようとしている自分がなんだか惨めだった。彼もそんな彼女の気持ちを察したのか、グツと苦しそうに顔を歪めている。

首を垂れて足元を見下ろし、彼が言葉を搜して居る。おもむろに顔を上げたかと思うと、肩を大きく上下して大きな溜息をついた。上目遣いに彼女に視線を向けると、

「理性が・・・保てなくなるのが怖いんだ」

なんだか悲しそうな目をして、そうポツリと呟くと、諦めた彼女は体勢を戻し、覚悟を決めた。

「・・・話って?」

「うん・・・あ、君の方は?」

「私は後でもいいんです」

作られた笑顔の裏には、先に様子を伺ってからにしよう　そ
んなずるい感情がいつの間にか湧き出していた。

「もしかして・・・この間の返事?」

小さくコクンと頷くと、そのまま俯いて、どうしよう・・・と
悩んだが、次に彼が話し出した事によって、その悩みは自分で解決
する必要が無くなった。

「その事なんだけど・・・」

「・・・。。。」

「忘れて欲しいんだ」

彼の言葉を聞いて、身体が少しビクツと震えた。ゆっくりと顔を
上げて彼の顔を見上げると、彼女の表情を見た彼が辛そうな顔を
して、顔を歪ませている。

「……忘れる……って？」

「無かった事にして欲しい」

尚も、容赦なく切り捨てる様な言葉に愕然とする。彼女の表情が
「何で？どうして？ついこの間まで、私を喜ばせるような事ばかり
言ってたじゃない？」と、言っている。

でも、その言葉を全て伝える事も出来ず、

「な……どうして？」

と、たった一言、少し震える声で尋ねるだけで精一杯だった。

彼女の作り笑顔が彼に追い討ちをかけている。

「僕は……君の言った通り、君に釣り合う男じゃないんだ」

「それはっ！……」

「これ以上、誰も傷つけたくはないんだよ」

「……誰もって……カレンさん？」

「。。。」

彼は断定しなかったが、押し黙る事が、‘イエス’の言葉の代わり
だと言う事を知る。

「……ずるいよ」

彼女の放った一言に、彼の顔が更に歪んでいくのが判る。目の前
にいる彼女の目から次々と涙があふれ出てきて、思い切り彼女を抱
きしめてやりたい衝動に駆られ、耳元で‘愛している’と囁きたか
った。

でも、そんな事をしてしまうと、今言った話が嘘になり、ただ彼女を傷つけたという事実しか残らなくなる。

彼は彼女から視線を逸らし、やるせなさでグッと握りこぶしを作ると、

「本当に・・・ごめんね」

そっぴい残して、逃げ去る様に彼はその場を去った。

背中に彼女の視線をいつまでも感じながら。

LOVE IS MAGICAL

第26話 逃げ出したい現実

逃げるように彼女の元を去ると車に乗り込み、震える手を見ながら下唇を強く噛んだ。

「僕は・・・なんて事をしてしまったんだ・・・」

ハンドルに拳を打ち付け、抑えていた感情を露にする。

真夜中の道路は昼間と違い車も少なく、自然とスピードが出てしまう。次第に視界が悪くなったと思うと、それは彼の目から涙が零れ落ちたせいであった。

短い期間ではあったが、彼は確実に彼女に夢中だった。

彼女の笑顔に触れると自然と顔がほころび、彼女の照れる顔を見ると抱きしめたい衝動に駆られた。

しかしもうそれらをもつ見ることは出来ない。その思いが彼の目から涙を溢れさせるのだった。

その日の朝

眩しい朝日が目に差込み、それによって朝の訪れを知らされる。

柔らかなシーツの中でゆっくりと上体を起こした彼は、自分が何も身に着けていないことに気付き、そばにあるガウンに手を伸ばしと、朝日の当たる窓の方から、あるはずの無い声が聞こえ、そこに目を向けた。

「あら、起こしちゃったわね」

そこには彼のシャツを素肌に纏い、朝日に包まれた中で、湯気立つコーヒークップを持って立っている何処か満足気に見えるカレンが居た。

カレンはベッドに近づくと、腰を下ろし彼の頬に軽くキスをする。

「ジャック・・・あなたは最高よ。最高の男だわ」

意味深な目つきをして、彼の耳元で囁いた。

「.....」

彼は何も言わずガウンを羽織ると、立ち上がり部屋を出ようとした。

「何処へ行くの？」

「.....シャワー、浴びてくる」

ポツリと言い残し、部屋から出て行った。

勢いよく出る熱めのシャワーを頭から浴びると、昨日起こった出来事が頭をよぎり、その事実が彼を追い詰める。

昨夜、社長室にて

彼の事をずっと思っていたと言うカレンの告白に、彼は戸惑いを隠せ無かった。しかしながら、自分の気持ちに嘘をつくことは出来ない、泣きじゃくるカレンをそっと抱きしめ、カレンに自分の本当の気持ちを打ち明けた。

「カレン、僕は君の気持ちに答える事が出来ないんだ。正直に言うよ・・・僕はカナに夢中なんだ」

カレンの背中をそっと撫でつけていた手を止め、カレンから離れ背を向けた。

「・・・？」

ふと、デスクの上の携帯電話に着信があつた事を知らせるライトが点滅している事に気付き、とっさに手を伸ばした。

「やめて！」

ピタリと一旦手を止め、カレンに振り返ると、嫉妬に狂った形相で彼を睨みつけている。

「その電話に出ないで！」

彼は一度視線を落として間を開けた。そして意を決したように、もう一度携帯電話に手を伸ばす。

「っ?!」

彼のそんな態度に激高したカレンは、デスクの上に置いてあつた

ペーパーナイフを手に取り、それを自らの喉に突きつけた。

「な、何を?!」

それには、流石の彼もおののき、無理に行動に移す事をやめた。

「私は本気よ!その電話に出ないで!」

驚く彼を尻目に彼女は凄んで見せた。その表情からしてカレンは本気だ、本気で自分の喉を掻つ切るつもりだと感じたのだった。

「判った、判ったから落ち着いて・・・ね?」

伸ばした手を引き上げ両手を上に上げる。更にデスクから少し距離を取り、電話を手にする気は無い事をカレンに示した。尚も、カレンの手にはペーパーナイフが握られていて、白い喉に向かって刃を向けている。この時ほど、ペーパーナイフをデスクの上に出しっぱなしにしていた事を後悔した事は無い。

「カレン、馬鹿な事はやめてよ」

頭を左右に振りながら、眉をひそめ悲しげな目でカレンに問いかけた。どうすれば今のこの現状を止めさせる事が出来るのか?頭の中でその思いがぐるぐると駆け巡る。しかし、彼が考えつくよりも早く、カレンの方から解決策を提示してきた。だが、提示してきた内容に、胸がギュツと詰まるのを感じる。

「私を抱いて」

「カレン・・・」

「昔のように抱いて頂戴・・・お願いだから」

突きつけたペーパーナイフは微動だにせず、今でも彼女の喉を捕らえている。カレンはきつと自分と彼女に対してのあてつけでそんな事を言い出したのだろう。そうだと判っていても、目の前で泣きながら懇願している彼女の事を思うと、放っておく事が出来なかった。

彼の屋敷の敷地内に隣接する、スタッフハウスに住んでいる彼女の部屋に行き、掴んでいたカレンの腕をベッドに向かって突き離れた。そのまま彼は部屋の隅にあるキッチンへと向かい、冷凍庫に入っているスミノフのボトルを取り出すと、そのまま口に含み勢い良く飲みだした。

味わうと言うよりかは、アルコールの力を借りてでもしないと、今からなされる行為に耐える事が出来ないかの如く、ゴクッゴクッと勢い良く音を立て、彼の喉に滑り落ちていくようだ。

ガンッ

荒っぽく音を立てテーブルの上にボトルを置くと、彼は振り返りカレンを見ながら口をぬぐった。

カレンは思わずその仕草にゴクリと喉を鳴らし、普段は温厚で中性的な彼の中の‘男’の部分を感じて、それがカレンの全身に鳥肌を立たせた。

「。。。」

獲物を捕らえるような目で、無言で近づいて来ると、横たわるカレンに馬乗りになった。ベッドが深く沈み、軋む音がする。

たったそれだけで、カレンの口から甘い吐息が『はあっ……っ』と零れ落ちた。

カレンの着ているシャツのボタンを一つ一つ取るのがもどかしいのか、一気に引き裂かれて、ボタンがピンピンッとあちらこちらにはじけ飛ぶ。

「っ、ジャック……」

恍惚とした彼女の顎を捕らえると、挑戦的な目つきで、

「わかったよ カレン……君の望み通りにしてやるさ」

そう言い放ち、彼女の賭けに敗れた彼は、何もかもを忘れて、カレンの胸に顔を埋めるのだった。

第27話 溢れる涙

オフィス内のあちらこちらで引つ切り無しに鳴り響いている電話の音にまみれながら、彼女は全てを忘れようと、無我夢中で仕事に没頭する。他にこれと言って趣味を持ち合わせていなかった彼女にとって、仕事に打ち込むことでしか傷ついた心を癒す事は出来ない。いや、仕事に集中しても心は簡単に癒えないのは、彼女も熟知しているが、自分を追い込む事で余計な事を考える暇を与えさせない様にするしか無かった。

あの日、彼に一方的に振られてから数週間が経った。

「コレ、急ぎの仕事なんだけど、誰かやってくれないかあ？」

そう言ったのは、彼女がWEBデザイナーとして勤めるWEB制作会社の上司で、制作部、WEBプロデューサーの山下課長、通称‘ボス’だった。今でこそ‘ボス’と言う呼び名がしっくりくる年齢になったが、‘ボス’と言うのはずっと昔、彼が初めてチームリーダーになった時からの彼の‘愛称’なのだ。部下と呼べる人間が出来てすぐ、『これからは、俺の事を‘ボス’と呼ぶように！』ってお達しを出した変わった人だ。どうやら、海外ドラマにはまっつしまい、‘ボス’と呼ばれる事にずっと憧れていたらしい。

嫌われているわけでは無いが、少し空気の読めない所があるのが特徴だ。

現に、後、数十分で終業だと言う時に仕事の依頼をして、誰が喜んで引き受けるだろうか？周りのスタッフはボスに指名されまいと、急に電話を掛け始めたり、おもむろに席を立つなどして、判りやすい反応をしている。

ボスは仕事を投げる先を見つけれず、書類を丸めて、弱ったなあといった感じで頭を掻いていた。

「私でよければ、やりましようか？」

見かねた彼女が声を掛ける。

「え？でも、これカナちゃんの担当分野じゃないが、いいのか？」

「はい、どうぞ早く帰ってもすることないですから。私が引き受けても問題無いんですたら、喜んで引き受けますが」

「おお、勿論問題無いよ！逆にカナちゃんみたいなベテランさんにやって貰った方が、早いしぶつくさ言わないし助かるわ。若い奴らはどうもイカン。ありがとう！じゃあお願いするよ」

何故だろう？褒められている筈なのに、何処か可愛そうな子扱いされて居るような気がして、顔が引きつる。

「帰ってもやる事が無い。」年頃の女性が言うには悲しい理由だったが、今の彼女にはそんなのはお構いなしだった。

とにかくいらぬ事を考えないように。

そう思っただがむしやらに仕事をしていた。

丸まった書類を広げると、有名なアーティストのCDジャケットの制作依頼。普段は企業のロゴや、ホームページのデザインを主にしている彼女にとって、非常に魅力的な仕事であった。

「JASON」・・・あ、この人知ってる」

訴えかけるようなメツセイジ性のある詩と、一度聞いたら耳に残るような音楽。そして何よりも透き通るような声が人気の歌手だ。

“なんだかラッキーかも”

初めてする分野の仕事に携わる事が出来、彼女はワクワクしていた。

「さて、と。そろそろ帰ろっかな」

ある程度仕事を片付け、帰宅の準備を始める。気付けばオフィスは彼女一人。ここ最近は何日こういった状況が続いていた。

窓から見る月は、外の空気が澄んでいるのか、くつきりと見えてとても綺麗だった。

仕事が終わわり、気が緩んだのか、ふと、あの日初めて電話をした時の事を思い出してしまった。

ドキドキして震える手でダイアルしたあの時。強引で直接的な表現をする彼に振り回されながらも、会えない日でさえも、凄く楽しかった思い出が蘇り、自然と口元が緩んだ。

それと同時に、何故あの時、終電を逃してしまった勢いで電話してしまったのだろうか？あの時、電話をしなければ、こんなに辛い思いはしなくて済んだかも知れないのに。

「……つぶ……」

今の彼女には、楽しかった思い出よりも辛かった思い出の方が、強烈に頭の中に残っている。忘れようと思っていた過去に蓋をしようと、もがけばもがくほど、手に負えない程それは圧力を増し、押さえた手のひらから溢れ出すと、あっという間に決壊を破られてしまう。

「……ほんと、ずるいよ」

涙が頬を伝い始め、思わず両手で顔を塞いだ。声が漏れるのをこらえながら、あの日から我慢していた涙があふれ出るのを止める事が出来ないでいた。

LOVE IS MAGICAL

第28話　めぐもり

彼女はオフィスで感情的になり、むせび泣いていた。一度出た涙は簡単には止まらないと、自分が一番良く知っていたから、あの日から今までずっと泣くのを我慢してきたのに。

彼との距離が一気に縮まった、あの日の夜。

今の状況が、その日に酷似していて、つい気が緩んだ時に思い出してしまった。

あの日も、月がとても綺麗だったのを、良く覚えている。

突然、ガチャツツという音がしてオフィスの扉が開く音が聞こえ、思わず身体がビクツと震えた。

“え？こんな時間に・・・？”

このビルの警備員は、23時頃に一度巡回に来たばかりなのに、一体誰だろう？

ココ最近、ほぼ毎日の様に、この位の時間まで残っていたが、こんな夜中に人が来る事は今まで1度も無かった。

声を上げて泣いていたのが嘘の様に、今はピタリと収まると、次には恐怖心が湧いてきた。

「あれ？カナちゃん、まだいたんスか？」

と、怯えていた人の気も知らず、呑気にオフィスに入ってきたのは、後輩でWEBプランナーの林健人だった。彼女より8歳も年下のくせに、彼女の事を「ちゃん」づけする生意気な男である。

とりあえず、不審者では無い事がわかると、すぐに健人から顔を背け、手のひらの手首に近い部分で目元を拭った。

「うん、今帰るトコ」

健人に悟られないように、努めて冷静に振舞いながら、荷物を片付け始める。が、鼻声だけは隠しようが無く、少し不審に思ったのか、健人が近づいてくるのを雰囲気察した。

「・・・そうなんすか。俺、忘れ物しちゃって取りにきたんスよね。」

「そうなんだ」

彼女の横に立ち止まり、180cm以上ある長身の健人に見下ろされてるのが、気配で判る。長い髪で顔を隠し通そうと、決して健人の方に顔を向けることはしなかった。

「女の人一人でこんな時間に帰ると危ないですよ？」

「そうだね、じゃあ急いで帰るわ」

「・・・。」

お先に。

って言いながら逃げるようにして健人の横を通り過ぎようとした。でも、急に腕を掴まれて健人の方に強引に顔を向けさせられてしま

乱れた髪に、びしょ濡れの顔。目も鼻も真っ赤になって、メイクもすっかり落ちている。

そんな彼女の顔を目撃した健人は、綺麗な切れ長の目をありえないほど丸くさせて、ギョツとした顔をしていた。

「……………」

「な、何よ!」

自分の顔を直視されるのが嫌で、思わず顔を背けると、健人は何を思ったか、突然噴出してケタケタと笑い出した。

「?!」

“ な、何なのコイツ?! ”

「カナちゃん、ひどい顔!」

一気に彼女の顔がムツとした表情になり、悲しい気持ちが吹っ飛んでしまった。健人はいつもこんな調子で人をからかうのだ。ノリも軽いし、女性と本気で付き合った事が無いと言ったことも、人伝いで聞いたことがある。

“ 彼とは正反対だ ”

気付いたら、つい彼と比べてしまう自分に心底驚いた。あんなに辛い思いをさせられたと言うのに。あんなに振り回されて、揚句の果て、違う女性に走った彼を何故いい様に思ってしまうのか、自分でも良く判らなかつた。

「う、うるいわね! いいから、もう離してよ!」

腕を振り解こうとしたその時、何故だか急に視界が暗くなった。タバコ臭いシャツ、首につけているジャラジャラしたアクセサリーが顔に当たり、それが冷たくて少し痛みを感じる。

「な、何をっ！」

思い切りきつく抱きしめられて、話す所か息が上手く出来なかった。

意識が遠のいたり戻ってきたりする。まだ自分の腕なりが、健人との間にあれば抵抗もし易いし、今みたいに意識が薄れそうになりもしないのに、完全に彼女の胸が健人の胸板に貼り付けられている上に、力強く抱き締められ、彼女は池の中で泳ぐ鯉の様に酸素を求めて、口をパクパクさせる事しか出来なかった。

健人の腕の力が少し弱まったと同時に、彼女の薄れ掛けていた意識も戻り始める。それを見計らって健人の腕から逃れようとするが、それに気付いた健人に又きつく抱き締められて、彼の腕から逃れる事は一切出来なかった。

「泣きたい時があるなら言ってよ。いつでも俺の胸を貸すからさ」
「。。。。」

遠のく意識の中、『誰があんななんかと！』って叫びたいのに、苦しくて文句を言う事も出来ない。無言でいる事が、健人にあらぬ誤解を与えてしまうと思いつつも、人の温もりがとてもあたたかく感じ、ほんの少しだけでも気が休まった様な気がした。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第29話 運命の悪戯

健人に抱きしめられてから1週間位経ったが、彼は別段変わった事も無くいつものように、

「カナちゃん、毎日毎日遅くまで頑張り過ぎ！お肌くすんでますよ？ちゃんとお手入れしなきゃ。でないとせつかく可愛い顔してるのに、勿体無いですよ」

と、人を小馬鹿にする事を楽しんでいる。可愛い顔って・・・まずありえないけど、8歳も年下の健人に言われるのは褒められていると言うよりは、舐められているという感情が先に立つ。

しかし、この会社のお局達に、彼はとても人気なのが未だに理解できない事の一つである。見え見えのお世辞でも、普段誰にも言われる事の無い、干乾びたお局様たちは、ウブな少女の様に頬を赤らめていたりするのだ。

入社当時の健人の事を思うと、どちらかと言うと絡みにくかったのが、今ではそんな事など微塵も感じさせない程、皆に馴染んで居る。

“まあ、3年目ともなると、少しは大人になるって事かしらね”

そんな事を思いつつ、適当に健人をやり過ごし、自分の仕事に戻った。

いつも通り黙々と仕事をしていると、ボスが慌てた顔をして彼女のところへやってきた。

「ちょ、ちょっとカナちゃん！こないだのやってくれた仕事！」

ボスの様子を見て、すぐに「こないだの仕事」がどの事を指して居るのか判る。

「・・・やっぱり良くなかったですかね？」

しまった、やっちゃったかな・・・と罰の悪そうな顔になったが、ボスの表情が表して居るのは、どうやらそういうことでは無かったようで、

「ち、違っただよ！先方えらく気に入ってくれたらしくてね！一度打ち合わせしたいって！」

「あ、そうでしたか、良かったです」

ホッと胸を撫で下ろし、何とか「ベテラン」の顔を守れたと安堵する。

ボスの顔を見ながらデスクの上のやりかけの仕事に手をつけようと、書類を集めていると、

「で、今から行くから君もすぐ用意して！」

と、突拍子も無い事を言われた。

「え？私もですか？」

「そりゃそっだよ！これは君が仕上げたんだから」

「はあ。」

今までの仕事の流れで言うと、こっから先はプランナーなり、ボスなりに話を進めていたのに、なんだか今回はそうでは無いようだ。‘?’と首を捻りながらも、慌てて出かける準備をし、タクシーに飛び乗った。

ボスは何故か興奮しきりだった。それもその筈、相手は大企業で今まで何度もチャンスを与えられてきたが、箸にも棒にも掛からなかったそうだ。

まだこの仕事は決まった訳じゃない、ここからが勝負なんだという事も、相手先の会社へと向かうタクシーの中で延々と熱く語られた。

タクシーが止まり、ここがその会社なんだと知らされる。

聳^{そび}え立つ高いビル 都心に程近く一体幾ら払えばこんな所にこんな高層ビルが建てられるのだろうか?とつまらない事を考えていた。このビルに入って行く人達も皆、お洒落で、高そうな洋服を颯爽と着こなしている。ココで働く人達は自分とは別世界に住む人達なんだなあ、と感じさせられた。

「・・・?」

敷地内に足を踏み入れて、ソコで初めて気付いた事があった。このビルに入っている会社の案内板。上層階の半分以上を占めている。今から向かうクライアントの社名。

“どこかで見た名前・・・”

「・・・!?!」

一気に胃がぎゅーっと鷲掴みにされる感覚が彼女を襲った。コツコツと自信有りげに響いていたヒールの音も、次第に間隔が開いて音も小さくなっていく。

“・・・彼の会社だ・・・”

「ん？どうした？行くぞ？・・・はっはあくん、流石のカナちゃんでも立派過ぎて緊張してるのか？」

「いや、・・・はい」

彼に会ったらどうしよう？もう周りが全く見えなくらい動揺する。ボスが横から何か言ってるが、もう彼女の耳には入ってこなかった。

不安に押しつぶされそうになりながらもロビーに入ると、余りの人の多さに思わず胸を撫で下ろした。

“ああ、そうか。こんなに大きな会社だったら、会う事もないか”

そう思うと、痛んでいた胃も楽になり、気持ち落ち着いてくる。彼女にとって大きな仕事なのは確かで、ボスだけでなく彼女もこの仕事を何とかして取りたいと思っていたから、ここで降りるわけ

には行かないのだ。

“ よしっ！”

と意気込むと、ボスと一緒にエレベーターに乗り込んだ。

「失礼します」

打ち合わせ室に通されしばらくすると、4人が室内に入ってきて、一通り挨拶を交わしボスを中心に話が進められる。

ドアをノックする音が聞こえると、どうやら女性が飲み物を運んできてくれた様だった。

「どうぞ」

とカップを差し出してくれた女性に軽く会釈し、カップに入っているものを何気なく覗き込むと黒い液体が波打って居るのが見えた。彼女はカップには一切口をつけず、ひたすら話に聞き入っていると、先程の女性が役目を終え、部屋から出ようとドアノブに手を掛けた瞬間、勝手に扉が開いて、その女性は胸を押さえて驚いていた。

「失礼しました。・・・社長も一緒にさるんですか？」

女性が発したその言葉を聞いて、ピクリと彼女の顔が凍りつく。

「ああ、すごく興味があつて。どんな人が作ったのか、一度話してみたいと思つてね」

甘い香りが部屋に流れ込み、優しい高音の声が響き渡る。

彼女が恐る恐る顔を上げるとそこには、少し伸びた髪を一つにまとめ、前髪をルーズに垂らしているあの‘彼’が・・・今一番会いたくなかったあの‘彼’が現実にそこにいた。

LOVE IS MAGICAL

第30話 緊張

彼が部屋に入りボスが慌てて立ち上がった。ボスが名刺を出すのに手間取っている間に、部屋の中を見渡して、うつむいて座っている彼女に視線を移した。

途端、ハツとした表情になり瞬きもせずに目を丸くしている。

何故、彼女がここに？

言葉に出さずとも、その表情でわかる。

さつきよりも更に愛想良く、ペコペコしながらボスが名刺を出して彼に挨拶をしている。明らかに彼女に注がれている彼の視線を感じるも、彼女は顔を上げる事など出来ず、膝の上で組まれた手をぐっと握り締めていた。

ボスの名刺を受け取ると、慌ててパタパタと自分の胸や腰を手で触り、名刺を忘れた事を詫びている。

ボスに肘でこづかれ立ち上がった彼女は、視線を上げる事無く、うつむいたまま震える手で自分の名刺を差し出した。

「・・・野嶋叶子と申します。」

ドキンドキンと胸の音を聞くたびに、差し出した自分の名刺が小刻みに震え、早く受け取って欲しいと心の中で訴えた。自分の手が小刻みに震えていると感じれば感じるほど、その手の震えが増す。

彼女とは対照的に、薄っすらと笑顔を浮かべている彼には、余裕さえ感じられる。

やっとの事で彼女の名刺を片手で受け取る。と同時に、すっと右手を出した。

「・・・初めまして」
「っ！」

その言葉の意味は、彼が最後に言った言葉通り、『無かった事にして』。それを意味しているものであった。

差し出された彼の手にそっと自分の手を重ねると、柔らかく温かい手に包まれた。

今までずっと頭の奥に封じ込めていた悲しい感情が溢れ出そうになる。喉に熱いものが込み上げてきて、吐き出したい気持ちを堪えるのに必死だった。

やっと気持ちが落ち着いてきたところだったのに、なんで神様はこんなに悪さをするのだろうか？こんなに沢山人がいる中で、なぜわざわざ再び出会わなければならないのだろうか？

気持ちの整理がつかないままに、中断していた打ち合わせが仕切りなおされた。

彼を真ん中に座らせるように社員達が席を移動すると、彼は彼女のまん前に座る形になった。

打ち合わせは再開され彼はテーブルに肘をついて、口元を隠すように手を組みじっと彼女を見つめている。

ふと視線を落としたかと思うと、急に席を立ちドアの外へ出て行った。他の社員達は突然退席した社長に別段気に掛ける事も無く、気にせず話を続けていた。

すぐに戻ってくるなり、又同じ姿勢で彼女を見つめている。

「社長はどう思われますか？」

意見を求められても、視線は彼女に向けたまま適当な返事をするだけだった。

しばらくして、又ドアをノックする音が聞こえ、先ほどの女性が又入ってきた。

彼女の側まで来ると、彼女に出されていたコーヒーは下げられ、代わりに温かい紅茶とミルク、それとひざ掛けを彼女に手渡しニコリと微笑んだ。

彼女があっけに取られていると、彼は絞ったライム入りのペリエを手に取り、とても満足気な顔をしていた。

LOVE IS MAGICAL

第31話 拒絶

ほんの数える程しか共にした事のない食事の中で、彼女のオーダーしているものを彼は把握していた。そのさりげない心遣いが、彼女にとっては余計に苦しいものとなる事を知らずに。

もう放って置いて欲しい。

そっちが忘れてくれて言ったのに、何故又優しくするのかさっぱり判らない。又その気にさせておいて、あっさり振るのだろうか？

彼の事が、判らない。

「では、今日はこの辺で」

終始、彼に見つめられ、彼女は心ここにあらずのまま打ち合わせがやっと終わった。

全員が一斉に席を立ち出口へと話しながら向かう中、彼女はテーブルに広げられた書類をまとめ、カップを片付けやすいように端に寄せていた。

彼はそんな彼女を微笑みながらドアで待っている。待たれているプレッシャーに思わず手が震え、カップがカチャカチャと音を立てた。

彼女が荷物を持ってドアに近づくと、そっと背中に手をおいて彼

女を先にドアの外へと導いた。

廊下には沢山の打ち合わせ室があり、使用していない部屋は暗くドアは開いた状態だった。

前方ではボスと彼の社員達が熱く語りあっている。彼女の後ろに居た彼は、あつという間に彼女を追い越すと、両手をポケットに突っ込んで彼女のすぐ前を歩き出した。

やっと打ち合わせと言う名の拷問が終り、はぁーっと思を吐き、足元を見ながら歩いていった。その間に、彼が扉の開いて居る部屋を覗きこんだかと思うと、そのままその中へと消えていった。

「・・・？　いつ？」

顔を上げて、さっきまで目の前に居た彼が居ない事に気がつくと同時に、腕を掴まれ強引に部屋の中へ引きずり込まれた。

彼女をドアに押し付けながら扉が閉まり、それと同時に手で口を塞がれる。

扉が閉まった事で明かりの点いていない部屋はますます真っ暗になり、ボスたちの話し声が遠ざかっていく。

「しーっ」

彼は人差し指を口に置いて、ボス達が自分達に気付かずに行ってしまうのを願っている。

彼の思惑通り、どうやらボス達は異変に全く気付かず行ってしまった様だった。

ゆっくりと彼女の口を塞いでいた手を離すと、そっと、まるで壊れ物を扱うかの様に彼女を抱きしめた。

「・・・逢いたかったよ」

その言葉を聞いて、また心臓が大きな音を立てた。

こんな事をして彼は一体どういうつもりなんだろう？振ったのは彼。無かった事にしてくれって言ったのは彼の方なのに。

嬉しさよりも、悔しさが込み上げて来て、彼女は彼を拒んだ。

「や、やめてっ・・・下さい」

慌てて彼を押しつけた。

ゆっくりと彼女を解放した彼の表情は、まるで捨て犬にでもなったかの様に、とても悲しそうな目をして彼女をじっと見つめていた。

「そんな目で見ないで・・・まるで私が悪い事したみたい」

「そんなつもりは・・・」

「一体、何なんですかつ？！こんな事をして！」

「あの、少し君と話がしたくて」

「私は、ありませんっ！」

外に出ようと、ドアノブに手を掛ける。

「待って！まさか君がこんな仕事をしていたなんて知らなくて、凄く・・・びっくりしたよ」

「・・・最初から知っていたら私はこの仕事を降りていたと思います」

背中を向けたまま、思っ居る事をはっきり彼に告げた。

「その・・・色々謝りたいんだ・・・君に」

「・・・。」

頬に何か触れ、ビクツとして思わず身構えた。彼の手の甲が彼女の頬をすつと撫でて居る。ゆっくりと後ろを振り返ると、哀しげな目で彼が微笑みながら、

「少し・・・痩せたね」

と呟いた。

添えられた手を振り払い彼をきつく睨むと

「誰のせいだと思ってるのよ?! 謝りたいと思ってるなら・・・
少しでも私に悪いと思ってるなら、もう二度と私の前に現れないで!」

涙をこらえた声でそう吐き捨てると、その部屋から飛び出した。彼は、彼女にかける言葉が見つからず、伸ばした手をぎゅっと強く握り締める事しか出来なかった。

“信じられない! あんな事・・・”

彼から逃れる為に、無我夢中で廊下を突き進んだ、頭の中がパニック状態になっていて、自分でも何処へ行こうとしてるのか判らな

い。どれだけ進んでも、目的地には辿り着かない事に気がつき、ハッとして我に返った。

“あれ？・・・ここ何処だろう”

キョロキョロしている彼女の前に、一人の女性が横切った。

「あの、すみません。エレベーターは、あっ・・・」

振り返ったその女性もまた、驚いた顔をしている。

「貴方・・・ここで何してるの?!」

黒のスーツをパリッと着こなしたその女性は、ある意味二人を引き裂いたとも言える人物。カレンだった。

「あの・・・仕事の打ち合わせで来たんです」

「何？そのバレバレな嘘。貴方まだジャックにちょっかいかけてるの?」

「ほ、本当です！私もびっくりしたんですから！」

「彼に・・・会ったの?」

上目遣いで小さく頷くと、カレンは更に驚いた表情をした。かと思うと、すぐに目つきが鋭く変化していく。

「ああ、そう。フフツ、貴方が勘違いしちゃうといけないからこの際はつきり言っておくわ。彼と私は‘男と女’の関係なの。わかる?あなたが彼に会うずっと前からね」

「……っ。」

薄々感付いてはいたが、いざ面と向かって言われると、計り知れない絶望感に襲われた。言葉を無くしている彼女を見てカレンは満足気にほくそ笑むと、

「ああ、エレベーターを探していたんだっただわね。それなら反対側よ、じゃあね子猫ちゃん」

カレンは片手をヒラヒラさせて、自信有りげにヒールの音をコツコツと鳴らしながら去っていった。

「……。」

思っていた以上にショックを受けてしまった。皮肉にもその事によって自分がまだ彼を忘れていないのだと言うことに、気付かされた。

エレベーターで下に向かう途中、脳裏に二人が抱き合っている姿が何度もちらついた。かき消してもかき消してもすぐに浮かんでくる。

どうして私ばかりこんな辛い目に？

私が何をしたの？

たまたま同じCDに手を伸ばしてしまったのがいけない？

彼の冗談を真に受けて連絡しちゃったのがいけないかった？

自分から彼に取り入った訳じゃない。

今日だって仕事で来ただけに……なぜあんな事を言われなければいけないの？

「・・・苦しい。」

張り裂けそうな胸をぎゅっと掴み、唇を噛み締めた。

「ああ、カナちゃん！やっと来た。何処行つてたのさ？」

「あ、すいません・・・ちよつとトイレに・・・」

1階のエレベータホール前でズボンのポケットに手を突っ込みながら、ウロウロと落ち着かない様子のボスが彼女を見つけて、ホツとした顔をしている。彼女の背に手を回し、タクシーを捕まえると会社へ戻るまでの間、ボスは又熱く語り始めた。

「どうやら話は彼女が知らない間に進んでおり、次回の打ち合わせ日も決まっていた。」

“又こんな気持ちを味わうかもしれない、もううんざりだ！”

そう思った彼女はやっと、もやもやしていた自分の気持ちの決心がついた。

「ボス、私この仕事降ります」

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第32話 混乱する感情

「な、何言ってるの?!どっかで頭でも打った?」

社に戻ってから終業間際までボスの説得が続く。しかし、何を言われようと、彼女の首はずっと横に振ったままだった。

「すみませんが、お先に失礼します」

「あ、ちよつと!カナちゃん!まだ話終わってないよ!」

終業時刻になると、今日一日散々だった彼女はボスから逃げるようにオフィスを出た。

周りの社員達の視線が痛い。

皆、何故この仕事を降りたがっているのか理解出来ないといった顔をしていて、中にはく天狗になってる>と陰口を叩くものもいた。しかし、周りに何と言われようと、この仕事をやるワケにはいかなないと、彼女はやけにムキになっていた。

エレベーターで1階まで降り、出口に向かってしていると、誰かに呼び止められた。

「カナちゃん!待って待って!」

その声を聞いただけで、後輩の健人だと判り、面倒を増やしたくないと思った彼女は振り返ることもせず、足を止める事もしなかった。そんな彼女を制止させるために、健人はわざと彼女の前に出て、強制的に彼女の行く手を阻む。

「待ってって!ねえメシ行かない?カナちゃんのおごりで」

「何で私のおごりであんたとメシ・・・ご飯食べなきゃなんないのよ！」

「プツ」

「っ?!」

健人と話をするといつもペースが乱される。不思議と嫌な気持ちの時に限って話しかけてきて、いつしかそんな感情が吹っ飛んでいくのだった。

“もしかして、元気付けようとしてる？”

そんな事が一瞬頭に浮かんだが、‘そんなわけない’とすぐに頭を振った。

「じゃあわかった!こうしよう!俺がメシおごるから力ナちゃん飲み代出してよ！」

「ザルなあんとそんな約束したら、たまったもんじゃない」

「いいじゃん、いいじゃん」

「・・・大体あんたね。私はあんたの先輩なのよ?何その口の利き方は」

「もう会社から出たから、先輩もくそもないじゃん？」

そう言ってふざけた様子で、健人が肩に手を回してきた。その手を振り解こうとした時、彼女を見つめる一つの視線に気が付いた。

「っ?!」

ビルの前でジャックが車にもたれながらこっちを見ている。思わず彼女の足も止まり彼をじっと見つめた。

突然、彼女が歩くのを止めたせいで、健人はけつまづき、何事かと彼女の顔を見た。一点に注がれて居る彼女の視線に気付き、それを追うと視線の先に一人の男性を見つけた。

「……。」

少しウェーブがかかった長めの髪をゆるく一つに束ね、前髪をルーズにおろした中性的な男性。長身とスラッと長い手足を生かして細身の黒のスーツを着こなし、見るからに高そうな車にもたれながら、少し哀しそうな表情でカナを見つめている。

以前、彼女が顔をくちやくちやにして泣いていた理由に、きっとこの男が絡んで居るのであるうと言ふ事を健人が察すると、

「……カナちゃん、行こうぜ。俺いい店知ってた」

「あ、……う、ん」

健人の腕に抱かれたまま、彼女は彼と視線を切った。彼の視線が背中につき刺さる。後ろ髪を引かれる思いで立ち去ろうとしたその時、

「カナ！」

初めて名前を呼ばれ、思わず足が止まった。ゆっくりと振り返ると、車にもたれていた腰を起こし、眉をひそめながらするような目で彼女を見つめている。

「お願いだ、僕から目を背けないで」

都合のいい事を又言い出した彼に、又怒りが沸いて来る。彼女が

一体どんな思いで彼の事を忘れようとしていたのか、彼は判っていないのだろうか？

彼女が声を発しようとする、健人が割って入ってきた。

「あのねえ、おじさん。邪魔しないでくれる？彼女だって嫌がってるじゃん、ねえ？」

「・・・もう、放つといて」

それだけいい残すと、彼女は彼に背を向けて、又歩き出した。

「カナ・・・」

彼は手を伸ばすが、はつきりと拒絶されて追いかける事も、それ以上声を掛ける事も出来ないでいた。

健人はと言うと、何故か得意顔で

「だってさ、残念だったね。もっと年相応の女探した方が身の為だよ？お・じ・さん」

ポケットに両手をつっ込んで少し体を折り曲げながらそう言う、すぐに彼女の後を追いかけた。健人が近づいてくる足音が聞こえたのか、彼女がぐるりと振り返り、

「あんたもよ！」

と、健人に向かって指をさしてキツク言い放ち、又一人で歩き出した。

健人がバツの悪そうな顔をして、彼の方を見ると、

「二人とも振られちゃったね」

彼は肩をすくめ両手を広げた。

“ ったく！何なの？二人とも人を馬鹿にしちゃって！健人も健人よ！彼に『おじさん』とか生意気な口ばっかり聞いて！彼を誰だと思ってるのよ！”

頬を少し膨らませながら大きく足音を鳴らし、駅へとひたすら歩き出した。

久しぶりに彼に会って彼女の心は完全にかき乱された。でも、彼が謝りたいと言っている。許してはいけない、彼の話が鵜呑みにしてはいけないと自分に言い聞かせているのに、お腹の底に何かくすぐったいような感覚が這いずり回る。

「だめ、・・・なのに」

彼と会って一つ確かな事がわかった。それは彼の事をまだ「想っていて」彼女はまだその自分自身の気持ちに気付かない「フリ」をしている。あれだけ傷ついたのだから、そう簡単に流されてたまるか、と言つ気持ちがあるからこそ、素直になれないのだろう。

これ以上傷付きたくないが故の、不器用な彼女なりの防衛策だった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第33話〜年上な彼〜

コンコンッ

「どうぞ」

「失礼します。社長、今年も徐々に届き始めましたよ」

肘でドアを開けて体を滑り込ませながら、ジユデイスが両手に大きな段ボール箱を抱えて入ってきた。彼のデスクの前で床にドサツとその箱を降ろすと、手をパンパンとはたいて、ふうつと息を吐いている。

「なにが？」

デスクで書類にペンを走らせていた彼は、顔を上げて上からその箱の中を覗き込んでみると、色とりどりのリボンが飾られた大小様々な形のプレゼントらしき物が、手狭そうにダンボール箱の中でひしめき合っている。どうせ、誰かがどっかから貰って来たものだろうと思った彼は、再び書類に視線を戻すと、興味無さ気にジユデイスに尋ねた。

「何それ？どうしたの？」

「バレンタインデーですよ〜」

バレンタインデー・・・その言葉を聞いて、そっぴやそろそろそんな時期か。と思い出し、もう一度箱の中を覗いてみる。

「コレ、全部僕宛て？」

「こんなの！まだまだ序の口ですよ。本番は明後日ですからね」

彼の大きなため息が零れると、走らせていたペンを休め、掛けていた縁無しの眼鏡を取り、深く椅子の背もたれに重心を移した。

「もう、これから届くものは断つといてね。女性に無駄にお金を使わせるのは申し訳ないよ」

「無駄に使ってる訳ではないと思いますが・・・」

肩をすくめながらどうしたものか、と苦笑っている彼に対し、ジュデイスは「判ってないなあ」と言いたげな表情を浮かべている。体を起こし、組んでいた長い足を解くと、デスクの上に肘をついて両手を組んだ。

「しかし、この国は不思議だね。女性から愛の告白をさせる習慣があるなんて」

「素敵じゃないですか」

「そう？僕なら自分から伝えたいよ」

「社長から愛されて断る人なんていないでしょうねえ」

「・・・」

「え？断られた事・・・あるんですか？・・・」

「・・・うるさいよ・・・」

「あ、す、すいません」

ジュデイスのその言葉を聞くと、リアルタイム過ぎる会話の内容に言葉を無くし、顔を引きつらせて彼はうなだれた。確かに、ジュデイスの言った通り、今まで断られた事は無かった。と言っても、今まで、何度も無謀な賭けだと明らかに判る相手を振り向かせてき

た。と言う訳ではなく、保険に保険を重ねて、断られるはずは無いだろう。と、予め予測出来る相手にしか自分から伝えた事は無かった。いや、自分から伝えるまでもなく、過去に付き合ってきた殆どの女性が、女性側から迫られる事ばかりだったので、はつきり言って、色恋沙汰に苦勞をしたことが無い。

百戦錬磨、とまでは行かなくとも、それなりに経験を積んできた彼にとつて、これほどまでに上手く行かない事があるのかと頭を抱える程、彼女の事を考える時間が増え、否応無しに、彼女が彼の頭の中を支配していく。

ずっと黙り込んでいる社長を見て、機嫌を損ねてしまったと感じたジユデイスが、慌てて部屋から立ち去ろうとした時、彼がジユデイスを呼び止めた。

「・・・そういえば、ジユデイスって今いくつ？」

ドアの前で振り返ると、きよとんとした顔で答えた。

「今年で25です」

「そう」

“25かぁ・・・彼女もソレ位なのかな？”

「じゃさ、君が付き合つとしたら何歳までならOKなの？」

「・・・？まあ、父親が45歳なので、それより下だったら大丈夫だとは思いますが」

「45?!」

思わず声が裏返り、大きな目が飛び出そうな位、見開いていた。仕事のパートナーの父親よりも、自分が年上だったと言う事を知り、

かなりがつくりした。あの日、彼女のオフィスの前で待ち伏せした時、彼女にくつついていた男に言われた、『年相応な女を捜しなよ？おじさん』と言われた事を、彼は結構気にしていたのだった。

「そうか・・・じゃあやっぱり君からしたら、僕なんておじさんだよね・・・」

「ええ？！おじさんだなんて！そ、そんなことないですよ！社長だったら全然OKですっ！・・・って・・・っあ。」

おつちよこちよいなジュデイスは、もしや社長が自分に気があるんじゃないかと、どうやら勘違いしてしまったらしく、みるみる顔が赤くなっていた。

慌てているジュデイスの様子に全くと言っていいほど気付いていない彼は、溜息を吐きながら眼鏡を掛けると、又書類に向かいながら少し口を尖らせた。

「いいよ、そんな気を使わなくても」

「あの、えと・・・し、失礼しました」

居たたまれなくなったジュデイスは、大急ぎで部屋から飛び出していた。

ジュデイスの慌てた様子にクスリと微笑むと、ゆっくりと椅子から立ち上がり、床に置かれたダンボール箱の中から1つ取り出して、裏と表を交互にじっと見つめた。

「ふむ。」

トントンと顎にソレをぶつけながら、遠くを見つめている。

「バレンタイン、ねえー・・・。」

何かを思いついたのか、顔一杯に笑顔を見せると無造作にダンボール箱にプレゼントを戻し、コートハンガーからコートを引っ掴むと、慌てて部屋から飛び出した。

「ジュデイス！ちょっと出かけてくるよ！」

開け放たれたドアに光が差し込み、彼がその光の中へと吸い込まれていった。

LOVE IS MAGICAL

第33話 年上な彼 (後書き)

こんにちは、ご訪問頂き有難う御座います。

さて、毎日1話更新頑張ってきましたが、そろそろやばそうな感じ
です。

突然更新途絶えても、「ああ、そう。」「位に思っというて頂ければと
オモイマス。

では、又のご訪問お待ちしております。

第34話 駆け引き

「もう君は顔に似合わず本当に強情だなあ」

「はい、もう決めましたから。何度言われても無理なものは無理ですよ」

「何でそんなにイヤなの？」

「嫌って言うか・・・無理なんです」

「もうそれじゃあ話にならないよ」

ボスは彼女を説得する為にランチに誘った。もちろんボスの驕りおごで、だ。

自分の社員にまで媚を売らなければならなくなるとは、思ってもみなかっただろう。やっと大きな仕事が舞い込んできたと言うのに、当の本人がやりたくない駄々をこねだすなんて、長い人生の中でも、そんな事1度も無かったボスは、どうすれば機嫌を直してくれるのかとんと検討もつかない。

せめて降りたい理由を言ってくれば、少しは対処出来るものの、‘無理’の一点張りいちぢで埒が明かない。どうにかならんものかと、ボスは頭をうな垂れていた。

オフィスのロビーから出て、何気なくこの間彼が居た場所を振り返る。そこに彼の姿は当然無く、ほっとしていると共に自然と探してしまう自分に吐き気がする。一度ああいうことをされると、又次があるんじゃないかと気になってしょうがない。

決して、それを‘期待’しているんじゃない。何を仕掛けてくるか判らない彼に、どうやって接すればいいのか判らない彼女は、不安で気が休まらないのだった。

「あつ、これはこれは社長！こんな所でどうされたんですか？」
「。。」

ボスの接待用の声が聞こえ、前を向くとなんとそこには彼が笑顔で立っていた。

彼女の不安は的中し、彼が突然目の前に現れた。そしてタイミングは驚くほどピッタリで、まるで監視されているのかとも疑ってしまっただけだ。

「やあ、こんにちは。ちょっとこの間の打ち合わせで、聞きそびれた事がありましたね。・・・ご迷惑でなければランチを一緒にしなからでもと・・・」

「いえいえ！迷惑だなんてとんでも・・・」
「ああ、あなたじゃなくて」

胸の前で両手で小さく彼女の方を指した。ボスは一瞬拍子抜けしたものの、いい助け舟がやってきたのだと悟り、これは彼女を説得できるチャンスだとばかりにはやし立てた。

「あ、はい！どうぞどうぞ！ほら！カナちゃん行っておいで！」
「（判ってるね？降りたいなんて事絶対言っちゃダメだよ！）」

彼女に耳打ちすると、彼のほうへトンと背中を押した。つんのめった彼女はボスに振り返り、顔をしかめて小さく首を振るが、ボスはそのような彼女の顔を見ても知らん振りをかまし、ご機嫌で手を振って去っていった。

「さて……」

彼が手をパンと一つ叩くと、親指を路肩に止めた車の方に向ける。

「とりあえず乗って」

「……」

彼が車に向かって歩き出すが、彼女は一向について行くことせず、ただ立ち止まっている。

そんな彼女にしびれを切らした彼は、彼女の元へと戻り手を握って半ば強引に連れて行った。

「ち、ちよつと……!」

繋がれた手が暖かい。

彼の大きくてしなやかな手は、一生忘れる事の出来ない感触だ。振りほどこうと思えば出来る筈なのに、少しの抵抗を見せただけで彼のされるがままになってしまう。まるで魔法にかかってしまったみたいに、気付けば彼の車の横に立っていた。

車の後部座席の扉が開かれて、背中に軽く手を添えられて、仕方なく車に乗り込んだ。もう、こうなったら、本人に直接仕事を降りる事を伝えよう。その時はそう意気込んでいた。

「やあ、どうも。久しぶりだね」

「あ、こんにちは」

運転席から、声が聞こえ見知った顔を見て思わずホツとした。そんな彼女の表情をすかさず見ていた彼は、

「なに？今ほつとしてなかった？」

片眉を上げて、何やら不満気だ。それもそのはず、彼女と再会してからは、自分の顔を見る度、顔を歪める彼女しか見ていなかったのだから、納得がいかない。

自分がした事を棚に上げて、そんな風に思ってしまう彼に、

「ジャックは信用ないからね」

「酷いなー！ビルまでそんな事言うなんて」

運転手のビルはバツサリと切り捨てた。

車内は笑い声で溢れ、なんだか和やかなムードであった。

ただ一人、彼女を除いては。

彼女はそのムードに流されまいと必死になり、膝の上で重ねた手をぐつと握り締め、

「あ、貴方はやっぱり卑怯です。仕事をエサに自分の思い通りにさせるなんて」

彼女の放ったその言葉が、穏やかな車内を一瞬にして凍りつかせる。

「私、この仕事降りるんです。だからもう構わないで下さい」

ビルがルームミラー越しにジャックを見ると、ビルと視線を合わせ両手を上げて首を振っていた。

「そう来ると思ってたよ。でもそうはさせない。これは個人的な感情で言ってるんじゃない。本当に君が、君の感性が必要なんだ。こ

れだけは判って欲しい」

さも、予想通りだと言わんばかりに、彼は小さく息を吐いた。いっになく真剣な表情の彼は訴えかけるようにそう言くと、多くを語れば語るほど自分への信用が無くなると思い、その口を硬く閉ざす。そして、その作戦が功を奏したのか、彼女は自分の思い込み過ぎなのかもと思い始めていた。

LOVE IS MAGICAL

第35話 鍵と扉

玄関の扉を開けると部屋の明かりもつけずに、持っていた荷物を部屋の中央にばら撒きながらわき目も振らずベッドへと直行した。

倒れこむように冷たいシートにその身を委ねると、そばにある枕を抱え込んで仰向けになりゆっくりと目を閉じて、昼間彼と会った時のことを思い返した。

おいしいカレー屋さんがあると言い、どこかのチェーン店でも連れて行かれるのかと思いきや、小洒落た本格的インド料理専門店の駐車場に二人を乗せた車が停車する。

頭にターバンを巻いた男性や、サリーを纏った女性のスタッフに、英語でにこやかに挨拶している彼は、どうやらこの店でも常連の様だった。

椅子を引いてくれたり、コートを脱がせてくれたりと店の従業員よりも気が利いているし、メニューを見てもさっぱりわけのわからない彼女に、ちゃんと辛くないものをチョイスしてくれて、食後は言わずともチャイティーをオーダーしてくれる彼の紳士っぷりに相変わらず脱帽する。

今回は、彼と彼の運転手のビルも一緒に食事を楽しんだ。そして、驚いた事に会話の内容は本当に仕事の話‘だけ’だった。この話が舞い込んだのは急だったため、彼の会社がどんな会社か全く予備知

識を入れていなかった彼女は、この時改めて彼がどういう仕事をしているのかを知る。

彼はコンサートやイベントなどのプロモーションや、大型のコンサートホールの運営を取り仕切って居る会社の代表取締役社長で、主に音楽プロモーターとして世界中を飛び回っているそうだ。

更に、完璧を求める彼は、作詞、作曲、プロデュース業はもちろんアーティストのボイストレーナーまでこなしてしまう程、入れ込んだアーティストには全て関わらないと気がすまないらしい。

今回、彼が手がける‘JASON’の新しいアルバムのジャケットにもこだわっており、彼女の仕上げた作品が思っていた通りの作品で驚いたと言っていた。

彼は音楽だけではなく芸術や世界情勢についても良く知っていて、終始圧倒されっぱなしで彼の博識さに目を丸くしている彼女とは対照的に、隣に座っていたビルは、‘また始まった’と言わんばかりの顔で肩をすくめて苦笑いをしていて、妙な温度差を感じた。

話題が変わり、今度は彼女の作品について彼が触れる。

『君は何にインスパイアされてあの作品を思いついたの？』

『普段はどういった種類の作品を作っているの？』

『君は素晴らしいアーティストだよ』

と絶賛してくれた。それに関しては何故かビルもうんうんと頭を上下して見て、見てもいなくせに！と思わず眉間に皺を寄せてビルを見ると、ビルは舌をペロツと出して真剣な表情の彼の横でおどけていた。

自分のやった事を認めてもらえて正直嬉しかった。今まで、どん

なに手の込んだデザインを作っても、『よっぽど暇だったんだね』とか、『残業つけてないだろうね?』と、冷たい視線を向けられる事の方が多かった。それでも、気付いて貰えるだけましな方で、ほとんども、気付かれずスルーされていたのだ。

もつと話を聞きたくなつた。

気付けば彼女の張っていた警戒線はあつという間に解除され、どんどん彼の世界に引き込まれていく自分がいた。

確かに、自分は彼に酷く傷つけられた。もう二度とあんな思いをするのはご免だし、彼女の記憶から忘れ去る事はきつと出来ないであろう。しかし、ビジネスパートナーとしての彼は申し分無い程の逸材で、自分のいい所をもつと引き出してくれそうな、それでいて色んな事を彼から吸収出来るような・・・そう思うと、私情を挟んで突っぱねようとしているのは、自分の方じゃないか。という事に気が付かされ、そんな自分が哀れに思えた。

夢中で話している彼をよそに、ビルがもうランチタイムは終わりと、自分のしている腕時計を彼に見せつけながら、人差し指で文字盤をトントントンと3回叩いた。あつという間に時が過ぎていた事に、彼女自身も驚きを隠せない。

惜しむように店を後にし、帰りの車中で初めて仕事以外の話を彼が口にする。

あの日、彼に何があったのかは教えてもらえなかったが、とにかく精神的に追い詰められていて、全てから逃げていた。その後、冷静になってから、自分のした事の愚かさに気付き、すぐに謝りたかったが、話を聞いて貰えるだろうかと不安で仕方なかった。そうしている内に、海外へ長期出張する事になり、ハードスケジュールと時差の関係で連絡する余裕が無かったのだと、彼は心から詫びてい

た。

『君の事は一時も忘れた事はないよ』

閉ざしていた心の扉が、徐々に開いていくのを感じる。

それは彼が持っている、鍵' によって開かれていくのだった。

LOVE IS MAGICAL

第35話 鍵と扉 (後書き)

昨夜頂いた、拍手コメントのお返事です。fc2の拍手コメントだと、コメントのお礼の文字制限(500文字)があり、しかもカウントしてくれないので、お礼を沢山申し上げたくても、『見えない500文字の壁』に阻まれてしまいました・・・勝手に申し訳ありませんが、こちらにお返事を書かせて頂きます。

それと、これは、ここに訪れてくださって居る方々にもあてたお話になるのですが、もし今後、気付いた点等御座いましたら、『小説家になるう』様のIDをお持ちであれば、「感想」、若しくは、「メッセージ」でも構いませんので、そちらの方へ頂ければ、お返事もしやすくなると思います。

お持ちで無い場合は、fc2の拍手コメントでも勿論結構です^^
ただ、公開設定でコメントを残してくださった場合は、こちらの方に転載させて頂こうかと思っておりますので、「ちよつと、それは・・・」と言う方は、非公開にてコメント頂ければ幸いです。(その場合のお返事はこちらに書きます)

頂いたコメントはちゃんとお返事させて頂きただけですので、勝手にお返事をこちらに書いてしまった事をどうかお許し下さい><

以下、コメントのお返事です。

こんにちは、初めまして、まる。と申します。

この度はコメント有難う御座います。

毎日読んで頂けているなんて、感謝感激で御座います。コメントを拝読して、私よりも良く判ってらっしゃる事に、大変感激致しました。伝えたい事を文章にするのは、私にとっては大変困難で、読ん

でおられる方にちゃんと伝わって居るのかどうか心配でした。これからも日々精進し、ちゃんとした日本語を書ける様に頑張りたいと思います！

そして社長ですが、いや、確かに自分勝手すぎますよね。しかし、世の中の不思議とこういう男性の方が何故かモテるんですよ。特に社長の場合は、アメリカと日本とのハーフなので、その辺の国民性を私なりの解釈で勝手に作り上げている所もあつたりします。

（あくまで、「私の解釈」と「話をおもしろくする為」ですので、全てのアメリカと日本のハーフはこんな感じ、と言うわけではありません、あしからず）

文才が無いので、どうしても端折りがちになってしまいましたが、これからの展開が面白くなるはず？なので、これからも『運命の人』を宜しくお願い致しますm(____)m

今回、こちらの都合で、勝手にここでお返事を書かせて頂きました事を、お許し下さい。

第36話く 与えられた試練く

冬の夜空は空気が澄んでいて、濃紺の空に月が良く映える。

時折かかる雲が月の形を変えていく様を見ながら、肩で大きく溜息をついた。

「・・・はあ。」

バルコニーの手すりに両肘をつき、一人物思いにふけっていた。

扉が開く音が聞こえて彼が振り返ると、グレースが大きなブランケットを持ってそこから出てくる。

扉が開いた時にかすかに甘い香りが室内から流れ出し、彼は鼻をクンとさせた。

「おやまあ、こんな所にいるとお体が冷えますぞ」

グレースはブランケットを広げると、うんと背伸びをして彼の肩にそれをかけた。

「グレース、この香りは何？」

「ああ、これはチョコレートですよ。明日はバレンタインデーですからね、皆こぞって作っているですよ」

「ああ・・・なるほど」

バレンタインデー。その言葉を聞いて、彼の溜息が又大きく零れる。

昨日、ランチタイムに彼女を待ち伏せて、無理矢理彼女を連れ出した。『仕事を餌にしている』と言われても仕方ない程、強引だったかもしれない。正直、彼女にサクッと切り捨てられて、彼の心の

中は酷く動揺させられてしまった。

本当は、あの時、彼女が許してくれるまで彼女を帰すつもりは無かった。怒鳴られても、殴られたとしても、ちゃんと自分の気持ちには彼女にしか向いていないのだと言う事を、何とかしてでも判つて欲しかったのだ。でも、膝の上で両手をギュツと握り締めながら、悔しそうな面持ちで放たれた言葉を聞いて、彼は何も言う事が出来なくなつた。

当初は彼女と二人で食事するつもりだったが、彼女の様子を見るととてもそんな事も言えず、車から降りる時、こつそりビルに同席してもらつたように頼んだ。『やれやれ、ジャックともあるう者が一体何をビビツてんだ？』とでも言いた気な顔をしていたのを、良く覚えている。

そう、僕は正直ビビツてていた。

彼女にこれ以上嫌われたく無いが為に、言いたい事をグツと我慢し、余計な事を考えないように仕事の話に没頭した。

でも、悲しいかな、彼女は仕事の話しかしない僕に、二人つきりで会うのでは無く、第三者が居るといふことに、少なからず安心していた。

その事によつて、僕、と言う人間は完全に否定されたのだと、思い知つた。

「はあ……」

又、ひとりでに溜息が零れる。僕の落ち込み様が気に掛かるのか、グレースが、今一番聞かれたくない事を聞いてくる。

「坊ちゃんは明日のお食事は外で済まされるのですか？」

「意地悪だなあ、もう。予定なんか無いよ」

「そうですか、私はいつだったか来られた方とてつきり」

「彼女はそんな簡単なもんじゃないんだよ」

自分の肩に掛けてくれていたブランケットを彼が取ると、それをグレースの肩にかけ直す。

その仕草がグレースにはまるで、彼が自分の話を聞いて欲しいと言っている様に思えたのだった。

「かわいらしいお嬢さんでしたが、何かこう一本筋が通っていると
言いますか、芯の強そうな感じがしましたなあ」

「そうなんだよ。その芯が強過ぎるのが悩みの種なんだ。あんな子
初めてだよ」

口に出して彼女の話しをする事で、彼女の顔が頭の中に浮かび、
思わず肩をすくめて苦笑いが出る。

「ほほほ。珍しく坊ちゃんが弱気で」

「自分の気持ちを前面に出すと相手を怒らせてしまうから、気持ち
を隠すのに苦労するよ」

「それは、坊ちゃんにとっては辛い試練ですなあ」

「もう苦しくてどうしていいのかわからないんだ。僕が何か行動を
起こそうとすると、どんどん離れて行っちゃう」

思い出して目頭を熱くしながら、それをグレースに気付かれまい
と目を眺めている。

いい歳をして女性の扱いが判らない自分が、酷く惨めに思え、も
う諦めた方がいいのか。と、気付けば楽になる為の道を選ぼうとし
ていた。

そんな弱々しい彼の様子に見かねたグレースは、まるで本当の母の様にやさしく声を掛ける。

「坊ちゃん、神は乗り越えられる試練しか与えません。勇気を持って自分の信じた道をお行きなさい」

逃げようとしている自分の背中をグレースが押してくれる。必ずしもその道は楽とは言えず、険しい道だと判っていても、恐れずに進めと言ってくれる。

自分はきつと、本当は誰かにこう言って欲しかったのだろう、その証拠に、胸に支えていた苦しいモノがスツと楽になった気がした。

「グレース、……ありがとう」

にっこり。と優しくグレースは微笑んだ。グレースから見れば、彼はまだまだ子供。泣きべそかいている姿は40年前と全く変わらない。

今は、彼の子供の世話をしているが、まだまだ彼のお世話も必要だと感じ、何故だか少しほっとしていた。

「さあさあ、ココは寒うございますからどうぞ中へ」

扉を開けると、又甘い香りが漂っている。彼はふと何かを思っていたのか、

「グレース、材料まだ余ってる？」

「ほ？」

急に笑顔になった彼は、嬉しそうにグレースの背中を両手で押し

て、まるで小さな子供がはしゃぐようにキッチンへと向かっていった。

LOVE IS MAGICAL

第37話 年下の男

両手一杯に書類を抱えながら廊下を歩くと、すれ違う男性は皆何故かいい香りがする。中には微笑みかけてきたり、いつもは話したことも無い人まで笑顔で挨拶をしてくれる。

普段と違った社内の様子に首をひねりながら、彼女はエレベーターホールの前で立ち止まった。

軽々しい音が聞こえ、エレベーターの扉が開いた瞬間、そこからも色んな香りが入り混じった匂いが流れ出てきて、今からこの中に閉じ込められるのかと思うと、思わずぞっとした。

しかし、意外にもこの階で降りる人が多く、ゾロゾロと人が出てきて、ホッと胸を撫で下ろした。

「あ、カナちゃん」

どうやらその中に健人が居たのか、中から彼女を呼ぶ声が聞こえた。健人は同じビルに入っている、他社の女性を捕まえて、エレベーターの中でおしゃべりしていた様だった。

相変わらず軽い男だ。

「じゃあね、ケント君。また」

「あ、うん。また」

その女性がエレベーターから降りる時に、彼女に会釈しながら軽く微笑んだ。ふんわりと女の子らしい香りが漂い、毛先をくるくる巻いたエレガントな雰囲気の子。綺麗な女の子。

彼女も愛想笑いを浮かべ、軽く会釈してからエレベーターの中に

乗り込んだ。

中に乗り込むと、健人以外は全員先程の階で降りてしまったようで、健人と二人つきりになってしまふ。相手をするのが煩わしいと感じた彼女は、彼に背を向けるようにドアの近くに立った。

「カナちゃん、荷物持とうか？」

ケントが背後に近づくのが判る。

「いいよ・・・てか何？この匂い」

顔だけ後ろに向けて、鼻をクンとさせた。

「いい匂いでしょ？」

「つけ過ぎじゃない？臭いよ？」

「えー？そう？」

健人は、ジャケットの身ごろを捲って鼻に持っていったり、袖を嗅いだりしている。

「なんなの？今日は皆やけに香水つけてる気がする」

「だって今日は特別な日じゃん」

「え？」

頭の中でしばらく考えて、今日は世間で言う、バレンタインデーなんだと、今やっと気付くのだった。

「ああ、そういふこと・・・」

彼女の横に立ったケントが両手を出している。筋張った手を辿りながら健人を見上げると、彼はニコニコと嬉しそうな顔をしていた。

「あるわけないし。てかいい年してまだそんなの欲しいの？」

「えー？ないのー？って俺まだ25なんだけど！」

「青いねえ」

「はあ?!」

自分よりも8歳も年下だとこも「男」というものを感じないものなのか。色気も無ければ、相手を楽しませるような粋な話術や気遣いにも欠けている。ジャックからは教わる事がまだまだ沢山あるが、健人に至っては、逆に彼女が色々教えてあげないといけない位だ。

“・・・”

彼女は知らないうちに又彼と比べてしまっていた。

「？」

ケントのトワレがさらに鼻についたなと思った時、彼女に黒い影がかかった。

「チヨコないんだったら、カナちゃんでもいいよ」

健人の声がすぐそばでして、ビクツとして振り向くと、彼女の両手が塞がってるのをいい事に、遠慮無しにケントの顔が近づいて来る。

「っ?!」

慌てて彼女が健人を避けると、じりじりといつしか隅に追いやられ、彼女の逃げ場を塞ぐように健人が両手で囲った。

彼女もそれほど背は低くないにしろ、180cmは超える長身の健人にそうされると、すっばりと上からも蓋をされた様な気分になる。

ほんの少し感じる‘危険性’を持ちつつも、普段の健人の事を思うと、単なる‘冗談’だったのにと、後々おちよくられそうな気がして、強く逃げる事が出来ない。しかも、二人つきりだとは言えここは職場であって、健人より8歳も年上の彼女にこんな事するわけがないと踏んで、彼女は後者を選択し、その場に立ち尽くしながら健人を睨み付けた。

「ち、ちょっと何なのよ」

「その顔、・・・そそる」

彼女の頬にツツと健人の筋張った指が滑り落ち、そのまま髪を梳く様にして右手を彼女の髪に差し込んだ。そのまま頭を押さえ、更に距離を狭めてくる。条件反射で顔を背けると、健人のもう一方の手も加わって彼女の顔がっしりと固定する。

「な、に・・・う、んっ!」

一気に抵抗の声も飲み込むようにして、彼女の唇をあっさりと奪った。何度も頭を動かして、健人の生暖かい唇の感触から逃げようとするが、顔を固定された手が頬に食い込むだけで、決して逃がしてはくれない。

手にした書類を手放し、両手を使って抵抗すればいいものの、咄

嗟の事で動揺して変に力が入り、逆に離さない様に書類を握り締め
てしまっていた。

「　　っ?!」

勝手に唇を割って中に入ってこようとす。齒列をなぞる健人の
舌が執拗に彼女を攻め立てて、彼女が次に声でも出そうもんなら、
きつとその瞬間を狙って彼女の舌を引きずり出そうとするだろう。

それだけは避けなくては!

火事場のクソ力と言うのか、彼女は思いっきり体全体を使ってケ
ントを押しつけて、この羞恥から逃れることに成功した。

少し息が上がった呼吸を整えながら、乱れた髪の間からケント
を睨みつける。

「っの・・・バカ!何すんのよっ!!」

健人は手で口を拭いながら挑発的な目で彼女を見た。してやった
りな表情かおをしている健人に背筋が凍る。

「・・・そんなにあのおっさんの方がいいのかよ」

「　　!・・・彼は、関係ないでしょ!」

エレベーターに乗っている時間がこんなに長く感じられるのは初
めてだった。

男を感じなくても力は紛れも無く男の力。次また襲ってくると、
今度は逃げる事が出来ないかもしれない。強気な態度でいるが内心
は心底ビクビクしている。

彼女が「男」と認めていない8歳も年下の健人に、彼女は初めて
怯えて居るのだった。

ガクンと少し揺れてエレベーターが止まると、ゆっくりと開き始めた扉をこじ開けるようにして、慌てて飛び出した。中に残っている健人に、

「少なくとも、彼は・・・こんな馬鹿な事しない」

そう吐き捨てると、急いでその場を去り、そのまま化粧室へ飛び込んだ。

洗面台に荷物を置いて両手をつき、頭を上げると鏡にうつる自分の顔は、今朝綺麗に引いたラインが乱れ、酷い顔になっている。

「・・・うつ」

唇にまだ残る健人の感触。何度もティッシュで唇をこすってもその感触が消える事は無かった。

ティッシュを持つ手が小刻みに震え、自然と涙が滲んで来る。

鏡に映るその顔は、怒りと悔しさに満ち溢れていた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第38話 抑制

強引に奪われた唇がひりひりして痛い。

どれだけこすっても、健人の感触が唇に残っていることにはうらたえる。

こんなはずじゃないのに、こんな事全然望んでないのに。

悔しい気持ちを消化する事が出来ず、体中に残る健人の足跡を消そうと躍起になっていた。

あまりにも戻るのが遅いと、他の連中に探されて厄介なのと、健人に対する意地も伴い、体の震えがなんとか治まったのを見計らってから、自分の席に戻る。

口の周りが赤くなっただが、メイク直しをする時間があるのなら、早く席に戻った方がいいと思った彼女は、諦めてそのままオフィスの中に入って行く。

自席につくと、隣の島の斜め前に座っている健人が、こっちを見ているのを感じる。

彼女は、あんな事されたって全然平気なのよ？私はあるよりずっと大人なんだから、と、健人に虚勢を張る事で、何とか持ちこたえて居るのだ。

ほんの少し触れるだけで崩れ落ちる、トランプタワーの様な今の彼女の気持ちを胸の奥底に仕舞い込んで、まるで何事も無かったかのように、仕事を再開した。

しばらくすると、オフィスに一本の電話が入り、その電話のせいで彼女は注目を浴びてしまう。

「野嶋さん、JJエンターテイメントさんからお電話ですー」

「あ、はい……？」

受話器に手を伸ばすと、なんとなく視線を感じ辺りを見渡す。すると、ボスを始め、ゴシップ好きの同僚の藍子、健人、それにこの仕事を当初避けていた連中が一斉に彼女から目を逸らした。

“何よ、もう。やりにくいなあ”

そう思いながら、受話器を取った。

「はい、野嶋です」

（こちらJJエンターテイメントです。お繋ぎ致しますので、少々お待ち下さい）

……

（もしもし？）

「あ、はい」

（僕だけど）

「あの、会社にまで電話しないで下さい」

受話器を手で覆いながら、周りに聞こえないように小さな声で話

した。心なしか周囲の連中の体が、こちら側に寄って来て居る気がする……。

(え?・・・あつと、仕事の話なんだけど・・・?)

その言葉を聞いて、全身の毛穴と言う毛穴が全開になった様な感覚が彼女を襲う。

そうだった、彼とは今は仕事上の関係だったのだ。なのにまるで追い回されて、迷惑だと言わんばかりの表現をしてしまい、彼女は羞恥に頬を染めた。

空いている方の手で額を覆って、熱くなった顔に気付かれないように、頭を俯かせる。

嗚呼、何という自惚れ!

「あ、ああ、そうでした・・・な、何でしょうか?」

(今夜、空いてる?・・・もちろん打ち合わせだよ)

電話越しでも判る、笑いを含んだ口調にますます体の温度が上昇する。

動揺している事を悟られないように、必死で冷静を装った。

「今夜、ですか」

額を押さえていた手を離し、彼女が顔を上げると、又皆が一斉に顔を逸らす。

「.....」

彼女はげんそうな顔を浮かべて、指でボールペンをくるくる回

しながら、辺りを見渡しながら、話を続けた。

「はい、大丈夫です」

(良かった。じゃあ19時に迎えに行くよ)

「えと、こちらからは山下と私で・・・?」

(んー、いや君だけでいいよ。今日は数字の話はしないから)

「あ、はい。わかりました」

(じゃ、あとでね)

受話器を下ろすと、皆が興味津々な顔をして彼女を見ている。

彼女はわざと視線を逸らして、矢の様に降り注ぐ好奇心旺盛な視線に、気付かない振りをした。

約束の時間になり下に降りると彼の車が見えた。すぐに運転席に目をやると、そこには今日もビルが乗っている。

車に近づいて行くと、彼女に気付いた彼が急いで車から降りてきて、後部座席のドアをいつもの様に開けて待っていてくれる。

「?」

何かに気付いたのか、ドアを開けたまま彼女の側まで来ると、何も言わずに彼女の顔をじっと見つめている。

「な、何ですか？」

「どうしたの？その唇」

「っ。」

左手で彼女の顎を持ち上げると、もう一方の手の人差し指が彼女の唇に触れる。いつもより近い距離に彼の端正な顔立ちがあり、上手く呼吸が出来ない。

「……。あつ、ごめん」

体が硬くなり、瞬きを忘れて居る彼女の異変に気付いた彼は、すぐに手を引つ込めた。

自然としてしまう彼の行動が、又彼女と距離を作ってしまう。その行動に裏があつてやっている訳では無いのに、彼女にはそう受け止められても仕方ないのかもしれない。

あくまでこれは仕事での付き合いなんだと、彼も又割り切るのに必死だった。

「じゃあ、行こうか」

彼女は目を見開いたまま、声を出さずに黙って頷いた。

バタンツ・・・ブオオンツ

「……。」

二人は彼の車に乗り込み、夜の街へと消えていく。

一部始終ゴシップ好きの藍子が、何か企んでる様な目つきで、ビルの陰から二人の様子をじっと見つめていたのも知らずに。

LOVE IS MAGICAL

第39話 2度目の恋

彼に連れて来られるお店は、何処もお洒落な高級レストランで、今日は一段と高そうな雰囲気のあるお店だった。

薄暗い店内は、食事と会話を楽しむゲストの邪魔にならない程度に、ピアノが旋律を奏でていて、各テーブルには、白いテーブルクロスの上に、真っ赤なクロスが敷かれ、その中央にキャンドルと一輪挿しがセットされている。

“きつと、ここも物凄く高いんだろうなあ”

彼との打ち合わせが入り、慌てて銀行に行つて正解だった。いつも彼が出してくれるけど、こつも毎回出してもらつのは気が引ける。二人は友人でも、恋人でもなく、‘ただの仕事上の付き合い’でしかないのだから。

“・・・”

頭の中でそう思い浮かんでおきながら、何故か胸が苦しくなった。

『君の事を一時も忘れた事は無いよ』

以前、彼に言われた言葉が混乱を招き寄せる。

あんな事言われなければ、あんな風にそつと優しく抱き締められなければ、彼女は過去の事は綺麗さっぱり割り切つて、彼とこのビジネスに集中出来るはずなのに。

表面上は、‘ビジネスパートナー’としての付き合いを望んでいて、本心では彼ともつと近づきたいと思う気持ちをきつと持っている。

でも、その想いを表面化させるのは、自分が辛い思いをして必死で乗り越えてきた事を全否定する事になる。

彼と自分では立場が違いすぎると言う現実を見る事で、彼への想いを踏みとどめようと必死だった。

いつもの事ながら驚くのは、どのお店に行っても彼は顔馴染みという事。勿論この高級レストランでもそれは変わらず、入り口に立っているスタッフが彼を見つけた途端、名前を聞かずとも席へと案内してくれる。

「こんばんは。お待ちしております」

「やあ、こんばんは」

「お二人様・・・でよろしいでしょうか？」

彼が頭を横に軽く振ると、親指を含めて指を3本出す。

予約の段階では3名と聞いていたのだろうか、彼と彼女しかいない事に不思議に思ったスタッフが改めて確認した様だった。

今日もどうやらビルも一緒と言う事だろう。前回と違って、今日は何故だかほんの少しがっくりしている自分がいた。

店のスタッフが彼の椅子を引いたが、彼は対面の椅子の横に立った彼女へと手のひらを向ける。

「失礼しました」

すぐに彼女の後ろにスタッフが回りこんで、椅子を引いてくれる。申し訳ないなと思いつつも、さすがレディーファーストの国の人だなと、改めて感心した。

用意されているテーブルセットは3人分。とりあえずワインをオーダーするが、ビルが中々来ないので先に2人で食事を始める事になった。

「さて、パパッと終わらせちゃおうか」

「え？何をですか？」

「仕事の話だよ。あ、有難う。うん、コレでいいよ」

運ばれてきたワインのテイスティングをしながら、彼は彼女に微笑んだ。

ゆらゆらとかすかに揺れるキャンドル越しに、ワインを口に含んでいる彼が見える。

仕事の話をしているせいか、アルコールを摂取していても、表情一つ変えずにこちらに要望を伝えてくる。

その言葉一句たりとも聞き逃さぬように、必死でメモを取っていた。

しばらくして、前菜を持ったスタッフが横に立ち、邪魔にならないように手帳をテーブルの端に寄せる。彼の話の続きを聞くこと、顔を彼に向けた時、

「よし、じゃあ仕事は終了！」

「え？」

仕事の話始めて5分と経っていないのに、『ほら、早くそれ仕舞いなよ』と、彼女の手帳をちよんちよんと指差している。

“ たったこれだけの話をするだけの為に、こんな高級レストランに来たの?! 電話で済むのに?! ”

と思いつつも、いや、きつと食後も話を続けるはずだと、すぐに話しの続きが出来るように、開けているページにペンを挟んだまま、素直に手帳をバッグに仕舞い込んだ。

デザートが運ばれてきて、食事が一通り終わった事に気付く。彼女は手首の時計に目をやると、首をかしげた。

「ビルさん、どうしたんですかね？」

「うーん、多分だけど、気を利かせてくれたんじゃないかな？」
「???’」

キャンドルの向こうの彼は、いつの間にか酔ってしまったのか、少し頬が赤く心なしか落ち着きのない様子だった。

彼の言った言葉の意味を考えながら、ふと辺りを見渡して見ると、客席にいる人たちは皆、明らかに恋人同士だと言う事に気付いた。

そうだった、今日はバレンタインデーだった。

隣のテーブルではチョコレートらしきものを渡しているのか、ピ

ソクのリボンで飾られた小さな箱がテーブルの上に置いてあって、テーブルを挟んで手を握り合っている。

“ 例え義理でも、チョコレートを用意すべきだったのかも ”

と、自分の気の回らなさに辟易する。

「 。 。 あの、ココの支払いは私にさせてもらえませんか？ 」

せめて、支払いだけでも。と財布の中のお金が足りるかどうかドキドキしながら言ってみたのだった。

彼は心底驚いた様な顔をし、その直後、首を横に振る。

「 女性にお金を使わせる事は出来ないよ 」

「 あ、えっと・・・私にというか、会社にというか・・・ 」

こんな高級レストランで接待。しかも、たった5分で終わった打ち合わせに、あの会社は何も言わず接待費として計上してくれるとは到底思わない。勿論、彼女も接待費として申請するつもりはさらさら無く、今まで沢山ご馳走になったのだから、身銭を切ればいいと思っていた。

それに、会社がお金を出すつて言えば彼も承知するだろうと、高を括っていた。

だが、しかし彼の方が一枚上手で、

「 例え会社持ちでも、女性がお会計をしている姿を見る趣味は、あいにく持ち合わせていないんだ 」

テーブルに肘を付き、手を組みながら、そう言ってニッコリと微笑んでいる。

困り果てている彼女を見て、それなら、と、彼が一つ提案をした。

「どうしても……って言うんなら」

「はい？」

「次、もう一軒付き合っつてよ。今からは仕事抜きでね」

ウィンクをしながら悪戯っぽく笑った。

今でも十分仕事だとは思えないと言うのに、彼はあくまでもこれは仕事なんだと強調している。そして、今からは仕事だと言う事を忘れろと言う。

その先には、甘い誘惑が手薬煉引いて、待っているのかも知れない。

昼間、健人に強引にされたキスの嫌な思い出も、過去に彼から受けた酷い仕打ちも、全てひっくりくるめて忘れさせてくれるんじゃないかと、胸の奥が期待で膨らむのか、ドクンツと音を立てている。

早く表に出たくて、ガタガタと蓋を揺らしていた彼女の本当の気持ちだが、主を無視して零れだして来た。

「はい」

結局、人って言うのは、悲しい気持ちを引きずるのはほんのわずかの期間だけで、時が経つと共に、楽しかった時の感情ばかりが頭に残ってしまうものだ。

あんなに突っ張っていた自分が恥ずかしいと思いつつも、これ以上突っぱね続ける自信がもう彼女には無くて、自分の感情の赴くままに、この身をゆだねようと心に決めた。

彼女の返事を聞いた途端、彼の表情がぱあっと明るくなる。彼はウェイターを呼んで、テーブルチェックを手早く済ませると、おもむろにテーブルの上に置いていた彼女の手を取り、そのまますぐ店を出た。

店を出てからもその手は繋がれたまま・・・
繋がれた手を振り解こうと思えば出きるのに、彼女はあえてそうしなかった。

彼に触れていた感情が沸いて来るのを感じたから。

「。。。。」

いつしか一方的に握られた手を、自然と握り返している。
彼女は再び彼に恋をし始めている様だった。

第40話 動揺

彼女の手を引く様にして、手を繋ぎながら駐車場まで続く石畳の上を歩いていく。

ところどころイルミネーションが飾られており、そこはまるで幻想の世界の様だった。

彼が握った手を彼女が握り返してくれたのを感じると、自然と彼の顔がほころんでいく。

このまま時が止まってしまえばいいのに。と、心の奥底で願っていた。

車に近づくと、車内には運転席に座ったビルが、退屈そうに車の帰りを待っている。

「ビル、お待たせ」

「おかえり。その様子だと楽しんだようだね」

チラッと視線を落としてビルがそう言った。

きつと仲良く手を繋いでいるのを見て、ビルはそう言ったのである。思わず彼女も繋がれた手を見て顔を赤らめている。

そんな彼女をよそに、彼は全く動じる事無く、

「ああ、お陰で凄く楽しかったよ。ありがとう」

と、さらっと言っただけだ。

繋いだ手を離すきつかけを無くし、車内でも二人の手は繋いだまま。

彼女の小さく華奢な手を彼の大きな手がすっぽりと包み込み、互いの温もりを感じていた。

「さて、次は何処へ行こうか？」

「あージャック、悪いんだけど・・・」

「ああ、そうか。ビルも今日は早く帰らないとね」

「そうなんだ、カミさんがうるさくてね」

時計に目をやると時刻はまだ21:30。

せつかく彼女と楽しいひと時を過ごせると思ったのに、ビルを帰さなければいけない。

彼は既にアルコールを摂取してしまっている為、運転する事は出来ないし、かと言って、タクシーに乗るのもあまり好きではない。

さて、どうしたものか。彼が決め兼ねていると、信じられない言葉が彼の耳に入ってきた。

「・・・貴方のお家は？」

上目使いで彼の顔を覗き込んだ彼女は、まるで彼の反応を楽しんでいるかの様に見えた。

目つきは少しトロンとしていて、酔った勢いでそんな事を言うてるのだろう。そうでないと、あんなに彼の事を拒絶していたのに辻褄が合わない。

本音を言うと二つ返事で、'YES' と言いたい所だったが、又辺に誤解されて距離を作られても困ると思いついた彼は、意を決して彼女の提案を断ろうとした。

「いや、それは・・・」

「あー、それがいい！そうしようー！」

彼の言葉を遮るようにビルがそう言うと、彼女の気が変わらないうちにと、さっさと車を走らせた。

「ビ、ビル?!」

口元に手をあててクスクスと笑っている彼女を見ると、やはり冗談で言ったのでは無かったのだろうか。何とも突然の展開に、思わず彼の方が気後れする。

「・・・いいの？」

「え? いいんじゃないですか?何か問題でも?」

彼が彼女を子供扱いし過ぎていたのか、しばらく合わないうちに大人びたのか、それとも無理に自分と合わせようとしているのか皆目検討もつかない。

何はともあれ、彼女が自分の家に来るからと言って、ここで調子に乗って碎けてしまわないように、努めて冷静に振舞わなければ。せつかく彼女の気持ちと和らいできているのに、ここに来て焦ってはいけないんだと、自分に言い聞かせていた。

「今日はありがとう。おやすみ」

「おやすみジャック。いい夜を」

「ありがとうございます、ビルさん」

二人は玄関の前で車から降り、ビルとおやすみの挨拶を交わす。ビルは彼女にウィンクすると車を走らせ、隣接する建物に車を止めた。

「？」

不思議そうに車の行方を追っている彼女に近寄ると、腰に手をあて家の中へと誘導しながら説明した。

「あそこはスタッフハウスだよ。僕の周りで働く極近しいスタッフだけ、あそこに住んでるんだ」

「・・・カレンさんも？」

「あ、ああ」

その名前が出てきて、思わず彼はビクツとしてしまった。思い出したくも無いあの日の夜の事が、頭の中に蘇った。

リビングに続く長い廊下を、二人とも無言で歩き始める。

さっきまでいいムードだったのが、彼女の一言で一気に崩れ去ってしまった。

こんな時こそ、彼女の手を握り締めていたい。言葉には出せなくともそうする事で、自分には彼女しか見えていないんだという事を示したかった。

車から降りる際に手を離してしまった事をとて後悔していた。

親指をズボンのポケットに引つ掛けて、手持ち無沙汰にしていると、そこにふとぬくもりを感じた。

視線を落とすと彼女の手がおどおどしながら、彼の手に巻きついている。

そんな彼女の行動に驚きながらも、すぐにその手を捕まえると、彼女はニコリと笑って見せた。

「。。。」

さっきの車の中での発言と言い、なんだか以前に比べて随分大人びて見える。

「あの、少し質問していい？」

「はい、どうぞ？」

「女性にこんな事聞くのは良くないんだろうけど、。。。君って今何歳？」

「。。。プツ」

「あ、何か変な事言った？」

「。。。い、いえ。。。えと、33歳です」

「ええ?!33? 見えないね!もつと若いと思ってたよ」

「。。。思ったより、年とってて悪かったですね!」

彼女はムツとした表情になり、口を尖らせて拗ねた顔をしているが、その表情はなんだか嬉しそうにも見える。

「あつ、ごめんごめん。そういう意味じゃあ無いんだよ」「
貴方はおいくつなんですか？」

「僕は46」

「?!?!」

「？」

「てつきり40歳前後かと・・・」

「わ、悪かったね！おじさんで！」

二人は思わず顔を見合わせて大笑いした。

お互いいい年をして何をやってるんだろうと、この時の会話によって先程まで感じていた、お互いの変な緊張がほぐれたのだった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第41話〜暗闇の中で〜

「あ、そうそう・・・」

リビングの扉を開ける直前、彼が何かを言いかけながら、彼女の方を振り返った。

彼が開けた扉の向こうに見える光景に思わず絶句する。

彼女のそんな顔を見た彼が、‘なんだろう?’とドアに手を掛けたまま、リビングに視線を戻すと、テーブルや、ソファは勿論、部屋の至る所に、大小さまざまなプレゼントらしき物が所狭しと置いてあって、彼も彼女と同じように目を丸くした。

「凄い！これ全部チヨコ？」

「ん、ああ、多分・・・そう」

タイミングの悪さにつくりしているのか、彼は頭を掻きながら、はあくっと大きなため息を吐いている。

「もう、これじゃあ話をする所か、ゆっくり座れもしない」

家に仕えるスタッフからは勿論、仕事関係の女性からも沢山届けられていたようで、その数は年々増えている。

座る所を確保しようとソファの上に置いてある物から片付け始めるが、数が多すぎて拉致があかない。

「ダメだ、隣の部屋に移ろう」

そう言って、彼が親指で指し示した方を見ると、以前来た時は気付かなかったが、リビングの奥に1枚の扉があった。

言われるがままに隣の部屋に入ると、どうやらそこは彼のプライベートスペースのようだった。

プライベートスペースと言ってもとても広いその部屋は、変な緊張感が生み出されそうな感じは一切なく、大きな本棚に囲まれたデスク。小さなバーカウンターと、大人の男性が一人寝そべっても、足がはみ出る事がなさそうな黒い革張りのソファ。そして、その前には大きなテレビが物凄い存在感をかもし出していた。

部屋の隅に目をやると、そこにはブラインドの奥に大きなベッドがチラリと顔を出しているのが見える。

相変わらずのスケールの大きさに呆気に取られ、思わずキョロキョロと部屋の中を見回していると、

「座つて。ちよつと散らかってるけど」

彼がネクタイを緩めながら、ソファを指差した。

ジャケットを脱いでデスクの椅子に雑に放り投げると、周りに乱雑に積み重ねてあるCDを拾い上げては、デスクの後ろのラックに片付けだした。

ソファの中央に彼女が腰を降ろし、それを見た彼が遠くからリモコンを操作してテレビの電源を入れる。

と、突然、物凄い音量で映画が映し出されて、体が一瞬浮いてしまっただけだった。

「ああ、ごめん音量下げるの忘れてた」

CDの束を片手で何枚も掴みながら、急いで音量を下げっていく。

「・・・い、いつもこんな大きな音で聞いているんですか？」

「うん、迫力あるからね」

「ああ、確かにこんなおつきなテレビで見ると、気持ちいいでしょうね。これって一体何インチですか？」

「えーっと、確かこれは103インチだったかな？」

「すごい・・・」

「このテレビで出来上がったばかりのミュージックビデオとか見ると、粗が良く判ってチェックするのに丁度いいんだ」

「なるほど・・・」

「仕事で使ってるのね」、とこの会話でも彼の仕事に対する情熱を感じさせられた。

「奥のベッドルームのはプロジェクターだけでもうちちょっと大きくて、120インチ位あったはず」

「へー！まるで映画館じゃないですか」

「めったにないけど休みの前の夜に、ベッドで寝転びながら映画を見ると凄く幸せになれるんだ」

そんな事で幸せを感じてしまえる僕は、本当に幸せな人間なのかもね。

CDのジャケットの表と裏を返して確認しながら、そう言って眉を下げた。

「ちょっと片付けてる間、これでも見てて」

リモコンを彼女に渡すついでに、ソファの前のテーブルに散乱している書類を引っ掴むと、又デスクへと戻って行った。

画面に映し出されていたものは、彼が何日か前に途中まで見た映画だそうだ。

途中から見るのもなあ・・・と思い、最初から見ようかと一瞬

リモコンに手を伸ばしてすぐに止めた。

きつとくりモコンを渡された。好きに見ていいよって事なんだろうけど、既に途中まで見てしまっている彼に悪いかな？と、思った彼女は、こんな大画面で見える事はこの先そうそう無いだろうから惜しい気もしたが、純粹に映画を楽しむ事は諦めて、そのまま途中から見る事にした。

が、しかし大画面の迫力たるや否や、本当に凄まじいものであって、あっさりと映画の世界に引きずり込まれてしまった。

「。。。」

画面に釘付けになっている彼女を横目で見て、彼はクスリと微笑んでいた。

しばらくすると、ソファアが沈むのを感じた。どうやら片付けを終えたらしい彼が、彼女の方に体を向ける様にして、ソファアの端に座っていたのだった。

首にしていたネクタイも既に無く、シャツのボタンも2、3個外されていた。その隙間から男らしい喉仏が垣間見え、トクンと心臓が跳ねても気付かない振りをする。

そしていつの間に淹れたのか、マグに入ったミルクティーを手渡され、言わずとも望みのものを与えてくれる彼に、おのずと安心感が生まれてくるのが判った。

「ありがとうございます」

そう言つと又、すぐに視線を画面に戻し再び映画に集中し始める。

カチッ

何か音がしたかと思うと、突然オレンジ色の光が現われた。その光がテーブルに置いてあるキャンドルに火を点し、彼が部屋の電気を消した。

「？」

「この方がもつと楽しめるよ」

急に部屋が暗くなった事で、天井を見上げている彼女にそう言つと、『なんだか映画館に来たみたい！』とはしゃいでいる。

確かに、こうした方がより映画を楽しめるからと思つてやった事には違いないが、薄暗い方が微妙な表情の変化がわかりにくく、自分にとってその方が都合がいいというのもあつた。

成り行きでそうなつたとは言え、自分の部屋に彼女がいる。

そう思うだけで、勝手に顔が紅潮していくのが自分でもよく判つた。

彼女は両手でマグを握り締めながら、楽しい場面では笑顔になり、悲しい場面では目に一杯涙を浮かべている。

彼は一緒に映画を見る振りをして、彼女の横顔を盗み見し、コロ

口口変わる表情を見ているだけで、心が自然に癒される様だった。

映画が終わり、エンドロールが流れ始めても、彼女はまだ画面に釘付けになっている。

彼は、彼女の横顔を見ながら、映画が終わった時、彼女が彼の方を向いたらそれを合図にある事を実行しようと考えていた事があった。

いつもより少し早く音を立てる胸の音が、否が応にも彼を煽り立てている。

緊張が最高潮にまで登りつめた時、画面が真っ暗になった事でエンドロールの終りを告げられ、そして、とうとうその時はやって来た。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第42話 魔法の箱

大画面で見る映画の迫力にいつしか飲み込まれ、‘彼’が横に居る事も、‘彼’の部屋に居る事も忘れ、映画の世界に入り込んでしまっていた。

エンドロールが終わってその事に気付くと、映画の余韻に浸ったまま、隣に座る彼に目を向ける。

「……？」

彼女の目の高さまで上げられた彼の両手は、何かを掬うような形を作って手のひらを上に向けている。

キョトンとしている彼女を見て、なんだか嬉しそうな表情の彼は、広げた手の平をもう一方の手でぐるりと覆う。再度両方の手の平を上に向けてるようにして見せると、彼のその大きな手の中に、金色のリボンがかかった黒い小さな箱が突如現れた。

「……わあ！凄いい！」

みるみる明るくなる彼女の表情を見ると、彼はとても満足している様子である。

「どうやったの？ねえ？」

突然見せられた手品に興奮したのか、いつもは敬語で話している彼女が、思わずタメ口になっているのにも気付かず、彼の手を上から見たり下を覗き込んだりして、どうやってやったのか必死で暴こうとしている。すると、頭上からはあっっと大きな溜息と共に、な

んだか切なそうな声が聞こえてきた。

「・・・そこなの？」

「え？」

なんだか肩透かしをくらったような表情をしている彼を見て、
一体何が気に入らないのかを落ち着いて考えて見る。

「・・・あ、コレ？」

手の平に乗った小さな箱を指差して尋ねた。

「そ。」

「コレ、さっき隣の部屋にあったチョコじゃないんですか？」

「違うよ」

「???・・・じゃあ？」

あまりにも鈍感な彼女にじれったくなつた彼は、彼女の手を取ると、その箱をその手の上に置いた。

まだ事の自体を把握してない彼女の表情を見て、

「開けて見て」

「え？あ？私に??」

幾分拍子抜けしたような彼の様子が見てとれる。コクコクと彼が頷いて初めて自分へのプレゼントなのだという事に気付いた。

“何が入ってるんだろう?”

ドキドキしながら言われた通りに金色のリボンをスルスルと解き始める。

「ん？やっぱりチョコ？？」

「うん」

箱の中身は形のバラバラなチョコレートが4つ。

彼は少し照れているのか、瞬きの回数が格段に増えているのが判る。

彼がジェスチャーで食べろという仕草をするので、彼女はその歪いびつな形のチョコを1個口に放り込んでみた。

途端、片頬を膨らませながら、眉間にしわを寄せているその表情は、お世辞にも美味しいものを食べているとは言えないだろう事は、誰が見ても一目瞭然だった。

「あ、おいしくない？」

「か、かたひ・・・」

「あ・・・やっぱり？」

「形もなんだかわわってるし、これ一体どこで買ったんですか？」

「・・・。」

「??？」

彼はむっとした顔になったかと思うと、何も言わず残りのチョコを彼女の手から取り上げて、背中後ろに隠してしまった。

「あつ・・・」

調子に乗って口を滑らせ、気を悪くさせてしまったと彼女は自分

の言った事を激しく後悔した。

自分は何も用意していなかったのだから、エラーに批評できる立場では無いはず。

せつかく彼が彼女の為にチョイスしてくれた物なのだから、例え不味くても顔に出す事は愚か、口に出すなんてもつてのほかだ。

でも、今までいつもおいしい食事をチョイスする彼にしては、どうしたのだろうか？と不思議でならなくて、思わずそんな風に口走ってしまった。

とにかく、何とか彼のご機嫌を取ろうと率直に思った事を言ってみる。

「あ、味はおいしいですよ！」

「・・・又、嘘ついている」

「嘘じゃないですって！」

「そりゃあ・・・材料はグレースが選んだいい奴使ってるから、下手でもそれなりにおいしいかもしれないけどね・・・」

なんだろう？彼は何故こんなすねた顔してるんだろう？部屋が暗くて判りにくい但他的顔が心なしか、赤くなってる様な気がした。

“グレースさんが用意した材料？下手でもそれなり？”

彼の言ったセリフをもう一度じっくり考えてみる。

「　　っ？！ま、まさかコレ、貴方が作ったとか??」

「・・・。」

背中に箱を隠しながら、顔を背け口を尖らせている彼の態度を見

ると、やはりこれは彼が作ったのだと確信した。

“うえ〜!! 嘘?! か、彼がチョコを・・・!! 46歳のバリバリ働くやり手の社長が、キッチンでテンパリングとかしちやったのお〜?!・・・エ、エプロンとかするのかなっ?! ああっ、でもなんだか、私より良く似合っつてそうで嫉妬する!”

慌てふためいて、まともな思考が出来ない彼女。それより何より、何かいい言い訳をしなければ! と考えた方がいい言葉が浮かばない。

もし、自分が人にチョコを作っつてあげて、あんな微妙な事言われたら傷つきすぎて、きつと立ち直れないよ!

「あ、あの〜もう1個食べたいなあ〜」

上目遣いで彼にお願いするが、完全にすねてしまった彼は顔をフンツと逸らしたまま、箱を渡す気配は全く無いようだ。

もう、こうなっつたら実力行使に出るしかない。

「・・・あっ! あのCD私も持つてるかもー?」

彼の後ろにあるデスクを指差し、彼の気を逸らそうとした。案の定彼はそれに釣られて、

「ん? どれ?」

と、彼が後ろを振り向くと、体を捻った事で後ろ手に持ったチョコレートの箱の姿が見えた。彼が油断しているその隙を狙って、そーっと彼の手にある箱を奪おうと試みるが、すぐにそれもばれ、彼はそのリーチの長さを生かして、上に上げたり、後ろにぐんと離したりと、決して彼女に取られまいと抵抗した。

「コラ！ダメだってば！」

「いいじゃない！それ私にくれたものでしょ？」

ソファアの上で二人は無邪気な子供がじゃれあっているかの様に、その小さな箱の争奪戦を始めた。

そして、気付かぬうちにどんどん二人の距離が狭まって行った。

L O V E I S M A G I C A L

第42話〜魔法の箱〜（後書き）

オトメンな社長さんの赤面の巻き。

はぶ〜なんとか、本日中の更新間に合いました；
慌てて書いたので、日本語がおかしいです（いつもですが

第43話〜理性〜

「もう！わかった、わかったから！」

観念した彼が、後ろに隠した小さな箱を差し出した。

彼女は勝ち誇った様な顔でその箱を受け取り、もう一粒口に放り込むと、すぐにもう一つ手に取って彼の顔の前にそれを近づけた。

「はい、あーん」

「。。」

目の前に出されたチョコを見て、そのまま指伝いにその先の彼女に視線を向けた。にまーつと嬉しそうにしている彼女の顔を見ると、思わず口元が緩む。

仕方なく開けた彼の口に、彼女がチョコを放り込んだ時、彼の唇にほんの少しだけ彼女の指が触れた。

彼女はそれに気付いているのかどうなのか判らないが、満足気に微笑みながらその指についたチョコを彼の目を見ながら舐めている。

その仕草に思わず今まで感じた事が無い様な色気を感じて、ドキッと胸が一段と大きな音を立てた。

・・・が、その気分に戻る間もなく、すぐに彼の眉間にもしわが寄る。

「ほんとだ、かたっ」

「でしょ？でも、おいしいよね」

「うん、味は・・・まともかな」

「生クリーム足すとかしたら柔らかくなっっていいですよ」

「へーそうなの？良く知ってるね」

「まあ、何回も作った事ありますから」

「ふう、ん……。」

彼女の言葉を聞いて微妙な気持ちになり、たったそれだけの事で、自分の知らない彼女の過去の相手に嫉妬しているのだと気付く。

彼女にだって過去に恋愛の一つや二つあるだろう事は無論判っていたが、持って行き場の無い感情が渦を巻いている。

「あ、さっきの手品、もう一回やって下さい」

彼がそんな事になっているとは、全く気付いていないのか、彼女は突然そう言うや否や、周りを見渡しテーブルの上にあったりモコンを掴んで、彼の手の平の上に乗せた。

「……さすがにこれは大きすぎて無理だよ。手の平に隠れる位の大きさに無いと」

そんな子供の様な彼女に、彼は笑った。

眉間に皺を寄せて、残念そうな顔を見ると、もう一度チヨコの入った箱を彼の手の上に乗せた。

ワクワクした顔をして、彼の手にグッと近づき至近距離でその魔法を見破ろうとしている。

こんな事で喜んでくれた事に彼は驚き、そして嬉しかった。

「仕込んでからでないといけないよ」

「そうなんですか？」

「そりゃそうさ、ちゃんとタネがあるんだから。ほら、目を瞑って」

「はい」

膝の上にちょこんと両手を揃えて置くと、言われた通りに目を瞑りながらニコニコしている彼女がいとおしくてたまらない。彼女が居るだけで自然と笑顔になれる、そんな気がした。

「ただだよ。ちゃんと目、瞑ってる？薄目したらもうやらないよ？」

「大丈夫、ちゃんと瞑ってますよー」

「……。」

タネを仕込みながら、彼女が目を瞑っているのをいい事に、無防備になっている彼女を見つめていると、今まで気づかなかった事が沢山あつた事に驚いた。

長い睫、小ぶりな鼻、ぷっくりした唇に笑うとキュツと細くなる顎。

細くて白い首筋、はっきり浮き出た鎖骨には、細いチエーンの本音が漏れる。

「まだ？」

「う、うん。ただだよ」

急に声を発したのに驚いて、彼の声が思わず裏返った。

明るい声で話しかけてくる彼女に対して、なんて卑猥な事を考えてるんだと、後ろめたさで一杯になる。

それでも、視線を逸らす事が出来ず、逸らすどころか、徐々に下げた。

着ているシャツに明らかに余裕のある二の腕と、その割りに窮屈そうにしている胸元に初めて気付き、思わず喉を鳴らしてしまう。キユツとくびれた腰にぶら下がったものは、腰の細さとは反比例していて何とも扇情的だ。そして、膝まであるタイトなスカートから伸びた彼女の足は、スラツとして程よい筋肉でしまっているのが伺える。

童顔な顔からは想像出来ない、33歳の大人の女性の身体をしている彼女に、まるで脳天を打ち抜かれた様な気持ちにさせられた。

「。。」

先ほど繰り広げられた争奪戦により、二人の距離はぐつと近くなっている。

少し腕を伸ばせばいいとも簡単に、抱き締められる距離に彼女が居る事に気がついてしまい、腕の中に閉じ込めてしまいたい、感情と、'そんな事をしてしまったら、せつかくここまで打ち解けてくれたのに、全てが水の泡になる'と言う理性が葛藤し、頭が混乱し始める。

もう、無理、かもしれない。

徐々に理性を失いつつある彼は、とうとう目の前にいる彼女を自分のものにしたという願望に打ち勝つ事が出来なかった。

「あの・・・」

見つめていた唇がゆっくりと開き、蕩けるような彼女の甘い声がそこから零れ落ちた。

既に彼の理性はどこかへ飛んで行ってしまったようで、チョコが入っている小さな箱を置くと、タネを仕込む手も止めた。

「・・・うん？」

彼も優しい声で彼女の言葉を受け入れる。

先程迄とは違った低音の落ち着いた声。

「どうして私にチョコを？」

まだ手品のタネを仕込んでいると思っている彼女は、目を閉じたままですのチョコには何か意味があるのか尋ねてみた。

「僕の育った国ではね、バレンタインデーは男性から愛する女性にチョコを贈るんだよ。ロマンティックなディナーを楽しんだりしてね」

「へー、そうなんだー」

さらっと言ったく愛する女性にチョコを贈るという彼の言葉の意味を、どうやら彼女は気付いていないのか、『国が違えばイベントの習慣でさえも変わるのね』なんて、感心している。

そんな彼女にもどかしくなった彼は、とうとう理性を失い、行動に出てしまった。

彼女の唇にふわんと柔らかい何かが触れる。

「?・・・、　っ?!」

ゆっくりと目を開けてみると、目と鼻の先に彼の顔があり、彼女はびっくりして肘をついて後ろに倒れむ様に仰け反った。

“え?ええっ?!い、今のって・・・”

完全にパニックっている彼女をよそに、彼女の目をじっと見つめている彼の目はどこか切な気で・・・そしてとてもセクシーな目つきだった。

“え?キス???されたの?!何で???”

大きな目を何度もパチクリしている彼女の様子を見て、彼がクスツと微笑んでいる。

「ちゃんと言ってなかったね」

「え?何、を?」

「僕は君を愛しているって事を・・・心の底からね」

「。。。」

‘愛している’その言葉の持つ意味の重さがズシンと心に響き渡る。

そんな事を言われた事は今だかつて一度も無いし、‘好きだ’と言つ言葉でさえも、過去に付き合った事のある数少ない男性達からは、付き合い始める時に1度聞いた切りで、彼女にとっては聞き慣れないワードの一つだった。

初めて言われるその言葉が彼女に安らぎを与え、同時に彼への想いを加速させていく。

彼に対する気持ちが大きく膨らみはじめていたのを、確かに自覚していたが、かといって、何て言っているのか返す言葉が見つからず、彼女はただじつと彼の目を見つめるしか出来なかった。

そうこうしていると、ソファーが沈み彼が手を前について、更に彼女に近づいて来ようとしているのが判った。

彼の手が彼女の髪をかき上げると、そのまま首の後ろに回し、肘をつき姿勢が苦しそうな彼女の肩をそつと掴みながら、二人は唇を重ね合い、そのままゆっくりとソファーに沈んで行った。

幾度も唇を啄ばんでは笑顔を見せ、彼は短い口付けをもつたいぶるかの様に楽しんでる。

彼女も抵抗する所か、目は蕩けきっていて、離れた時に魅せる彼女の潤んだ瞳を見ると、今した所なのにすぐにもう一度触れたくなくて、又唇を寄せてしまう。と言ったループを繰り返している。

彼女の下唇を軽く食みながら少し距離を取った時、寸分の狂いも無い眼差しを彼女に向けた。

そして、まるで彼女に言い聞かせるように、

「愛しているよ」

と、もう一度そう囁くと、より彼女の深い所に潜り込む為に、顔の角度を変えながら貪る様な甘い口付けを交わした。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第44話 誘惑

愛している？

彼が？私なんかを？

長い手足に大きくてスツとした目元、薄い唇。色素を感じさせられない程の白い肌が彼を中性的に魅せていて、その容姿は人並み以上、いや人並み外れている。

容姿の素晴らしさもさることながら、仕事も出来るし女性の扱っても手馴れたものだ。

ほっといても女性が寄ってきそうなこの人が、何のとりえも無いこんな私を好きだと言うの？

好意をもたれているのかな？とは、そりやまあ少しは思っていたけれど、きつと大勢いる中の一人だと思ってきた。だって、誰がどう見ても‘超’がつくほどのハイスペックな彼が、よりもよって私みたいな‘超’がつくほどの凡人を好きになるとは到底思えない。でも、目の前にいる彼に、真面目な顔でそんな事を言われ、優しく触れられるだけで、本当なのかも、と錯覚してしまう。

右の手で髪をそつと撫でられ、もう一方の手は彼女の首筋から肩を通り、二の腕まで滑り落ちては又来た道を何度も辿っている。温かくて柔らかかくて、包み込むような彼の大きな手が優しく触れる度に、焦れたい感情が沸きつつも、大事にされている様な気分になる。

今、彼に触れられている場所全てが熱を帯び始め、彼だけで無く彼女も又、彼を求めているのだと気付かされた。

口腔内を縦横無尽に動き回っている彼の舌を確かに感じる。

角度を変える度に開いた口の隙間から漏れ出す水音と、呼吸を抑える彼女のくぐもった声が聴覚を刺激し、もつと、もつとと、高みの方へ連れて行く。

深く甘い口付けを交わす二人には何も阻むものはなかった。

もう彼には振り回されない、そう決めたのにも関わらず目の前の彼に溺れて行った。

彼の長い腕が彼女の肩と、膝裏に滑り込んだかと思うと、次の瞬間、彼女の体が宙に浮き、咄嗟に彼の首に両手を巻きつけた。

驚いた顔で彼を見上げると、彼はニツコリと微笑みを返し、そのまま、スタスタと軽い物を持つ様に歩き出した。その先には、120インチのプロジェクターがあると saying していたベッドルームがあり、今からそこで何が行われるのか簡単に予想がつく。

見た事も無いような大きいベッドにそつと下ろされると同時に、そのまま彼も覆いかぶさってもう一度ゆっくりと唇を重ねた。

彼のキスは決して強引にするのではなく、相手の様子を見ながら少しづつ進んでいく。彼らしい優しいキスに翻弄されつつも、昼間にされたケントの強引なキスを、こんな時に思い出してしまった。

“・・・あんなの、最低だ・・・”

あの時の嫌な思い出を、彼で上書きしたかった。

過去を上書きする事が出来たら、無かった事に出来るのならどんなに気持ちになるのだろう。

“ ”

『無かった事にして欲しい』

あの日、彼が言った言葉が頭の中を駆け巡る。

以前、彼から切り出された別れの言葉を思い出して、彼女が動揺し始めた事に気付かず、彼の唇は首筋を這い始める。

突然やってきた刺激に耐えられず、勝手に零れ落ちた甘い吐息。すると、彼の大きな手が彼女のくびれた腰を捉えシャツの裾から素肌に滑り込んだ。

「っ！」

腹部を撫でながら這い上がってくるその手を遮り、反らしていた喉を引く。

彼は彼女の服の中に入り込んだ自分の手の上に重ねられた、彼女の華奢な手に一度視線を落とすと、もう一度彼女の顔を覗き込んだ。

眉毛を上にも動かし少し首をかしげているその顔は、言葉には出さないが、何か問題でも？>と聞いたげなのが見てとれる。

「……っ、めんなさい」

「……。」

彼の胸に手を置いて彼を拒んだ。

上体を起こした彼女はそれ以上何も言わず、髪と衣服の乱れを整

えている。

片膝を立てて彼女の横に座った彼は、寂しそうな表情を浮かべていた。

「……どうしたの？」

「あの、やっぱり、無理です」

「無理って？」

「貴方と、その、こういう関係になるのは、良くないって思うんです」

「じゃあ君は、どういう関係を望んでるの？」

「その……、今まで通り仕事上の関係を……」

ここまで来てそんな事を言い出した彼女に、彼はイラつきの表情を見せた。

最初の方は確かに戸惑っている様子だったが、何度も彼女の舌を絡め取っていると、躊躇いがちに彼女も舌を差し出して来ていたのだ。

人を煽るだけ煽っておきながら、今更ビジネスパートナーとしての関係に徹すると言う、何とも解せない理由に、少しの穴も決して見逃さない彼の‘悪い癖’が出始めた。

「君は……仕事上の関係‘だけ’の人の自宅まで簡単に行ったりするんだ？」

「そんな事しなっ！……。」

落ち着いて彼女の話聞いてみると、彼女の言っている言葉が矛盾している事に気付く。

彼女は多分、自分の気持ちに気付いていないか、進んでは行けないのだと必死で制御しているのだろう。

彼女を楽にしてあげたい。そして素直に自分を認めて欲しいと感じた彼は、そつと彼女の手を取ると、両手で包み彼の口元に持つていった。

「カナ・・・僕は‘男’なんだ。愛する人が目の前に居て、それが二人きりだったのなら尚更抱きしめたくなるのが普通なんだよ。何もするなと言われれば何もしない。・・・けど・・・」

「・・・、」

「それじゃあまるで蛇の生殺しだよ」

彼の辛そうな顔を見ると、一体どうしたらいいのか彼女の方も苦しくなってきた。

このまま流された方が楽なのかもしれない。でも、あの日の出来事がいつまでも消化されずに、彼女の頭の中を支配し続けるのが目に見えていて、一步を踏み出せなくなっている。

抱かれる度に、愛を囁かれる度に繰り返される嫌悪に耐え切れる自信が無い。

「あの、・・・でも、」

歯切れの悪い彼女の返事に耐え切れず、彼女の気持ちを開放するつもりが、自身の欲望を満たしたい感情が競り勝ち彼は一気に畳み掛けた。

「君は。。。」

「・・・。」

「君は、どういつつもりで僕の家に来たんだい？どういつつもりで僕の手を握ってきたの？何の意味もないなんて言い訳は通じないよ」

「いつ・・・！」

先程までとは違い、少し乱暴に彼女を押し倒した。彼女の両手首をベッドに縫い付けると、ひどく悲しげな表情で、

「君が始めたんだ。そう、・・・君が始めた事なんだよ？男の家に簡単にホイホイついて来る事がどういう事か、判らせてあげるよ」

そう言った彼の表情を見て、背中にツツと冷たい物が走るのを感じる。

いつも優しい彼が急変し、目の前にいる彼がとても冷血に見えた。彼が再び彼女に襲い掛かる。

「や、やめてっ！」

「仕事上の関係のままでもいいんだよね？・・・だとしたら、ビジネスはギブ&テイクで成り立つって事位知ってるよね？」
「っ？！」

「僕は君に沢山与えた。豪華な食事や君の会社にとっては大きな仕事もね。勿論、それらは僕がやりたくて与えたモノだし、見返りを求めるつもりも無い。けど、君が僕の事を恋人でも、友人でも無く、ビジネスパートナー以上に見る事が出来ないって言うのであれば、話は別だ。一体、君は僕にどんな利益を与えてくれるんだ？」

「そ、そんな、の」

トーンが全く変わらない声と冷たい言葉の数々とは裏腹に、少し苦しそうに顔を歪めている彼の表情が何処か引っ掛かる。

きつと彼はそんな事を言いたいわけでは無いのだろう。と、心の何処かでまだ彼の事を信じている自分が居た。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第45話 繋がり

「や、やめ、・・・」

彼の荒々しい息遣いが聞こえ、アルコールの香りが辺りを立ち込める。

獣と化した彼は彼女の制止も聞き入れず、目の前にある獲物に照準を合わすと、両手を捕らえ彼女の自由を奪った。

豹変した彼に少なからず恐怖を覚えた彼女は、先程までは受け入れていた口付けも拒み顔を背けた拍子に、彼の唇はそんな事にめげもせず首筋へと降りていった。

彼女に拒む権利はなかった。

彼の言う通り、確かに思わせ振りの態度や言葉を発したのにも関わらず、拒絶するなんて最低だ。

自分でもそれは判っていたが、彼に一方的に振られたあの日の事や、カレンに言われた二人の関係・・・マイナスの要素が脳裏に浮かび、それらを消し去る事が出来なかった。

まるで嘔むようにして与えられる愛撫が、彼の今の心情を表しているかのようにもとれ、自分のせいで彼がそうなってしまったのだと責任を感じる。

太ももに硬いものを感じ、彼女は覚悟を決めたかの様に全身の力を抜いた。

抵抗が収まったのが判ると、彼は彼女の両手を解放し、自由になった彼の両手は、今まで触れられなかった部分へと一斉にその触手を伸ばし始めた。

柔らかな双丘を揉みしだき、彼女が暴れて捲れ上がったスカートから覗いている、肉付きのいい太腿を撫で上げられ、じわりじわりと迫り来る恐怖で喉を反らす。

彼が彼女のシャツの裾を持つと、それを一気にずり上げられ彼の唇が彼女の肌に直に触れようとした。

少し暗めではあるけれど、煌々と点いたライトの下で晒される羞恥に耐え切れず、目をぎゅっと瞑り下唇を思いつきり噛み締めた。

「　　っ！」

すると、せつつく様に動き回っていた彼の手が何故かピタッと止まった。

その時の彼女の顔を見た途端、手の動きは勿論、思考までもがピタリと停止した。

顔を背け歯を食いしばり目を硬く閉じている、良く見ると小刻みに震えているのも判った。

何の抵抗も示さなくなつた彼女は、ちょっと強引ではあつたけれど、やっと自分の事を理解し、己を解放する事に同意したのだと、思っていたのに。

「……どうして？」

彼女の目から、とうとう一筋の涙が頬を伝った。

「どうして抵抗するのを止めたの？本当は嫌なんじゃないの？」

そう問いかけると、ゆっくりと目を開け彼の方へと視線を向けた。噛みすぎた唇が痛々しく真っ赤になっている。

「……私が悪いから。私が軽率すぎたのが」

「……そうだよ、君は男を判っていなさ過ぎる。でも、だからって無理矢理抱かれて……カナはそれで平気なの？」

「わ、からない……けど、……怖くて」

「怖い……？」

小刻みに震えながら首を縦に振り、恐怖におののく彼女を見た彼は捲れ上がった彼女のシャツを下ろすと、そのまま彼女の横に倒れこんだ。

「……。」

彼女の言葉に愕然とした。

何もかもを彼女一人のせいにして、己の感情だけを優先した自分に腹が立つ。

彼女を守りたい気持ちで居たはずの自分が、彼女の脅威となってしまうている。

どうしても空回りしてしまう自分がある。

どうすれば判り合えるのだろう。

彼女の事を想う気持ちの速度に、どうやら彼女はついて来れず、振り返るとずっと遠いところに彼女はまだ立っているのだ。

そんな状態で半ば強引に身体を重ねようとしても、温度差があつて当たり前なのに、何を焦っているのか。

勿論、彼女の体だけが目的ではなく、ただ‘繋がり’が欲しかったのだけれども、彼女とはまだ心すら繋がっていないと言つ事に気付き苦虫を嚙んだ。

神に与えられた試練がこれほど辛いものとは思ひもよらず拳を握り締めた。

LOVE IS MAGICAL

第46話 逆の効果

「はい、おやすみ」

「おやすみ、グレース」

パタン

「さて、私もそろそろ寝るとしましょうか」

2階から手すりを掴んでゆっくりと階段を降り始めると、1階の階段の横のリビングの扉が勢いよく開く音が耳に入り、上から下を覗く様な形でグレースが見下ろしてみると、コートを手を持った女性之急いでその扉から出てきた。

“ はて？あのお方は確か・・・ ”

「カナ！待って！」

すぐ後を彼が追って飛び出してきて、グレースは何となくだが今の二人の状況が飲み込めたのか、

「おやまあ、あんなに逃げ腰になっていたのが、嘘みたいですね」

と、彼の姿を見て微笑んだ。

ベッドの上での耐え難い羞恥から解放された彼女は、いてもたってもいられなくなり、再び上体を起こすとソファに早足で向かいながら、髪と服の乱れを手早く直しソファの横のサイドテーブルに置いてあった、自分のコートとバッグを手にとった。

同じく上体を起こした彼が、その様子をベッドの上でじっと見つめている。

「カナ？」

「わ、私帰ります！」

彼の顔も見ることが出来ず、慌てて部屋から飛び出していった。

彼が後を追い、長い廊下の途中で彼女の腕を捕まえた。

「カナ！こんな時間に一人でどうやって帰るの?!」

「大丈夫です、タクシーでも捕まえるから」

「こんな所でタクシーなんか捕まえないよ！」

確かに彼の家は、人里離れた山の中に建っていて、周りは人気どころか店1軒すら建っていない。そんな場所でもこんなに夜も更けた後では、流しのタクシーなんて当然走っているはずも無い。

しかし、このまま彼と同じ空気を吸うのが何とも居心地が悪く、どうにかしてココから逃げ出そうと、考えもなしに部屋を飛び出し

てしまった。

「……で、電話で呼ぶから！」

掴まれた腕を振り解き、廊下を進む。すぐに彼に又捕まり、今度は両腕を掴まれて振り向かせられた。

「じゃあタクシーが来るまでここにいろんだ！」

「だ、大丈夫よ！子供じゃあるまいし……離して！」

「子供じゃないから心配してるんじゃないか！」

「……！」

「子供だったらこんな時間に一人で外へ出るなんてしないよ！大人だから……僕の大事な女性だから余計に心配なんだよ！それ位、判れよ！」

言いながら、まるで聞き分けの無い子供に諭すように、何度も身体を揺すられる。

耐え切れず、彼女の目から大粒の涙がポロポロと零れ始めた。

涙を見せる事で彼を困らせてしまうのだと感じながらも、一度決壊を破ってしまったものはすぐに収める事が出来ず、何とかして気付かれまいと首をすくめる。

又、彼を怒らせてしまった。

何をやっても空回りして、結局彼の怒りに触れてしまう。

「はじめ、んなさい」

「……。」

溢れる涙を抑えきれず、両手で顔を塞いだ。

そんな弱々しい彼女を目の当たりにして、‘又やってしまった’
と掴んでいた彼女の両腕を開放し、自分が傷つけてしまったせいで
泣いている彼女を直視する事が出来ず、彼は彼女に背を向けた。

明かりの落とされた廊下の窓から、月の明かりが差し込んでいる。

お互い声を掛けることが出来ず、ただ二人とも押し黙っていると、
暗闇から聞き覚えのある声が聞こえた。

「あら、いらしてたんですね？」

今の二人の状況を把握しているのか、していないのか判らないグ
レースの呑気な声がして、二人は思わず驚き暗闇の中の声のする方
へ目をやった。

その暗闇の中、普段通りニコニコと笑みを浮かべて立っているグ
レースは、

「丁度、いいお茶が手に入ったんですよ。よろしければ召し上がっ
て行きませんか？」

と、彼女を誘った。

その口振りで、きつと今二人が揉めているのを判っていて、気を
使ってそんな事を言い出したのだらうと二人も気付いている。

「あの、でも私そろそろ・・・」

「まあまあ、いいじゃありませんか。ささっ、どうぞこちらへ」

彼女の側まで来ると、乾燥したしわくちやの手が彼女の手を取っ
た。

‘どうしよう?’と迷いつつ彼の方へ目を向けると、コクンと一

つ頷いて彼はその場を後にした。

「。」「

彼が自分の部屋に戻ろうと踵を返し、両手をズボンのポケットに突っ込みながら、グレースが彼女を引き止めてくれたことにホッと安堵の表情を浮かべる。

今の自分だと何かしようとする度に、余計に彼女を追い詰めてしまっている。

グレースがどういふつもりで彼女を連れて行ったのかは、正直判らなかったが、長年自分の事を見てくれていたグレースの事だから、自分の不器用な所を上手く彼女に伝えてくれるのでは。と、他人任せではあるが、そうあって欲しいと願っていた。

彼女の手を引いてグレースはキッチンへと向かう。

さすがにグレースの手を振り解く事が出来なかった彼女は、指先で涙を拭きながらグレースの後を、ただ黙ってついて歩いた。

そんな彼女の前に、グレースがハンカチを差し出し、

「ええと、カナさん？でしたかな？もう夜も更けましたから、今晚は泊まっていかれなさい」

「……ありがとうございます」

ニッコリと微笑むグレースの手からハンカチを受け取ると、温かいグレースの言葉に又涙が彼女の頬を伝う。

懐かしい匂いにするハンカチに緊迫していた気持ちだが、次第にゆるゆると解れていった。

L O V E I S M A G I C A L

第47話 本心

キッチンの隅に置かれたテーブルセットに座らされると、グレースはケトルに水を入れてシュンシュンと湯気が上がるのを待った。やがて沸点まで熱された熱々のお湯を、茶葉がポットの中で循環するように、勢いよくティーポットに注ぎ淹れると、ティーコージーを被せ、砂時計を引っくり返す。

それが終わると、ティーカップのセットを持って、グレースが彼女の前に腰掛けた。

「少し、落ち着きなさったかな？」

「はい、お陰さまで」

彼女の様子を見てニッコリと微笑んだかと思うと、次には眉間に皺を寄せた。

「しかし、女の子を泣かせるとは、坊ちゃんも酷い事をするもんだ」「い、いえ、私が悪いんです」

思ったとおりの返事が返ってきて、グレースの目じりが下がる。今までジャックが付き合ってきた女性は皆、自己主張が激しく、ジャックと喧嘩をしても、誰一人折れるのはおろか、自分に非があるなんて言う女性は居なかった。

かと言って、カナが自己主張のしない、つまらない人間なのかと言われるとそうではなく、ちゃんと自分の非を認めても、一緒に居る事が出来ないのだと、部屋を飛び出したのだから決して流されてしまうような人間では無いのだろうと、グレースは思った。

女性を振り回すことがあっても、振り回されることが無いジャック

クが、珍しく女性に夢中になっている理由が判る気がした。

グレースがティーカップを広げながら、紅茶を淹れる準備をし始めた。

「坊ちゃんは正直すぎる所があるんです。時にそれが強引に感じるがありますが、慣れればとてもコントロールしやすい方ですよ」

砂が全部落ちたのを横目で確認すると、ティーストレナーに手を伸ばし、紅茶を注ぎいれながら彼女に向かってウインクをした。淹れたての紅茶と温めたミルクを彼女に差し出し、ソレを飲むように手で促され、彼女は軽く頭を下げると、ティーカップに手を伸ばし、ゴクリと一口喉に流し入れる。

「・・・おいしい」

思わず自然に出た言葉に、グレースはにっこりと微笑んでいる。

「・・・でも、カナさんに対しては随分我慢なされてる様で、正直びっくり致しました」

「我慢？」

「こういう話をするのは良くないのかも知れませんが・・・坊ちゃんは自分の気持ちを抑える事が苦手な方でして、いい事も悪い事も全部吐き出さないと気が済まないんです。駆け引きって言うのが出来ないタイプなんですな」

「そうなんですか？」

「ただ、カナさんに対してはかなり自分を押し殺していましたね。仕事でも恋愛でも自分についてこれる奴だけについてくればいい。っという考えの方だったのに、自分の気持ちを隠してまであなたの側

に居たかった様ですよ」

「……。」

彼女にとっては十分強引に見える彼だが、それが彼の本性でないと知り、自分が彼を我慢させていたんだという事実が、彼女の胸を締め付ける。

「私は……私はどうしたらいいのでしょうか」

「ほ？」

「彼の気持ちを受け入れたいとは思っているのですが、どうしても過去の事が引つかかってしまって、受け入れられなくなるんです」「それは、カレンさんの事ですか？」

ティーカップを見つめながら小さく頷いた。

こんな話をしてしまったって本当に良いのだろうか？少なくとも自分よりカレンとの付き合いが長いグレースに、こんな話をするのはいささか不利な気がする。

しかし、彼の事を良く知っているグレースだからこそ、何か解決策を見出せるかもしれないと、彼女は藁にも縋る思いだった。

言っているものかどうなのかと、悩んでいるような表情をしたグレースが大きな溜息をつくとき、とうとうその重い口を開いた。

「確かに、あの二人は以前、近しい存在ではありませんでした。……ですが、どちらかと言うとカレンさんの一方的な感情だったと私は思っております」

「そうでしょうか……」

「それに今は、カレンさんは他の方とご結婚なさってますし」

「えっ?!」

「あ、ご存知無かったですか?」

「は、はい」

「なんでしよう、妬いておられるのでしょうかね。坊ちゃんとは長い付き合いで一時とは言え男女の仲・・・コホン、仲良くされておられましたし」

口を滑らせてしまったと、笑いながら舌を出したグレースを見ると、カレンとの仲を気にしている自分がなんだか滑稽に思えてきた。

大事なのは過去ではない、いま現在なのだと、グレースに教えてもらっている様な気がする。

「坊ちゃんは意外に単純なお方ですから、貴方も直ぐに操れるようになりますよ」

そう言つと声を出して笑い出したグレースに、彼女もつられて笑つてしまう。

声を出して思いっきり笑つと、くよくよしていた自分が凄くちっぽけに思えて来る。

きっとあのまま帰っていたら、もう彼に会うことは出来なかっただろう。

グレースに会えて良かったと今は心から思えるようになった。

「・・・ありがとうございます」

グレースと談笑しながら玄関へと向かうと、ドアの横の椅子に頭をうなだれて座っていた彼が二人を見つけた。

彼の表情は今にも泣きそうで、とても不安そうな顔をしている。

彼を見た彼女は、足を一瞬止めてしまったが、グレースに背中を軽く押され、ゆっくりと彼の元へ歩いていった。

大きな手で彼女の背中に手を回し、顔を覗き込むようにして彼女の様子を伺っている。

そんな彼の態度を見て、彼女は申し訳なさそうに微笑みながら、彼に支えられるようにしてドアへと向かう。

彼が振り返り、グレースに『ありがとう』と、声を出さずに口を動かすと、グレースはまるで自分の役目を終えたかのように、につこり微笑んでその場を離れた。

「・・・本当に帰るの？」

頭の上から、消え入りそうな彼の声が聞こえる。

「はい、明日も仕事があるので」

「そっか・・・」

彼が扉に手を掛けた時、彼女の足がピタリと止まった。

「・・・どうしたの？」

腫れ物に触るかの様な態度で自分に接している彼を見て、心が締め付けられる。

“ こんなの本当の彼じゃない、自分の言いたい事を言えない彼なんて・・・。いつも堂々としているからこそ、魅力的な人なんだ。”

うつむいていた顔を上げると、意を決して彼に告げた。

「 私、貴方が好きです。すぐには無理かもしれないけど、貴方と向き合っていきたいの」

「・・・」

彼女からの突然の告白に、瞬きをするのも忘れ放心状態になっている彼のシャツの胸元を掴むと、グイッと引き寄せ彼女の方から口付けた。

明かりの落とされた玄関の透かし戸に、呼んでおいたタクシーのヘッドライトが入り込んでいる。

タクシーが到着を知らせるクラクションが何度も鳴り響く中、そのライトの明かりに包まれながら二人の影はやがて一つになり、いつまでも固く抱き合っていた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第47話〜本心〜（後書き）

こんにちは、まる。です。

ご訪問有難う御座いますm(____)m

はあ、やっとここまで終わりました・・・長かったorz
区切るとしたら、この辺りで一旦区切る感じになると思います。

更新もちょっとバラつきが出始めました。

少しでも気に入ったと思われた方は、宜しければこの機会に是非、
更新通知サービスorお気に入り登録をして頂けると、コレ幸いです。
御座います。

それと、毎日沢山の拍手有難うございます！

拍手を頂く度に、もっといいものを書きたい！と思うのですが、中々どうも上手く行きません。

が！

日々精進致しますので、又のご来訪を心よりお待ち申し上げます。
ます。

では、今後共『運命の人』を宜しくお願い致しますm(____)m

第1話くオンとオフ

手首にした少しゆるめの腕時計をくるりと回し、約束の時刻が来た事を確認すると、荷物をまとめPCの電源を切った。

「ボス、打ち合わせ後直帰しますね」

「はいよ！頑張ってきてよ！」

彼との仕事を降りると強情をはっていた彼女の気が変わり、以前よりもやる気が感じられる彼女に、ボスは上機嫌でいつも送り出してくれる。

ニコリと笑うと彼女はドアの横のホワイトボードに、水性ペンのキャップをポンツつと開けると、鼻歌でも飛び出しそうな程な程なんだか楽しそうに「NO RETURN」と書いて急いで扉から出て行った。

彼とはあれから打ち合わせと称して会っている。いつも忙しい彼はプライベートの時間を作るのはとても難しく、こういう形で無いと中々会えないのが少し不満ではあった。

職権乱用、はたまた公私混同だと言われそうだが、仕事をしているのには間違いない。

完璧主義な彼らしく、彼女のデザインを気に入ったとは言え、全てをそのまま受け入れるのではなく、実に細やかに要望を伝えてくる。

「ここはこの色を使って」と言う風に言ってくれるととても助かるのだが、彼の表現は「冬の朝に温かいベッドから這い出てくる感じ」と、まあ非常にデザイナー泣かせな表現で指示を出す。

どうにもこうにも判らなくて、「すみません、もうちょっと具体

的に』と恥を忍んで尋ねてみるも、

『冬の朝って凄く寒くてベッドから出るの嫌になるよね？でも、起きないと仕事にも行けないし、学校にも行けない。それどころか、新しい出合いが待っているかもしれないのに、それじゃあもつたいないよね？だから、思い切ってベッドから出るんだけど、本当はまだ出たくないから、指先から徐々に這い出て、最後の最後までベッドのぬくもりを感じていたいから足を出すのは一番最後なんだよ。』

そんな感じ』

『はぁ……。』

先生、正直さっぱり見えません。

“これって試されてるのかなあ？”

困った顔をしている彼女に、彼は

『君なら大丈夫。きっといいのが描けるよ』

そう言って、微笑んでいる。

いつも頭を悩ませられるのだけれども、彼によって成長していくのが自分でも良く判った。

「お待たせしました」

いつもの様に彼が車の前で彼女を待っている。

彼女が近づくと、彼は満面の笑みで彼女を抱きしめた。

「ち、ちょっと、やめて下さい！」

彼の長い腕の中でもがいている彼女の両肘を持つようにして距離を取ると、彼女の顔を覗き込みながら彼は不思議そうな顔で尋ねた。

「なんで？抱きしめる位ならいつもしてるじゃない」

しれつと言つてのけた科白に、彼女の顔が朱に染まる。

「ち、ちがつ、会社の前だし、誰かに見られたら・・・ね？」

辺りをキョロキョロしながら小さな声で彼に近づいてそう言つと、良く聞こえなかったと言わんばかりに、彼は耳を近づけてもう一度彼女の言葉を待った。

「・・・もう・・・だから・・・」

彼の耳に手をかぶせ耳打ちするように話し出そうとした瞬間、不意をついた彼は彼女の頬にチュツと軽くキスを落とした。

驚いた彼女は彼を突き放し、耳まで赤く染めて顔を引きつらせている。

「ひ、人の話聞いてます?!」

頬を手で押さえながら怒っている彼女の様子を見て、彼は身体を折るようにして、笑い出した。

カンカンな彼女を尻目に大喜びの彼は、笑いをこらえる事が出来ないまま、彼女を車に誘導する。

車内に乗り込んだ後も両極端な態度の二人を見て、ビルは呆れていた。

「もう！私は仕事で出てきてるんですよ？こんなトコ誰かに見られたりしたら・・・ああ、そう考えただけで予想がつくのが恐ろしい・・・」

「ククツ・・・気をつけないとね・・・プツ」

まだキスをされた頬を押さえながら、ギロつと彼を横目で睨みつけ、彼はまたそんな彼女を見て笑っている。

「で、でも・・・ハハツ　凄くスリリングだね？・・・プツ」
「もう・・・バカッ！」

いつもの様においしい食事を楽しみながら、仕事の話に没頭した。目の前にいる彼は、先ほどまでの彼とは打って変わって、鋭い目つきビジネスマンの顔になっている。

そんな彼の様子に彼女はまだ慣れないのか、メモを取りつつ彼の

目を見ながら話を聞いているが、いつの間にもやらどこか上の空になつて自然とペンが止まる。

彼が視線を外した時を狙つて、彼の目から徐々に視線を落とすと視線は彼の唇に止まつた。

この人がさつき私を抱きしめて頬にキスした人。

この人が私を愛していると言つてくれる人。

そう思いつつも、今、目の前にいる彼はまるで別人の様だつた。彼の唇が動きを止めたのに気付かず、そのまま彼の薄い唇に見とれていた。

「……ねえ？聞いてる？」

唇が動くと同時に出了た彼の言葉で、慌てて視線を彼の目に戻した。

「あ、は、はい！聞いてます」

疑つたような目で彼女を見つめる彼に、彼女もしまったと言つような表情が顔に出る。

「さつき、ずっと僕の口元見てたよね？」

「っ？！？！そ、そんなこ、っと、ありません！！！」

見事に噛んだ。

途端、彼が険しい表情になり、その顔を見て思わず背筋が凍つた。

「……いいかい？今日はビジネスで来てるんだ、ちゃんとその辺をわきまえて貰わないと困るよ」

「…………はい…………すみません…………」

「……………プツ」

シユンとなって頭をうな垂れている彼女を見て、彼は堪え切れず笑い出した。

彼女はキョトンとした顔で事の事態を把握出来ないで居る。

「…………ほんつと、君って正直だよね…………クククツ、『あるりません!』だって、あははっ」

途端にさっきまでの鋭い目つきが無くなり、いつもの彼のやさしい表情に変わった。

彼に遊ばれていると思ったが、『君って本当可愛い』を連呼されて、怒るところか嬉しくなる。

「…………もっっ!」

口を尖らせてむくれている彼女の頭に手を置いて、ポンポンと2回そつと撫でると、

「ちゃんと後であげるから…………ね?」

「っ!……!」

サラツとした顔でそんな事を言って、又彼女を困らせた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第2話〜欲求〜

いつもの様に彼がお会計を済ませている間、彼女はお店の外で彼を待っていた。外はまだ寒く、あつという間に手が冷たくなる。

その場しのぎではあるが、息をはあつと吐き何度も手を擦りあわせて自分の手を暖め、この後にある幸せの瞬間に備えていた。

「お待たせ」

そう言って彼は駆け寄ってくると、すぐに彼女の手を捕まえる。

二人が‘ビジネス’の関係から‘恋人’に切り替わるこの瞬間が、彼女はとても好きだった。

駐車場まで続く道を手を繋ぎながら歩いていると、彼が急に彼女の腰に両手を回し、向かい合う様にして立ち止まる彼にキョトンとしていると、目を伏せた彼が首を傾けながら距離を狭め、あつという間に唇が塞がれる。

「うんっ…ち、ちよつと」

両手で彼の胸をおさえて唇を離すが、腰に回された彼の手は彼女を解放しないままだ。

「どうしたの？」

「どうしたのじゃないでしょ?!こんな所で突然」

「だってキス、したかったんでしょ？」

悪戯っぽく微笑みながら首を傾げている。

その笑みは、本当に気付かなかったといった素振りをしている、確信犯的な意地悪な微笑みだった。

「っ！！だ、だから、誰がそんな事言いました?!」

「顔に書いてあったよ」

両手で頬をこすり、彼女はあからさまに動揺した。

そんな彼女を見て彼はクスリと笑うと、右手を彼女の頬に添えて親指でそのぷっくりした唇をなぞりあげる。

「僕の唇が欲しくてたまらない・・・って顔してたよ」

「・・・。」

うつとりとした目で射抜かれて、その色香に彼女の心がざわめき立つ。

見つめられているだけで彼女の思考はあっさりと停止し、辺りに人の気配は無いとは言え、いつ何時人が通るか判らない駐車場で、彼に吸い込まれるように顔を近づけていった。

最初はふんわりと柔らかかくて薄い唇が焦れるように触れる。

一度顔を離してニッコリと微笑むと、又目を細めて続きを強請る。少しづつ侵入を始める彼の舌に躊躇して、自身の舌を喉の奥に引っ込めていると、彼が顔の角度を変えて更に深い所に入り込もうとする。

「っは、ん。。。」

突然奥まで到達し、彼の胸に置いていた手がピクリと跳ねた。すぐに呼吸がままならなくなると、自然と眉間に皺が寄り、意識せず悩まし気な声が漏れ出してしまう。

奥で縮こまっていた彼女の舌を彼の舌が追い詰めると、あっさりと絡め取られて前へ引き出させる。最初は戸惑いがちに突き出していた舌が、彼のリードによって徐々に様になっていった。

ゆったりと繰り広げられる彼の焦れたキスが、あっという間に彼女を蕩けさせてしまう。

ただ、唇を合わせて舌をもつれさせているだけなのに、身体の一つと奥の方が徐々に熱を持ち始め、自身の体の変化によって彼のキスが上手なのだと言ふ事を知る。

“や、ヤダ…頭がボーっとしちゃう”

恥ずかしくて嫌がっていた彼女もいつの間にか彼のペースにのせられて受け入れてしまっている。

長い戯れの後、名残惜しむように彼がやつのことと唇を解放する。そのままキツク抱き寄せられながら、彼女は乱れきっている呼吸を整えようと、大きく息を吸い込んだ。

「あんまり煽らないでよ、理性が保てなくなる」

「…あ、煽ってなんか」

キツク巻きつけた腕を少し緩めると、彼女の頭のとっぺんにチュツとキスを落としてから、彼の頬がそこに横たわる。小さく溜息を吐きながら、

「…君が欲しいよ」

と、いつにも増して熱のこもった艶のある声でポツリと呟いた。彼の家での一件があつてから、二人の関係はキス止まり。先程の様な情熱的な口付けはあの時以来だったから、彼も余程嬉しかったのか、押さえが利かずつい本音が漏れてしまった様だった。

「……。」

急に現実の世界に引き戻されたかのように、火照っていた体から熱が失われていく。

このまま身体を密着させていると、彼が又暴走しそうな気がして、彼の腕からすり抜けて背を向けた。

ぬくもりが無くなり、手持ち無沙汰になった彼の腕は、そのまま組まれて気を紛らわせているようだった。

右手にした腕時計を見てからまだ時間に余裕がある事を知ると、

「ねえ……今から僕ん家来ない？帰って少し仕事もしたいし」

と優しく問いかけても、彼女は背を向けたまま黙って首を振っている。

彼は肩を上下して深い溜息をつくと、眉毛を下げて困ったなと言つように話しかけた。

「そう毎回毎回拒絶されると、君が家に来てくれるって言った時、僕変に期待しちゃいそうだけど？」

「あ、あの！その！……っ。」

慌てて彼の方を振り返り、しどろもどろになった彼女がとってつけたような言い訳を始める。

男女の関係になるのが、今まで経験した事がないわけでは無いが、やはりあの時の怒りに満ち溢れた彼の顔がフラッシュバックして、中々前に進む事が出来ない。

彼もそれを承知しているのか、今の今まで強制的に自分のモノにしようといった態度を取った事は無かったから、安心していた。

いつかは乗り越えなければならぬその壁を、叩き潰せるまでの気持ちの準備がまだ整っていない。

眉尻を下げ明らかに返答に困っていると、ふわっと柔らかい温もりで包まれた。

「いいよ、僕待つから」

「。。。」

彼の優しさが心に染み入るのを感じると、彼女も少し譲歩しようと言う気持ちが自然に湧いて出る。

「何も、しないって約束できるなら、行ってもいいですけど・・・？」

閉じていた目を見開いた彼は、ガバツと抱き締めていた体を離して彼女の両肩に手を置き、顔を覗き込むようにして彼女に問いかけた。

「・・・今なんて？」

「こんな事、何度も言えません」

顔を背けて頬を赤らめている彼女を見て、聞き間違いではない事を確信した彼は、みるみる顔がほころんでいく。

気が変わらないうちにとわんばかりに、おもむろに彼女の手を

取りあげた。

「約束だよ？」

と、念を押した彼女に彼は満面の笑みで返す。

「うん！行くう」

急に走り出して足が纏れそうになりながらも、引っ張られるように
について行く。

「ちよっ、待って！何も走らなくても」

「急いで！時間がもつたいないよ」

走りながら後ろを振り返る無邪気な彼の姿を見て、つい彼女の頬
も緩んだ。

第3話〜良からぬ噂〜

「送ってくれて、ありがとうございます」

「うん、じゃあ、おやすみ」

玄関の扉を閉めようと彼女がノブに手をかけた時、彼が忘れ物をしたかの様に『あっ』と言うような顔をした。

1歩前に出て扉が閉まるのを片手で防ぐと、彼女の首の後ろに手をやり別れを惜しむかのようにそっと口付けた。

伏目がちにした目をゆっくりと上げると、少し照れた様な顔をして微笑んでいる。

「じゃ、又電話する」

「は、い・・・」

彼女の扉が閉まるのを見届けてから、彼はいつもその場を離れ、彼女もドアの側で彼の靴音が小さくなっていくのを聞いてから部屋の中へと入った。

彼と過ごす時間はとても楽しく、一人になった瞬間に一気に孤独に襲われ、決して広いとは言えない1LDKの自分の部屋にペタリと座り込むと、まるで魔法が解けたかのような感覚が胸を締め付ける。

今まで一人で居る時間の方が長かったのに、いつの間にか自分の心の中はたっぷり彼の愛情で満たされてしまい、一人で過ごす時間が物悲しくもなる。

たった今、別れた所だと言うのに、もう逢いたい気持ちが出てきて、初めて恋をしている少女の様に胸をときめかせた。

「お待たせビル。いつも遅くまでつき合わせちゃってすまないね」

車内の時計を見るともう既に夜中の3時を過ぎている。その現実
に思わず目を伏せた。

「いや、俺はこれが仕事だし時間に余裕があるから別にいいんだが、
ジャックの方がキツイだろ？」

「うーん、確かに結構キツイけど・・・かと言って会えなくなるの
はもっとキツイよね」

肩を上げ眉をひそめて苦笑いを浮かべる。

「。。」

昼間に見るのは全く違う外の景色に目をやりながら、持って行
き場の無い感情に親指の爪を噛んだ。

オフィスのドアに入る直前に眠い目をこすると、思わず大きなあくびが出た。

「でっかいあくび」

手で口元を覆って目を赤くしている彼女に、健人がタイミングよく声を掛けてきた。

「・・・おはよう」

「凄い不細工な顔してたよ」

「うるさいなあ・・・てか、ここ会社なんだけど？敬語使っていないじゃん」

「もう止めた。・・・カナちゃんにはね」

「・・・。」

昨日エレベーターでとんでもない事をしでかしたくせに、しかしこの男は、まあ飄々としてられるもんだ！との意味も込めてギロツと睨み付けながら、オフィスの扉を力チャリと開けた。

何故か皆の視線が入り口に居た彼女に集まる。

いつもと少し違う雰囲気少し息が詰まりながらも、席に着こうとする彼女を見つけたボスが、慌てて飛んできた。

「ああ、ちょっとカナちゃんこっち来てくれる？」

「はい？」

ボスと会議室に入り、とりあえず座るように促される。

「なんだろう？」いつもと違うボスの態度に彼女の心は動揺した。

彼女の対面にボスが膝に肘をつく様にして座り、はぁーっと大きな溜息をつけてから、その重い口を開いた。

「こんな事言うの馬鹿らしいんだけど・・・君とあの社長との事について色々噂が飛び交っていてね」

「噂・・・ですか？」

ボスは口ごもり話しくそくにしている。

「うん・・・その・・・君があんたの社長と関係を持って仕事を取った・みたいだね」

「関係？」

「その、‘枕営業’的な？」

「はあっ?!?!あ、ありえません！なんですかそれ！」

ボスの言葉で彼女は先ほどの皆の視線の意味を理解した。

「まあとにかく、相手の会社は外資だからそんな事気にもしないだろうけど、うちは純国産中小企業だからね。そう言った所にはとても敏感なんだよ」

“何処からそんな噂が？昨日会社の前で抱きしめられたのを誰かが見てた？にしても、それだけでそんなに話が飛躍するなんて信じられない！”

膝の上に重ねた手を彼女はぎゅっと握り締めた。

「……………で、すまないけど」

「はい。判りました」

会議室から出ると又、皆がこっちを見てヒソヒソと小声で話していた。その光景を見てうんざりしながら席に着く。

ヒソヒソ

「……………らしいよ」

「(えー？本当に?!)」

彼女は怒鳴りつけてやりたかった。そんな話は根も葉もない単なるくだらない噂だと。

今となつては彼とは恋人同士なのは確かだが、それで仕事を取つたわけではない。

でも、きつと彼女が何かを言つても、誰も信じてはくれないだろう。

そう思うと無駄な努力をするよりも、彼女は黙り続ける事を選び奥歯を噛み締めた。

「・・・あゝやだやだ、これだから女って嫌なんだよな」

オフィス内にピンと張り詰めた空気が漂う。

彼女を庇う様にそう話し出したのは、他でも無い、あの健人だった。

手にした書類でバンツ！と大きな音を立ててデスクに叩きつける
と、

「くだらね」

そう言って皆を一蹴して、切れ長の目でギロツと睨みつけた。

社内で人気者の彼が、皆の嫌われ役を買って出た。

ヒソヒソと陰口を叩いていた輩はパラパラと散り始め、やっと彼女に平穏が訪れる。

「。。」

面白くなさそうな顔をしている健人を見て、彼女は心の中でありがとつとお礼を言った。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第4話　納得出来ない事

プルルルルツ・・・プルルルルツ・・・

ベッドから細くて白い腕がよきつと出して、枕もとに置いてある目覚まし時計を何度も叩いていた。

何度叩いても音が止まらない目覚まし時計をおもむろに掴むと、それを遠くに放り投げてからまた布団に潜り込む。

「・・・。」

いつまでも鳴り続けるうざったい音の正体が、彼女の携帯電話であることに気付き、同じく枕元に置いてあった携帯電話を手にした。そして、それが彼からの着信であった事に驚いて、ぼんやりとしていた頭が一気に覚醒し始める。

「もしもし」

朝の7時をさしている時計に目を向けながら、寝起きと悟られないように1オクターブ高い声で電話に出た。

“こんな朝早くからなんだろう?”

とにかく、彼の声で目覚めるのはとても気分がいいものだった。

(もしもし? 僕だけ寝てる所ごめんね)

あつさりと寝起きを見破られてしまいなんだか恥ずかしい。
それよりも、電話の向こうの彼は少し元気がない様に思えるが、
朝早いせいだろうとその時は特に気にも留めなかった。

ガチャツ、バタンツ、タツタツタツタツ、ガチャツ

「だ、大丈夫?!」

肩を大きく上下させながら息も絶え絶えで、急いで彼の元へと駆けつけた。

彼の部屋の扉を勢い良く開けると、彼女がそこで見つけたのは普段と変わらぬ様子の彼が、デスクで何やら仕事をしているのか、眼鏡を掛けて書類を捲っていた。

突然の彼女の訪問に、彼は目を丸くして驚いた顔をしている。すぐに状況が飲み込めた様で、みるみる口角が上がりだした。

「カナ! 本当に来てくれたんだ?」

眼鏡を取って彼が立ち上がると、そのままの勢いでキック抱きしめられるが、すぐに彼の腕を掴んで距離を取った。彼の緩みきった表情を見て、彼女は少し不思議な顔をしている。

「倒れたんじゃないの・・・？仕事して大丈夫なの？」

「うん。さつき医者が来てね、貧血だって。今日一日ゆっくりしてれば良くなるだろうだってさ」

「・・・そっか・・・良かった・・・」

「。」

ホッと胸を撫で下ろしている彼女を見下ろしながら、

「心配してくれたんだ・・・？」

そう言いながら、彼女の頬に手の甲を滑らせる。

彼女が顔を上げて彼と目が合うと、彼が大きな目を細めて微笑んでいた。

彼が次第に近づいてくるの感じ、慌てて彼の腕の中から抜け出した。

「ル、ルール違反しちゃダメです！」

「・・・はい・・・」

一昨日の夜、彼の家に行った時に決めた二人のルール。

彼の家にいる間は、彼女に手を触れてはいけないと言う内容のもの。

彼にとってはとても辛いルールだったようだが、そのルールを作る事で彼女が家に来やすい様にしたのだ。

彼が少しむくれた顔でバーカウンターに行くと、ケトルを出してお湯を沸かす準備をした。

「ごめんね、仕事休ませちゃって」

「・・・いいんです・・・どうせしばらく休みになったんで」

腑に落ちないと言った表情で、彼女はソファアにボスツと座る。

「しばらく休み？」

「・・・なんだか貴方と私の事が会社にはれちゃったみたいで」

「ばれたって？ばれたからってなんで会社が休みになるの？」

意味が判らないと言った面持ちで、ティーポットに紅茶の葉を入れながら彼女の話に耳を傾ける。

「私、今回の仕事外されたんです」

「はあっ?!」

第5話〜ルール〜

「私、今回の仕事外されたんです」
「はあっ?!」

茶葉をティーポットに入れていた手元が狂いパラパラとカウンタ―に散らばった。

ソレを見た彼女が、ソファ―から立ち上がり、彼の隣にやって来ると、紅茶の葉を手でかき集めて片付けて、彼から紅茶缶を取り上げた。

彼は両手をカウンターについて、彼女の顔を不思議そうな顔で覗き込んでいる。

彼女は紅茶を入れる準備をしながら、溜息混じりに事の成り行きをゆっくりと話し出した。

「……という訳で、騒ぎが落ち着くまで旅行にでも行っといで……だって」
「。。」

彼は少し考えこんだかと思うと、スタスタとデスクに向かい、おもむろに受話器を握り締めた。

何となく嫌な予感がする。

「何処にかけるんですか？」
「君のボスにだよ」
「っ！ダメ！」

「いいかい？こんな馬鹿げた噂話を信じて、僕の大事な仕事が潰さ

れてたまるもんか！」

受話器を耳にあてながら、人差し指を立てて険しい顔をしている。彼女が慌てて彼の受話器を取り上げると、そのままガチャンと受話器を置いた。

「やめて、余計こじれるから！」

「でも！」

お湯が沸いたのを知らせる音が鳴り、彼女はカウンターへと戻ると、彼女を納得させようと話をしながら彼も後をついて来た。

ティーポットにお湯を入れて蒸らしている間に、手際よく彼のペリエの準備をしながら、

「もう大体出来上がったし・・・作品自体はあれで行くらしいから。ただ、担当者が変わるだけで、貴方には何も支障はないよ。それに、変に貴方が出てきたら、収まるどころか話が大きくなっちゃって、私が仕事に戻れなくなっちゃうよ」

「・・・・・・」

確かに彼が口を挟むと話が余計に大きくなる。冷静に考えると、彼女の言う事はごもつともだと判り、彼も諦めた様子だった。

ただ、コレから彼女と仕事を口実に会うことが出来なくなる。いずれはそういう日がやってくるとは思っていたが、こつも早くその日が訪れるとは思っていなかった。

「・・・・・・！！！」

蒸らし終えた紅茶を、マグに注ぎいれている彼女の側で、彼が思いも寄らぬ発言をした。

「ねえ、この家で一緒に住まない？」
「!!!!!!」

ガチャンツとティーポットの蓋が外れ、熱い紅茶が彼女の手にかかった。

「熱っ!!!」
「大丈夫?!」

彼女の手を掴み急いで蛇口をひねると、すぐに勢い良く水を出して指をそこで冷やす。

「もう、おっちょこちよいだなあ」

クスクスと笑っている彼を直視する事が出来ずに、顔を赤くして蛇口から流れ出る水を見つめていた。

「だ、だって変な冗談言うから・・・」
「冗談なんかじゃないよ。その方が一緒に居られる時間が増えるでしょ?」
「だ、で・・・ええ?」

じつとりとした熱い眼差しを向けられて、顔の熱が一向に収まる気配が無い。

どこでどうなったらこんな話になるのかと、さっきまで落ち込んでいたはずが彼の一言で一気に調子が狂う。

「空いてる部屋は沢山あるし。と、言っても荷物置き場ね。寝室は一緒にいいよね?ああ、一緒と言っても大丈夫。僕、何もしないか

ら安心して。ただ君を抱き締めて眠れるっただけで十分だよ」

彼は何処か妄想に浸っているような口振りで、勝手にプランを練っている。

蛇口をキュツと閉めると、彼女の指を彼の目の高さまで持っていない、痕が残っていないかあっちこっちから見ながら、

「とりあえず・・・旅行に来たつもりで、仕事が休みの間ココに居てよ」

返事に困っている彼女に微笑みかけると、その視線を外さないまま、彼女の指にチュツとキスを落とした。

「や、ちよっ・・・」

思わず首を竦めて眉を顰めた。

顔を真っ赤にして照れる彼女を見て、彼は楽しんでいるのか、ちらりと赤い舌を覗かせると、火傷を負った箇所にはペロリとその赤い舌を這わせた。

彼からの視線を感じつつも、自分の指を舐める彼の舌に目を逸らす事が出来ず、時折ピクンツと体が震えるのを感じる。

「や、だぁ…もっ」

羞恥に震えた声で許しを請うと、やっと彼は彼女の指を開放した。彼女の手をそのまま握り締め、手の甲に軽く口付けると、次には彼女の唇にトンと唇を重ね合わせる。

ゆっくりと唇を離すと、下を向いた彼女が震えた声で呟いた。

「・・・ル、ルール違反だよ・・・」

そう言いながらも、上気した頬がまんざらでもないのだと代わりに言っているのが良く判る。

そんな彼女にクスリと微笑んで、

「知ってた？ルールってのはさ、破る為にあるんだよ？」

「・・・バカ・・・」

そして、又どちらからともなく引き寄せられるように、口付けを交わした。

LOVE IS MAGICAL

第6話〜彼の優しさ〜

クローゼットを開け放ち、奥から大き目の旅行バッグを取り出して適当な荷物を詰め込んでいく。

“ 本当に彼の家に行って大丈夫かなあ・・・ ”

肩で大きく息を吐き、振り返ってすりガラスの向こうの玄関を見ると、大きな黒っぽい塊がゴソゴソと蠢いている。

彼に旅行に来たつもりで泊まりにおいでと言われ、荷物を取りに自宅に戻った彼女に、『荷物を運ぶのが大変だろうから』と、一緒に彼もついてきた。

確かに彼の言うとおり一緒に住んだ方が、会える時間もぐっと増える。

それは彼女も嬉しい事だが、あの家にはカレン・・・それとまだ会った事のない彼の3人の子供達がいる。

今まで接して来た中でのカレンの印象はお世辞にも良いとは言えず、今後も会う度に何かされそうな気がしてならない。その上、彼の子供達とも上手くやっていかなければならないのだから、中途半端な気持ちで行く事は出来ないのだと思う。

「はあ、やっぱり無理だよ・・・」

荷物を詰めるの手を止め、すりガラスの扉をカチャリと開けた。

「・・・？準備できた？」

狭い玄関で座り込みながら本を読んでいた彼が振り返る。その表情はまるで、これから旅行にでも出かけるみたいにくわくしたような顔をしていた。

彼女が俯いて首を横に振ると、

「・・・ゆっくりでいいよ。僕この本読みたいから」

彼女の表情を見て何かを悟ったのか、少し顔が曇りそのまま彼女に背を向けると又読書に戻った。

彼は本当に頭がいいのだと言う事を思い知る。

読書に戻る事によって、これ以上彼女がいらぬ考えを起こさない様に、そして彼女が自分の非になるような発言をしようとしているのを感じ取り、ソレを遮る様に仕向けたのだ。

そして、彼の思惑通り、彼女は彼に声をかける事が出来なくなっ
た。

「・・・？」

彼の肩に手をやり、彼の大きな背中に彼女の顔が埋まる。

彼女が見せたその行動によって、彼の作戦は脆くも失敗に終わって
しまった。

そっと肩に置いた彼女の華奢な手を握り締めると、小さく息を吐
いて半ば諦めた様子で彼女に話しかけた。

「……どうしたの？」

「私、やっぱり行けない……」

「……そう言うと思ったよ」

「ごめんね」

「いいんだよ……壁が高いほど上りがあるからね」

「……」

そう言うつと彼は本をパタンと閉じ、眼鏡を取ってシャツに引っ掛けるとスクツと立ち上がった。

「……本当は振り返って君を抱きしめたいけど、暴走しそうだから止めておくよ」

肩で大きく息を吐くと彼は振り返らずに、

「又、電話する」

そついい残して部屋から出て行った。

騒ぎが収まるまで旅行にでも行って来いといわれ、半ば強制的に取らされた時期外れな1週間の休暇。

彼の家に滞在する事を拒んだ彼女は、少し後悔し始めていた。

と言つのも、明日で長い休みが終わりを告げようとしているのに、あれから彼と会うことも無ければ連絡さえも無いからだ。

「はあ。

あ、そうだ」

明後日から始まる仕事に備え、旅行に行っている事になっているから、それなりにアライバイを作らなければ。

「何処かにお土産でも買いに行くかな」

重い腰を上げ久しぶりに街へと飛び出した。

外の空気はまだ冷たくコートを手放せないが、道端に咲く小さな花を見つけてはもうすぐ春が訪れるのだろうと感じる。

そう言えばココ最近、こうして道に咲く花に目を向ける事もなかった。

頭の中は常に彼と仕事の事で一杯。落ち着いて自分を見つめなおすには、今回の休みは不条理ではあったがとても意味のあるものだった。

旅行のアライバイになりそうな物を探しに、新幹線が止まる駅へと足を運ぶ。

次々と変わる時刻表を見ると、ふとこのまま何処かへ行ってしまいたい衝動に駆られ、気付くと彼女は切符売り場の前で行き先

を探していた。

「・・・？」

騒がしい構内でわずかに携帯電話の音が聞こえる。

バックを耳に近づけそれが自分の携帯電話である事に気付いた彼女は、急いでバックから取り出した。

着信欄を見て一気に笑顔になる。

一つ深呼吸して受話ボタンを押すと、嬉しさのあまり声がつわづらないようにと慎重に声を出した。

「もしもし？」

（もしもし？僕だけど）

久しぶりに聞く彼の柔らかい声が耳を通じて脳に染み入る。何故か別れた恋人からの電話のように胸が締め付けられた。

（ごめんね、電話できなくて）

「ううん、大丈夫、。」

大丈夫なわけない。

毎日毎晩、彼からの連絡を待ち侘びながらベッドに潜り、迎えた朝に現実を知り、絶望と不安に苛まされて、まるで自分が自分ではなくなっていた様だった。

こういう時こそ素直に、寂しかった、と何故言えないのだろうか。そもそも、気になるのなら自分から電話すればいい事なのに、彼の家に行くのを断った事で、彼に引け目を感じた彼女はそれすら出来ないでいたのだった。

(まだ仕事、休みあるよね?)

「あ、うん。明日で終わるけど」

(良かった。今から会える?)

手首の時計を見るとまだ昼を過ぎた所。彼が仕事を終えるには早すぎる時間だ。

「今から?お仕事は?」

(君とゆっくり過ごしたくてね。無我夢中で仕事を詰めて、明日休み取ったんだ。・・・だから、今から何処に行かない?)

彼に嫌われて電話が無かったわけではない、自分の事を想ってこそ彼は連絡を絶っていたのだと知ると、自然と涙腺が緩んでくる。

「・・・うん」

長く話すと今の自分の状態を感じられると思い、それ以上、上手く話す事が出来なかった。

(・・・本当にごめんね?電話できなくて・・・早く逢いたいよ)

電話の向こうの彼は彼女の様子を察しているかどうかは判らないが、さつきよりソフトな語り口でそう言った。

“私も早く貴方に会いたい”

気付けば自分の中で彼の存在が物凄く大きなものになっていたのを感じ、ついに溢れ出してしまった止まらない涙を指先で拭いた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第6話、彼の優しさ（後書き）

しばらく、二人のラブラブな感じが続きます。

第7話〜約束〜

人込みの中をかきわけて通る様に、彼が走ってやって来た。彼女を見つけると、途端に険しい表情から笑顔に変わる。

「お待たせ、大分待った？」

肩で息をしながら、彼女の前で立ち止まる。

判ってる。彼は彼女の為に急いでここに来た事を。彼の会社からこの駅までは、ゆっくりしてたらこんな早く着くはずが無い。

それでも、彼女は彼に会えた事で一気に感情が噴出してしまったのか、

「遅いよ」

歪み始める顔を見られるのが嫌で、俯きながら彼のジャケットの袖をか細い指でそっと掴んだ。

「。。。。」

いつもの彼女なら、決まって「大丈夫、って言う筈が、思わぬ彼女の返答に彼は目を丸くした。

口元を緩め人目もはばからず彼女の肩をそっと抱き寄せると、

「逢いたかったよ」

そう呟いた。

「何処へ行くの？」

彼の手に引かれ、人気もまばらな特急電車に乗り込み、彼に行き先を尋ねる。

「凄く素敵な所だよ」

嬉しそうにそう言うと、『楽しみにしてて』と言ってウィンクしてみせた。

横並びに座った座席で外の景色に目をやると、あっという間にビル群は無くなり代わりにのどかな田園風景が現れた。

「たまには列車の旅ってのもいいね」

そう言うと、彼女の手を捕まえる。たった数日会えなかっただけに、もう何年も会ってないかのような感じがする。

彼の肩に頭をもたげながら、久しぶりにその感触を味わった。

「今日はなんだか素直だね？」

「だって、凄く逢いたかったんだから」

彼は又目を丸くした。

ココに居る彼女は別人ではないのかと思うほど、彼女の発言に動揺させられっぱなしだ。

「・・・たまには連絡を絶つのもいいかもね。こんなにかわいい君が見れるのなら」

頭の上から聞き捨てならない言葉が聞こえ、すぐに顔を上げて彼をキツと睨んだ。

慌てて彼女の目を手で遮った彼は、

「うわっ！いつもの君に戻った！嘘、嘘！もうこれからはどんなに忙しくてもちゃんと連絡するってば」

「ちよつと！『いつもの私』ってどついう意味っ？！」

遮った彼の大きな手が下ろされると、目にうつすら涙を溜めて笑いを堪えている彼女が現れ、少し元気になった彼女を見て彼はほっとしている。

彼女の頬にそつと手をあてがうと、

「君が僕を必要とした時、何も遠慮せずに電話して来ていいんだからね？朝だろうが夜だろうがすぐに君の元へ飛んでいくよ」

そつ言つと、親指でその涙を拭った。

足元にあたる温かい風と電車の揺れ。それと何よりも彼がすぐ側に居るといふ安心感で、彼女はいつの間にか眠りに落ちていた。彼の肩にもたがえていた頭が電車の揺れによつてずり落ち、それによつて彼女の目が覚めた。すぐに彼を探すように顔を上げると、優しげに微笑んで自分を見つめている彼を見つけ、自然に笑みが零れ落ちる。

「おはよう」

「・・・寝ちゃつた」

「うん、気持ち良さそうだったよ」

車窓から覗く景色はすっかり日も落ちていて、いつの間にもやたらと変わったものになっていた。

ちらほらと雪が積もっている所もあり、随分と長い間寝ていたのだろうと感ずる程に。

彼の方が疲れてるはずなのに、二人とも寝てしまうと目的地に辿りつけないと思つたのか、先に寝てしまった彼女の為に、きつと落ちてくる瞼と戦いながら彼は我慢して起きていてくれたのだろう。眉間を押さえる仕草がそれを物語っている。

「貴方の方が疲れているのに、ごめんなさい」

寝起きの掠れた声で言つても何の説得力もないなと思ひながらも彼女がそう言つと、彼は頭を振つて肩をすくめた。

「君が寝ている間、以前君が言った言葉を思い返していたんだ」
「？」

「『何処にも行かないで』って電話で言ったの覚えてる？」
「・・・・・・？」

彼女の丸くした目を見て、やっぱりといった表情で眉を潜めてい
る。

「君が僕の家泊まった次の日に、一緒にランチに行こうとしたの
は覚えてる？」

「・・・あー、結局お仕事で行けなかったのよね？」

「そう、その晩に君に電話したら君がそう言ったの」

「・・・私が？」

「やっぱり・・・寝ぼけてあんな事言ったんだね」

彼は少し残念そうに笑っている。

全く記憶には無かったが寝ぼけてそんな話をしたと思うと、どん
どん顔が熱くなってくるのが判った。

「でもね、僕凄く嬉しかったんだ。今でもあの時の君の悲しそうな
声が耳に残ってる」

「や、やめてよ、恥ずかしい」

彼女は繋がれていない方の手で熱くなった頬の熱を冷ますかのよ
うに覆う。

彼はその手も取ると大きな手で包み込み、彼女の方に体を向けた。

あらたまった姿勢の彼を見て、彼女も慌てて彼の方に体を向け彼

の言葉を待つと、ゆっくりと彼の唇が動き始めた。

「・・・僕はあの時、君を悲しませてはいけない、君をずっと守りたいって思ったんだ」

彼女は照れながらも彼の目をじっと見つめ小さく頷く。

「でも随分君を泣かせてしまったね」

彼の言葉に、さも、その通りだと言わんばかりに少し眉間にしわを寄せながら、今度は大きく頷いた。

「ごめん、ごめん。これから埋め合わせするからね」

ころころ変わる彼女の表情に少し噴出しながら、頭を撫でて彼女の頭のとっぺんにキスを落とす。

・
> <間もなく・・・に到着します。お忘れ物ございませんよう・・・

「さあ、やっとついたよ。誰にも邪魔されない所にね」

彼女の手を取り立ち上がると、彼はウィンクして微笑んだ。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第8話 隠れ家

ボタンツ ブロロロツツ……

「さあ、着いたよ」

「わあ……」

一面銀世界の中に一際映える大きなログハウス。寒いはずなのにとても暖かそうなぬくもりを感じる家で、大きな窓からは暖色系の明かりがこぼれ、屋根にある煙突には煙が上がっている。

まるで絵本の中に紛れ込んでしまったかのような様な建物に、自然と心が浮き足立つ。

中に入ると想像通りの内装だった。

あちらこちらに大きなぬいぐるみや木製のおもちゃ、壁には小さな子供を題材にした絵があちらこちらに飾られていて、ここに良く小さな子供が来るのだろうかと言ふ事を窺わせた。

「……ココは？」

「僕の隠れ家さ」

「隠れ家？」

「そう、誰にも邪魔されずにゆっくりする為の家だよ。家族や友人達と……たまに一人でもココに来るんだ。この家にはパソコンも無ければ携帯の電波も届かない。電話は一応あるけどここの番号を知ってる人は誰もいないんだ」

「ね？素敵な所でしょ？」

そう言っってウィンクをする彼とは対照的に、彼女は別の事が気に掛かった。

「何かあったらどうするの?」

駅からも随分距離があるし、それより何よりも文明の利器とも言える、携帯電話やネットが使えない様な山深いこんな場所で、何かあったらどうするんだろう?

それこそ雪崩とか、散歩中に熊と遭遇!とかあったりしたらたまたまもんじゃない。

「この山の麓にこの家を管理してくれるスタッフがいるね、皆、何かあったらそこに連絡する様になってる。そのスタッフだけが唯一この電話番号を知っていて、緊急時のみココに電話してくれるんだ。勿論、自然災害のおそれのある時なんかは、ここは使えないし、君の心配している熊なんかには遭遇しないように、このエリアには赤外線が張られていて、反応したらすぐに映像が飛んでスタッフが駆けつけてくれるんだよ。で、そのスタッフに今日僕が行くって言ったから、ある程度必要な物は揃っているはず」

『ほえ〜』と感心している彼女に『意外に心配性なんだね』と笑いながら、天然木のいい香りが漂う廊下を進むと、大きな2枚扉が現れた。彼が片方の扉を開けた途端、更に暖かい空気が流れ出てきて、冷えた体を芯から暖めてくれそうな気がする。

暖炉には薪がくべられていて、パチパチと音を立てている。

その横にあるテーブルの上には、シャンパンとフルーツやチーズが、温まらないように氷を下に張って用意されていた。

長椅子に座った彼が手際よくシャンパンを抜くと、それをフルートグラスに注ぎ始めた。

対面に腰を下ろした彼女をチラッと見ては、何故かクスクスと笑

っている。

そんな彼の不可解な行動に彼女が気付かないワケも無く、

「……何？」

「……いや……だって……プツ」

「?!」

明らかにムツとした彼女を余所に、シャンパンを注ぎ終わった彼はボトルをシャンパンクーラーに戻すと、グラスを2つテーブルの上に並べ、

「こつちへおいで、不自然だよ」

自分が座っている横をポンポンと叩いた。

その言葉で彼が笑っていた意味がやっと判ると、確かにさっきまでは彼の横に座ってずっと手を握っていたなと思い出し、彼女も少し苦笑いを浮かべた。

彼の隣に席を移すと同時にグラスを手渡される。

「さて、とりあえず乾杯しようか」

「何に乾杯するの？」

『うーん、そうだなー』と、しばらく考えた彼が、急に真顔になったと思うと、

「素敵な夜に……かな？」

そう言うや否や、『ごめん、やっぱり無理!』と言って噴出した彼に、お互い笑いをこらえながら、チンっと小さな音をたててグラス

を交わした。

空になったシャンパンボトルをさかさまにひっくり返すと、シャンパンクーラーにずぼっと突っ込んだ。

「さて、ゲームでもしょうか」

「ゲーム？」

「うん、ここには誰も居ないって言ったよね？」

「うん」

「と、言う事は・・・」

「と言う事は??」

口元に人差し指を置いてなにやら上目遣いで彼女を見た。

妙に艶っぽいその表情にドキツとして、彼の言おうとしている事が彼女の胸のドキドキを早める。

“えっ・・・?!”

思わず視線を逸らすと、彼が嬉しそうに話を続けた。

「誰も居ないという事は・・・食事を作ってくれる人も居ないって

事なんだよ?」

その言葉に、彼女は目を大きく見開きながら彼の顔を見た。

「さあどうする?」と言いたげな彼の表情に、勝手に勘違いして不謹慎な事を考えていた自分が本当に恥ずかしい。

「あつ、ああ、そうね・・・で、ゲームするのと何の関係があるの?」

「ああ、ちくしょう!負けちゃったよー!」

手にしたカードを空に放り投げると、大の字になって寝転んだ。ばら撒かれたカードを拾いながら彼女は勝ち誇った顔をしている。

「じゃあ、ご馳走お願いしま〜す」

「・・・はい」

渋々起き上がると、頬を膨らませながら一緒にカードを拾い出した。

キッチンに立った彼は顎と腰に手を置き、今宵のディナーメニューを考えている。

冷蔵庫を覗き込んで、中にあつた沢山の食材をカウンターに並べだした。

「うわぁー、凄い沢山材料あるねー」

「うん。でも、生の鴨肉とか・・・絶対使わくない？」

「プツ・・・そうね」

彼がキッチンに立つのを見るとは想像もしてなかったが、様子を見ているとかなりおもしろい。

細身の黒のスーツのジャケットを脱ぎ、ピンと立ち上がったポタリ、ポタリの白襟と、黒地に細いグレーのストライプが入ったクレリックシャツのボタンを2、3個開けて首を寛げると、ダブルカフスに付いているクリスタルとブラックダイヤモンドのスワロフスキーのカフリンクスを一旦外して袖を捲っている。

体の細さの割に太くて筋張った二の腕に、彼の中の「男らしさ」を感じて思わず溜息が出た。

立っているだけでも優雅な佇まいを魅せている彼が、たまねぎと皮むき器を手にし皮を剥こうと必死になっているその危なっかしい手つきが、とても新鮮でとてもおもしろい。

「ねえ、たまねぎの皮ってどこまでが皮なのかなあ？」

首をかしげながら、どんどん皮むき器でたまねぎを削っていく。

「・・・プツ」

そんな彼の様子を見た彼女は、たまらなくなって噴出した。

ケタケタと笑いながらカウンター越しに彼の手からたまねぎを取

り上げ、

「あははっ、たまねぎは皮むき器で皮をむくもんじゃないよ?」

小さな子供に教えるかのようにそう言うと、カウンターの中に入
つて来て水を張ったボウルにたまねぎを入れた。

「?」

「たまねぎの皮はね、水に少し浸してから剥くと剥きやすいのよ」

そう言って微笑むと次々と食材を準備し、さっきの彼と同じよう
に顎と腰に手をやった。

きよとんとしている彼に視線を向け、

「私が作ります。あなたに任せるとゲームに勝ったはずなのに、罰ゲ
ームさせられてる気分になり兼ねないもの」

「酷いなあ!」

仕事の時の厳しい表情と違い、ぷうっと膨らませた頬が、46歳
のいい大人とは思えない程、愛らしく、そしてそのギャップが彼女
の心を虜にさせた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第9話　心の余裕

手際よく次々と材料を仕込んでいく手つきからして、慣れている感じが伝わる。

彼は感心しながらもそんな彼女を手伝った。

たまねぎの皮を皮むき機で剥こうとする位の残念な知識しか持ち合わせていない彼の事だ。そんな彼が手伝うと言っても、

『○○取って』や『火止めて』『お皿出して』

と言った類ではあるが、一緒に食事を作ってる感、がして、彼はかなり満足していた。

彼女の横に立ち、彼女の手元を見ながらふと思いついた疑問を彼女にぶつけてみる。

「女の子って手料理振舞うのを嫌がる子の方が多いのに、君は全然平気なんだね」

そのセリフにトントントンと綺麗なリズムを刻んでいた手が、一瞬ピタッと止まる。

気を取り直してすぐまた作業に戻ると、

「そう、かもね。・・・あ、でも、私は学生の頃アルバイトで少しやってたからあんまり抵抗ないのかも」

少し彼女の顔つきが曇ったかと思うと、途端に彼と目をあわさな

くなくなった。

その変化に気付いた彼は、彼女の顔が曇った理由がすぐに頭に浮かんで口元を緩めた。

急にふわつと背中が温かくなったと思うと、同時に彼の両腕が視線を落として手元を見ていた彼女の目の前に現れた。

「も、もう！危ないから邪魔しないで」

照れ隠しにそう言つと、

「もしかして、妬いちゃった？」

彼女の耳元でそつと囁いた。

横を向くだけで唇が触れ合いそんな距離に彼の顔がある。体が一気に熱くなって頬が朱に染まって行くのをじわりと感じ、この時ほど髪が長い事に感謝したことはない。

そんな自分の顔を彼に見られまいと、髪で顔を隠すように俯いてひたすら自分の手元を見ていた。

「な?!なんで??」

「だって、女の子に料理作ってもらおうとした事が、何度もあるって今思ってたでしょ?」

「お、思ってた・・・!!」

「ナイ?」

彼の表情は恥ずかしくて見れないけれど、声のトーンで嬉しそうにニヤニヤと笑っているだろうと言つのが嫌でも判る。

ちゃんと正直に言ってくれたら、ご褒美を上げるよ？

とか言って彼女を焚き付けるのだから、たまらない。

まんまと彼の言った科白に激しく動揺した彼女はほんの少しの期待を抱きつつも、そのまま崩しになってご飯が作れなくなってしまうかど、一気に不安に駆られた。

ああっ！もう！凶星ですってば！

半ばヤケクソ気味に、

「、しまいました！」

と、潔く言い切った。

「素直でよろしい」

クスリと彼が微笑むと、更にぎゅっと抱きしめながら頭を撫でられた。そのまま彼女の髪を掻き揚げられ、あっけなく彼女の赤くなつた横顔が暴かれてしまう。

遠慮なく注がれた彼の視線により、無情にも更に熱を上げる事となつてしまったのが判ると、耐え難い羞恥に目を硬く閉じた。

なのに、なのに！

「耳、真っ赤だよ？」

「っっ？！もうっ！いいからあっちへ行つてて！！」

鳩尾に肘鉄を食らいながらも、思ったとおりのリアクションをした彼女を見て、どこか満足そうに笑っていた。

「ふうーっ、おいしかったーご馳走様でした！」
「はいはいー」

彼女が立ち上がり、彼の分のお皿も重ねると彼はグラスを集め始めた。

「凄い料理上手だね。お店で食べてるみたいだ」

「お店でだしてたからね」

「ああ、そっか」

他愛のないやり取りをしては大きな声で笑う。こんな何気ない事にも幸せを感じる。

誰の目も気にする必要がないと言つのは、こんなに気持ちに余裕が出るものなのであろうか。

つい数時間前まで感じていた自分の気持ちの事を考えると、180度違う今の気持ちに改めて驚かされた。

洗い物を一緒に片付け、先に役割を終えた彼はソファで本を読みながらくつろいでいる。

全ての片付けを終えた彼女が、今度はちゃんと彼の横に腰を下ろすと、チラッと彼女に目をやった彼が本を読みながら彼女の肩に手

を回した。

TVも音楽もないこの部屋は、とても静かで薪がパチパチと弾ける様に燃える音しか聞こえない。

ゆるりと流れる時間がこれ程までに心地良いものだとは思ってもよらなかった。

彼女でもそう思うのだから、いつも仕事に追われている彼はより格別なものを感じるだろう。

都会の喧騒から少し離れるだけで、これ程までに人の心に余裕を与える事が出来るのかと思うと、彼が一人でここに来る気持ちがわからなくも無いなと思った。

「？」

背中を反らして彼の向こう側にある大きな窓から外の景色を見てみると、無数の星が綺麗に輝いているのが見えた。

その彼女の視界に同じく背を反らした彼が割り込んできて、

「星でも見る？」

眼鏡を取って読みかけの本をテーブルに置くと、スクツと立ち上がり彼女に手を差し出した。

彼の手に導かれ、屋根裏へと続くはしこの前で立ち止まる。

彼が先にそのはしごによじ登り天井の扉を押し上げると、冷たい空気が流れ落ちてきた。

彼はさっさと上りきってしまつと、あっちへ行つたりこっちへ行つたりとなんだかウロウロしている。

「どうかしたの？」

彼女が下から声を掛けると、はしごの下に居る彼女を上から覗き込んだ。

「上がってこれる？」

「うん」

そう言われて、はしごにつかまり少しづつ登っていくが、見ているとやってみるのは大違いで傾斜の無いはしごは少しでも油断すると下に落ちそうになる。

子供の頃はコレくらいひよひよいつと登れたのでそんな風に思ひもしなかったが、大きくなった体はちゃんとここにも重力があるのだと言つ事を証明している。

上まで上りきつた時に差し伸べられた手に掴まると、いきなり目に飛び込んできた大きな天窓に無数の星たちが光り輝いていて、あまりの美しさに動く事も話す事さえも忘れてしまふ。

「ここに来る人は皆そんな顔するなあ・・・」

彼が何気なく呟いたと思つたら、‘しまった！’と言つような顔をして慌てて付け加えた。

「あ！そう言う意味じゃないよ！？」

又、何人もの女性をここに連れてきて口説いていると思われたかも？と余計な心配をしてしまった彼に構う事無く、当の彼女は目の前に広がる素晴らしい光景に感動していて、全く彼の話を聞いていなかったのか、赤くした彼の顔を見て首を傾げている。

「え、えーっと、こっちおいで。あ、天井低いから頭ぶつけないように気をつけて」

先に彼がスイッチを入れてくれていたのか、赤々と暗い部屋を照らしているストーブと、その前には大きなクッションが二つ並べられていて、一人で先が上がってウロウロしていたのはこの為か。と言う事が判り、何気ない彼の優しさに触れて嬉しくなる。

言われるがままに彼女がそこへ座ると、大きなブランケットを広げながら彼も横に寄り添う様に座って二人を包み込んだ。

「…暖かい」

「…ん」

どんな暖房器具よりも人のぬくもりが一番あったかい事を実感する。

彼の胸に頭を預けると、彼の心臓の音がトクントクンと小さく刻むのが判る。

彼の甘い香りに包まれながら、満天の星空をただ黙って見上げていた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第10話 覚悟

どれ位星を眺めていただろう。

吸い込まれそうな夜空を見ていると自然と口数が減り、ただ目の前にある圧倒的な美しさに呆然とするだけで、言葉なんて必要無くなる。

「？」

ふと、彼の頭が何度も垂れてくるのに気付いた彼女は、びっくりさせないようにそっと彼に問いかけた。

「眠い？」

「うーん・・・流石にここ最近まともに寝てなかったからね」

その声で慌てて頭を上げ、目をこすりながら小さくあくびをした。彼女と二人つきりでの時を過ごそうと思った彼は、仕事を詰めて休暇を取ったと言っていた。普段でも睡眠時間は3、4時間程しか無いと言っていたのだから、仕事を詰めた事によって徹夜になった日もあったかも知れない。

それなのに、彼から連絡が無いだけでまるで抜け殻の様になり、仕舞いには彼に飽きられたのかと疑ってしまっていた自分が情けない。

「そうだ、ここのお風呂は夜空を見ながら入れるよ」

「えー！気持ち良さそう！」

「・・・一緒に入る？」

「なっ???!」

「嘘、嘘。冗談だよ。僕は部屋のシャワー使うから君はソコで入っ
といで」

真っ赤にした目に涙を少し浮かべて笑っているが、極度の眠気の
せいか彼の笑顔が少なくなっていた。

リビングの扉を開けると先にシャワーを済ませた彼がソファア
横になって本を読んでいた。

もう一方の手にはロックグラスがぶら下がっている。

「何飲んでるの？」

彼女の存在に気付いた彼はグラスを置くと姿勢を正し、本と眼鏡
を置いた。

髪の毛をタオルでふき取りながら彼の横に腰を下ろす。

「ベイリーズっていうリキュールだよ」

そう言うと彼女にグラスを渡し、それを一口含んだ彼女の肩が上
がった。

「んー！甘くておいしい」

「でしょ？」

スクツと立ち上がるとキッチンへと向かい、ロツクグラスに大きな氷を一つ入れる。

カリーンとベルが鳴るような綺麗な音がして、冷蔵庫からボトルを取り出しソコへ注ぎいれていく。

そのままボトルと共に戻ってきた彼にグラスを手渡され、又乾杯をした。

「ちょっと・・・飲みすぎじゃない？」

心配そうな彼をよそに彼女はボトルを又握り締めている。それ程お酒が強くない彼女でもグビグビいけるこのお酒に嵌まってしまったのか、気付けば彼よりも多くお代わりをしていた。

「だっておいしいんだもの。明日も休みだしいいじゃない」

自分のグラスに自ら注ぎいれようとする彼女の手から、彼がボトルを取り上げた。

「もうおしまい」

「えー？貴方が薦めたんじゃない！」

「そうだけど、飲みすぎだよ」

彼女から取り上げたボトルが妙に軽い事にぎよつとし、天井のシヤンデリアに透かして茶色の瓶を覗き込むと、確か新しいボトルを

開けたはずなのにもう4分の1程しか残っていない事に驚いた。
余計なモノを教えてしまったもんだと嘆き、額を手で覆った。

「……………」

「あつ！コラ！」

隙をついて彼からボトルを奪い返すと、彼も又むきになってボトルを取り上げようとしている。

「あと一杯だけ！ね？お願い！」

手を合わせて今度は「お願い」と来た。
両手を広げ困りながらも、

「オーケー。じゃあ一杯だけだよ？」

彼がそう言うと、大きく頭を上下した彼女はとても嬉しそうだった。

小さく溜息をつきながら彼女からボトルを受け取って、コポコポと彼女のグラスに注いでいく。

そんな彼の綺麗な横顔を見ながら、うっとりした顔で彼女がポツリと呟いた。

「……私を酔わせてどうするつもり？」

「へっ！？」

思わず手元が狂って零しそうになる。自分からお代わりをせがんでおいて人のせいにする彼女は確実に酔っていると判った。

どちらかと言えば、彼が彼女を酔わせようとしているというかは、彼女自ら酔いたがっていると言った方が筋が通るだろうと言つのは

一目瞭然だと言うのに。

彼女の発言に驚いた彼が手を止めて横に座っている彼女を見ると、ほんのりと火照った頬と妖艶な眼差しでじっと見つめられ思わずゾクツとした。

途端、二人きりで一晚共にするという現実には、急に意識してしまえば彼はうろたえた。

以前、拒絶されたあの日からそういう類の邪念は闇に葬り去った。今は身体を繋げる事よりも、心を繋いでいく事の方が大事だと思っようになっっていたし、今日ここで過ごす事に関しても今まで通りに接するつもりだった。

でも、今日はあの日とは訳が違う。

なんだか今日の彼女は彼を誘っているかのように見える。

「いや、ダメだ！今の彼女は酔ってて冷静な判断が出来ないで居るはずだ。きつと手の平を返されるに決まってる……」

両手で自分の顔を叩き努めて冷静に振舞った。

「や、やっぱり飲みすぎだよ。もう寝た方がいいね」

そう言って立ち上がるうとした彼の腕を彼女に巻き取られ、強引に又ソファへ座らされる。

「酔ってないよ。ちゃんと判ってるから……」

虚ろな目をして彼を見つめながら、伏目がちにした潤んだ目が色

っばい。

徐々に近づいてきた彼女の顔に度肝を抜かれながらも、そのままゆっくりと唇を重ね合わせた。

唇を舐めるようなキスを交わし、一旦距離を取って目の前にいる彼と焦点を合わそうとしている。

「甘い……」

先程のリキュールの味がするのか、彼女が自分の唇をぺロリと舐め上げて下唇を噛んだ。

流石の彼もその仕草に動揺を隠し切れない。

彼女の期待に応えるべくピンク色に染まったかわいい頬にそっと手を伸ばし、頬から唇に指を這わせながら少し意地悪な質問をした。

「判ってるって……どういう意味？」

「口で言わなきゃダメ？」

「質問に質問で返すのは良くないなあ」

「もう……いつからそんなに意地悪になったの？」

「こんなに優しい男はいないよ？君に発言しやすくしてあげてるだけなのに」

二人はクスクスと笑い合つと、引き寄せられるようにして深く唇を重ねていった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第11話〜いとおいしい〜

二人の重みでベッドが軋み、真っ白なシーツの波はその形を幾重にも変えていく。過剰に摂取したアルコールのせいなのか、はたまたこれから行われる事に対しての気持ちの高ぶりからかは判らないが、既に火照りきってしまったている身体にパリツとしたシーツの冷たさが心地良い。

酔いに身を任せた二人が今、一つになる事をお互い強く願ひ、あれ程身体の関係になりたくない拒んでいたのが嘘の様に、今は彼と結ばれたいと心から思っていた。

自分の事をいつも気に掛けてくれて、決して無理強いはしない。彼女の為なら睡眠時間を削ってまで時間を取ってくれる、彼の自分に対する純粋な思いが、ついに彼女の心を動かした。

もう、迷わない。

実のところ本当はもうずっと前から覚悟は出来ていた。

でも、自分からそういう事を言い出すことが出来ず、そういつた雰囲気になっても照れ隠しで『ダメ!』と連呼してしまっていたから、優しい彼はそれ以上求めては来なかった。

彼の優しさにつけこんでここまで来たが、流石に彼女の方がもう限界とばかりに今は彼を求めている。

今、目の前にいる彼は信じられないと言った顔をして、少し不安そうに見える。

彼の事だから、こんな事なるうとは思っても見なかったのだらう。

ほんの少し泳がせている目で『本当に、いいの?』と改めて彼女

の気持ちを確認してくれる彼が今はいとしくてたまらない。『うん・
・』とだけ言った返事に、彼はまだうるたえていた。

「もう逃げないから。言ったでしょ？向き合って行きたいっ
て」

「カナ・・・」

彼に自分は酔った勢いで言っているわけではないと判ってもらおうと、にっこりと微笑みながらそう言くと、眉をひそめた彼の目にはうつすらと涙が浮んでいた。

伏し目がちにした彼の顔が徐々に距離を詰めると、自然と唇が触れ合った。

二度、三度とじれたい口付けを交わし痺れを切らした彼女が、彼の頭を引き寄せるとほぼ同時に二人の舌が絡まり始め、互いの欲望を吐き出す合図が出される。

すぐに息が乱れ唇の隙間から吐息が零れ落ち、それが二人の聴覚を刺激して二人は興奮の坩堝と化する。

まだキスをしているだけだと言うのに、彼に触れられる所全てが敏感になり意思とは反して甘い喘ぎ声が漏れてしまう。

「カナ」

彼の唇が頬を伝い首筋を這い出した時、切なくて苦しそうな声で名前を呼ばれた。

トクン。

「カナ、愛してる。。」

何度でも惜しみなく浴びせられる愛の言葉に身体が、心が反応し、あっけなく彼女の思考は溶かされて行く。

ルームウェアから少し覗いている鎖骨に沿って口付けを落とされ、唇で挟むようにして進む生暖かい感触に身体が震えた。

顔のすぐ下にある蠢く彼の髪。洗いたてのシャンプーの匂いが自分と同じなのだと思うと、ますます欲情が駆り立てられる気がする。

ベッドに縫い付けていた手をふいに離され、温もりを失った事に急に寂しさが込み上げてくる。彼の利き手が彼女の胸のボタンを一つ、二つと片手で器用に外しスーツと空気に触れた肌に再び熱を求めている自分がある。

『はぁ・・・』と小さく彼が溜息を零した後、すぐに彼の手によって温もりを得ることが出来た。

もう一方の手で彼女の肘に溜まった上着を取り去ると、一時も離れる事が出来ないのか舌を絡ませながら彼が上体を起こしながら、自分のＴシャツを一気に脱ぎそれをベッドの外へと放り投げた。

額に薄っすら汗が浮かび、何かに耐えるようにしたその顔が男性なのにとてもセクシーで、思わず手を伸ばしてその頬に触れた。

「？」

「もっと良く貴方の顔が見たい」

「カナ。」

頬を包んでいるその手を彼が握り締めると、手の甲にそっと口付けた。

途端、先程までの情熱的な感情が静まり、彼の視線を感じながら

もその唇は小さく音を立ててそのまま彼女の腕をゆっ……くりと伝い始める。

焦らされる感覚に頭の回路がショートしそうになる。

じっと目を見つめられながら徐々に近づいてくる赤い舌に気が狂いそうになり、たまらず息を呑んで耐え難い羞恥に頬を染める。

二の腕を通り、肩を舐め、やがて彼の唇が彼女の首筋を捕らえると、耐え切れず彼女の唇から大きな声が零れ落ちた。

「…っん…あっ…」

彼の広い背中に腕を回し強く抱き寄せると、彼女の左右の首筋を彼の頭が交互して、それに合わせるかのように彼女は彼に首筋を差し出していく。

既に息も絶え絶えになっている所へ彼の舌は更なる刺激を求めようと、徐々にその位置をずらし始める。

そうしてゆっくりと移動する柔らかい唇が、丁度胸の谷間に到達した時に　コトは起こった。

「　？」

抱き寄せた彼の体の重みが増したと思った途端、彼の動きも止まった。

いくら細いと言えども長身の彼の全体重が掛かると、流石に呼吸もままならない。

「く、苦しい」

彼の背中に回した手で2、3度背中を叩いてみても、ピクリとも反応しない。

「??？」

胸元に顔を埋めている彼を上から覗き込むと、何と彼はスーッと寝息を立てて眠っていたのだった。

「へ？嘘??・・・。」

こんな時に寝れるなんて！と、あっけにとられつつも、次の瞬間クスツと微笑みながら彼の頭をいとおしそうに両手で抱え込んだ。

彼の頭に自分の頬を寄せ、まるで小さな子供をあやすように彼の髪を撫で続けた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第12話 愛のあるキス

「んーっ！・・・っはあ」

デッキに出て大きく深呼吸すると、朝露に濡れた草木の香りが充滿して、何とも気持ち癒される。小鳥の囀っている声が聞こえ、大自然にいる事を感じさせられた。

ピーツ、ピーツ、ピーツ、...

部屋の中からご飯が炊けた合図が聞こえて後ろを振り返ると、部屋の中にはボサボサ頭の彼が、ソファで足を組んでふてくされながら新聞を読んでいるのが見える。先程のやり取りを思い出すとおかしくて又笑ってしまった。

「？」

部屋の中に入り、彼が読んでいる新聞を取り上げると、くるりと上下を返しもう一度彼の手にそれを戻す。

ちよつとムツとした顔で見上げられた視線に対し微笑みながら、

「朝食の準備するね」

そう言ってキッチンに向かう彼女に、

「・・・お願いします・・・」

不機嫌そうに口を尖らせながら彼はボソツと呟いて、再度新聞に

目を向けた。

キッチンで朝食の準備をしていると、ドタドタとまるで転げ落ちるかの様な勢いで、階段を駆け降りて来る音が聞こえる。

リビングの扉が勢い良く開き、血相を変えた彼が部屋の中をぐるりと見回すと、すぐに彼女を見つけた。

『あ、おはよう。朝は和食でも』

『カナ！どうして起こしてくれなかったの？?!』

彼女が話し終わるのを待たずに、彼女の言葉を遮った。

そんな彼の形相はまさに顔面蒼白とも、もうこの世の終りだ！とも言えそうな顔をしていた。

『え？あんまり気持ち良さそうにすやすやと寝ていたから、起こすの悪いなと思って。朝食の準備が出来たら起こせばいいかな、と』

彼が本当はそういう事を聞きたかったワケでは無いのだから、言う事くらい予想はついていたがあえて違う答えを試みたら、ほんのり頬を赤らめながら彼が慌てて否定した。

『そうじゃなくて！・・・き、昨日の晩の事だよっ』

あまりに真剣な表情の彼がおかしくてつい噴出してしまった。そ

んな彼女を見て彼は気に食わないのか片方の眉がクイツと上がる。

『……プツ、ご、ごめんなさい……えと、さっきと同じよ。凄く気持ち良さそうに眠ってたから』

『……ああああー！なんで寝てしまったんだー僕はー！』

『疲れてたんだから、仕方ないよ』

キッチンのカウンターに両肘をつき頭を抱え込みながら、自分の失態を恥じている。

彼女はその様子を横目で見て、笑いをこらえるのに必死だった。

『、きやつー！』

がばつと勢い良く体を起こしたと思うと、彼女の腰に両手を回し、グツと引き寄せた。バランスを崩した彼女は、あっさり彼の胸板にボスツと顔が埋まる。

『今から……続きを……』

彼を見上げて目を丸くしている彼女に、先程とは打って変わって甘い顔に変化を遂げた彼が、そう言いながら彼女の首筋に顔を近づけてきた。

幾らなんでも、こんな朝っぱらからコトを致すなんて、ご先祖様達に顔向け出来ないと慌てて体を反らしながら彼の胸を押し返す。

『ちよ、ちよつと待って！朝から続きつて』

ガバツと彼女の目と鼻の先に顔を近づけてきた彼の目が血走っていて、必死な感じがたまらなく面白い。

『じゃあ、夜ならいいの?』

『夜って……今日はもう帰らなきゃ』

『もう一泊する!』

もうダメだ!ソコまで必死すぎる彼に笑いが止まらない!途中で寝てしまったのがよっぽど悔しかったのか、あんなに仕事に一途な彼がそれをほっぽってでも続きがしたい様だ。

『……し、仕事があるでしょ?……プツ』

笑っている彼女とは対照的に、彼は悔しそうな顔をして肩を落としている。そんな彼が可愛くて、いとおしくてつい触れなくなる。

頭をうな垂れている彼の頬にそっと手をあてると、彼女の方から短くソフトではあるが愛のあるキスをした。

『じゃあ、はじめからやり直しね』

『えっ。』

『おはよう』

そう言って彼女がニッコリ微笑むと、無茶な事を言って彼女を困らせてしまった事に気付いたのか、少し照れくさそうにしながら、

『……おはよう……』

やっと落ち着いて朝の挨拶をした。

『はい、じゃあ座って待ってて？』
『はい』

上手くまとめられた感が否めない。

今のやりとりでどっちが年上なのか判らない程、立場が逆転していた事に彼は気付かないまま、ソファアーにドサッと腰を下ろした。

L O V E I S M A G I C A L

第13話 近い未来の約束

楽しかった時はあつという間に過ぎ去り、次にやって来るのは別れの寂しさだけ。

二人が最終列車に飛び乗ると、あつという間に車窓から見える雪景色は姿を消した。

停車する度にプラットホームを見れば徐々に人が多くなっていくのが判る。

それは二人の別れが近くなっていると言う事を意味するものであった。

彼女の家の最寄り駅に到着すると、二人は手を繋ぎながらトボトボと歩き出す。気付けば会話も無くなっていて、普段は歩くのが早い彼も、随分足取りが重くなっている。

「ねえ、次いつ逢える？」

彼女からこんな科白を言ったのは初めてだった。

彼の重荷になりたくないと思うがばかりに今までは中々言えなかった言葉だったが、昨日、今日と一緒に居た時間が楽しすぎてこれから訪れる別れを肌で感じてしまうと、又今度会えるという＜確約＞が欲しくなる。

たった一言でいいから近い未来の約束を取り付けたかった。

それがもし不可能になったとしても、今この寂しさを埋める為の＜保証＞が欲しかった。

「んー、正直わからないなあー」

そんな彼女の思いも虚しく、彼に『わからない』の一言で片付けられ、酷く動揺した。

「、？」

彼の携帯電話が鳴る音が、現実の世界に戻ってきた事を知らせている。

「ちょっと、ごめんね」

胸のポケットから電話を探り当て、彼女に一言詫びてその電話に出た。

「うん、そう・・・ああ、いいよ。うん、じゃあよろしく」

片手で携帯を閉じ、何か考え事をしているかのような面持ちで胸ポケットにしまった。

横目に彼女の視線を感じた彼は、

「ん？ああ、ビルからだよ。道が混んでて少し遅れるって」

「そう・・・」

いつものように部屋の前まで彼が送ってくれる。彼女がドアの内側に入りドアノブに手を掛けながら彼を見上げた。

「じゃあ、また。電話・・・待ってる・・・？」

「・・・うん。電話する」

扉を閉めようとした時、彼がとても悲しそうな表情を浮かべているのを感じながらドアをパタンと閉めた。

彼の靴音が聞こえない、玄関の鍵が閉まる音も聞こえない。
1枚のドアを隔てて二人はじっと佇んでいるのがわかる。

すぐにでもこの扉を開けて、彼に抱きつきたい衝動に駆られながらも、彼を引き止めてしまう事を恐れてしまう。

明日からお互い仕事が始まる。彼女の仕事はなんともなるが、きつと彼は明日から怒涛の毎日を暫く過ごさなければならぬのだ。ろう事は、先程の口振りで良く判った。

きつと、又暫く会えなくなる。

次に会う約束が無いと言う事が、これほどまでに自分の気持ちを不安定にさせるとは思ってもおらず、苦しくて悲鳴を上げている胸をぎゅっと掴んで唇を噛み締める。

コツンッ、

「！」

その靴音にハツとした。

離れたくないという気持ちが一気に溢れ出し、次に彼女の思考を停止させた。

考える事を放棄した彼女は勢い良く扉を開けると、驚いて半身振り返った彼の胸座を掴みそのままドアの中へ引きずり込んだ。

正直、自分のした事が信じられなかった。

あれ程身体を繋ぐ事を拒絶していたのが、今では自分から彼を求めてしまっている。しかも、相手の気持ちも考えずに、言葉も無く行動に移したのだから彼もかなり驚いている様子だった。

今朝、いざと言う時に寝てしまい落ち込んでいたのは実は彼だけではない、彼女も又、ショックを受けていた。このまま彼を帰すと、もう二度とタイミングを掴めないんじゃないかと言う程、頭が混乱していた。

玄関の扉が閉まるよりも早く、まるで当たり前かのように二人は口付けを交わす。啄ばむ様な優しいキスではなく、最初から濡れた舌を絡め合わせた。

彼女は彼の首に両腕を巻きつけ、彼は彼女を強く抱きしめる。

狭い玄関の壁に彼女の背中を押し付けると、互いの両手の指を絡めながら歯が当たるほど深く口付けた。

まるで我慢して来た事を一気に放出するかの様に、激しく互いの口腔内を貪り続ける。

深く、深く、時には浅く。彼女を追い詰めるようにして口腔内を駆け回る彼の舌に、身も心も文字通り溶かされて行く。

すぐに熱を帯びた身体は甘い吐息を溢れさせ、もっと、もっとと、と更なる快感を強請る。

足元に二人のコートと上着がポトリ、ポトリと落ちていき、彼の唇が彼女の首筋を捕らえると、彼女は一気に脱力し壁にもたれたまま、ズズツ、ズズツとその場に崩れ落ちた。自分の家の玄関で欲情

している事に悪びれる事も無く、ただ、目の前にある「果て」を味わいたくて上気した身体を、心を、彼に預けた。

廊下に彼女を移し彼がその上から覆いかぶさる。

背中に床の冷たさを感じても彼女は一向に構わなかった。床の冷たさよりも彼の肌の暖かさの方が勝っているから。

もとより、ここで止めてしまうと、もう彼とは結ばれないどころか、逢えなくなる様なそんな気がしたのもある。

ドアを閉める時に見た彼の表情は、以前、彼に振られた日の事を彼女に思い出させた。

あの時、彼に何も言えなかった事をずっと悔やんで来たからこそ、もう二度と後悔しない為に自分の今の気持ちに正直になる事を選んだのだった。

彼の暖かい手がスカートを捲り上げ、程よく肉付きのある太腿を這い出すと、更に息が上がり興奮状態にあるのがよく判る。

乱れた息遣いで何度も、

「カナ、愛してる」

と、耳元で囁く彼に応えるように何度も小さく頷いた。

ブルツ・・・ブルルルル・・・ブルルルル・・・

彼の携帯電話が鳴り二人は動きを止めて彼の上着を見つめた。

上にいる彼が、又しても邪魔が入った事に一際大きな溜息を零した。

どうしてこうもいつも上手く行かないのか。やはり二人は結ばれてはいけない運命なのだろうか？とさえ勘繰ってしまう。

「……ビルだ……」

少し考えて、のろのろと上体を起こすとジャケットに手を伸ばした。ああ、やっぱりその電話に出るのね、と思うと又胸が張り裂けそうな思いになる。

呼吸を整えながら携帯電話を探している彼の横で、露になった胸元を隠すように両手でシャツを重ね、起き上がると彼から目を背けた。

「……」

そんな彼女を見つめながら、彼が受話ボタンを押す。

「もしもし、うん。……悪いけど帰っていいよ」

「。」

その言葉を聞いた彼女は驚いた表情で彼を見つめた、彼はウィンクしながらビルの文句を聞いている。

「大丈夫、一人で帰れるから。じゃ」

（そんな事を言ってるんじゃない……！）

携帯電話から漏れ出す程の大声で喚いているビルが憐れに思う。一方的に彼が電話を切ると、そのまま電源も切ってしまった。

驚きを隠せない表情の彼女の頭を抱き寄せ、額にそっと口付ける
と、

「もう、限界。君を一人にはさせないよ」

そう言って彼女を軽々と抱き上げ、部屋の中へと進んで行った。

LOVE IS MAGICAL

第14話 余韻

肩が冷えるのを感じ、温もりを得るために暖かい毛布の中に潜り込んだ。ふわっと持ち上がった毛布の香りがいつもと違う事に気付きゆつくりとその瞼を開けると、二人で寝るには手狭なシングルベッドから落っこちないように彼女の背中を抱くようにして自分も一緒に寝てしまっていた事に気が付いた。

「。。」

華奢な肩を包み込むように抱き締めて長くて艶のある髪に鼻先を埋める。鼻孔をくすぐるその髪についた匂いが自分と同じ匂いだと思つと、ほんの少しの照れが生まれた。

彼女と一つになる事を諦めかけていた彼は、彼女の勇气によつて救われた。彼女がドアを開けてくれなければ、今この瞬間は訪れなかったのだと思つと感慨深いものがある。

昨夜の事を振り返ると彼女へのいとおしさがぶり返してくる。思わずそのまま彼女をきつく抱きしめ、今自分の腕の中にあるという現実を味わっていた。

全く起きる様子の無い彼女の肩も冷え切っていて、毛布を少し上げて彼女の肩にかけようとした時、彼女の背中がチラリと見えた。思わずもつと見てみたくて、かけてあげるところか腰まで下ろし長い髪を片側にまとめると、彼女の首筋から腰までをじつと見つめだした。

“参ったな・・・背中までこんなに綺麗なんだ”

横になって寝ている彼女は彼が凝視しているのに当然気付かず、すやすやと寝息をたてている。肩と胸部が小さく上下する事が、くびれた腰を強調していて何とも悩ましい姿を魅せつけられて頭がクラクラする。

「。。。」

一つ、喉をゴクリと鳴らすと、そのまま彼女の背中に吸い込まれて行った。

彼女の肩を擦りながら、白いうなじにそっと口付ける。先程までの行為の激しさをあらわしているように、舌先に少し汗の味が感じられた。

自分には無い独特な、女の匂い、にゾクゾクが止まらなくなり、全く起きる気配がないのをいい事に彼は少しづつ位置をずらしていく。

背中全体を彼の唇が這い始め、彼の大きな手も肩から二の腕を通り、手の甲へと滑り落ちるのを幾度と無く繰り返している。やがて更なる刺激を求めだしたその手は位置を変え、彼女の腰から太ももにかけて這い出した。

起きたらやばいな、でもちょっと起きて欲しいかも、と矛盾する気持ちとは裏腹に、その行為を終わらせると言う選択肢は毛頭無かった。

「…ん、…。」

彼女のぷっくりとした紅い唇が薄く開いたかと思うとぐぐもった

声が漏れ、少し意識が戻ったのか彼女は腕を背中に回して背中に感じる感觸の原因を探りだす。

彼がすぐにその手を捕まえると、苦しくないように彼女の胸の前へと持つていきながらその細い肩に吸い付いた。

「…は、あ…」

大きく息を吐くようにして零れた吐息を吐くと、彼女は背中を向けたまま反り返り、元に戻すために添えた筈の彼の手を振り解いた。振り解いて自由になったその手を彼の首に回し、彼を引き寄せるとそのまま唇を合わせた。たったそれだけでも下半身が疼き始め、新たな怒張を呼び起こすと言うのに、それに加えて彼女の方から舌を絡めてきたのだからたまらない。これはもう一度彼女を味わえるチャンスかも？と思ったのも束の間、彼女は目を瞑ったまま次第にその動きが緩慢になり、又枕に頭を埋めてすやすやと眠りについてしまった。

「あつ・・・寝ちゃった？」

思わず声にだしてしまった。心底がっかりした表情を浮かべたと同時に彼のキスの悪戯も終わる。彼女の可愛い寝顔を見ていると無理矢理起こすのも可愛そうだ。

寝返りを打って彼の方に向き直し丸くなって寝息を立てている彼女を見ていただけで、上がりだした熱が徐々に落ち着きを取り戻していくのが判る。

「僕の可愛い人」

そう言って、鼻先をちよんと指でつつくと、毛布をすっぽり覆い彼女を胸元に引き寄せてから静かに目を閉じた。

彼女の温もりと一つになれた幸せの余韻に浸りながら。

LOVE IS MAGICAL

第1話〜視線〜

「ええ〜っ???!」

店中に絵里香の驚きの声が響き渡り、慌てて両手で口を塞いで周りに小さく頭を下げると、カナと目を合わせて噴出した。

「もう、絵里香ってば」

「だって！」

今日は絵里香に誘われて仕事帰りに飲みに来た。どうやら絵里香にも大事な話がある様だったが、『で、最近あの彼とはどうなってるの?』と、まずは挨拶代わりにした質問に対しての彼女の返答が思いも寄らなかったのか、先程の様な大声を張り上げてしまう失態を犯してしまった。

頭を低くして、目をまん丸に見開きながら、

「ま、まじでえ〜?!」

と小さな声で再確認する絵里香に、彼女は少し恥ずかしそうに上目遣いで小さく頷いた。

「ちょ、ちょっと待って・・・頭の中整理するね・・・。えと・・・ご飯作って、一緒にお風呂に入って」

「ソコ違う、一緒にお風呂なんて入ってない！」

「ああ・・・で、お酒飲んでいい感じになって・・・でも、彼は途中で寝ちゃったんだよね？」

「うん」

「んで？次の朝？再チャレンジ？」

「してないっ」

彼女はだんだん面白くなってきたのか、お腹を抱えて笑いながら絵里香の話の聞いています。

「あ、次の日の夜に嫌がる彼を無理矢理連れ込んで・・・しちゃったと？」

「なんか話が歪曲されてる様な気がするけど・・・まあそんなトコ」「・・・ええええー？！カナってそんなタイプだったっけえ〜？」

首をブンブン振ってさも『とんでもない！』と言うように彼女は否定している。

「だよねえー・・・なんで？」

「なんでって言われても・・・自分でも良くわかんないのに」

「それだけハマっちゃってるのだろうねー、その彼に」

そう言ってテーブルの上に置いてある彼女の携帯電話を指差した。

「？」

「だって誰と飲む時もそうだけど、カナは恋人がいてもテーブルに携帯電話置いたりしないじゃん」

「えーっと・・・、どういう事？」

「もう！鈍いなあ！」

腕を組んで絵里香は頬を膨らませた。

「彼からの電話、待ってるんでしょ？掛かってきてもすぐ取れるように、目のつくところに置いて」
「……………」

そう言われるとそうかもしれない。

今まではこういつた席では、携帯電話はずっとバックの中にしまいい込んだままだったのに、無意識のうちですぐ手に取れる所に置いていたのだ。

絵里香によつてその事に気付かされると、絵里香には悪いが無性に彼に会いたい気持ちが膨らんできた。

「会ってみたいなあ、カナの彼」

「そのうち、ね」

その言葉に反応したかのように彼女の携帯電話がブルブルと震えだした。

当然の事ながら、二人の視線がそこに集中する。

「彼？」

「うん…………ちよつといい？」

「もちろん！」

自分の幸せを心から願ってくれている親友の笑顔にホツとしながら電話に出た。

「…………あ、今、友達と飲みに来てて…………うん悪いけど」

ああ、何とタイミングが悪いのだろう。あれから思った通り彼とは全然会っていない。なのに、今、なら少し会えるだなんて…………

本当にツイてない。流石に絵里香の目の前で『今から行く』何て言えない彼女は、残念そうにして彼に断りを入れた。しかし、その会話にピンと来たらしい絵里香は、

「ねね、逢いたって言うてるの？ならココに呼んじゃいなよ！」

と、小さな声で彼女に提案した。

突然の事で動揺したが、いずれは絵里香にも会ってもらいたいと思っていた彼女は、思い切って彼に尋ねてみた。

「うん・・・じゃあ後で」

「どう？彼来るって？」

「うん、まだ仕事だから少ししか居れないけどって」

「ぎゃー！大変！メイク直ししなきゃ！」

「何それっ」

嫌がりもせず彼を招き入れてくれる友人の優しさが嬉しくなってきた。

しばらくすると、突然店の中がざわつき、店内にいる人の視線が一箇所に集中した。

その先を見ると膝下まであるブラックコートの襟を立て、革の黒

い手袋を手から外しながら、店の入り口でキヨロキヨロと彼女を探している彼が居た。

店の従業員ですら目を奪われて、明らかに人を探している風な彼に声を掛ける事も出来ない様子だった。

“ やっぱり、目立つ人だなあ・・・ ”

変な緊張感を感じつつもおおずと彼女が手を上げると、それに気付いた彼の顔に一気に笑顔が溢れ出しコツコツと革靴を鳴らして駆け寄ってきた。

人々の嘆きの声が聞こえると共に、予想通り皆の視線が容赦なく突き刺さる。恋人同士でさえも目の前にいる彼氏そっこのけで、女の子が悔しそうな顔をしていたり、もう、こういったお店の中で待ち合わせをするのは止めておこうと、その時固く心に誓った。

「こっちへすわっ・・・」

席を詰める為に彼女が立ち上がった途端、長い腕が彼女を包み込んだ。

「逢いたかったよ」

「（きやあ！・・・いいなあ・・・ヒソヒソ）」

周りの人の羨ましそうな声があちらこちらから聞こえてくると、彼女は恥ずかしくて顔を真っ赤にしながら彼と距離を取った。

「そ、そんな大袈裟な・・・ たっ、 たった1週間程度じゃない」

「この間はたった1週間でも、心配で居てもたつてもいられなかつたくせに」

意地悪そうに彼女の顔を覗き込みながら笑った。

『何で今ココでそんな意地悪な事言うのかな?!』と心の中で叫びながらも、否定できずに俯きながら、必死に抗議する。

「、、？」

「あ、あ、あれは！電話も無かつたか・・・、つらあ?!」

両頬を大きな手で包まれて俯いていた顔を無理に上げさせられた。彼と目を合わすと彼の眉間にみるみるしわが寄っていく。

一段と周りの声が騒がしくなるのが見ずしても判り、もうこのまま溶けて無くなってしまいたいとさえ思った。

「大分飲んだの？真っ赤だよ？」

「違う！」

確かに飲んでるから少しは赤いのかも知れないけれど、今顔が赤いのは明らかに貴方がココに来てからなのよ！その意味判るかなっ？！
何て、とてもじゃないけど言えそうにも無い。

憤慨している彼女を余所に、

「違うの？じゃあ熱でもあるのか？」

とか言つて、額にかかる前髪を上には掻き揚げられて、端正な顔立ちが近づいてきた。

「こ、これは！」

少女漫画で良くある、主人公の女の子が熱を出して、思いを寄せ

ているイケメン男子に介抱してもらったりする時に描かれる、‘人間体温計’なるものをなさるうとしているのですかっ?!

“いやっ、ち、ちよっと!・・・う、嬉しいけど!流石にこんな人前じゃ無理!”

「な、な、な、無い!無い!熱なんてこれっぽっちも無いよ!」

「そう?でも、さっきより又一段と赤くなって来てるよ」

慌てて背中を反らして一段と顔を赤くした彼女に追い討ちを掛けるように、又もや頬を両手で包まれてじーっと見つめられた。心配そうにしていた彼の目が、徐々に緩んでいく。甘い顔を急に見せつけられて、一瞬ココが何処だか忘れそうになる。

「。。。!」

ハッと意識を戻すと、周囲から注がれる視線に全く気付いていない様子の彼に、何とか今の状況を把握してもらおうと必死になった。

「(ちっ、ちがっ!周り見て!)」

「???」

彼女にそう言われて、彼が周りを見渡すと店内の女性がうつとりした顔で彼を見つめて色めき立っていた。

彼がニッコリと微笑むと、『きゃあ〜』と黄色い声があちらこちらで上がっている。

彼は慣れているのだろう、いつもの事だと言わんばかりに彼女に視線を戻すと、『それが?』見たいな顔をして、首を傾げていた。

「いや、だからね、あ」

ふと、側で立ちほうけている友人に気付き、慌てて彼の手から逃れた。

「あ、お、お帰り」

「ただいま……。遅くなってごめんね、トイレ混んでたんだ」

なんだか絵里香の顔が引きつっている。

“そりゃそうだよ、いきなりこんな所見せ付けられちゃあ、流石に引くよね……”

がつくりと頭をうな垂れつつも、

「あ、絵里香、こちらが……」

「こんばんは。初めま……。あれ？」

「こんばんは、ジャックさん。ご無沙汰してます」

彼女はキョトンとした顔で、何度も彼と絵里香の顔を交互に見ていた。

LOVE
IS
MAGICAL

第1話〜視線〜（後書き）

「第3章 噛み合わない歯車」のスタートです。
宜しく願います。

第2話〜度重なる偶然〜

初めて絵里香に彼を紹介したはずが、『初めまして』じゃなくて『ご無沙汰してます』と絵里香が言った。

彼も何処か記憶の端にあるのか、必死で思い出そうと絵里香を凝視している。

彼女は二人の接点が皆目検討もつかなくて、ただ二人の様子を黙って見ているだけだった。

「あれ？確か君は・・・」

「ラ・トゥールのパティシエールの佐々木です」

「ああ！そくだそくだ！お店で見るとは服装が違うから判らなかつたよ」

今の状況を説明して欲しそうに彼女が交互に二人を見てみると、それに気付いた絵里香が、

「ジャックさんは良くうちに来てくださるのよ。ここ最近はとんと見かけなかつたけど」

「あ？そくだったの？」

「最近忙しくてね。でもびっくりしたな君の友達だったなんて」

「ええ、私も目を疑いましたよ」

3人とも席に着くと、彼女は二人の話しの腰を折らないように小声で、『ペリエでいい？』とまだ仕事上の彼のためにソフトドリンクを勧める。『うん、お願い』と笑顔で返してくれた彼に嬉しくなりながら、店員を呼んで彼のドリンクをオーダーした。

「そくだ、門倉シェフは元気にしてるかい？・・・」

二人はなんだか楽しそうにして、彼女には判らない話で盛り上がっているのを横目で見つつ、少しつまはじきをくらった様な気持ちになり、ほんの少し口を尖らせた。

「へへ、そうか、じゃあ是非、又今度近いうちに寄らせてもらうよ。……？」

そんな彼女の気持ちが判ったのか、絵里香と話を弾ませながらベロンシートに置いた彼女の手に、彼の大きくて暖かな手が上から重ねられる。友達の前で見られていないとはいえ、少し気恥ずかしかったが、それと同時に大きな安心感を与えられた。

「ああ、なるほど！それは凄い」

彼が絵里香に相槌を打ちながら、彼女の手の甲を彼の親指が何度も滑る。その優しい指使いに先程まで口を尖らせていたのが嘘の様に、表情が和らいでいく。

“ああ、この人には敵わないや”

彼の横顔を見上げながら、二人の話しに耳を傾けていた。

「そうなんですよ、カナガラ・タワーに居た頃は……」

絵里香が彼も当然知ってるかのように話し出すと、彼が急に目を丸くして彼女の方へ振り向いた。大きな瞳を何度もパタつかせ、キョトンとしている。

「え？君、あそこで働いてたの？」

「あ、うん。前言ってた学生時代のアルバイトだね。絵里香はその後もずっと続けて社員になったの」

「どつりで・・・」

『料理が上手いはずだ』と彼女を見つめながら極上の甘顔で呟いた言葉は、絵里香にしたら惚気にしか聞こえないだろう。今の彼の様子を見ていると、ここで、『レシピが素晴らしいからよ！』何て言おうもんなら、きつと親友の前で又意地悪な言葉を言われそうな気がした彼女は、頬を染めたまま小さく縮こまっていた。

「ジャックさんがうちに来られたのは、確かカナが辞めてしばらくしてからだったけど、もし、カナがまだ働いてたらどうなっていたんでしょうね」

「ほんとに」

彼と彼女は目を合わせ、この巡り合わせに驚きの表情を隠せない様子だった。重ねられていた彼の手はしっかりと彼女の手を握り締め、それが『もう離さないよ』と言っている様にも見える。

「？」

ふと、彼が繋いだままの手を自分の目線まで持ち上げて、彼女の手首にある時計を見た。

「わ、もうこんな時間だ！ごめん、そろそろ戻らなきゃ」

彼が慌てて立ち上がり、絵里香にすつと手を伸ばす。

「会えて嬉しかったよ」

「こちらこそ。又お店でお待ちしております」

『今度は二人で来て下さいね』と絵里香が言いながら二人が握手を交わした後、彼女の方を向いてスツと極々自然に頬に口付けた。

「又、電話するからね」

「う、うん」

ニツコリと微笑むと、そのまま出口へと進みキャッシャーでこちらを指差しながら、上着の内ポケットに手を入れ従業員と何やら話している。その様子と、普段の彼の行動からしてこの支払いをしてきているのだなと容易に判った。

しばらくして会計が済んだのか、彼は彼女に小さく手を振ると、ブラックコートの裾を翻して出口から姿を消した。

「。。。」

「う、ごめんねえ、何か慌しくって」

最後の最後にテーブルの下で手を繋いでいた事がバレた事に、彼女は動揺を隠し切れない。しかし、そんな事、絵里香にはどうでも良かったのか、別段その事に触れる事も無く、それどころか彼が居なくなったのを確認した絵里香の口から、とんでもない言葉が飛び出した。

絵里香は、先程までとは全く違った真剣な表情を浮かべている。

「あの人は・・・やめた方がいいよ」

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第3話〜疑惑〜

いつもの様に薄暗い彼の部屋で、彼の仕事が終わるまで映画を見て過ごしていた。

彼と関係を持ってから今までと違う事は、隣の部屋のリビングで過ごす事が無くなったと言う事。

その方が彼は仕事をしながら彼女と過ごせる。そういう理由ではあるが、きつとそれだけではないのである。事は流石の彼女でも十分判っていた。

「。。。」

とつづくに映画は終わっていることにも気付かずに、ソファアに座りじつと画面に目を向けている。

この間、絵里香が言っていた事。それが彼女の頭の中をずっと支配していた。

『。。。え？』

絵里香は話しくそうに俯きながら、カクテルピンに刺さっているオリーブをグラスの中でコロコロと転がしている。

絵里香が突然発した言葉に、ざわついていた店内の喧騒は彼女の耳には届かず、一気に静寂に変わっていくのが感じられる。

『絵里香？』

再度彼女が呼びかけると、諦めた様に大きく息を吸って彼女の方を真つ直ぐ見つめ、絵里香はその重い口を開いた。

『・・・あの人に泣かされた娘を沢山知ってるの。だからカナにはそんな思いさせたくない、　、ただそれだけよ』

『ちよつ、ちよつと絵里香、なんなのそれ？ちゃんと話してよ』

絵里香が彼に泣かされた娘を沢山知っている？

先程まで浮かれていたのが嘘の様に、一気に絶望に包まれた。心臓を急に驚掴みにされた様な気分になり、ほんの少しの吐き気を覚える。絵里香の口が少し開く度に、何かの間違いで有ります様に、と心の何処かで手を合わせていた。

絵里香はオリブをグラスの外に出すと一気にそのカクテルを飲み干した。その様子がこれから聞かされる内容を暗示するかのようで、一際大きな緊張感が張り巡らされる。

『実はね　、　：　：　：　：　。』

絵里香が言うには、彼は誰が見ても一際目を引く存在で、それは先ほど彼が店内に入って来た時にも証明されている。エリカの働く店でも勿論同じ様な現象になるそうだ。

彼はいつもブロンドの綺麗な女性と二人で来ていた。どう見ても親密そうな二人の様子を見ても尚、店のスタッフは彼に夢中になる娘が後を絶たない。

女性を連れて来ているにも拘らず、相手が席を外した時を見計らって彼は言葉巧みにその娘達を誘い、飽きたらあっさりと捨てる。

そういう噂があつたという間にオーナーの耳に入り、彼が来店するとホールの女の子は全て奥へ引つ込めさせられていたのだと言う。

『何？それ？う、噂なんですよ？』

『、そう思いたいカナの気持ちは判るけど・・・私、何人も捨てられた娘を見てきてるのよ。かわいそうに、精神的に参っちゃってる子もいたわ』

『・・・・。』

『大体さ、私なんて裏方だから顔なんて覚えてる方がおかしいと思わない？根っからの女好きなんだ・・・よ・・・？、カナ・・・？』

『え？』

俯きながら絵里香の話を聞いていた彼女が顔を上げると、絵里香が「しまった」と言った表情を浮かべた。

『やだ、カナ・・・泣いてるの？』

絵里香にそう言われ、指で頬に触れてみると自分では気付かぬうちに、涙で頬が濡れていた事に初めて気付く。

『あれ？なんでだろう・・・悲しいわけじゃないのにな』

「どうしたの？」

ソファーが沈んだのを感じ思わずドキッとした。彼がリモコンでテレビを消すとロックグラスに入れたバーボンをテーブルに置く。

「考え事？何も映ってない画面ずっと見てたね」

「あ、ううん……。仕事終わった？」

「うん、やっと解放されたよ」

両腕を思いっきり上に伸ばし脱力すると、そのまま彼女の肩を抱いた。

それに合わせるように頭を彼の肩に預ける彼女のその仕草を見て、彼は思わず笑みが零れた。

「随分時間がかかったなあ」

「今日はいつもより早く終わった方じゃない？」

「そうじゃなくて……」

もう一方の手で彼女の髪を耳にかきあげ、そのまま耳から下あごを顔の輪郭にそって指でゆっくりとなぞる。

「僕が肩を抱いたら君が自然と寄り添ってくれるようになるのがっ

て事」

「……。」

言葉を失っている彼女の顎を掬うと、そっとやさしく口付けが降って来た。

「今日……泊まってく？」

鼻先が触れ合う距離で言われ、彼の吐息が唇を掠める。胸の鼓動が早くなるのを感じると彼は彼女の返事を待たずして、既に彼女のシャツのボタンに手を掛けていた。

「あの！明日朝早くから大事な会議があるの。も、もう帰らなきゃ」

慌てて彼の腕の中から逃れる様に立ち上がると、視線を合わす事も出来ず背中を向けて帰り支度を始めた。

「……こないだも同じ事言ってたよ？」

「しょっちゅう朝一からあるの、皆嫌がってるってボスに一回言っ
てやらなきゃ」

自然に振舞おうと思えば思うほど、声の上擦っているのが自分でも判る。その事実が更に彼女を不自然にさせると言うのに。

「……本当に会議なんてあるの？」

当然の様に、彼に見抜かれて激しく動揺する。

「ほ、本当よ。なんで嘘なんか……」

「じゃあ明日、君のボスに電話するよ？」

ずっと背中を向けていたがその言葉にハツとして、彼女は振り返り彼にキツイ視線を向けた。

「酷い・・・それって、私を信用してないの？」

「酷いのは君の方だよ！！」
「きゃっ！」

テーブルをバンツと叩きながら彼が急に大きな声を出した。その衝撃でロックグラスは横転し、茶色の液体が絨毯に染みを作る。

急に怒鳴られて驚いた彼女は思わず肩を竦めた。

いつも穏やかな彼の表情がみるみる豹変し、見た事の無い彼の一面が見える。以前、グレースが言っていた『坊ちゃんは何事に関しても自分について来れる奴だけについて来ればいい、って言うタイプなんです』と、まるで俺様気質だと言わんばかりの話の初めに聞かされた時は、‘あんなに優しい彼が？’と少し信じられない気持ちだったが、今の彼を見ているとグレースが言った事はこういう事だったのかも思い知る。

「何故僕を避けるの？僕が何をしたの？全く判らないよ！」

「さ、避けてなんか・・・」

「！！僕が君の少しの変化も見抜けないような、そんな鈍感な男だと思ってるの?!」

彼女が何かを言う度に腑に落ちない彼は、どんどん怒りが増していく様だった。

目の前の彼は怒りに身を任せる様に、彼女を追い詰める。

いつもの優しい彼はいつの間にか姿を消していた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第4話〜嘘〜

静寂だけが漂う部屋の中、彼はソファ―に座ったまま彼女と視線を合わせようとせず、眉間にしわを寄せて親指の爪を噛んでいる。そんな普段とは全く違う彼を見て、どうやら本気で彼をイラつかせてしまったと言う事が嫌でも判る。

絵里香の話が頭の中から離れず悩んでいるのを彼には悟られないように、普段通りに振舞っていたつもりだったがあっさりと気付かれていた。

勿論彼の事は本当に好きだ、むしろ彼の国の言葉で言う所の‘愛してる’に相当する。

しかし、絵里香との付き合いは長く、嘘をついているとは到底思えないし、単なる噂程度の話で友達の幸せを踏みにじるような事を言う子でもない。

ままとまりのつかない頭が悲鳴を上げている

彼に直接尋ねられたらどれだけ楽か。

そんな思いが頭の中に浮んで来ては何度もかき消すのを繰り返している。

話の出所を考えると、真っ先に絵里香が疑われるのは判っている。絵里香に火の粉が飛ぶのだけは避けなければ。

「。。」

沈黙が続く中、彼が両膝をパンッと叩いて立ち上がると、俯きながら両手でバッグを握り締めている彼女の前まで来て立ち止まる。

彼も又、両手をポケットに突っ込んで目を合わせずに俯いていた。

やがて、『はあっ』と、肩で大きく息を吐く声が聞こえ、思わず身構える。

「　じめん、」

彼が力なくポツリと呟いた言葉に、彼女は驚いて顔を上げた。

目の前には、先程までイラついていた彼の姿は無く、反対になんだけ弱々しく見える彼が居た。

ズボンのポケットに仕舞い込んでいた手を出すと、彼女の反応を見ながらそっと抱きしめてくれる彼に、心がズキンツと痛んだ。

「・・・。」

彼の胸元に頬を寄せながら、彼が自ら謝ってきた事に驚きを隠せなかった。以前、グレースが『自分の気持ちを隠してまであなたの側に居たかった様ですよ』と言った言葉がフラッシュバックする。本当は自分がイケナイのに、彼に飽きられて当然の事をしている筈なのに、突き放す所か、『君にみつともない所を見せてしまった』と彼は自分自身を悔いた。

「・・・でもね、思った事は何でも言ってくれないと、僕は君の心の中を読むわけじゃないんだ。僕が気付かないうちに君に嫌な思いをさせてるんじゃないかと思うと、やりきれないんだよ。言えば済む事もあるんだから」

「・・・っ、ん。」

言っってしまうのか？

今の彼なら言っても大丈夫かもしれないと、心の中で葛藤する。

何度か口を開いては声に出せずを繰り返して、どうやって話を切り出そうか迷っているうちに、彼が先に口火を切った。しかし、それは思いも寄らない言葉だった。

「・・・僕の、セックスが良く無かった？」

「セツ!?!?!」

思わず声が裏返り両手で彼を押し退けたが、彼の手は彼女の両肩をしっかりと掴んでいて離してくれそうも無い。

「どこがいけなかったの？」

真顔で愛の行為についてダメだしを求められ、彼女は完全にパニックでしまった。

さっきまで真剣に彼との今後の未来について思い悩んでいたのが馬鹿みたいに思えてくる。

「そ、そ、そ、そんなのっ! 聞くものじゃないでしょっ!」

「何で? 大事な事だよ? 気持ち良くない事されても嬉しくないですよ?」

「!」

「・・・まあ確かにあの日はちょっと、性急過ぎたかなと思ったりもして反省してるんだ。本当はもうちょっと前戯に時間を掛けたか

息を呑んでいるのが判る。

「　、大人の女性にはね。月に1回来るものがあるの」
「う、うん・・・？」

上目遣いで、「ね？わかるでしょ？」と言うような表情をすると、しばらく考えていた彼が急に悟ったかの様に慌てだした。

「・・・。　　っ！！！」

彼が両手で自分の口を塞ぐと、面白いほどにみるみる顔が赤くなっていく。うんうんと頭を何度も上下させ彼女の言っている意味がようやく理解できた様だ。

「もう！女性にこんな事言わせるなんて！」
「い、ごめん」

「・・・。」

彼に嘘をついてしまった事を後悔しつつも、次回はこの手はもう使えないのだと思うと、今度彼に会うまでにこの悩みを解決しておかなければならず、当分眠れない日々が続くのかと溜息が自然に零れ落ちた。

“はあっ。・・・しっかし、　。”

自分の性行為のダメだしを真顔で求める彼が、こんな事で顔を真っ赤にさせるとは・・・

彼の「恥ずかしい」と思うスイッチは一体何処にあるのだろうか
と、耳の先まで赤くして狼狽している彼の横で彼女は首を傾げた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第5話〜迷い〜

ガヤガヤと騒がしい店内で少し遅めのランチを取る事にした。

店の中ではおじさん達が窓際に座った彼女を、チラチラと物珍しそうに見ているのが横目で判る。

テーブルに肘をついて顎をのせ、大したモノが見えるワケでもない窓の外の景色を見ていた彼女は、そんな事もお構い無しといった感じだった。

「あいよっ！お待ち！」

恰幅のいいおじさんに運んでもらった魚定食を見て、何故だかホツとした。箸を持って小さな声で『いただきます』と呟くと、舌なめずりしそうなのをぐっと堪えて、箸をパチンツと割った。

「おう！いらっしやい！」

店の扉が勢い良く開くと同時に、店主の威勢のいい声が店内に響き渡る。

「おやっさん、俺いつものね」

聞き覚えのある声に、先程までのホツとしていた気持ちが一気にスーッと冷えてしまいそうになる。なるべく、その声の主の方を見ないように体を窓側に向けながら、鯖の味噌煮を箸でつついた。

「、？」

カウンターに座ろうとしたその男性が窓際の彼女に目をやると、スタスタと近づいてきて彼女のテーブルの横で立ち止まる。

「あれ？何でこんなトコいるの？」

頭上から聞こえてきたその声に、思わず「ああ、見つかってしまった。」と思ってしまった。面倒臭そうにして顔を上げると、ソコには思ったとおり、後輩の健人が不思議そうな顔をして立っていた。

「こんなトコで悪かったな！」

「あ、わりいわりい、おやっさんの鯖の味噌煮はこの町1番だよ！」

カウンターの中から聞こえる店主の怒号にも、サラッと返せる愛想のいいケントは、何処へ行っても人気者だ。

「・・・誰も座っていいなんて言ってないよ」

彼女の前に健人が座ると、不機嫌そうに彼女は言い放ったが、健人はもの見事に彼女の話聞き流した。

「珍しいね、カナちゃんでも定食とか食べるんだ」

「何それ？いつも私はステーキでも食べてると思ってるの？」

いつも彼と上品な美味しい食事を食べていると、たまにはこういう庶民的な味が恋しくなる。心なしかスカートのホックがキツクなってきたし、彼と会わない時の食事位ちゃんと気を付けなければ、と言つのが本当の理由だったけれど、

「それは過大評価じゃない？」

「?!」

何となく冗談のつもりで言った言葉に真面目な反応を返してきた健人にムツとした。

なんでコイツはいちいち癪に障る様な事をいうのだろう。そして本当にタイミング良く現れる。

彼との事を誰かに聞いてもらいたかったが、絵里香には当然相談出来ない。相談相手にするには少々力不足の様な気がしたが、藁にもすがる思いで健人に少し話を聞いてみることにした。

彼女と同じ、鯖の味噌煮定食が運ばれるのを健人が目で追いながら、嬉しそうな顔をして箸を割る。

その表情があどけない子供の様で、思わず笑みが零れた。

「いつただきまあ〜すっ!」

手を合わせて鯖の味噌煮を口に入れるとすぐに、ほかほかのご飯を口一杯に頬張った。もしかもしかとまるでリスが餌を頬張っているみたいで、頬をぷっくら膨らませている。

「あのさあ、ちょっと聞きたいんだけど」

「うん?」

食べるのに必死なのか、決して箸は止めない。久しぶりに彼以外の異性と食事をしてみて、これ程までに違うものかと驚いた。

「なんだか友達の彼が女癖が悪いって噂があるらしくて、別れた方が良いつて他の友達がその子に言ってるんだけど、当の本人には彼がそんな人には見えなくてどうしていいか悩んだよね」

「ふむ」

「健人ならどつちを信じる？彼女が男癖が悪いつて噂があったら」
「俺？　　あ、おやつさん飯お代わり！」

うんうんと頷いて健人の答えを待った。相変わらずリスの頬袋を膨らませながら、ご飯をががごと一気にかきこむと、空になったお茶碗を店主に見せるようにして上へ持ち上げた。お代わりが来るまでなら、話してやってもいいぞ？と言わんばかりに、箸を置きお茶を啜る。

「うーん、俺なら彼女を信じるかなあ」
「ほう」

友達の話の筈なのに思わず口元が緩んでしまい、慌てて顔を引き締めた。

「でもさ、その噂を聞きつけた子とも長い付き合いで、嘘をつくよ
うな子じゃないのよね」

「噂でしょ？」
「う、うん。まあ・・・」

「俺は噂話ってだいつきれー。絶対話が元ネタよか大きくなるじゃん。そんなくだらない話よか、目の前に居る子を信じないでどうすんのよ？」

ふと　以前社内では彼女が噂の的にされた時、救いの手を差し伸べてくれたことを思い出した。

そうだ、健人はそういう奴なんだ。

嬉しそうにご飯にがつついていっている健人を見ると、そんな風には全然思えなかったが、今の発言でなんだか健人が大人に見えてきた。

これが男と女の感覚の違いなんだろうか。

「自分が相手の事をどれだけ思っているかが大事なんじゃない？噂なんかには惑わされなくて相手をちゃんと見てあげなきゃ。自分から見てもそんな子に見えないんであれば、俺は彼女を信じるね。噂話程度で別れるなんて事はしないし、仮にその噂が本当だったとしても俺は後悔しない。」

お、おやっさんサンキュ」

「そっか・・・」

健人は運ばれて来たてんこ盛りの白米に又吸い寄せられるようにして、箸を動かした。

健人が意外にしっかりとした考えを持っていることに彼女は正直驚いた。周りに流されずに自分の思うがままに生きる。健人はそれを実行している様に思えた。

「？」

味がすっかり染み込んだ手元にある鯖の味噌煮をじっと見つめていると、ぬつと健人の大きな手の平が視界を遮る。顔を上げると、箸を咥えながら健人がニカニカと微笑んでいた。

「相談料。高いよ?」

「えー?お金取るの?!」

「払えないって言うならさ、そのじーつと見るだけで一向に消化されない鯖の味噌煮、貰っちゃおうよ?」

「あ!ちよつ!」

そう言って彼女の鯖の味噌煮に箸を伸ばして来て、慌ててトレイ

ごと横にずらすと、その振動で彼女のお味噌汁が左右に波打ってお椀の外に零れだす。

「ああっ！もう！何やってんのよ！！」

さっきまで落ち込んでいた気持ちが嘘のように無くなった。彼と会っている時の緊張感と比べると、健人と話している時は彼女は自然体でいられる。

「まじでさ、今度飲みに行こうよ。そしたらもっと人生の相談に乗ってやるよ」

「私の方が人生の先輩だっつーの！！」

嫌な奴だと思っていたが、ほんの少し健人を見直した。この時の彼女には、この出来事がこれから訪れる彼と健人の狭間で揺れ動く感情の前触れであると言う事に、当然気付くはずもなかった。

第6話〜策略〜

「藍子さん、JJエンターテイメントさんからお電話ですー」

あれから彼女の代わりに同期の藍子が、JJエンタの担当を任せられた。どうやら今回彼女が担当を外された時に、自ら進んで代わりに申し出たらしい。

「もしもし〜？あ、ジャックさあ〜ん？」

それから言うものまるであてつけのつもりなのか、ジャックから電話がある度、猫なで声を出し、勝ち誇った様な顔で彼女の方をチラチラと見てはほくそ笑んでいる。あの噂を流したのはきつと藍子だろう。入社した時から何かとライバル視される現状を考えると、そう思うのが自然だった。

わざと彼女に聞こえるように大きな声で、

「こないださあ〜ジャックさんに食事誘われちゃってえ〜」

「ええー?!あのイケメン社長に?」

彼女をこき下ろす為なら何でもするのか、キャピキャピと自分が注目的になるのを楽しんでいる様だ。

藍子の術中に見事に彼女は嵌って行く。絵里香の話ともリンクするの追討ちをかけた。

“ なんて、藍子なんかと・・・ ”

打ち合わせと称して食事に行っていたのは、自分だったからこそ思っていたのに・・・。持って行き場の無いやり切れない気持ちに、その場で硬く手を握り締めた。

「おーい、皆今日の作業は終了だ！時間厳守だぞ！ところで今日の幹事は誰だ？」

「・・・はあ〜い」

ボスの呼びかけに面倒臭そうに藍子が手を上げる。

今日は年度末の打ち上げがあり、ボスは毎年この日を楽しみにしていて、どんなに忙しくても強制的に仕事を終了させられる。

皆が次々と仕事を終え、打ち上げ会場に向かう準備を始め出し、彼女も仕事の手を止めデスクの上を片付けていると、彼女の携帯電話が鳴った。

電話の液晶画面に写し出された名前が、彼からの着信を知らせている。周りを見渡して、皆飲み会モードになっているのか、ガヤガヤと騒がしいオフィスに安心してその電話に出る事にした。

「もしもし」

（もしもし？僕だけ。今日これから時間ある？）

「あー、ごめん。これから打ち上げがあるの」

（・・・その後は？）

「あー、んー、毎年恒例の行事で、2次会もあるから・・・今日は

無理っばい」

(・・・そっか、わかった)
「ごめんね」

電話を切った後、彼女はやりきれない気持ちになった。

確かに2次会はあるが、彼女は毎年断っている。今年もそのつもりだったけれど、今の気持ちで彼に会う事をためらってしまい、又つい嘘をついてしまった。

「はぁ・・・どうしよう・・・」

大きく溜息をついてポツリと呟きながら、携帯電話をコートのポケットにしまい込んだ。

“ へえ・・・ ”

「何してんの？藍子。幹事なんだから早く行かなきゃ」

「あ、うん・・・」

彼女が電話しているのを一部始終見ていた藍子はニヤリと片口を上げた。

「うーし！うんじゃあ次行くぞ！次！！」

変に声をかけてしまうと、無理矢理にでも二次会に連れて行かれるのを判っている彼女は、会場の入り口付近でたむろする団体に見つからないように、そつとその場を離れ闇へと紛れ込んだ。

コートのポケットから携帯電話を取り出し、彼にかけようかしばらく悩んでいると後から誰かの足音が近づいて来た。そうかと思うと、おもむろにポンと肩に手を置かれ、飛び上がりそうになりながら振り返れば、健人が煙草を銜えながら彼女の顔を覗き込んできた。

「何処行くの？」

「びっ、くりした・・・、もう、何処って、帰るのよ」

「んじゃあさ、今から飲みに行こうよ。こないだの相談料として」

「はあ？本気で言ってるの？」

「すぐそこにおんもしれえート」あるんだ」

健人が彼女の手を取ると、さっさと歩き出し半ば強引に彼女を連れ去ろうとする。

「ちょっと、誰も行くななんて一言も・・・」

「つまんなかったら帰っていいって、ほら行くよ」

「あ、ちよっ・・・」

いつもなら断固拒否！だったのが、この間の印象が良かったからか、少し位なら、いいかと、この時は気を許してしまった。躓

きそつになりながらも健人の手に引かれて夜の闇へと共に消えていった。

「。。。」

「藍子ー？次行かないの？」

「。。。ああーごめん。ちょっと急用思い出したから、先に行つて」

藍子は片手をひらひらと振ると、二人が歩いていった方へと歩き出した。

看板も何も無い薄暗いドアから出てきた二人。ふてくされているケントに対して、彼女はと言うとお腹を抱えて笑い転げている。

「ぶっ！、ぶっはははははっ！ひ、ひいゝゝ！おっかしい。

「。。。。」

涙を浮かべながら笑いが止まりそうに無い彼女。健人はと言うと

面白くなさそうに口を尖らせて明らかにムツとしていた。

「もう！いい加減にしろよな！笑いすぎ！」

「ひいひい・・・だってお兄さん達に囲まれた時の、あの健人の顔ときたら・・・プツ」

健人が連れて行った、‘おもしろいトコ’と言うのは実はゲイバーだった。

店の前で笑い転げてる二人を横目で見ながら、勇ましい男達がそのドアの向こうへと姿を消していく。

店の前の少し陰のある場所では、中で盛り上がった男性同士のカップルが激しいキスを繰り返しているといった、なんとも普段の生活の中ではまあ滅多にお目に掛かる事の出来ない光景が、あちらこちらで普通に行われている。

最初に入った時は、目を泳がせていた彼女もいつしかその場を楽しめるほどの余裕が出てきて、今では同性同士のラブシーンでさえも目も暮れなくなっていた。

彼女は声を出して思いつきり笑った。

こんなに笑ったのはいつ振りだろう？

健人となると辛い事や悲しい事も、いつしかどこかに行ってしまう。

「あははっ！は、・・・、」

彼女は自然と心の中で彼と比べてしまっていた。少なくとも彼がこんな店に彼女を連れて行くこともないだろうし、ましてや町の定食屋さんに連れて行かれる事も無いだろう。

彼とどう接していいのか判らないが故に、肩肘張らない付き合い

が出来る健人への気持ちだが、心の中で勝手に膨らみだしている事に気付いて思わずかぶりを振る。

「さて、気を取り直してもう1軒行くぞ！」

「ええ〜？まだつき合わず気？」

健人が彼女の肩に手を回し、地下にあった店から階段を上り切ると、彼女の目に飛び込んできた光景に背中が凍りついた。

「　　っ！！」

「　　力、ナ？・・・。」

携帯をぎゅっと手に握り締めながら、悲しそうな目で彼女を見つめているジャックが、何故かソコに居たのだった。

第7話　嫉妬

明かりの殆どない暗い路地裏に、いつものブラックコートを羽織り車の横で佇んでいる。彼がこつちを振り向いた瞬間、顔ははつきり見えなくともその凡人離れたスタイルに、彼以外の人物を思い浮かべることが出来なかった。

車のハザードが点いたり消えたりするその明かりでやっと、彼の悲し気な表情が読み取れる。

「な、なんでここに・・・？」

潮が引いて行く様に楽しかった気持ちも無く消え去り、あとと言つ間に絶望の淵に立たされる。彼女の顔はひきつり、声は震えていた。

「藍子ちゃんから、君が話があるからココに来て欲しいって言うって電話があつて・・・。君に何度も電話したんだけど・・・。」

思わず手でコートの上からポケットの携帯に触れた。コートのポケットに入れっぱなしで、彼からの着信に全然気付かなかった事を今更ながら後悔する。

絵里香と飲んでいた時は、片時も離さず側に置いていたと言つのに、一体どうしたと言つのだらう。彼を信じたい気持ちがあったのは事実だが、それよりも今の現実から逃れたいと思つてしまったのだのかも知れない。

やけに藍子と親しげに思える彼の言い方が、彼へ謝罪する所か逆に詰め寄りそうになる。

「藍子・・・ちゃん？」

彼の眉が上がり、‘そうだけど?’と言った表情で頷く彼に、あの噂は嘘であつて欲しいと願っていた彼女の思いが打ち砕かれた気分だつた。

彼は眉を顰めて自分の事より、一体これはどう言つ事なのか説明して欲しそうにしている。

店の周りにたむろする連中を横目で見ながら彼が近づいて来て、頭を左右に振り手を広げ彼女の目の前で立ち止まつた。

まるで恋人に裏切られたかのような表情を浮べ、信じられないでも言いたそつだ。

「僕に嘘をついてまで、こんな所に来たかつたなんて」

「そ、そういうわけじゃ・・・嘘ついた訳でもないし」

彼女の言葉に彼の表情が変わり、大きな目が少しつり上がった。ほんの少しの無言の間が彼女を苦しめる。

「へえ?会社の恒例行事つてこの事なの?」

「そ、それはもう終わつて・・・」

「じゃあ2次会?彼と二人で?」

「.....」

隣で固唾を呑んで様子を見守つている健人に手を向けながら、俯いた彼女の頭の上から矢継ぎ早に疑問をぶつけどだした。

彼の口調が徐々に強くなつて来て、彼女は返す言葉が見つからず、ただ、黙つて彼の話を聞いているだけになる。

あまりにも、一方的な彼の態度に、しばらく二人の様子を見ていた健人がたまりかね、とうとう口を開いた。

「ちよつとあんた、自分勝手すぎるんじゃないかね？」

「け、健人！」

彼が彼女の顔の前に手を広げ、彼女が健人を制止するのを拒んだ。

「自分勝手？僕が？」

「ああ。あんたこそあつちこつちの女に手え出しといて、いざ自分の女が思い通りに行かなくなったら切れるって、男として最低じゃね？」

「なつ?!、健人!!!」

「僕が？あつちこつちの女性に手を出す？」

健人が何を言っているのか理解不能といった表情で、事の経緯の説明を聞こうと視線を健人から彼女に移すと、彼と視線を合わすことが出来ない彼女は彼から目を背けた。

いつか自分で彼に確かめようと思っていたことが、以前相談した話が友達ではなく彼女自身の話だと気付いていた健人によって、心の準備が出来ていないまま突然その時がやってきてしまう。どうやってこの場を乗り切れればいいのか、混乱している彼女には何も思い浮かんで来ない。

「……。」

彼女からの説明も貰えないと思った彼は、視線を又健人に移し、

「ちよつと意味が良くわからないんだけど……、とりあえず君はもう帰っていいよ」

鼻で笑いながら健人にそう言っていると、彼女の肩を抱いてくるりと背を向けた。あくまでも紳士的に声を荒げず接していた彼だったが、次の瞬間、とうとう逆鱗に触れてしまった。

「おい、ちよつと待てよ！話はまだ・・・」

健人が彼の肩を掴むと同時に、その手を振り解く様に振り返り、嫌悪を露にしながら人差し指を健人につき立てた。

「いいか？カナは僕の恋人なんだ。部外者はこれ以上彼女に付きま
とわないでくれ！」
「っ！！！」

鬼の様な形相で凄まれ、流石の健人も何も言い返す事が出来ず黙
り込んでしまった。

ギロリと睨みつけながら再び背を向け、待たせていた車の後部座
席に二人で乗り込むと、車は静かに動き出した。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第8話〜誤解〜

健人を一人残したまま、走り去った車の中では沈黙が続いている。そんないつもの違う二人の様子を、ビルは時折ルームミラー越しに伺っては、小さく溜息を吐いた。

狭い路地裏に車を停めていたので、二人が乗った途端車を出すには出したが、行き先はまだ告げられていない。

「ジャック、家でいいのか？」

「、ああ」

彼は肘をつき、その上に顎をのせながら、窓から見える外の景色を瞬きもせずじっと見ている。窓ガラスに映る彼の表情は険しく、とても声をかけられる様なものではない。結局彼の家に着くまでお互い一言も発せられる事が無かった。

彼の家の扉の前に着くや否や、彼は車から降りてさっさと一人で玄関へと行ってしまふ。いつもなら彼女側の扉を開けてくれるのが、その態度が今の彼の気持ちをよく表していた。

そんな彼を見て、不安になった彼女はミラー越しに目でビルに助けを請うが、「大丈夫」と言わんばかりに、ビルは頷くだけだった。それでも車から降りるのを躊躇していると、突然彼女側の扉がガバツと開き、どうやら痺れを切らしたらしい彼が、彼女の手を掴むとまるで引き摺り下ろされるように、足早に家の中へと引っ張られた。

「い、痛いよ、手を離して」
「。。。」

彼は何も言わず長い廊下を歩いていく。彼の長い足だと彼女はついていくのがやっとだった。

握られた手首が痛い。引っ張られる腕が痛い。

何を言っても彼の耳には届かず、仕方なく自分が小走りになる事で、なんとか腕の痛さだけでも逃がす事位しか為す術は無かった。

彼の部屋に入ると、手にしていたコートをソファーに放り投げ、一直線にベッドルームへと向かう。先程コートを放り投げたのと同じ様にして、彼女を無駄に広いベッドに突き放すと、そのまま彼女に覆いかぶさって来た。

「やつ…、ちよつ、何、を?!」

彼女の問いかけに一切応じない彼の目は冷たく、絶対に彼女と目を合わせようとはしなかった。ただ淡々と彼女の首筋に顔を埋めて、舌を執拗に這わし、己の欲望を満たそうと躍起になっている。

「ね、ねえ、こんなのやめて・・・話を聞いてよ!」

彼の肩に置いた両手に力を入れても、何の意味も無いのは判っている。幾ら細身とは言え、服の上から手で触れただけでも判りそうな程、筋肉質の無駄な肉の無い彼の肢体。それに比べて華奢な彼女がどれだけ頑張っても敵うわけが無い。

それでも、明らかに様子のおかしい彼に、何の話し合いも無くただ身体を差し出すのでは、彼の家に初めて来た時と同じだ。

きつと、きつと、彼は判ってくれるはず。

しかし、その願いは虚しくガラガラと音を立てて崩れ落ちていった。

彼女のシャツのボタンに彼が手を掛けた時、彼女は更に激しく抵抗した。彼女の腹部にまたがっている彼は、上体を起こして体重をかけ逃げられないように彼女を拘束すると、首元のネクタイをすすると解いた。

「ねえ、お願いちゃんと話し合おうよ。こんなのおかしいよ、ね？」
「……。」

彼女が何を言っても全く表情を変えないまま、彼女の細い手首を両手で掴むと、頭上でその手首を重ね、大きな手ひとつで彼女の両手首を掴んだ。

「っ！、やつ！何?!」

無言で彼がその重ねた手首をネクタイで縛り付けていく。何度、抵抗しても全く歯が立たない。もがけばもがくほど彼の力は強くなり、次第に手首に痺れを感じだした。

「…と、の…?」
「え?」

やっと口を開いたと思ったら、蚊の鳴くような声で上手く聞き取れない。思わず聞き返してしまったことをこの後すぐに後悔した。

「彼と・・・あの男とセックスしたのかって聞いてるんだ!!」

鋭い目つきで大声で怒鳴りつけられ、彼女は思わず肩を竦めて目を閉じた。

そろつと目を開けると真上には気が狂ったかのように、怒りを露にしている彼が歯をギリツと噛み締めながら彼女を見下ろしている。

「な、何を言つて、...?勘違いしてる!」

「勘違い?...はっ、そうだったらどんなに良かった事か!」

「本当よ!ちゃんと訳を話すから!お願いだからこんな事しないで!」

お願い、これ以上、私に不信感を抱かせないで!

「 やつと判つたよ、僕を避けてた本当の理由が。あんな若造が君の体を弄んでるなんて、...許せない。僕が、僕が今から綺麗にしてあげるからね・・・」

「っ?!」

完全に、健人との仲を疑い混乱している彼の言葉を聞いて背筋がゾツとした。彼女の髪を撫でながら微笑んでいる彼の目は、生気を感ずる所か、正常な人間とは思えない。

手首を拘束し、もう逃げられないだろうと悟った彼は、彼女の上から一度体を離すと横たわる彼女を舐めるように見つめながらジャケットを脱ぎ、それをベッドの外に放り投げた。

激しく抵抗したためずり上がってしまったスカートは、もはや本

来の役割を果たしていない。程よく肉付いた艶かしい太腿が無造作に投げ出され、それが逆に彼を誘っているようにも見える。

「カナ、綺麗だよ」

全く止める気配の無い彼は彼女の懇願も虚しく、情け容赦なく彼女の内腿にその大きな手を伸ばしていった。

LOVE IS MAGICAL

第9話〜愛するが故に〜

彼は何かにとり憑かれたかのように、彼女の必死の願いも聞き入れず、ただ自分の欲望を満たす為だけにスカートの中を弄った。

彼女は悲しげな表情を浮かべて、ただ黙って彼を見つめている。そんな彼女を見ていると、ほんの少しだけ残っている正常な思考が、頭の隅を掠めて行った。

“・・・僕は一体何をしているんだ？こんな事をして彼女の気持ちを取り戻せるとでも思っているのか？”

それでも、今自分が犯している罪を止める事が出来ない。

彼女を誰にも渡したくない、自分でも理解し難い激しい嫉妬感が彼を襲う。

今まで女性に対してこれ程の感情を抱いた事は無かった。彼女に対する気持ちが大きすぎて、ひとたび裏切りを感じた途端、それは狂気に変わり果て頭の中は支配欲の塊と化す。やがてそれが彼を陵辱へと駆り立てるのだ。

彼女の唇にキスを落とす度に、彼女の肌に手を滑らすほどに、彼女が今、自分の目の前に居て、自分のモノだけになろうとしているのだと思うと、自分が犯している罪が少しずつ形を消して行き、その内その‘罪’そのものも跡形も無く消え去るのだと、彼は信じていた。

「ねえ、貴方はこれで満足なの？私を抱けば誤解は解けるの？」

黙っていた彼女が眉を顰めながらそう言つと、劣情の世界に入り込んでいた彼が現実の世界に引き戻される様に、その手の動きをピタリと止めた。

「……、」

「これで誤解が解けるなら……。でも、私はどうなるの？あなたに対する不信感はどうやって消すの？」

「……不信、感……。？」

「こんなレイプまがいの事をして、この先貴方の事を信用していいと思う？貴方は満足かもしれないけれど、私には不信感しか残らないよ」

「そ、んな、ただ僕は不安……。そう、不安なだけで。君が僕の手から離れて行くんじゃないかって、そう思うと……」

「こうする事で貴方のその不安が解消されるの、ね？……判つた。でも、これは取って頂戴。私に対する侮辱としか思えない」

逃げないから。

両手首を彼の顔の前に差し出しながら鋭い目つきで言い放つ。彼は『わかった』と一言呟いて、手首を締め付けていたネクタイをスルスルと解いていった。

解放された手首を擦っている彼女に手を伸ばすと、身体を擦ってかわされる。

「待つて……。自分で、脱ぐから」

上体を起こした彼女は、彼に背中を見せるようにして、潔く乱れていた衣服を脱ぎ捨てていく。その行為がわずかだが彼への反抗を示すと共に、私は貴方の奴隷ではない、と意味しているかの様に見える。

彼女の真つ白な肌が姿を現すと、既に見たことがあると言つのに、思わず息を呑む。肌に触れているもの全てを脱ぎ捨て、両手で腕を抱きしめるようにして、そのままベッドの上に座っていた。

彼が彼女の肩を抱きそつとベッドに横たわらせると、彼女の胸の上で交わった腕をゆっくりと開いていく。

「……？」

手首にうつ血した痕を見つけてハッと我に返った。そんな自分を見つめている一つの視線を感じてソコへ目を向ければ、一際冷静な顔で黙って自分を眺めている彼女に酷く動揺した。

その表情から『そうよ、貴方がやったのよ』と言われている様な気がし、一気に罪悪感に苛まされる。

“ ああ、僕は何て事を…… ”

後悔しても、もう遅い。

「カナ……僕は君を愛している。ただそれだけなんだ」

彼の目をじっと見つめたまま、彼女は黙ってコクリと頷いている。

「今から僕がする事を許して欲しい。早くこの不安から解放されたいんだ」

うつ血した手首に口付けると、そのまま彼女に溺れていった。

「…っ！…っ」

彼女の上で彼が上下する。

苦しそうな顔で目を瞑り、何かに耐え忍んでいるような彼女を見るのが辛い。彼女の顔の横に彼も顔を埋め、首筋を弄ってはそんな彼女を見ないようにして動いた。

「カナ、カナ…何処にも行かないで…」

彼の呼びかけに小さく頷いている彼女が、その時何を考えていたか彼は全く理解しようとはしなかった。ただ自分の中に渦巻く嫌な感情を落ち着かせたいが為に、無我夢中で彼女を壊してしまうんじゃないかと思うほどに、何度も抱いた。

翌朝、この出来事がさらに彼自身を追い詰める結果となる事にも気付かずに……。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第10話 それぞれの想い

「くそっ！」

ベッドに横たわり煙草をくゆらせながら、さっきの出来事を思い起こしては苛立ちを隠しきれず舌打ちを打つ。隣でうつ伏せに寝そべっていた女が、その声に反応する様に起き上がって声を掛けた。

「どうしたの？」

「何でもない」

何でもないとは思えない程、彼の顔が歪んでいる。女はそんな事は特に気にも掛けず、「どうでもいいわ」と言った表情で彼の素肌に自分の肌をすり寄せた。

「・・・ねえ、今晚泊まってよ」

「まさか」

視線を合わせることも無く、鼻で笑ってはサイドテーブルに置いた灰皿へ灰を落とし、女の話聞き流している。

「いいじゃない。大変だったんだからね？急に会いたいなんて言うていきなり家来るんだもの。あの人、珍しくもう帰るってメールが来てたから、慌てて『父が来てるから』ってそれとなく、まだ帰ってくるなアピールするの大変だったんだからね。もうちょっとで旦那とニアミスする所だったのよ？」

「ははっ、そりゃやべえな。　、で？今日ボスは？」

「終電無くなつたからカプセル泊まるって。『お義父さんに宜しく』だって。あの人、うちの父が苦手なのよ。」

「ボスらしいな」

肺の奥まで煙を吸い込んで、煙を吐き出しながらクツクツと苦笑いをしている。

「ねえ、健人。次いつ会える？」

「・・・もう会わないよ」

ふーっと煙を吐くと煙が目にも染みるのか、目を細めながら吸い掛けの煙草を灰皿へ押し付けると、ベッドの下に落ちていたワイシャツを拾い上げそれに袖を通し始めた。

「何で？」

「ちよつと久しぶりに火が着いちやっただけみたいでさ」

「えー？何それ？許さないから」

女は悪戯っぽく笑うと、シーツの中に潜り込み彼を逃がすものかと、彼の男の部分に舌を這わし健人の思考を徐々に崩壊させていく。

「おい、やめろ、よ…っく、」

無理に呼び起こされた情欲は、いとも簡単にその女の手に墮ちていく。払い除けようと掴んだ女の頭に指を差し入れると髪を掻き乱し、女の巧みな舌使いにいつの間にか溺れていった。

毎朝セットしている目覚まし代わりに流れ出すクラシックが聞こえ、彼は夢うつつで目を覚ました。

「。。。」

すぐに彼女を探すが彼の広いベッドには、彼女の姿はおろか温もりすら無い。

嫌な予感がした彼はすぐさま起き上がると、部屋中を駆け回り彼女の痕跡を探す。

「・・・力、ナ？」

デスクに向かい受話器を掴むと、受話器を持つ手がわずかながら震えていた。内線で守衛室のボタンを押し、返ってきた言葉は、彼女は夜中のうちに出て行ったという事だった。

「！！、なんで、引き止めなかったんだ！」

思いつき受話器を叩きつけると、ふらふらとした足取りでソファーに向かい、頭を抱え込みながらソコに腰掛けた。又もや大きな不安に駆られ、胸の鼓動が早さを増していく。

「嘘だろ・・・。」

ふと、昨晩は確かに無かったテーブルに置かれた小さなメモ用紙を見つけ、慌ててそれを手にとった。

『ごめんなさい。』

叶子

たった一言だけ綴られたメモだったが、夜中に彼女が勝手に出て行ってしまった事で、その言葉が一体何を意味するのか、たった一言でも十分理解出来るものであった。

「そんな・・・カナ・・・」

自分が昨晚犯してしまった罪の大きさを知り、愕然とした。

ランチを済ませた彼女は食後の紅茶を淹れようと、事務所の隅でお湯を沸かしていた。

シュンシュンとケトルが吹いているのも気付かずに、壁にもたれながら昨晚起こった出来事をボーっと思い返している。

“あれでよかったんだよ、ね?・・・”

誰に聞くわけでもなく、ただ自分に言い聞かせていた。

「ココに居たのか」

急に声がして、定まっていない視線がピントを合わず。声が聞こえる方を向くと、背の高い健人が給湯室の入り口を立ち塞いでいた。

「ああ、健人か。・・・昨日は」「昨日は・・・」

「　、あ・・・何？」

健人に先に話すように促すと、むくれた顔の健人は特に表情も変えず低い声で話し出した。

「昨日はあれからどうしたの？」

「別に？どうもしないよ？」

「んじゃ、なんでそんなボーっとしてんの？」

「し、失礼ね！ボーっとなんてしてないわよ！」

「お湯・・・とっくに沸いてるみたいだけど？」

「え？ああ・・・」

ガスを止めようと彼女が手を伸ばした時、健人の目に飛び込んだ物が気になったのか、おもむろに彼女の手を掴んだ。

「な、何？」

健人が彼女の手を掴み袖を捲くると、切れ長の健人の目が大きく見開いた。

「ちよつ、ちよつと」

「何、コレ・・・」

その手首を隠す為に、もう一方の手で抑えようとする、その手も健人に掴まれてしまう。両方の手首に同じ痕がついているのがバシ、慌てて手を振り解いた。

「何でもないわよ」

これ以上この事に触れてくれると言わんばかりに、そっけなく言い放つがそんな事位で引っ込む健人ではない。

「アイツにやられたのか？」

「……。」

無言は肯定の証。

「あのおっさん、そんな趣味があつたのかよ」

「バカ！違つわよ！」

「んじゃあ、コレ何さ？」

「あ、あなたには関係無いつて！もう……終わった事なんだから」

「終わった？……つてもしかして別れたの？」

「さあ、ね」

曖昧な答えで逃げている彼女だったが、はつきり聞かなくても彼女の表情からして、二人の関係はもう終わったのだらうと健人はあらかじめ予想がついた。

「へえ」

腕を組みながら健人はニヤリと笑った。

「ますますおもしろくなってきたな」

「何がおもしろいんだか」

「なるほど……それでか」

「さつきから何言ってるの?!」

意味不明な事ばかり口にする健人がうっとおしくて、ティーパツクをちやぶちやぶとマグの中で手早く上下させた。さっさとこの場を立ち去ろうとしている彼女に、健人の口から妙な言葉が出てきて、思わずピタリと動きを止めた。

「俺、JJエンタの担当になったんだ」

「はあ?!」

突然言い出した健人の言葉に耳を疑った。

“ 健人が彼の担当に? 何故? ”

胸の中で渦巻く何かが、彼女を更なる恐怖へと誘う。

「さつき電話があつたみたいでさ、ボスからそう言われたよ。今日夕方に早速初顔合わせだつてさ」

「なっ、なんであんたがっ?!」

「さあ? 力の差を見せ付けたいんじゃないの?」

「い、意味判んない・・・」

「しかし、昨日は啖呵切られて俺全く反論できなくてさ、こりゃ俺には敵わねえなあって正直思ったけど、俺を指名してくる辺りそうでもなかったみたいで嬉しいよ。久しぶりにやる気が出てくるわ」
「いや、だから意味判んないって・・・。あつ藍子は? 藍子はどつなつたの?」

健人は手の平をピンと伸ばし水平にすると、その手の平で首の前

をスツと横切らせた。

マグを片手にオフィスに戻ってみると、隅の方で両手で顔を塞ぎ泣き崩れているアイコが居た。いつものようにあちらこちらで噂話で持ちきりだったので、彼女はあえて誰かに尋ねなくとも耳を澄ますだけでおのずと情報が入ってくる。

「藍子、」エンタから直々にクビ宣言されたらしいよ」

「えーっ?!まじで?なんて言われたの?」

「秘書からの電話でね」社長はもう貴方の力を必要としていません」
「だっっ〜!」

「えー?!コワ〜!!流石外資系だよね・・・てか、あそこの仕事ほぼ終わってるのになんで今更クビになったの?」

「そこはわかんないんだけどさ。それより!先方から後任を指名されたらしくてさ」

「え?指名?誰?誰?」

「ケ・ン・ト!」

「えっ?!まじ??何で?大抜擢じゃん!」

「おつかしいよねー?健人まだ3年目だよ?ありえなくない?」

「あっ、しっ!藍子がこっち見てるよ・・・」

殆どの情報を与えてくれた二人は藍子に睨まれて散っていった。

藍子はその二人を睨んだついでに、何故か彼女までも睨みつけてくる。

“ 何で私が睨まれなきゃ・・・私の方が睨みたいよ、ったく。
ん？なんだ？こっちに来るし！”

藍子は彼女の横で立ち止まり、頭の上から鬼のような形相で彼女を見下ろした。

「許さないから！」

一言そう言い放つと、オフィスのドアから飛び出して行った。

第11話 意地のぶつかり合い

過去から未来へ、
めまぐるしく変化を遂げる毎日に飽きる事無く、朝、目を覚ませば又今日という日が訪れる。これから見る未来への期待は出来ても、必ずしも結果とは結びつかない。過去の過ちを振り返ったとしても、塗り替える事は出来ない。

ただ、ただ、人は訪れる日々を何となくやり過ごしていく。

彼と出会ってしまった事で彼女自身だけでなく、周りの人間にも変化を及ぼしている事にふと気付く。

健人は彼に出会った事によりカナに夢中になって行き、藍子は彼に出会った事によりカナを陥れる計画を立てる。

彼女が知らぬ間に物事がどんどん進んで行っている様で、少なからずの恐怖を覚えた。

彼は一体何者なのだろう？

いつしか彼の事をそんな風に思うようになってしまった。

「では、そういう事でこれからも宜しくお願いします」

打ち合わせ室で皆が一斉に席を立つ。窓際に立って外の景色を見ていたジャックは、皆が席を立つのを見計らって声を掛けた。

「あ、君はちよつと残ってくれる？」

「・・・はい」

あからさまにむすつとしてゐる健人の様子を見て、ボスがそつと耳打ちする。

「（くれぐれも粗相の無いようにね！）」

「・・・。」

肩をポンポンツとボスに叩かれて、打ち合わせ室の扉がバタンツと音を立てて閉まると、窓の外を見ていた彼が、くるりと振り返り腕を組んで軽く足を交差させ、そのまま窓枠にもたれかかつて鋭い視線で健人を射抜いた。

窓の外から差し込む橙色の光が彼を包み込む。

ゆるく結んだ肩ほどの長い髪。タイトなスーツを品良く着こなし、ノーネクタイのシャツはボタンが2、3個外されていて、覗かせた喉仏に大人の男の色香を漂わせている。

ルーズにおろされた前髪の間隙から、人を見極める様な大きなブラウンの瞳で物言いたげにじつと健人を見つめていた。

“チツ・・・いちいちカツコイイ奴だな”

‘男でさえも見惚れる男’、彼にはそういう言葉が良く似合う。自分には無い大人の男の魅力に、悔しくて羨ましくてたまらなかつた。

「健人君・・・だったかな？」

「健人でいいです」

今回の件で、彼とは同じスタートラインに立っていると自負していた健人は、‘君’付けされるのを拒んだ。相手はクライアントではあるが、今のこの瞬間はきつと、‘野嶋叶子’と言う一人の女性を賭けた‘男’と‘男’でしかないのだと思い、対等である事を望んだ。

「君、この間僕があっちこっちの女性に手を出してるって言ってたよね？あれ、どういうことか説明してくれるかな？」

「そのままですけど・・・カナちゃんがそう言ってたし。実際、藍子先輩にも手えだしてたでしょ？」

「アイコ・・・ああ、アイコちゃんの事か。手を出すって・・・僕はただ仕事の話で電話で2、3回したただけだけ？それが君の言う‘手を出している’って言う行為に当てはまるのなら、僕は君の言った通りあちこちの女性は愚か、男性にまでも手を出している事になるね」

クツクツクと含み笑いをして、健人の言う事を全否定した。

「カナといい君といい、何か勘違いしてないかい？」

「・・・。」

ジャツクの表情が急変し、眉間に皺が寄る。口元は笑っているが、細められた目は、まるで見えにくいモノを見るようにして、健人と言う人間を観察しているようだ。

「君はカナのなんなの？」

「・・・今は、後輩です」

「、今は？これからカナとどうにかなるつもりでいるの？」

フンツと鼻で笑う彼にむっとした健人は、立場を忘れ彼に食って掛かった。

「今はそうかもしれないけど、いつか絶対振り向かせて見せるよ！」

急に声を荒げた健人を見て、ジャックは腹を抱えて笑い出した。

「っ！なっ何が?!」

「はははっ・・・あのねえ、言ったでしょ？カナは僕の恋人だつて」

「カナちゃんはあるたと別れたつて言つてたよ！」

その科白に、一瞬彼の顔が凍りついた。瞬きを忘れ、一段と低い声で健人に戒めるように昨晚の情事を語る彼の目は又、生気を感じられない。

「、カナがそんな事言うわけが無い、昨夜だつてあんなに何度も愛し合つたんだからね」

「っ!？」

「あ、何？悔しいの？　ハッ・・・悪いが君の出番は回ってこないよ」

仕事上での立場だけでなく、ここでも上に立とうとする彼は健人を罵倒し、どんどん感情的にさせていく。その様はまるで、相手を

感情的にさせる事により、相手のミスを引き起こそうとする戦術にも見て取れる。

健人はそんな彼の策略にも気付かずに、まんまとぬかるみに自分から足を踏み入れてしまった。

「か、勝手に言ってるよ！遠くの‘ステーキ’より近くの‘鯖の味噌煮’が良いって事があるたにも判る日がすぐにやって来るから！」

健人の苦し紛れとも言える言葉を聞き、ジャックは大きな目を更に拡大させてパチパチと瞬きをしている。

「・・・クツ、」

一気に笑いがこみ上げてきて、手を叩いて健人を嘲笑った。

「な、何がおかしいんだよ！」

「・・・あ、あのね、君。人と話をする時はちゃんと相手に話が伝わる様な物の言い方をしないといけないよ？それが社会人としての常識だと思うけどね」

彼に笑われた事が悔しかったのか、それとも彼の言っていることが正しくて恥ずかしかったのか、健人の顔が少し赤くなる。

「つ、つまり・・・あんたみたいなお高い人間と一緒に居るよか、俺みたいな同じ視線でモノを見れる・・・って言うか、と、と、兎に角っ！砕けた付き合いが出来る男の方が良いに決まってるって事だよ！この間だっけ見ただろ？！彼女の心底楽しそうなあの笑顔！」

「よし！言っちゃった！」と思ったのも束の間、腹を抱えて笑っ

ていたジャックはピタリと笑うのを止めると、窓枠にもたれていた身体を起き上がらせ、健人の前につかつかと歩みだした。健人の前でその足を止め、絶対零度の冷ややかな眼差しに射抜かれて、思わず身体を仰け反らせた。

「なっ、なんだよ・・・」

「君は彼女に何を与えて上げられるんだ？ 地位・名声・権力・財力。全てを兼ね備えている僕には、彼女に与えて上げられるものが沢山ある。しかし、それよりも彼女に対する愛情は人一倍・・・いや、何十倍、何百倍も彼女に惜しみなく注いでいるつもりだ。これ以上の物はないだろう？ こういうのも男の魅力の一つになるんだ・・・いいかい？ 君は僕と彼女を取り合うゲームのスタートラインにすら立ててないんだ。参加する事すら出来ないんだからね、いい加減、身の程を知るのがいいよ」

「っ！！・・・」

『ケント君』。最後にそう付け加えて、ジャックは打ち合わせ室から姿を消した。ジャックに一気に捲くし立てられた健人は、昨晚凄まれた時と同様に言い返す言葉が見つからず、ただその場に立ち尽くしていた。彼の言っている事は的を射ていて、ぐうの音も出なかったと言うのが本当のところだ。

彼女につく虫を自ら排除しようとする、ジャックの彼女に対する愛情は本物だ。

昨日今日、彼女の事を本気で気になりだした程度の健人には、到底太刀打ち出来ないと言う事を、ジャックにことごとく思い知らされる羽目になった。

「・・・くっそ!」

ジャックに対し完全に負けを感じた健人は、その場で拳を硬く握り締め、やり場の無い気持ちに苦虫を嚙んだ。

LOVE IS MAGICAL

第12話 互いの気持ち

エレベーターの扉が開き、ズボンのポケットに両手をつっ込んだ彼が、その箱の中から飛び出すようにして出てきた。すれ違いざまに頭を下げる社員達に目も暮れず、早く一人になりたくて早足で廊下を進んだ。

「。。」

彼はあれ程の彼女の笑顔を引き出せる‘健人’と言う人物に興味を持った。やる事が子供染みているとは思ったが、担当を健人に変える事で、自分の方が優位にあるのだと知らしめたかったのだ。どうあがいても自分のライバルにするには分不相応なのだと言う事を、身をもって判らせようとした。

しかし、健人を思う存分こき下ろす事によって、健人が彼の脅威になっているのだと、彼の心の中にある感情を映し出す結果となり、その事実が彼に大きな打撃を与えた。

「、社長、明日の定例会の資料ですが」

「悪い、ジュディス。後にしてくれると助かる」

「え？・・・あ、はい。かしこまりました」

彼がニツコリと微笑むと、社長室の扉を開け後ろ手でそのドアを閉めた。

ドサツとソファアの背もたれに背中を預けるように座り、天井を

仰ぐ。もやもやとした感情が纏わりつき、それがいつまでも彼を苦しめている。

『砕けた付き合いが出来る男の方が良いに決まってるって事だよ！この間だつて見ただろ？！彼女の心底楽しそうなあの笑顔！』

「……。」

健人の言った科白が頭に引つ掛かり、思い出すだけでたまらず吐き気を覚える。健人の言った通り、あの日、彼が目撃した彼女の楽しそうな笑顔を見て、頭を打ち砕かれる様な感覚に陥ったのは確かだ。

『カナちゃんはあんたと別れたって言ってたよ！』

「そ、んな……。」

天井を見上げていた顔を両手で塞ぐと、何度も彼女の名前を呼んだ。

彼と最後に会ってから早や5日が過ぎようとしていた。

あれから彼からの連絡は一切無く、あの日、彼の事が判らなくなり思わず逃げるようにして彼の元を去ってしまった事を、彼女は後

悔し始めていた。

彼の事だからきつとすぐに何も無かったかのように連絡をしてくるのだろう。と、彼女は高を括っていた。

今、彼はどんな気持ちでいるのだろう。

彼女の周りはいつになく静かだった。結局の所、絵里香の言う通り、藍子もそして彼女も良い様に弄ばれたのであろうか。

そう信じたくは無いの、今の現状を考えるとそう思わざるを得なくなる。

彼とは連絡が途絶え、健人も彼と打ち合わせで会って以来、彼女の周りをうるつくのをやめた。

藍子は例の如く、どうやら1週間の休みを、取らされて、いるのか、最近職場で顔を見ていない。

これで、彼と出会う前の生活に戻った。又、今まで通り平凡な毎日を繰り返すだけ。

「。。。」

『カナ、こっちへおいで』

目を閉じると、両手を広げて微笑んでいる彼が浮ぶ。

『カナ、愛してるよ』

伏せられた長い睫毛が次第に距離を詰めてくる。

「……ち、がっ」

全ては幻想の世界だったのだと自分に言い聞かせ、耳を両手で塞いでかぶりを振った。

（二週間後）

「おや？坊っちゃん又こんな所で。もう春といえどもまだまだ夜は冷えますぞ」

「ああ・・・うん」

漆黒の夜空に浮ぶ綺麗な月を仰ぎ見ながら、彼は大きな溜息をついた。

「最近カナさんをお見かけしませんか、どうされたのですか？」

その名前を聞いてピクツと彼の肩が小さく反応する。

「・・・グレースは良く見ているね」

「ほほ。毎日真っ直ぐ会社から帰宅なさって、いつも家で食事されてるのを見れば誰でも判りますよ」

月を見上げていた彼は振り返ると、手すりにもたれかかるように

肘をついた。

「しばらく会わないようになって、色々気付いた事があるよ」
「と、いうと？」

「僕はね彼女を疑っていたんだ。誰か他にいい男がいると思ってね。それを問いただすと彼女は否定したのに、僕は彼女の話を聞こうとはしなかった。どうやら僕の事も疑っていた彼女はその事で僕を信じられなくなっただけだ」

「ほほ。相思相愛ですな」

その言葉を聞いて彼は、はーっと大きな溜息を又一つ吐き、眉間に深い皺を刻み込んだ。

「もう随分連絡も取ってないんだよ。落ち着いたらきつと彼女から電話してくれるって思ってね。・・・でもその自信も最近は無くなってきたなあ」

「御自分から会いに行けばよろしいのでは？」

「・・・。」

又、グレースに背を向け腕を組んで手すりに肘をつくとき、もう一度空を見上げた。

「それが簡単に出来ればどれだけ楽か」

「坊っちゃんらしくありませんね」

「・・・。」

「人は会わなくなるとだんだんそれが普通に思えてくるものです。」

御自分から距離を置かれて何が伝わるのですか？何度も話し合っ
て人はお互いを知っていくものです。この際洗いざらい話してしまっ
たらどうでしょう。それで嫌われたら、又その時考えればいい事じ
やありませんか」

ゆつくりと彼が振り返ると、ニコニコいつもの笑顔でグレース
は微笑んでいる。

どうしていいのかわらなくなっている彼の背中を、いつもグレー
スは優しく押してくれる。その手はとても暖かく、愛情に包まれて
いるのだ。

「ただ・・・」

「？」

「坊っちゃんは今度、幾分度過ぎる所がありますので、努めて冷
静にお話された方がいいかもしれませんね」

そう言うと、グレースは舌をペロツと出してウィンクをした。そ
の仕草に曇っていた顔に少し笑顔が戻る。

「酷いなあ・・・でも有難う。頑張っ見て見るよ」

この日を境に、彼の溜息は徐々に減り、夜に月を見上げる事も無
くなった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第13話 二人の住む世界

どんなに辛い事があって深く傷ついても、ひとたび眠りにつけば毎日嫌でも朝はやって来る。

いつしか彼女は毎朝起き抜けに携帯電話を手に取り、着信履歴をチエックする事を欠かさなくなってしまった。日を追う毎に人は不思議と悲しく辛い感情は霞み、楽しかった日々だけが鮮明に頭に残る。その想い出にすぎるようにいつか彼から連絡があるのではないかと夢見て、朝だけではなく何度も携帯電話を見ては小さく溜息をつく毎日を繰り返していた。

「ちよつと！カナちゃん！ここ、何でこの色使ったの？」

「え？先方の指定の色で・・・」

「違うよ！良く見て！」

「・・・あ」

「もう！頼むよ！」

「・・・すみません」

いつもの彼女ならこんな初歩的なミスを犯す事などないのに、彼の家を飛び出したあの日から上の空になる事が多くなっていた。

肩を落としながらオフィスを後にする。
ビルのエントランスを出ると、柔らかな懐かしい声が彼女の耳に聞こえてきた。

《 、、カナ・・・ 》

「・・・?!」

彼女の顔から笑顔が零れ落ちる。

良く彼が待つていてくれたその場所を振り返ると、そこは普段と何も変わらないいつもの風景で、すぐに笑みは消え思わず苦笑いが出た。

“ とうとう幻聴まで聞こえるようになったのか・・・ ”

くるりと向きを変え駅への道をいつもの様にトボトボと歩き出した。

街中は家路へ急ぐ人達で溢れかえっている。

その人の波に乗り切れていない速度で下を向いて歩く彼女は、後から来る人達に追い抜き様に邪魔だと言わんばかりに睨まれ、中には舌打ちを打つ者もいた。

ドンッ

「 、、あっ・・・ 」

肩がぶつかり力なく握っていた彼女のバッグが落ち、路上に中身

が少し散らばった。

慌てて屈んで荷物を拾う彼女の目は涙で潤み、目が霞んで上手く拾えない。

いつの間にか彼を探している自分が情けなくて、道路に這いつくばっている自分が情けなくて、思わず堪え切れなくなった感情が溢れ出して来た。

「何やってんの?!」

顔を上げると、健人が周りの人と全く逆の流れで彼女の方へ向かってくる。彼女の腕を掴むとすぐに立ち上がらせ、代わりに手早く落ちていた彼女の荷物を集めだした。

スクツと立ち上がりバッグを差し出すと、

「こんなトコで屈んでたら皆に踏まれるぜ?」

「あ、ありがと……」

「……」

小刻みに震えながらバッグに伸ばしたその手を健人に掴まれて、その人の流れから飛び出し駅とは違う方向へ黙々と歩き出した。

「ちょ、ちょっと……あんた会社戻る所じゃないの?」

「やめた」

「やめたって……」

「お前のそんな顔見たらほっとけないだろ」

「……」

、お前？

いつもの彼女なら、‘なんであんななんかに『お前』呼ばわりされなきゃなんないのよ!’と絡んでいただろう。

何故だかこの時は『お前』と呼ばれた事が妙に心地良く、彼の口からは決して聞くことが無いだろう言葉に、少しの癒しを覚える。

外回りから戻った健人と繋いだ手は、彼とは違い冷たくゴツゴツしていて、それが彼女と同じ位置で同じ物を見ているのだと感ずる。

「。。。」

そして、所詮彼は手の届かない人、自分とは違う世界にいる人なのだと感じた。

「健人」

「。。。。。」

「健人、何処へ行くの？」

「・・・わかんねえよ」

「何それ？」

可笑しくなつて彼女は思わず笑い出した。彼女の辛そうな顔を見て、思わず彼女の手を掴んで歩き出したはいいものの、健人は何処

に行こうとしているのかなんて考えていなかった。ただ、側に居てやりたい。ただそれだけで彼女を連れ去った。

彼女が足を止め健人が掴んでいる手が離れる。

「もういいよ。私、帰るから」

「・・・なんで？」

「見かけによらずあんたって優しいんだね。勘違いしちゃいそうだよ」

「・・・勘違いなんかじゃないよ」

「あはは、だね。恥ずかしいわ」

「俺、本気だから」

「へ？」

「本気でカナちゃんと、ちゃんと付き合いたいと思ってる」

「・・・?!」

思いがけない告白に彼女は戸惑いを隠せない。案外いい奴だと思いかけていた事には間違い無いが、8歳も年下の健人を今までそういう対象に見たことが無かったのだから、動揺するのも無理も無い。

『冗談でしょ?』って言いかけた言葉を思わず飲み込んだ。真っ直ぐに自分を見詰める健人の目に、本気の色が見えたから。

「すぐにあんな奴忘れさせてやるよ」

「ちょ、ちよつと待って健人落ち着いて・・・あんたと私8歳も離れてんだよ?」

「関係ねえーし」

「か、関係あるよ！同時に小学校通えないんだよ？」

「なんの例えだよ……」

「とりあえず、今の話は聞かなかった事にするから……じゃね」「っ？！」

そうやって、健人に背を向けると又、駅に向かって歩き出す。しかし、すぐ様健人に腕を掴まれて、その足を止められた。

「年下だから相手にしないなんて、馬鹿にすんなよ！　、くそっ！どいつもこいつも！」

「……もしかして、彼に何か言われたの？」

健人の脳裏にジャックに罵倒された時の事が浮ぶ。悔しくて、腹ただしくて、でも何も言い返せなかった。ジャックにとっては赤子も同然の様な無様な自分に地団駄を踏んだあの日。

「ねえ、何を……一体何を言われたの？」

「あいつ、俺の事散々コケにしゃがって、俺はカナちゃんに見合う男じゃないっ、自分こそが彼女の恋人に相応しいなんて事を偉そうに……でも俺はっ！……、　っ？！」

「そ、う……彼がそんな事を」

彼女の表情を見ると焦点の合わない目で口元を緩めている。健人が言った話を聞いて諦めかけていた気持ちに、まるで希望の光が差し込んだようだった。

「っ!!」

「・・・えっ? な、何?!」

そんな彼女の顔を見て健人は思わずカッとなり、ビルの隙間にある路地裏に連れ込んだ。彼女を壁に押し付けると、すっぱり隠れてしまいそうな小さな顔を両手で掴み、黙れと言わんばかりに、無理矢理彼女の唇を自らの口で塞いだ。

L O V E I S M A G I C A L

第14話 安らぎを求めて

「!？」

手にしていたバッグが転げ落ち、さつき健人が拾ってくれた荷物が又地面に散らばった。首を竦め両手で健人を必死に押し返しても以前エレベーターの中で無理矢理された時のキスの時とは比べ物にならない程の力で拘束されている。

硬く閉じた唇を抉じ開け、もつと中に入れてくれと健人の舌が歯列をなぞり上げると、つま先から頭の天辺までゾワリとした感覚が這い上がっていく。

「…んあっ…や、めっ!…」

思いつきり身体を捻ってやっとの事で唇が解放されても、すぐに逃がすものかと強く抱きしめられて首筋に顔を埋めた。

「…ちよっ、ちよっ、ヤダっ!健人、止めてよ!」

恐怖で体が凍りつく。まるで耳を貸さない獣の化身の様になった健人は、その手を全く緩めようとせずつ次第に彼女の体を侵蝕していく。彼女の胸を貪る手が快感どころか、吐き気さえも引き起こす。その手が進むのを止め様と彼女が手を掛けるが、妨害されまいと力を込めた健人の手にまるで握り潰されるかと思うほど強く揉みだかれてしまう。

「…っ!い、いたっ…」

もがいても、もがいても健人の腕から逃げる事が出来ず、拘束の

手が緩められるとは微塵も感じられない。

「っ？！」

下半身に体温を感じ、スカートのサイドスリットに侵入した健人の手が太腿を這い出したのがハッキリと判る。このままじゃ、健人のされるがままになってしまふ。そんな恐怖から一刻も早く逃れなくて、突き飛ばす事が出来ないのならと屈んですり抜けようとしたが、そのまま地面に押し倒されて余計に分が悪くなってしまった。

“ な、何コレ？！何でこんな事になるの？！”

全体重を掛けて押し掛かれて逃げ場を失ってしまった。しかも、倒れこんだ拍子に足の間に健人の膝が入り込み、太腿を這っていた手が閉じることの出来なくなった無防備な内腿に触れた。 万
事休す。

「…い、やめっ！ っ！」

声を出した隙に、又もや健人の唇が彼女の口を塞ぎ、チャンスとばかりに舌を侵入させた。引つ込めた彼女の舌を追い回すように、健人が執拗に絡みつく。

“ い、嫌だ！こんな所で、こんな奴と！！”

次の瞬間、

「っ！うあああー！！！！！！」

思い切り舌に噛み付き、健人が怯んだ隙を見て今度は股間めがけ

て膝を思い切り突き上げた。

「つぐあー!!」

力なく彼女の上から崩れ落ちる健人を押しつけ、息を乱しながら自分のバッグと散らばった中身を拾うとヨロヨロと立ち上がった。

「あ、あんたはね・・・私を好きな訳じゃないのよ。ただ彼に負けたくない、ただそれだけでそんな事言ってるだけなのよ・・・そんなくたらないプライドの為だけに、私を巻き込まないで!!」

そう吐き捨てる、股間を押さえもがき苦しんでいる健人を残し、フラフラと路地裏を後にした。

「。。。」

さっき倒れこんでしまった時に、思い切り体重をかけられてどうやら足をくじいたのか、足首がじんじんしてそれを庇うようにして歩いていった。

悔しくて、悔しくてたまらない。

何度も手の甲で唇を拭って健人の感触を消そうとするが、あの恐怖が消えるどころかどんどん色濃いものになってくる。

「…ふっ…。うっ…っ」

彼に会いたい。

空を見上げると目から涙が零れ落ち、夜空に浮ぶ綺麗な月が彼と会った日のことを思い出させた。

「あー疲れた！もう流石に帰っていいよね？」

広く閑散としたロビーに革靴とヒールの音がコツコツと鳴り響く。

「いえいえ、まだこの後打ち合わせがありますよ。皆社長の帰りをまつているんですから」

「ええー！？まだあるの？・・・ジュデイス、君は僕を殺す気じゃないだろうね？」

怪訝そうな顔でジュデイスを見ている彼に、まるで相手にしていない様な顔つきでジュデイスが彼を横目で見た。

「年度末ですからね、仕方ありませんよ」

「やれやれ、アメリカでは12月が年度末だから2回も年度末があ

る様なもんだよ。これじゃあ、おちおちデートの一つも出来やしな
い」

肩をすくめ両手を広げながら溜息を吐いた。

「あら？お相手いらっしやるんですか？」

「……。」

「ああ……失礼しました」

彼に無言で睨まれたジユデイスは、片手で口を押さえわざとらしく失言を詫びている。

「ジユデイス。こういう時こそ上手く切り返す技を身につけないと、秘書としての資質が問われるよ？」

二人が楽しく談笑しながらエレベーターホールへと向かう途中、受付の女性が彼を小声で呼び止めた。

「あ、あの、社長」

「？」

口元に手を当てて話しづらそうにしている受付の女性に、彼が近づいていく。

「何？どうしたの？」

「あ、あの、さっき社長に会いたって女性が来られて、外出中だつて言ったら帰ってくるまで待つって言っんですけど……。」

「うん。」

「あの、その、凄く汚らしい格好で……。」

「……？　で、今その女性は？」

受付の女性がちよんちよんと指し示す方向を見ると、ロビーの片隅のガラス越しにじっと佇む彼女の姿が見える。

「……。」

思わず笑みが零れ落ち、仕事の疲れも吹っ飛びそうな勢いだ。

「お掛け下さいって一応言ったんですが、『ソファアが汚れるから』
つてずつと立ってるんです。やはり警備員呼んだ方がいいですか？」

受付の女性の話も上の空で、彼女に少しづつ歩み寄った。

「……。」

少しづつ距離が近づくにつれ、次第に彼女の異変に気が付く。それに合わせて彼の顔も歪んでいく。ゆっくりと進めていた歩調を一気に速め、慌てて彼女の名前を呼んだ。

「カナ！」

「……あつ。」

その声を聞いて振り返った彼女の唇は赤く腫れあがり、淡い色のスーツは背中もお尻も泥だらけで、ストッキングも無残に破れていた。

「あ、あの……ごめんなさい。急に来ちゃって……」

「……。」

何かに怯えるようにして、小刻みに震えていた彼女に彼は何も言わず、羽織っていたコートを脱いで俯いている彼女の肩にそれをかけた。

「あ、の……」

彼の優しさに触れると、会いたかった感情が一気に溢れ出し、彼女はそのまま彼の胸に顔を埋めた。まだ震えている彼女の肩を包み込むようにして、両手でぐっと抱きしめると、

「もう大丈夫だよ。心配しないで」

何も彼女に問い詰める事無く、彼女の頭をそっと撫で続けた。

LOVE IS MAGICAL

第15話 屈辱

頬に伝わる彼の温もり、彼の匂い、彼の胸の鼓動
それは心の奥底ですつと彼女が求めていたもの。

彼は何も言わず無条件に抱きしめてくれる。

彼女はもうこのまま離れたくないと願う。

それは叶わぬ願いと知りながら・・・

彼女を優しく包み込むように抱きしめながら、普段とは違うある
事に気付いていた。

わずかに鼻につく男性用のフレグランス。

「っ！」

あの日、健人と二人で打ち合わせ室で話をした時に、つけていた
香水だと言う事に気付くと彼女を抱く手に自然と力が入った。

「ジュデイス!!」

彼女の背中を抱いたまま顔を横に向けると、まだ受付で立ち呆け
ている秘書を大きな声で呼びつけた。その声を聞いて、ジュデイス
が慌てて彼に駆け寄ってくる。

「は、はい」

「ジュデイス、彼女を頼むよ。僕の部屋まで案内して」

「は、はい、わかりました」

「・・・カナ。ジュデイスと一緒に先に行つてて？」

彼女の肩に手を置いて胸に顔を埋めている彼女に優しく声をかけるが、彼女は顔を埋めたまま頭を横に振った。

「・・・僕もすぐに行くから、ね？」

「ど、どござ、こちらです」

「・・・。」

彼の胸からゆっくりと離れていくと、失われた温もりをもう一度求めたくなる衝動に駆られたのか、伸ばした手を慌てて引っ込めた。肩にかけられた彼のコートを両手でぎゅっと掴むその姿は、まるで彼のぬくもりをずっと感じていたいかの様だった。

「。。。」

彼女をジュデイスに託すと、真っ先に受付に向かって真っ直ぐ歩き出した。コツン、コツンとその足音が静かなロビーに響き渡っている。

「あゝヤダヤダ、今日は飛んだ残業になっちゃたわ」

「ほーんと。さっ、やっと片付いたしさっさと帰ろつよ」

彼が近づいて来ているのにも気付かずに、受付の二人はおしゃべ

りを続けていた。

「あははっ、・・・あ」

一人が彼に気付きもう一人に目で合図すると、二人は慌てて姿勢を正した。ピタリとカウンターの前で足を止めた彼の表情は全く無く、何処か不機嫌そうな社長の姿を目の当たりにした二人は立ち竦んでいた。

「・・・彼女は何時に来たんだ？」

「あ、はい・・・確か、20時過ぎだったと思います」

彼が右手のシャツの袖を捲り腕時計を見ると、時刻は23時を過ぎていた。

「あの、社長。私達そろそろ上がりま・・・」

一人がそう言い掛けると、彼がカウンターにパンツと手を叩きつけた音が、立ち竦んでいる二人を更にビクつかせる。

「きゃっ!」

思わず身構えてしまった二人に、彼は長い前髪の間隙から怒り狂ったモノの様な眼差しで二人を睨み付けた。

「君達はあんな姿の彼女を、あんな目立つ所でまるで見世物のように3時間も突っ立たせてたのか?! 僕に連絡もよこさないのはおろか、別室に移す事も服をかけてやることもせず!」

「あ・・・いえ、あの・・・」

いつもは女性に優しい彼が物凄い剣幕で怒り出し、二人は目を合わせて戸惑っている。

「自分達がああ状況だったらどう思う？平気であそこで立っているのか？同じ女性なのに彼女の気持ち判らないのか！」

「も、申し訳ございませんっ！」

シーンっと人気の無いロビーに沈黙が走る。

深々と頭を下げたまま、顔を上げる事が出来ない二人の頭上に大きな溜息が零れると、

「・・・もう、帰って良いよ」

「は、はい。お先に失礼しま・・・」

厭きれ果てて怒鳴る事も馬鹿らしいと言うように、カウンターに前のめりになっていた体勢を戻し、その場から去るように体を半身ずらすと最後にこう付け加えた。

「ああ、それと。もう来なくていいから」

「え・・・？」

「君達はクビだ」

「?!、・・・」

人差し指と中指で二人を指しながらその場を離れると、受付の二人はただ何も言葉を発する事も出来ず、青い顔でその場に立ち尽くしていた。

早く彼女のそばにいてやりたい

はやる気持ちを抑えることが出来ず、エレベーターホールへ急いで向かった。

「？」

とうに向かっているはずの二人がまだそこにいて、良く見ると彼女は足を庇いながら歩いているのが判り、ジュデイスは彼女の歩調に合わせて背中に手を添えながら傍らで心配そうにしている。

「っ！！」

痛々しい彼女の様子を見た彼は、眉間に深い皺を刻み、下唇をぐつと噛んだ。

「ジュデイス！」

彼女を支えるようにして歩いていたジュデイスが振り返ると、ジャケットの内ポケットに手を入れながら二人のもとへと駆け寄り、長財布の中からカードを一枚取り出すと、それをジュデイスに差し出した。

「これで下の店に行って彼女に合いそうな服を買ってきて」
「は、はい」

そう言っつてジユデイスから彼女を預かると、ヒョイツといとも簡単に抱き上げた。チンと軽い音が聞こえエレベーターの扉が開くと、ジユデイスが中に入り彼の降りる階のボタンを押してから急いで箱の外に出る。

「ありがとう、ジユデイス。頼んだよ」

「い、いえ……」

“社長……いい女性いたんだ……”

扉が閉まると、暫くジユデイスはそこに立ち尽くした。

早足で社長室に向かう。
閉まった扉を前にして彼女は、

「もう大丈夫だから降ろして」

そついう彼女に彼はニッコリと微笑むが、扉へと向かうスピードは一向に変わらない。思わずぶつかると思い目を瞑ると、直前でく

るりと回り器用に肘でドアノブを下げながら、背中で扉を押し部屋の中へと入っていった。

ソファーにゆっくりと彼女を降ろすと、すぐに扉の側まで行って、空調をいじったのか部屋に暖かい空気が流れ込んできた。調整を終えた後もせわしなくデスクに向かい、受話器をとっておもむろに何処かに電話をかけたしている。彼女はただ黙って彼のそんな行動を目で追っていた。

「あ、僕だけど。うん・・・待ってくれてたトコ悪いんだけど、今日はもう皆帰って良いよ、又明日にしよう。」

静かに受話器を下ろすと、次は部屋の隅に向かい力チャ力チャとマグやティーポットを戸棚から出し始める。

「あの、まだお仕事中だったんじゃない？私に構わず、」

先程の電話の内容が、自分のせいで彼が一方的にキャンセルしたのだと判り、申し訳ない気持ちで一杯になる。それでも彼は紅茶の準備をする手を止める事無く、彼女に背中を向けたまま横顔見せた。

「ん？大丈夫だよ。明日できることは明日にする主義なんだ、そんな事より・・・」

彼が何かを言いかけて彼女は少し身構えた、何を聞かれるのだろう？こんな出で立ちで突然現れた自分を見てどう思っただろう？ほんの少しの間が彼女に取っては何時間もの沈黙にも感じられる。

彼が紅茶を入れる手を止めて彼女の方へ振り返ると、まるで何年

も会っていない人にやつと会えて感傷に浸っている様な、そんな顔をしていた。

「逢いに来てくれて本当に嬉しいよ」

目を逸らすどころか瞬きもせず、彼が真剣な表情を浮かべると、彼女の目をじっと見つめながらそう言った。

「今日は沢山話をしようね」

「う、ん・・・」

彼女の勝手な行動を彼は一切責めようとはしなかった。責める所か嬉しいと言つて暖かく迎え入れてくれている。その優しさに触れ、締め付けられた胸元をぎゅっと掴んだ。

第16話 判り合う為に

一直線に彼女に向けられているぶれのない瞳は、彼の内にある本心を露にしている。

以前、彼女の話に一切耳を傾ける事無く、一方的な感情で彼女を抱いたあの日は全く違い、今の彼にはどこか余裕さえも感じられた。

くるりと彼女に背を向けると、デロングのエスプレッソマシーンから賑やかなスチーム音が耳を劈き、湯気かもわもわと彼の周りで立ち上っている。茶葉を蒸らしている間に、ジャケットを脱ぎ、反対側の壁にあるクローゼットの中に上着を仕舞い込んだ。ネクタイを片手でクイツと緩める仕草にぼうつとしてしていると、彼は又、紅茶を用意する為に反対側の壁へと向かった。

「あの、さ」

「？」

「そんなにジツと見られると、ちょっと恥ずかしいかも」

「えっ？ああ、ご、ごめんなさい！」

「あ、いや、いいんだけど、ね。ははっ・・・」

彼は鼻の下を指で擦って照れながら、カチャカチャと又お茶を入れる準備を始める。

つい、久しぶりに会った彼を補給するかの様に、彼の一拳一動に目を見張ってしまっていたのがバレてしまい、かあつと頬を染めながら肩を竦めて俯いた。

「君がいなくなったあの日から、僕は又どうしたらいいのか判らなくなっただんだ」

背中を向けたまま、彼がゆっくりと話します。

彼の広くて大きな背中。いつもは遅く見えるその背中がジャケツトを脱いだせいか、今は少しだけ寂しさを漂わせている。

「。。。。」

「君の置手紙を見て、正直戸惑ったよ。すぐに会いたかったけど会ってくれるだろうか？電話したいけど出てくれなかったらどうしよう？ってな具合にね。結果を知るのが怖くてずっと逃げてた。その内に又仕事が忙しくなって、逃げている自分を必死で正当化してたんだ。逃げてるんじゃない、仕事が忙しいからだ　　って。でも少し間を空けたお陰で僕がやる事全てが全部裏返しになって、結局君を傷つけていたと言う事にやっと気付いたよ。　　ったく、本っ当情けないよね」

『あははっ』と、力なく笑いながらマグを持って彼女の隣に腰を沈める。ミルクティーを手渡され、彼女はそれで手を温める様にして両手でマグを包み込んだ。一口紅茶を口に含むと、じんわりとお腹の辺りに温もりが広がっていく。それと同時に、彼の言葉で彼女の心の中も温もりを帯び始めた。

「　　、私も貴方と会えなくなって、貴方の事を思う気持ちがい程大きかったか・・・判った気がする。自分から逃げ出すようにして出て行ったのに、日を追う毎に苦しくて・・・キツかった」

マグを見つめながら彼女が言った思いがけない言葉に、彼は「そんな馬鹿な」とでも言わんばかりにポカーンとした顔をしている。

「・・・本当に？」

黙ってコクリと頷く彼女を見て、みるみる口元が緩んでいく。そんなならしない顔を見られないようにと、隠すようにして片手で口を塞いだ。

「あの・・・少し聞きたい事があるの。ずっと私の中で引っかかってて、その事を考えると、頭が混乱しちゃって」

「あ、うん。何？何でも答えるよ」

彼は緩んだ顔を両手でこすり、姿勢をただして両手を膝の上に置いた。

「あの・・・この間、健人が貴方に言った事なんだけど、・・・あれは本当なの？」

彼が自分にとって、とても大切な存在である事に気付くと、心の中つつかえているものを解消しようと思いつける。その返事が仮に残念なものであっても、全てを受け止める覚悟で。

「この間僕に言った事・・・？」

「その、女性を弄ぶ的な・・・」

「ああ！その事が。彼にも言ったけど一体何処からそんな話聞いたの？根拠のないデマだよそんなの」

「でも、絵里香は！・・・、あ」

思わず絵里香の名前を出してしまい、しまったとばかりに両手で口を塞ぐが既に遅かった。

「絵里香ちゃん？・・・ああ、ラ・トゥールでの話を聞いたんだね」
黙って頷いている彼女に、彼はふうーっと息を吐くと困った顔を
して話し出した。

「何処まで聞いているか判らないけど、何人かの子に付き合っ
て欲しいみたいな事を言われたよ」

自分から尋ねておいてなんだが、彼の女性関係の話聞くのはか
なりの拷問だ。ラ・トゥールで何人かの子、って事は他の店でも又
何人かの子がいるのだろうと予想されるワケで・・・。

「でも、そんな気にはなれなかつたから丁重にお断りしたんだけど
・・・それが女性を弄ぶに何故なるのかな？」

「その娘達は貴方に誘われて、その・・・体の関係を持つたら捨
てられたって」

「はあっ？！何それ？？ラ・トゥールでもそんな事言われてたの？
？」
「でも？」

やれやれと言った表情で両手を広げて、大きなため息を吐いた。

「何故だか僕が女性の申し出を断ると、途端にその店に行き辛くな
るんだ。僕が入店した途端、ホールの人が一斉に散る始末でさ。自
然と入店拒否されてる様な気分になってその店に行きにくくなるん
だ。ラ・トゥールもその一つさ」

「・・・。」

「で、ある店のオーナーに尋ねると、今君が言った様な事を聞かさ

れたよ。どうやら振られた腹いせにそんなデマを言ってるみたいだ」
「そう、なの？」

「神に誓って僕はそんな事しないよ」

胸に手を置きながら、彼女の目を真っ直ぐ見つめて話す彼からは、彼女を騙そうとしている様にはとても見えなかった。

それによくよく考えると、シャイな日本の女性がレディファーストが当たり前の国で育った彼に、日本の男性では考えられない様な扱いを受け、自分が「特別」なのだ勘違いしてしまったのかもしれない。

それに付け加え、誰に対しても柔らかい物腰で接するし、ましてやこの貴賓溢れんばかりの中性的な容姿に、勘違いしたくなるのも無理は無い。

「あ！それと・・・いつもブロンドの人と一緒にたってたって言ってたけど・・・」

気になった事を調子に乗って思わず聞いてしまったが、カレンと彼は以前は「そういう関係」だったとグレースから聞いていたから、「付き合っていた」と言われて当然なのに、心の中で「そうじゃないんだよ」と彼に言ってもらえる事を期待していた。

「ん？カレンの事かな？ラ・トゥールはカレンのお気に入りだったからね。彼女は僕の秘書だし、僕がラ・トゥールに行くという事は必然とカレンも一緒だって事さ」

「ああ、そう」

両手を胸の前に組んで何処かほっとした表情を浮かべた。胸の支

えが取れて随分楽になった気がする。

最初から彼に尋ねておけば、こんな苦しくなる事も無かったのにと、彼女は自分を責め、心の中で彼に詫びた。

「気が済んだ？」

俯いている彼女を覗き込んで、悪戯な表情で笑う。彼女は少し困った様な顔をして、上目遣いでコクンと頷くと、まるで眩しいものでも見るように彼が目を細めた。

「じゃあさ」

『仲直りのキス、しよう？』甘い低音の声で囁くと、彼の暖かい手が彼女の頬を包み込んで徐々に二人の距離を詰めていった。

LOVE IS MAGICAL

第17話 贈り物

彼の顔が近づいてくると、胸の鼓動が一際大きくトクンツと音を刻む。何度も唇を交わした事があるのに、今日は何処か特別な気がした。

睫毛がゆっくりと伏せられていき、互いの吐息が口元を掠めた時、コンコンッと扉を叩く音によって無情にも甘い時は強制終了させられる。

「。。。。」

閉じていた目が同時に開き、至近距離で見詰め合う二人は一気に現実に引き戻され、眉間を寄せた二人の表情が、後1秒遅ければ唇を触れ合わせる事が出来たのにと物語っているのが判ると、目を合わせて苦笑いした。

ガチャツ

彼が扉を開けるとソコには大きな紙袋を提げたジユデイスが立っていた。

「あの、コレでよろしいでしょうか？」

地下に入っているテナントをもうとつくに閉店しているというのに、たまたま棚卸をしていた店を叩き、無理矢理開けて貰った。普通なら嫌な顔一つされてもおかしくないのに、笑顔で招き入れられ

るのは、ジュデイスがこのビルの所有者の秘書だと言う事が、テナントのスタッフでさえも知れ渡っているのが功を奏した。

買ってきた服が入った大きな紙袋と彼のクレジットカードを差し出すと、彼はそれらを受け取り、笑顔を返す。

「ありがとう、ジュデイス。助かったよ」

そう言って扉を早々と閉めようとした彼に、ジュデイスが身を乗り出した。

「あの！打ち合わせ室を開けておりますので、そこでお着替えを・・・」

そう言いながら、彼女の様子が気になるのか、立ち塞がる彼の間を縫って社長室の中をチラチラと覗こうとしている。

彼女を心配してと言うよりかは、単に興味本位での行動のようにも見て取れるジュデイスに、

「ありがとうジュデイス。君は本当にいい秘書だよ。でもその必要はないから」

あっさり却下すると、パタンと静かに扉が閉められた。

「あつ！・・・、」。

ジュデイスは複雑な気持ちになりながら、扉に背を向け歩き出した。

ガチャッ

「？」

又、扉が開く音が聞こえてジユデイスが振り返ると、何か思い出したかの様な顔をした彼が扉から出てきた。後ろ手でドアをきつちり閉め、ジユデイスに手招きをする。

「受付の二人、クビにしたから手続きしといてね」

「え?!クビにしたんですか?どうしてですか?」

「人の気持ち判らない人間がこの会社の顔として働いているなんて考えられないよ。いいかい?ココに来る人はまず最初に彼女達に会うんだ。言わば会社の顔だ。それがあんな対応しか出来ないなんて我が社の恥に等しいね」

「そ、そうですか・・・。」

「じゃ、宜しく。　、　ああ、君もビルももう帰っていいよ。お疲れ様」

そう言つと又扉の向こうへ消えていった。

彼女の隣に座り紙袋から服を取り出した。服を包んでいる薄い紙から服を出すと、彼女にあてがい少し離れてうんと一つ頷く。

「なかなかいいんじゃない?コレ」

「なんだか悪いわ、洗えば済む事なのに」

「いいんだよ。君に贈り物なんてそう言えばしてなかったし」

「チヨコ貰ったよ？」

「ああ・・・そんな事あったね」

彼は思い出して少し照れているのか、彼女から視線を外した。

一旦服をくるくるっと丸めてその場に置き、デスクにハサミを取りに向かう。

「・・・・っ!!」

彼女が丸めた服を広げてたまたま目にしたタグを見て、まさに目が飛び出る様な金額がソコに書かれているのに気付いて慌てた。

「ち、ちょっと、この服ゼロの数が多すぎるんだけどっ!？」

ハサミを片手に戻ってきた彼は、少し残念そうにしている。

“もう、ジユデイスは最後の最後にミスをするなあ”

「ん？ああ、まあこんなもんでしょ？」

「こんなもんで・・・」

シャキンシャキンと、空を切る音が何回かすると、

「それよりさ・・・僕も少し質問していい？」

服を広げながら、そう言う伏目がちな彼の表情が少し暗くなった。

ついに来た。

何を聞かれるのだろうか、彼女は少し身構えた。

LOVE IS MAGICAL

第18話 小さな子供の様に

彼が彼女に聞きたい事があると言うが、一体何を聞かれるのだろう？ 今日、自分の身に一体何があったのかと聞かれたら、素直に答えるべきなのだろうか？ 正直に答えて又険悪なムードになるのを彼女は恐れていた。

彼にも聞こえてやいないだろうかと心配するほどに、ドクツドクツと心臓の音が聞こえる。

しばらくすると俯いたままの彼が、その重い口を開いた。

「彼を・・・ケントって子を」

「う、ん」

予想通り、健人の名前が出てきて思わず固唾を呑んだが、彼の言葉はそこで途切れ、何か考えているような面持ちで、彼女の肩にかかった彼の薄手のコートを取り、彼女のスーツのジャケットのボタンを一つ一つ外していく。

その邪魔にならない様に、両手に握り締めていたマグをテーブルに置くと、彼女は彼の指先を見ながら次に飛び出す彼の言葉を黙って待っていた。

「、君はどういう風に思ってるの？」

彼女のジャケットを脱がしソファアの背にかける。そのまま両手を彼女の腰に持って行くとカットソーの裾をつまんだ。

「別に・・・単なるお調子者の後輩っただけで、貴方が勘違いする様な事は何も」

彼がカットソーを捲り上げようと持ち上げた時、

「はい、バンザイして」

そう言われて、思わず彼の言うとおりに腕を上げた。スポンツとカットソーが脱がされて、キャミソール姿になる。彼女の脱いだ力ツトソーを丁寧にたたみながら、ソレを又ソファアの背にかけた。

「じゃあ、何も無いんだね？」

「う、ん」

何も無いかと問われたら、そうでは無いのだろうけど、彼女自身、健人に対しての恋愛感情は一切無かったのでそう答えた。ジャックと会えなかった時期は、健人に優しくされて少しくらりとしそうにはなったが、その程度でわざわざ話を拗らせたくは無かった。

「・・・わかった」

それだけ言うと、彼はすくつと立ち上がり彼女に両手を差し出す。

「立てる？」

彼の手に彼女の手を重ね、素直に彼に従いゆっくりと立ち上がると、彼は彼女の腰に手を置いてどうやらスカート下のジッパを探している様だった。

ジッパが後ろにあることに気付くと、抱きしめるような形で両手を後ろに回し、彼女の背中の上から覗き込むようにして、スカートのホックに手を掛け、彼女は腕を邪魔にならないように少し浮かした。

「……他は？……他には何も聞かないの？」

「聞いて欲しいなら聞くけど？」

「いえ……結構です」

彼はクスツと笑うと、スカートのホックを外しジッパーを降ろした。

ジジジツとジッパーが下ろされる音が聞こえ、お腹周りがふつと緩んだ。一番下まで下げられた時、そこで何故か彼の手がピタッと止まった。

「……。」

「？」

「……僕、君に何て聞こうか、何て答えが返ってくるのか。って思うと凄く動揺してて気付かなかったんだけど」

「う、うん」

「……今、僕凄く事しちゃってるよね」

「え？」

ストンと足元に彼女のスカートが落ち、ソレが足元を囲うように溜まる。

え？

彼女も同じく頭が混乱していて、彼にされるがままであったが、よくよく考えると着替えを手伝ってもらっている小さな子供の様に、彼に服を一枚ずつ脱がされ、今ではキャミソール姿になってしまっ

ている。

今、彼は自分を抱きしめる形で動きが止まっていて、ほんの少し身体を動かせば、すぐにでも体温を感じる事が出来る距離にいる。

薄着過ぎる自分の格好に今更気付き、自分の顔の横に屈んだ彼の顔がある事を急に意識してしまい、妙にドキドキと心臓が激しく鼓動を刻みだした。

薄暗い彼の部屋は夜のビル群の明かりが良く映え、このシチュエーションと今の自分の状態を考えると、彼の職場にいる事も忘れ急に体が火照ってくるのを感じた。

「.....」

沈黙が続く薄暗い部屋の中、抱きあうような格好でいる二人は離れる事も、抱き締め合う事も出来ず、ただ黙ってそのままの姿勢で固まっている。

なんとか理性を抑えようとしているものの、キャミソール姿の彼女に今更気付いた彼は、そのまま離れる事が中々出来ないで居た。

ほんの少し自分の腕を交差させれば、すぐにでも彼女の肌に触れる事が出来る。丁度いい具合にすぐ側には二人が寝そべっても十分だろう大きなソファもあるのだし、少し彼女に覆いかぶさるだけで、‘仲直りのキス’所か、身体を繋げる事も出来るだろう。

‘幸い’と言ってはなんだが、ビルもジュデイスも居ないし、恐らくここに入ってくる人間はもう誰も残っていない。

自分の仕事場で何て破廉恥な！と思ったのは最初だけで、今では

彼女が欲しい欲求の方が勝っている。

“思い切り抱きしめたい”

そんな感情がいつしか彼の中に沸いて来るのを感じ、自身の欲望をコントロール出来ずに居た。

「つ、。。。。」

「。。。いいよ」

「!?!」

彼女の発した言葉に耳を疑い、彼が目を見開いた。

「私も多分あなたと同じ事を考えているから」

そう言うと彼女は浮かしていた手を、そのまま彼の背中に回しそつと抱きしめた。

彼の首元に顔を埋め、どこか安らいでいる様な表情を浮かべている。

このまま欲望に負けて彼女を抱きしめれば、歯止めが利かなくなるのは目に見えている。恐らく健人に怖い思いをさせられたばかりの彼女に、自分が又同じような事をしていいのか？健人と自分を重ねられてしまうんじゃないかと不安になった。

「、、」

意を決して彼女の腰に手を置き少し距離を取ると、彼の目を交互に見て、今にも壊れてしまっんじゃないかと思う程、不安気な顔を

見せている彼女を直視する事が出来ず、思わず俯いてしまった。

「ダメだよ、女の子がそんな軽はずみな事いっちゃ」

必死で平静を装うと、ジューデイスが買ってきた新しいシャツを彼女の腕に通していく。シャツのボタンをかける事で必死で理性を保つ彼は、次に彼女が迫ってくれば簡単に崩れてしまうのを感じている。

「僕の背中に手を置いて」

彼女の足元に屈みこみ足元からスカートを通していく。スカートと共に立ち上がると又先程と同じような姿勢になりジッパー上げて言った。

「？」

途端彼女が小刻みに震えている事に気付き、俯いている彼女の顔を覗き込む。顔を両手で塞いで必死で声押し殺している彼女の両手首を握り、そっと顔から離れた。

「カナ？」

大きな目には涙で溢れていて、瞬きでもしようものならあっさりとその液体は零れ落ちそうな程だった。

「どうしたの？僕、何か悪い事言った？」

「ヒック・・・やっぱり私が汚いからなの？」

「え?!何処も汚くないよ?服も着替えたし・・・」

「そうじゃなくて！・・・本当は気付いてるんでしょ？私に何があったのか・・・」

「あ・・・。う、ん。　その、最後まで・・・？」

彼女が頭を激しく左右に振ると、溜まっていた涙はポロポロと頬を伝い始めた。一度道を作ってしまったと、次々と新たな涙がその道を辿り始める。彼が両頬に手を添え親指でそれを拭ってもすぐに新しい涙が跡を作っていく。

「・・・汚くて触れたくないの？」

「ちっ、違うよ！君を汚いなんて思った事無いよ！」

「じゃあ何故？何故、私に触れてくれないの？」

自分を求めている彼女を見ると、彼は困惑し胸が締め付けられた。普段はこんな事を言う女性では無いのに、今日あった出来事が彼女にこんな科白を吐き出させてしまうのだと思うと、彼女をこんな目にあわせた男の非道な行為に彼は憤怒し、何らかの制裁を加えねば気が済まないと思っただ。

「。。。」

目の前で小さくなって泣き崩れている彼女を見ると、今の自分の顔を見せてはいけないと、自分を落ち着かせる為に肩で小さく息を吐く。

口元を緩め、涙で彼女の顔に張り付いてしまった髪を梳かす様にして取っていくと、柔らかい声で彼女に諭すように話し出す。

「あのね、さっきの状態で君を抱きしめてしまうと、僕は完全に理

性を失ってしまうって思ったんだ。こんな場所で傷ついている君に触れるのは僕は怖いんだよ・・・きつと、優しく出来ないと思うから

「それでも・・・」
「でも」

顔を上げた彼女をそっと抱き寄せた。

「今の君なら大丈夫」

彼の腕の中で顔を上げ、彼女はきよとんと不思議な顔をしている。まるで、何がどう違うの？’と言いたそうだ。

「服を着ているからね」

ニッコリ微笑んで額にチュッとキスを落とす。彼の腕に包まれた彼女は、この上ない幸福感に浸っているかのように、すっぽりと彼の胸にその体を預けた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第19話 胸騒ぎ

「おはようございます」

足を庇う様に歩きながら、いつも通り席に向かう。

「おはよう・・・ん？足どうかしたの？」

「あ、ええ、足捻っちゃったみたいで」

誰かに会う度にそう聞かれて、少々うんざりしてきた。聞かれる前に社内メールで『野嶋叶子は足を捻りました。でも、大した事無いので心配しないで下さい』とでも書いて一斉送信したい気分だ。

はぁーっと溜息を吐きながら椅子に座ると、一つの視線が突き刺さるのを感じる。ソコに目を向けることはしなかったが、明らかに健人が彼女を見ているのが判った。

「あ、おはよう・・・って、どうしたの？その足」

しばらくして朝の紅茶をいれに給湯室へと向かうと、ここでももう一度説明を始めなければならなかった事にげんなりする。

「もういい年なんだし、気をつけなよ」

「一言余計ですよ！」

先輩とお茶を入れながら談笑している所に、人の気配を感じた先輩がその人物に目をやったのに気付き、彼女も後ろを振り返ってみ

ると、顔を合わせたくないと思っていた健人が立っていた。

先輩が居たのに気付き、少しばつが悪そうな顔をしている健人に、何も事情を知らない先輩はズケズケとモノを言う。

「あら、健人。何その顔は？私がいちやいけくない？」

「違いますよー、俺もコーヒー飲もうかなと思って」

「あらそう？ならいいんだけど。ちょっと待ってすぐ終わるから」

狭い給湯室は2人入れば窮屈だ。コーヒー派の先輩はサーバーに落とされたコーヒーをマグに入れるだけなのに対して、紅茶派の彼女は紅茶を入れる為のお湯がまだ沸ききっておらず、その場に健人と二人つきりになるのが嫌で、先輩に留まって貰いたくて心の中で必死に先輩を引きとめた。

「お待たせ、お先」

あっさりとマグにコーヒーを注ぎ、健人と入れ替わるようにして、先輩が給湯室から出て行った。

彼女は目をあわさないように腕を組んで壁にもたれかかり、自分の爪を見ている。

「あの……昨日はごめん」

「……。」

「本当に反省してる」

「……。」

「足、大丈夫？」

「あんだ、本当に反省してんの？」

「……うん」

視線を爪から健人につつして睨みつけると、シュンシュンと湯気がケトルからやっと吹き出て、彼女はそれに手を伸ばした。

「じゃあもう構わないでよね」

「それは、・・・保証出来ない」

「はあ？あんた言ってる事がでんでおかしいよ？」

「昨日の事は悪いと思ってるけど、だからと言って俺の気持ちが変わるわけじゃないって事だよ」

健人の反省してるとは思えない科白に、一際大きく溜息をつくど、

「あんたは恋に恋してんのよ。早く目を覚ました方がいいよ」

そっぴい残して、その場を去った。

「？」

デスクに戻ると又オフィス内が騒がしい。いつものように聞き耳を立てると、とんでもない話を耳にした。

ビルのエントランスから足を引きずりながら出てきた彼女を見つけた彼は、急いで彼女の元へと駆け寄り肩を貸した。

「今日一日大丈夫だった？」

「うん、なんとか」

彼女の足元に視線を落とした彼は、何の処置もされていない彼女の足に気付いて眉を顰める。

「もう！すぐに病院行きなさいって言ったのに」

「だって、寝坊しちゃったんだもん」

膨らませた頬をつつく彼の顔は、彼女が可愛くて仕方が無いといった表情をしている。

「じゃあ、今日は病院寄って帰ろうね」

「はい」

昨日までの出来事がまるで無かったかのように、二人の間には穏やかな空気が流れ込んでいる。健人の事は本当に腹ただしい事ではあったが、あの出来事があった事で二人が又引き合わされ、そして互いの間にあった誤解が解けたのは純粹に喜ばしく、本当は健人に対しもっとキツク当たってもおかしくない所だったが、彼との関係が修復した事で相殺する事にした。

きっと、彼もそう思っているのか、誰に何をされたかなど、深く追求してくる事は無かった。

「さてと、やっと仕事も片付いたよ」
「お疲れ様」

以前、そうしていた様に彼の部屋のソファ―に座り、本を読んでいた彼女の横に彼が座った。

「足、見せて」

包帯が巻かれた足を彼女が軽く浮かせると、彼がその足を自分の膝の上に置いた。そつと撫でながら、

「大した事無くて良かった」

と、ポツリと呟いている。

「うん・・・心配してくれてありがとう」

自分の足首を何度も撫でる彼の手を見ながら、彼女は今日会社で耳にした噂を彼に確かめたかった。もし、その噂が本当なら彼の口から出てきてもおかしくないのに、全くその気配は無い。

耐え切れず、彼女は彼に思い切って尋ねてみた。

「あの・・・今日何か変わった事無かった？」
「ん？変わった事？・・・うーん」

腕を組み顎に手を置いて頭を捻っている。暫くして、あっと思い

出したような表情になり、彼女は食い入るように彼を見つめた。

「今日、お昼にから揚げ弁当食べたらさ、いつもよりから揚げが1個多かった!」

「・・・プツ」

思いも寄らぬ言葉が彼の口から出てきて、思わず彼女は嘔吐してしまった。彼女を笑わせる事が出来た彼は満足そうだ。

「あなたでもそんな食べるのね・・・ふふっ」

「時間が無い時はお弁当が多いよ?」

勝手に彼はいつも豪華な食事しかしないと決め込んでいた彼女は、意外な事実を聞いてぐっとなを身近に感じ少し嬉しくなった。今まで彼の何を見ていたのだろうか?勝手なイメージを決め付けていたのは自分では無いのか?と少し反省する。

「って、そうじゃなくて。もっと・・・」

「?????」

彼女の言いたい事が、これでは彼には伝わらないという事に気付くと、彼の膝から足を下ろし姿勢を正して真剣な表情で彼を見つめた。

「藍子が貴方を訴えたって・・・」

「ああ、その事が」

ゴクリと息を呑んで言った彼女に対し、彼はあっけらかんとしている。

「やっぱり本当なの!？」

「うん、そうだよ」

1週間の休みを取らされていた藍子は、あれから全く出社していなかった。今朝そんな噂を小耳に挟んだ彼女は、又よからぬ事を考えている藍子に心底怯えた。

LOVE IS MAGICAL

第20話 絆

藍子が彼を訴えたと言う噂はどうやら本当のようで、その話を耳にした時かなり驚いたが、もっと驚いたのは彼の返答だ。

「そうだよって・・・なんだか余裕ね」

「うん、だって余裕だもの」

ソファアの背にもたれながら頭の後ろで手を組む彼は、苦笑いを浮かべている。

「え?!なんで?訴えられたんでしょ??」

『普通ならもつと動揺するんじゃない?』と何故か彼女が動揺しているのに対し、彼は至って冷静で、組んでいた手を解くと膝の上に肘をつくように手を組み直した。余裕だとは言ったものの、何処か遠くを見るような目は少し疲れているようにも見える。

「こつこつ仕事してると慣れっこになるもんなんだよ」

「そうなの?」

「うん。ただアイコちゃんの場合は少し複雑ではあるけどね。でも問題ないよ」

「複雑って?」

「なんだか、昨日君が言った様な事言ってるんだってさ」

「え?」

「僕がアイコちゃんに迫って、彼女がそれを断ったらクビ切られたって。笑っちゃうよね」

「あー、そう言えばなんかそれっぽい事言ってたなあ」

「・・・まさか君、その話本気にしてたんじゃないだろうね？」

上目遣いで彼を見ながら、指で‘少し’といった仕草をして見せると赤い舌をちろつと覗かせた。以前の彼女だと、こんな風には返せなかっただろう彼のとんでもない話に、今では平然としていられるのがなんとも不思議だった。

もう、彼女は十分傷つき、悩んだ。だからこそ、多少の事ではへこたれない自信を持つことが出来たのだった。

「ちよつとカンベンしてよ！最初に挨拶しただけで、その後電話で2、3度話したつきりだよ？」

『僕にも選ぶ権利つてもものが・・・』と言い掛けて、彼は慌てて口を噤んだ。

「藍子は貴方に食事に誘われたって騒いでたわよ？」

「ナイナイナイナイ！」

彼は両手を彼女に向けて広げながら、頭と手をブンブン振って否定している。

「そんなデマをすぐ信じられるなんて、僕って周りから見るとそんなに女性に困ってる様に見えるのかなあ？」

「それってどういう意味？まるで自分は‘モテる’って言いたい訳？」

顎に手を置き不満そうな顔をしている彼に向かって、彼女は片眉を上げて少し睨みをきかせると、そんな彼女の表情を見た彼が目を細めて甘い顔を覗かせた。

「僕の心は君で満たされてるのに、って事だよ」

そういいながら伏目がちに彼が近づいてくるのを感じて、彼女も目をゆっくり閉じていった。

チュッ

「。。。。」

口元を通り過ぎ頬に彼の唇が触れる。唇にキスをもらえろと思っていた彼女は、なんだか拍子抜けし、思わず頬に手をあてがった。彼はすぐに離れ部屋の時計を見ると、スクツと立ち上がり、

「もう時間だね、送るよ」

そう言って彼女に手を差し出した。

帰りの車の中で先ほどの事を考えていた。今までなら唇にキスしてくれてたのに、今までなら、泊まってく?、って言うてくれるのに、何も無くあっさり家に帰るように促された。

やはりしばらく会わなかった事が、彼の中に何かしら変化をもたらしたのだろうか?

今までと違う彼の態度が少し気に掛かる。

「あのさ、ケント君から何か言われた？その・・・昨日の夜の事で・・・」

やはり相手は健人だと彼は気付いていた様で、もう何も隠す必要はないと感じた彼女は包み隠す事無く正直に彼に話した。

「うん・・・反省してるって言ってたよ」

「そか。彼はやっぱり本気みたいだね、君の事」

「ち、違うつて！そんなんじゃないから。健人はただ貴方を妬んでるだけだと思っよ？」

「君はそう思うのかも知れないけれど・・・正直、心配だな。そんな男が君の側にいるなんて」

ハンドルを握っている彼は、視線は前に向けたままでそう言った。暗い車内に街頭の明かりが時折零れ、その一瞬で彼の表情を見極める事は難しかったが、チラッと彼女の方を見た時に見せた顔は、憂いを含んでいた。

「だ、大丈夫！貴方が心配するほどの事じゃないから」
「本当？信じてても大丈夫？」

何度も大袈裟に彼女は頭を縦に振る。

「じゃあさ、ひとつお願い聞いてくれる？」

「うん、何？」

「・・・その、そろそろ名前で呼んでくれないかな？」

「へ？」

「ケント君はいいなあ〜名前でもらって
「あ……う」

実は彼女もそれを気にはしていたが、あまりにも時間が経ちすぎて、今更名前を呼ぶなんて恥ずかしさの方が勝り呼ぶ事が出来なくなっていた。

そのうち自然と出てくるだろうから、焦らなくていいと思っていた矢先の彼からのおねだりに、余計に呼びづらくなってしまふ。

もじもじして、一向に名前を呼ばれる気配が感じられないと、彼はどうやら痺れを切らしたのか、彼女を煽り始める。

「はい、呼んで？」

「ええ〜？……ジ、ジ……」

「……」

「ジ、ジ、ジ……ああ〜ダメ！そう構えられると、恥ずかしくて余計言えない！」

「何で恥ずかしいのさ？僕は平気だよ？力ナ」

「あの……その……今更感があつて……ね？」

「えー？じゃあこれからずっと僕の事『貴方』って呼ぶの？遠くから僕を呼ぶときも『あ〜な〜たあ〜！』って？そんなのみんな振り向いちゃっよ」

「う、う〜ん……」

弱ったなと自分の両頬に手を置くと、手のひらに熱を感じる。

「ほら、もう君の家に着いちゃっよー！」

「も、もう、何も今じゃなくても。ちゃんとその内呼べるようになるって〜」

そうこうしているうちに、彼女のマンションの前に車が止まり、助かったといわんばかりにそそくさと彼女はシートベルトを外した。

「ああ！残念！又今度ちゃんと言うから！」

顔を引きつらせながら車のドアを開けようと手を掛けた時、何故かビクともしない車のドアに首を捻った。

「あれ??」

「開かないよ、チャイルドロックしたから」

「な、何で?・・・かな?・・・あ、ははは、・・・・。」

彼の方を振り向いた彼女は、『何で?』と聞かなくても、ニヤニヤとまるで子供が悪巧みを企んでいる様な彼の顔を見れば、一目瞭然だということに気付いた。

タラ〜ツと額に汗が流れてきそうな程の身の危険を感じる。

「聞くまで帰さない」

「えええええ〜?!」

シートベルトを外しハンドルを抱え込むようにした彼は、今か今かと彼女の口から自分の名前が出てくるのをひたすら待っている。

「ジ、ジ、ジャ・・・だはあ〜〜」

自分の指を絡ませながら、もじもじしている彼女を見て彼がクス

ツと微笑んだ。

「う、う、う、今日じゃなきゃ、ダメ？」

「駄目」

インパネのブルーの明かりが彼の顔を照らし、車のヒーターの暖かきによって少し眠たそうな彼の目はとても色っぽくて思わずドキツとする。

“ そんな目で見つめられたら、余計に緊張して言えない！”

彼女の心の声が聞こえたのか、

「仕方ないなあ、じゃあ大サービスで僕が呼びやすくしてあげるよ」

そう言うと、手をグツと伸ばし彼女の頭をゆっくりと撫でつけた。その手を彼女の頭の後ろに回すと、もう一方の手で彼女の頬に手を添える。

革張りのシートが軋む音がし、潤みを増した彼の双眸がゆっくりと彼女に近づくと、彼女は思わず息を呑んだ。

又、さっきの彼の部屋での時の様に肩透かしを食らうのかもと、彼女はギリギリまで目を開けているつもりだったが、彼の顔が接近してくるとどうしても目を開けていることが出来なかった。

閉じた瞼にそつと唇が触れる。もう一方の瞼にもキスが降って来て、チュツチュツと両方の頬や額にそのキスの雨は降り注いだ。一瞬、間が空いて彼女が目を開けようとした時に、彼女の唇に期待していた彼の唇がそつと重なる。

求めていたものをやっと与えられ、この上ない幸せに浸った。

小鳥が啄ばむ様に何度か唇を合わせると、申し合わせたわけでもなく、次第に深い口付けに変わっていく。

「愛してるよ、 カナ」

「私も、・・・ジャック」

彼が甘い声で彼女の名を呼び愛の言葉を囁くと、ご褒美を与えられた彼女は自然と彼の名を呼ぶことが出来た。

「・・・。」

唇を合わせながら口元を緩めた彼は、この一瞬の悦びの為に今まで彼女に触れるのを我慢していたのだろうか、とても満足そうな表情を浮かべている。

「ありがとう・・・カナ」

「、、じゃあもう帰っていい？」

そんな風に言うなんて、ムードが無いなと思ったのに、当の本人は余程ご満悦なのか、その事には特に触れず、

「ん、・・・もうちょっと・・・」

と、キスのおねだりをして、彼女を腕の中に閉じ込めた。

二人の関係は今まで以上に強い絆を作り、周りに振り回される事は無くなった。互いの事を信じる事で、二人の間にある絆は一層強く固いものへと姿を変えた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第21話 幸せと憎しみと

ピピピピッ、ピピピピッ

いつもの様に目覚まし時計が鳴る音で目が覚める。何処と無く体の節々に痛みを感じながら、ベッドから腕を伸ばして鳴り響く目覚まし時計を探した。

ピピッ　　、ピッ。

「……、？」

まだプラスチックの冷たい感触を探し当てていないのに、目覚まし時計の音が止んだ事に不思議に思い、うつ伏せになったまま顔を上げて見ると、彼女の頭の上に置いていた目覚まし時計の上に白くて綺麗な彼の手がかかっていた。

“あ、そつか・・・彼がいたんだった”

起き抜けに感じた体中の痛みの原因も判り、一人で頬を染めた。

綺麗な手を伝って彼の寝顔に目をやると、長い睫に筋の通った鼻、ほんのり赤みがかかった薄い唇、誰がどう見ても美麗と思われれる中性的な男性が無防備に横たわっている。

美しい彼の寝姿を間近で見、彼女は視線を外せなくなった。

「ねえ、起きて。朝食できたよ?・・・ねえってば!」

何度、声をかけようが、身体を揺するうが彼はピクリともせず、全く起きる気配がない。

眠りの深い人なのかな?と思いつつも、ちゃんと息をしているのかと心配になってきた彼女は、彼の顔に耳を近づけた。

スー、スー、と規則正しい寝息が聞こえ、取りあえずホツとする。しかし、こつも起きないとこのまま目を覚まさないんじゃない?と思えてきて、彼の顔を側で見つめながら恐る恐るもう一度声を掛けた。

「ねえ・・・起きてよ・・・ジャック?」

彼の名を呼んだ途端、それに呼応するかの如く大きな目がパチッと見開いた。

「つ。・・・あ、」

あつと言う間に彼の太い腕が彼女に伸びて、ベッドに引きずり込まれてしまった。ぎゅっと抱きしめられて彼の素肌から伝わる温もりが、ソコから出ようとするのを妨げる。

「もうっ!起きてたの?!」

彼女がそういうと、彼は眠たそうな目で微笑みながら互いの額をコツンと合わせた。

「いや、寝てたよ。でも夢の中でカナの悲しそうに僕を呼ぶ声が聞こえてきて、それで目が覚めた」

「だって、全然起きないから心配になって・・・」

「もうカナは心配性だなあ」

目を伏せて少し口先を尖らせた彼女のそれに、ちょこんと彼の口が軽く触れる。上目遣いに視線を彼に向けると更にキツク抱きしめられた。

「あ、ちょ、スーツに皺がついちゃう」

「・・・そ、それは大変だ！すぐに脱がなきゃ！」

急に彼女の上に覆い被さった彼は、彼女の服のボタンに慌てて手を掛けた。

「えっ?! ちょっ、ちょっ、ちょっと! 何するの!」

「皺になったら大変だからね」

「もう! バカッ!」

二人の笑い声が溢れだし、幸せを噛みしめる。ずっとこの幸せが続けばいいのにと、彼女は切に願った。

「ああ、疲れたあ、グレースただいま！」

「ほ？カレンさん、今日お帰りでしたか」

朝食の後片付けをしている所へ、カレンが大きな荷物を持って現れた。

ダイニングテーブルの椅子に足を組んで腰掛け、サングラスを取るとテーブルの上の苺を一粒口に含んだ。

「一日も早くジャックに話をしたくて、予定を変更して早目に帰って来たのよ」

「おやおやそうでしたか、言って下されば迎えの車を手配致しましたのに」

「ううん、いいの。ジャックを驚かせたかったから。ねえ？

彼は何処？まだ出社してないでしょ？」

手を伸ばし苺をもう一粒手にした。

「坊っちゃん昨日はお戻りになられなかったようですね」

グレースの言葉に苺を口に運ぶ手が止まる。疲れてはいるものの、何処か浮かれている様子だったカレンの表情がみるみる変わっていく。

「……何処へ行ったの？」

先ほどまでとは違う、一段低いトーンでグレースに問いかけた。カレンの変化に全く気付いていないグレースは、何の悪気も無く本当の事を言ってしまった。

「はて？カナさんを送って行かれたつきりで。坊っちゃんも大人ですからあえてこちらから電話もしませんし」

「カナ？！・・・何あの小娘、私がアメリカに帰ってる間に、又ジヤックにちよつかいだしたの？！」

「いえいえ、カナさんがちよつかい掛けてると言うよりも、坊っちゃんか・・・あゝ、コホン。」

お喋りが過ぎたと言わんばかりに、グレースはカレンに背を向けて舌をペロツと出すと、トレーにのせた食器を持ってキッチンの中へと逃げ込んだ。

「・・・っ！」

手の平にすっぽりと収まっていた苺は口に運ばれる事も無く、カレンの手の平の中で握りつぶされる。指の隙間から赤いものが滴り落ちると、カレンの顔に怒りの表情が浮かび上がった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第22話　動き出す二人の運命

「おはようジユデイス、今日も綺麗だね」

「お、おはようございます・・・ありがとうございます」

「・・・」

バタンッ

「・・・」

普段通り、ジユデイスに朝の挨拶をする彼は、いつにも増して「機嫌だ」という事が一目で判る。

『今日も綺麗だね』と言う言葉は本心で言っていたのではなく、やはり社交辞令だったのだとこの間の一件で気付かされ、自惚れていた自分に小さく肩で息を吐いた。

昨晚の事、今朝の事を思い出すと自然と笑みが零れている自分がある。お互いを深く信じる事で、二人の揺るぎない気持ちに確信を持ち、彼は彼女への気持ちが一層深まった。

もう大丈夫、もう二人が引き離される事などもうないと、心からそう感じていた。

「、。。。。」

余韻に浸っている間もなく、デスクの電話がけたたましく鳴り響く。我に返った彼は頬を両手でパチンと叩いて、気を引き締めなすすと受話器を取った。

「はい」

（アメリカ本社のお父様からお電話です）

「ありがとうございます」

“珍しいな、どうしたんだらう？”

普段、父とは久しぶりに会ったとしても会話は殆ど無く、正直何を考えている人が息子の自分でさえも良く判らない。仕事の用があったとしても、全て秘書からしか連絡を寄越さなかったと言つのにそんな寡黙な父がわざわざ息子の入社するであろう時間を見計らつて電話を掛けてくるとは、一体何事だらう？ もしや、母になにかあったのだらうか？電話が切り替わるまでの間、何となく嫌な予感が頭を過ぎった。

「。。。、Hello・This is Jack・、
hat?!」

「えっ?!ほ、本当ですか?」

目の前に座っているボスは、心底嬉しそうな顔をして腕を組みながらウンウンと何度も頷いている。

朝早くから打ち合わせ室に呼ばれて、'又何か変な噂とか・・・?'と不吉な予感がしていた彼女の予想をいい意味で裏切られ、驚きのあまり顔が固まった。

「こないだのJJエンタの君の功績が称えられたんだよ。来月からマネージャーとして皆を引っ張って行ってくれよ?」

「は・・・はい!頑張ります!」

ボスより先に打ち合わせ室から出ると、軽く握っていた手が勝手にガッツポーズを作る。まだボスが言った言葉がにわかには信じられず、ポーっとした表情のまま自分の席に腰を落ち着かせた。

周囲を見渡すといつものオフィスの光景。これが夢ではなく、現実のものなのだと感じると徐々に顔が緩みだした。

ランチタイムになり携帯電話を手に取ると、急いで外に飛び出した。春の風を頬に感じながら電話を掛ける彼女の顔はほころんでいて、この喜びを彼と早く分かち合いたい気持ちで一杯だった。

彼に言ったらなんて言うだろう?一緒に喜んでくれるかな?一人

で妄想を膨らませていると、居ても立ってもいられなかった。

「・・・あ！もしもし？今大丈夫？」

（うん、大丈夫だよ。珍しいね君から電話なんて。どうかした？）

「ちよっと話があつて、今日も会える？」

（ うん、僕も丁度話があるんだ）

「良かった！じゃあ後で」

この時の彼女は自分のことで頭が一杯で、彼も話があると言った事を特に気に留めていなかった。

待ち合わせの場所に着くと彼はいつも先にソコにいて、彼女が現れるのを待ち詫びている。側道に止めた車にもたれ片手をポケットに突っ込みながら、手持ち無沙汰そうに自分の爪を見ていた。

「・・・。」

何気に顔を上げると、大勢の人込みの中から彼女を見つけた。途端に笑顔が零れ落ち、車に寄りかかっていた身体を急いで起こした。

彼女はいつもその瞬間の彼にときめいてしまう。明日も明後日も・・・きつと何年経つてもその気持ちは変わる事が無いとさえ思っていた。

まだ少し足を庇うようにして歩いてきた彼女を見て、心配そうな面持ちで人の流れに逆らいながら彼が近づいてくる。

彼女の手をやっと捕まえて、やさしく肩を抱き寄せた。

「まだ痛む？」

「少しね」

心配そうにしている彼の表情を見ると、いつもの彼の笑顔が見たくなる。

「だ、大丈夫よ！ほらっ！……っ」と

怪我をした足だけで無理に立ってみせた彼女は、案の定バランスを崩し前のめりになった所を彼に抱きかかえられた。

「もう、そんな見栄張らなくていいのに」

困った顔で苦笑いすると、ここに掴まっつと言わんばかりに、彼が腕を差し出した。

彼女が素直に手を巻き付けると、彼女のペースでゆっくりと歩き始める。

「ねえ」

「ん？」

彼女の顔を覗き込むようにして、彼が微笑んだ。

「大好き」

「……」

突然の彼女の言葉に驚いた彼はしばらく返す言葉が出ない。丸くした目がだんだん細くなり口角がじんわりと上がってくる。

「僕の方がもつと大好きだよ」

嬉しそうな顔で微笑む彼に胸がトクンと音を立てた。

彼はいつも大きな愛でやさしく包んでくれる。彼が居れば怖いものはもう何もないのだと、彼女は心からそう感じた。

「そう言えば話って？」

食前酒が運ばれてきた時に、彼が口火を切った。彼女はシェリーグラスに伸ばしかけた手を引っ込めると、両手を膝に置き突然かしまる。

「実はね、」

「……。」

少し照れながら口を窄めて彼女が話し始めると、彼の表情が一瞬固まり顔から笑顔が消えた。

“あれ？何か変な事言っただかな？”

と、少し不安になったが、すぐにその不安は掻き消される。

「……す、凄いいじゃない！おめでとう！！」

みるみる彼の顔に笑顔が戻り、彼女はほっと胸を撫で下ろした。

「ありがとう、貴方のお陰よ」

「違うよ、君の実力さ。そうか〜じゃあお祝いしなきゃね。っと、とりあえずシャンパンで乾杯しよう！」

そう言うと彼は右手を挙げて、ウェイターにドン・ペリニオンを頼むと視線を彼女に戻した。しめたとばかりに明らかに緩んだウェイターの顔がおもしろい。

「あ、後、今日は君の好きなの思う存分食べていいよ」

「いつもそうしてるけど？」

「ああ、そうか……。あっそうだ、何かプレゼントするよ！！」
「いらない」

「どうして？何でもいいから言ってごらん？」

それでも彼女は頭を左右に振った。

「貴方が居てくれるだけで十分」

「カ、ナ……」

ピクツと表情が曇ったと思うと、彼の眉間に皺が寄る。彼女の言葉に一瞬胸が締め付けられた彼は、テーブルに肘をつき大きな手の平で鼻と口元をすっぽり覆いながら目を伏せた。

「・・・？ どうしたの？」

ゆっくりと開いた彼の目は真っ赤になっていて、涙が零れ落ちそうになるのを我慢しているのが良く判る。

「いや・・・嬉しくて」

「もう・・・貴方がそんな顔したら私もうつっちゃうよ」

声を震わせながら二人は笑った。

「。。。」

幸せすぎて感極まった彼女とは対照的に、彼の中では違う感情の波も押し寄せていた。彼女が知らない内に物事はどんどん進んでいっているのだという事を、思いも寄らぬ人物から知らされる羽目になるとは、この時の彼女には知る由も無かった。

第23話 過去の清算

「……だつてさ」

「へ〜？ そうなんだ〜？？」

食事を終え、いつもの様に彼の家で過ごす事にした。二人楽しく談笑しながら長い廊下を歩きリビングの扉を開けると、中から暖かい空気が流れ出てきて既にそこに誰かが居る事が判る。

リビングの中央に置かれたソファーに座っている人影が、ゆっくりと二人の方を振り返るとその人物が冷たい眼差しを向けた。

「っ、カレン？！ 帰国は明日じゃ？」

「急遽、今朝帰ってきたのよ」

彼女は繋いだ手を思わず解こうとしたが、逆に彼に握り締められた。不安そうな顔で彼を見上げると、彼女に向かって「大丈夫だよ」と言わんばかりに彼が口角を上げる。

カレンが立ち上がると腕を組みながら二人の方へゆっくりと近づいてくる。カレンの冷ややかな視線が下がると二人の繋いだ手に注がれた。

「フン、お盛んなことねえ〜。 昨晚も帰ってこなかったって言うのに、まだやり足りないワケ？」

「君には関係の無い事だ。・・・悪いけど席を外してくれないかな？」

明らかにカレンの表情が変わり、その怒りの矛先は彼女に向けられた。

「っ！！せいぜい今のうちに楽しむがいいわ。もうすぐジャックはアメリカに戻ってくるんだしね！」

「カ、カレン！！」

「・・・え？」

カレンが発した一言で、彼女の中で何かが音を立てて崩れ落ちていく音が聞こえた。

“えっ？彼がアメリカへ帰る？”

確かにカレンはそう言った様に聞こえた。聞き間違いだと思いたかったが、慌ててカレンの言葉を遮った彼の態度に、聞き間違いではないのだと思わざるを得なかった。

カレンは彼と彼女の様子を見てニヤリと片口を上げると、更に彼女を煽るように嫌味な言葉を吐き続ける。

「あら？ジャック。子猫ちゃんにまだ言っただけで無かったの？ダメじゃないこういう事はちゃんとやっておかないと。それとも、この子にはそんな大事な話をする必要が無いと感じたのかしらね？」

「・・・。」

彼は黙って俯いてしまった。いつの間にか離されていた手はどこか遠く感じ、彼女にはその手を捕まえる勇気がなかった。

カレンは腕を組んだまま彼女の前に立つと、彼が居る前でこれ見よがしに彼女が傷つくであろう言葉の羅列に、思わず耳を塞ぎたくなる衝動に駆られる。

「フン、丁度いいわ。ついでに言っておくけどあなたがジャックに

振られた日、覚えてる？彼が何で貴女を振ったのか、理由は判っているのかしらね？ジャックは貴女じゃなく、私を選んだの。あの前の晩、私達は愛し合ったのよ。わかる？セックスしたの」「っカレン！！なっ何を?!」

「っ!」

「なんだ。その様子じゃこの話も初耳？貴女達の関係って何なの？包み隠さず話す事がお互いの信頼関係を築くものだと思うけど？」

絶句している彼女を見てカレンは、'いい気味だ'と言わんばかりに高々と笑っている。

「っ、もう、うんざりだ！今すぐここから出て行ってくれ！」

両手で頭を抱えるようにして、カレンの顔も見ずに彼がそう言い放った。

「言われなくても出て行くわよ。ふん！自分だけ幸せになるうなんて虫が良すぎるわ。・・・ああ、そうだ、ジャック。私、マットと正式に離婚れたから」

「っ?!離婚れた？何故?!」

彼が顔を上げて、目を見開いた。確かグレースがカレンは結婚していると言っていたのを思い出し、あの時に感じていたカレンに対する嫉妬心はその時に薄れていたが、その人と離婚れたとカレンが言った言葉の持つ意味は想像するに容易い。

ギロツとカレンが彼女を鋭い目で睨みつける。

「これ以上、貴方に変な虫がつかないように見張ってなきゃね。」

「カレン・・・僕は君とは、」

眉を顰める彼に見向きもせず、

「貴方のお父様は何て言うかしら？それに、いずれ嫌でも貴方が私を必要とする時がやって来るはずよ？自分でも判っているんでしょ？・・・ふふふ、楽しみだわ」

不敵な笑みを浮かべるとカレンは扉に向かって歩き出した。部屋から出る前に振り返ったカレンは彼女に向けて、まるで余裕ともとれる程の笑みを浮かべている。

「じゃあね子猫ちゃん。せいぜい楽しみなさい」

勝ち誇った者の様な顔でそう言うと、パタンとドアが閉まり扉の向こうへと姿を消した。

「、、」

彼女は今ここで何が起こったのか判らなかつた。いや、判りたく無かつただけかもしれない。カレンの言った言葉に対し、彼は一切否定する事が無ければ、はっきりと拒絶もしない。

ただ彼の口からカレンの言った事はデタラメだと、いつか彼に着せられたおかしな噂の真相を尋ねた時の様に、はっきりと否定して欲しかった。彼の口からその言葉を聞くだけで、真相はどうであれ彼女は救われるというのに。

彼はそんな彼女の気持ちを知ってか知らずか、ただ黙って両手をポケットに入れて彼女と目を合わさない様にしている。

そんな彼を見るのが辛くて、そんな大事な話をカレンから聞かさ

れたという事実が悲しくて、呼吸をするのもままならない。

ただ、時だけが刻々と過ぎていき、静まり返った室内で二人は互いの目を見ることが出来ず、ただ言葉を無くしていた。

L O V E I S M A G I C A L

第24話　叶わぬ願い

カレンの放った言葉に顔を歪めている彼は、誰がどう見ても明らかに動揺していた。

いつかカレンとの事もキチンと話さなければとは思っていたが、聞かれても無い事をペラペラと話するのはどうかと、内容が内容なだけに二の足を踏んでいた。

そんな矢先、アメリカへの帰国の話が持ち上がり、今日まさに彼女に話すつもりだったが、昇格が決まった彼女の嬉しそうな顔を見ていると、とてもじゃないが彼はそれを告げることが出来なかったのだった。

沈黙が流れ張り詰めた空気が漂う。

何処から話せばいいのかと、彼は迷っていた。

「　　どうして何も言ってくれないの？」

彼女の問いかけにほんの少し体が震えてしまう。彼は大きく深呼吸し、体をくるりと彼女の方へ向けて見ると、リビングの中央で佇んでいる彼女の表情から、不安そうに怯えているのが簡単に見て取れる。

本当の事を言うと彼女は泣いてしまいかもしれない。この部屋から飛び出して行くかもしれない。

そうなった時、果たして今の自分に彼女を引き止める権利があるのだろうか？

未だ揺れ動く感情を落ち着かせる事が出来ぬまま、もう逃げ場は無いのだと腹をくくり、彼はゆっくりと話し始めた。

「カナ、僕は君に言わなければいけないことがある。とても辛い話

だ。僕にとっても、多分　、君にとっても」
「……。」

眉を顰め下唇を噛み締めた彼女の顔を見ると、洗いざらい全てを彼女に話そうと今しがた決めた自身の決断が、本当に正しいものなのかどうかも判らなくなりそうだ。

彼女を目を直視する事が出来ず、少し視線を外して彼女の表情を見ないようにした。

「カレンとは最初に離婚した後、悲しみに打ちひしがれていた僕を彼女が慰めようとしてくれて・・・、寂しさのあまりつい関係を持つてしまったんだ。自分の寂しさを埋める為にカレンを利用するのは良くないと思って、カレンと関係を持つのは止めた。その後、カレンは他の男性と結婚したんだけど・・・まあ、さっきの通りだ」

広げていた両手をパタンと下ろし、鼻で少し笑って首を傾げた。

「あの時、私が貴方に一方的に振られたのは・・・、カレンさんが言った事は本当なの？」

その問いかけに、胸がギュツと握り締められた様な感覚が彼を襲う。あの時、自分が良かれと思ってした行動が、今なお彼女に刃を向け、平気で傷つけてしまう事になるなんて。

目を硬く瞑ると、彼は俯きながら小さく頷いた。

すぐに顔を上げると、彼女にその時の自分の気持ちを判って貰いたくて、必死に彼女に訴えかけた。

「あの時、僕にはああする事しかできなかつたんだ。君の事を嫌いになった訳じゃない、ナイフを自分の喉に突きつけて、懇願しているカレンを放って置く事が出来なかつたんだ。でも、やっぱり君へ

の後ろめたさである時君にあんな事を・・・」

言い終わると、自分のした事の愚かさに吐き気がして、耐え切れず彼女に背を向けた。

「、・・・。」

背中に温もりを感じ、思わず目を見開いた彼は、そのまま自分の背中に感じる温もりに目をやった。

「・・・カナ」

「有難う。ちゃんと話してくれて・・・もついいのよ自分を責めないで」

背中に顔を埋めている彼女から、想定外の返事が返ってきて驚いた。いつから彼女はこんなに聞き分けが良くなったのだろうか。どこかいつもの彼女ではないと感じながらも、彼は振り返って彼女の肩を掴むと顔を覗き込み、まだ話していない肝心な事を伝えようとした。

「それと、カナ。僕はカレンが言った通りアメリカへ帰らな・・・」

「ね、ねえ！少しお酒でも飲まない？前飲ませてくれた・・・あのクリームのおいしいお酒、なんだっけ？」

「え？」

彼の話をかき消すようにして、先程までの様子とは全く違う彼女が、慌てたように捲くし立てた。その表情はどこか落ち着かず視線も定まっていなように見える。

「・・・カナ？」

「あれ凄く美味しいよね？貴方の部屋にも置いてあるの？」

そう言いながら、彼の腕から抜け出した彼女は彼の部屋へと向かって歩き出す。

「カナ？まだ、話が済んでな・・・」

逃げるようにして、彼の元から離れようとする彼女の腕を掴むとそのまま振り向かせた。同時に、彼女は両耳を手で塞ぎ目を固く瞑っている。

「カナ、ちゃんと僕の話最後まで聞いて。凄く大事な話なんだよ」

頭を何度も左右に振って彼女の耳を塞いだ華奢な手首を掴むと、彼はゆっくり耳からその手を遠ざけさせた。

「いいかい？僕は・・・」

「いやっ！-！」

「・・・。」

顔を上げて彼を見つめる彼女の目には涙が浮んでいて、一度瞬きをすればそれは簡単に零れ落ちてきそうだった。

これ以上、彼女を傷つけたくは無かったが、だからと言って無かったことにする事は出来ない。

意を決して、ふうーっと息を整えると、もう一度話し出そうとした。

「・・・僕は」

「いやよっ！嫌っ！どうしてそんな事言うの？！ずっと側にいるって言ったじゃない？私を悲しませる様なことはしないって言ったじゃない？私は何も要らないの！ただ貴方が側に居てくれるだけでいいのよ・・・。なのに、・・・なんで？・・・それすら叶わないの？」

みるみる顔が歪んでいく彼女の目から、大粒の涙がポロポロと零れ落ち始め、掴んでいた彼女の手首に掛かる力をふっと緩めた。顔を塞ぎ哀咽に崩れた彼女に何も言っただけで、自分の不甲斐無さに呆れて足元を見ると、自分の革靴の足先にポタポタと彼女の涙で作られた小さな水溜りがいくつも広がっていくのを、ただじっと見つめていた。

LOVE IS MAGICAL

第25話 二人の進むべき道

興奮状態になっている彼女を静める為に、何も言わず彼女を抱き寄せた。最初の方こそ腕の中で暴れ、泣き叫んでいた彼女も、次第に落ち着きを取り戻してきたのが判り、そのまま彼の部屋へと場所を移した。

ソファーに腰掛けてもなお、ヒックヒックとむせび泣いていた彼女は、まるで小さな子供の様だった。

肩を抱き寄せられて額に口付けが落とされると、頭の上に彼が頬を付け、身体全体を包むようにして抱き締めてくれる。彼の大きな手のひらで背中を何度も撫で付けられ、彼の温もりと匂いを感じるだけで、どんどん気持ちいくなっていた。

「・・・変な事言って、ごめんなさい・・・」

力の無い声で彼女がぼそつと呟いた。

「いいんだ、本当の君の気持ち聞いて嬉しいよ。そもそも君が謝る必要なんてない、僕が悪いんだから」

「もう大丈夫だから、ちゃんと話を聞かせて」

少し距離を取ると、彼女の手が大きな手の平で包み込む様にして握り締められた。彼女の目を真っ直ぐ見つめ、彼が少しづつ真実を語りだす。

「・・・僕の父はアメリカ本社にいてね、未だに現役で随分頑張ってたんだけど、さすがに歳には勝てなくてね、僕が代わる事になったんだ。カナに会うずっと前に僕の方から何度も打診してたんだ

けど、父は強情な人で。でも、まさか今になってそれを持ち出してくるなんて、皮肉だよね……」

「こっちは……日本の会社はどうするの？」

「ココは僕の兄のブランドンが代わりに引き継ぐらしい」

「アメリカの会社は貴方で無いとダメなの？」

彼は黙って頷いた。

「仕事もそうだけど、僕の両親ももう高齢だからね。そろそろ近くに居てやりたいって気持ちはあったんだよ」

「……。」

「今日、君に会ってこの事を話したかったんだけど、中々言い出せなくて……。驚かせる事になってしまって、本当にごめんね」

彼女はハツとした表情を浮かべた。そう言えば確かに電話で話があると彼は言っていたのに、自分の事ばかりで浮かれていて、彼に話すチャンスを与えずに居たのだという事に今更気付き、彼を責めるなんて筋違いもいいとこだと、心の中で激しく叱咤した。

「あ……私があんな話しちゃったから……」

固い表情を浮かべた彼女に、彼は黙って頭を振った。

「今日、僕はね。アメリカと一緒に生きてきて欲しいって、言うつもりで居たんだ。でも、あんな君の嬉しそうな顔見たら、とてもじゃないけど自分の都合でせつかくの君のチャンスを台無しにするなんて事出来ないなって」

思い出したら又感極まってしまったのか、彼の目が少し赤くなってきた。

「・・・いつ日本を発つつもりなの？」

「下半期が始まる頃、6月にはもう僕主導で行きたいから、5月頭には向こうに行かないと・・・」

「5月?! もう1ヶ月とちょっとしかないじゃない??」
「。。。」

悲しげな顔で見つめるその目は、彼の会社で偶然再会し、帰り際に打ち合わせ室に引き擦り込まれた時に、まるで捨て犬の様な表情を見せたあの時に似ている。

彼と離れたくない

「私・・・行く」

「え?」

「私もアメリカ行く!」

「力、カナ、仕事はどうするの? せっかく掴んだチャンスでしょ?」
「アメリカで探すわ」

「・・・カナ・・・英語話せるの?」

「うっ・・・な、なら話さなくてもいい仕事を探すわ。ビルの掃除係とか・・・」

「ダメだよ! 君は才能があるんだから。今の仕事を続けないと僕が許さないよ」

「貴方はっ! 、私と離れても平気なの?!」

「平気なはず無いよ。ただ、今の君の仕事を奪ってまで、アメリカに来て欲しいとは思わないね。それに・・・」
「それに？」

「本来ならプロポーズしたい所なんだけど」
「プ?!、プロッポツ???!」

慌てる彼女を尻目に、至って彼は真剣な顔で彼女を見据えている。そして視線を落としたかと思うと、はあーっと大きく溜息をついた。

「でも、僕はもう結婚は考えてないんだ」
「あ・・・。う、ん」

彼は二度、結婚に失敗していると以前言っていたのを思い出した。とても辛そうに話していたので、もう結婚は懲り懲りなのだろう。

「カナは年頃の女性だし、やっぱり仕事を捨ててまでアメリカについていくならそれなりにケジメつきたいよね？」

「あの・・・私、そんな事考えた事も無くて、な、なんて言っていないのか」

彼は彼女の事を一番に考えてくれている。今回の事により、彼女は改めて自分の事しか考えてなかったのだと思い知らされた。

「君の為を思うと・・・」
「・・・。」

「僕がここで身を引くのが一番いいんじゃないかと思う」

「・・・身を、引くって？」

彼の言っている言葉の意味が本当は判っているくせに、それを認めたくなくて判らない振りをして問い返してしまった。彼が返事をするまでの間、ほんの数秒のはずが、それは何分、何十分にも思える瞬間だった。

「僕はアメリカ、君はこのまま日本に残っていい男性おとこを見つけて、ゆくゆくは結婚して幸せな家庭を持つ」
「そ、それってつまり・・・別れるって事？」

ドクンッと胸が一際大きな音を立てた。恐る恐る震える声で尋ねると、彼は黙って小さく頷いた。

突如降って沸いた別れ話に目の前が真っ白になり意識が遠のいていく。今、目の前で起こっている出来事が、現実のものなのかも判らなくなっていた。

第26話 決心

突然の別れ話に彼女の頭の中は真っ白になった。

ついさっきまで愛を語りあっていたのが何だったのか。彼の事が又見えなくなっていく。

結婚という形を取りたく無いが故に、彼女の事を想っていても別れた方が彼女の為だと言うそれも、彼の優しさなのだろう事は判ってはいるものの、その考え方が彼女には到底理解出来るものでは無かった。

「貴方、自分が何を言っているのか判ってる？」

彼は彼女の手を離すと、前を向き膝に肘をつけて顔を塞いだ。

「うん・・・凄く辛い事を言ってるって事はちゃんと把握してる」

「私が『結婚』っていう紙切れだけの決め事に縛られる様な人間だとでも思ってるの？」

「そうじゃないけど、・・・でも、カナだっつていずれば結婚したいと思ってるでしょ？」

「そんなの！・・・思っただけで言えれば嘘になるけど・・・」

顔を塞いだ手を取り、ほらね？』と言わんばかりの顔をした。塞いでいた手を顎の下で組むと、視線を遠くにやりながら思い出すかのように彼が口を開く。

「娘がね・・・もう数年前の話なんだけど、娘の友達の両親が離婚して再婚したらいいんだ。で、その友達から色々嫌な事を聞かされたみたいで、ある日僕に『パパは再婚しないよね？』って聞いてき

「たんだよ。その時は勿論、そんな事思つても無かつたから『ああ、しないよ』つて答えたんだ。そしたら嬉しそうな顔されてね。だから、娘の悲しむ顔を見たくなくて、もう結婚はしないつて固く誓つたんだ」

「わからない」

「えっ？」

彼が目を見開いて、隣に座っている彼女を見た。さっきまで子供のように泣いていた彼女は何処へやら。何やら難しい顔をして眉を顰めている。

「貴方の事が判らない。結婚したくないつて言う気持ちは判るけど、でも、私は結婚したいから貴方を好きになつたわけじゃないのよ？ただ、一緒に居たいつてだけなの。それは今までと何ら変わらないのに、何故別れなきゃなんないの？」

「だつて・・・僕は結婚出来ないんだ。そんな僕とずっと一緒にいたつて君は幸せになれないんだよ？」

「?! だからっ！何で結婚できなきゃ不幸せだつて言う構図が出来あがるわけ?!」

「え?・・・だ、だつて」

「だつて、? 何よ?!」

「う・・・。」

明らかに苛つき出した彼女を見て、彼は何も言う事が出来ず閉口していた。

30も過ぎると途端に周りの声がうるさくなる。同僚は勿論、後

輩までもが次々と結婚退職していき、両親、親戚だけでなく、更には道行く人まで『あの人独身かな?』と言った類の聲がヒソヒソと聞こえてくるのだからたまらない。

たまには自分にご褒美と思つてエステにでも行こうもんなら、申込書に既婚なのか未婚なのか答える欄があるのを見て、心の中で舌打ちをする様なことが今まで何度あつたか。

結婚に対して自分は焦つていなかったのに、周りから責められて何するにも敏感になつていた時期も確かにあつた。

でも、今は優しい彼が居るし、仕事も順調。今が良ければそんな事思いもしなかつたのに。

「はあ〜っ・・・」

彼にまでそんな事を言われてしまい、大きな溜息が出た。

丸くなつていた背中を突然ピンツと伸ばすと、急に魂が吹き込まれたかの様な目で一点を見つめた。

「もういい! 決めた! 私もアメリカ行く!!」

「カナ、ダメだつて。君には仕事が・・・ひっ」

彼女にキツと睨まれて、彼は思わず口を噤んでしまう。

「これは私の人生よ。貴方に勝手に決められたくない!」

「カナ・・・」

腕を組んで口先を少し尖らせながら、ソファアの背にボスツと寄りかかった彼女の頬は、興奮気味なのか少し赤くなつていた。

そんな彼女の様子を横目で見ると、彼はクスリと微笑んだ。

長い腕を広げて彼女をぎゅっと包み込み、

「ありがとう」

と、耳元に囁かれた柔らかい声がとても心地よく、寄せられていた眉が元の場所に戻っていく。

強く抱きしめられた腕の力が無くなるのを感じると同時に、二人は唇を重ねた。

いつもの様に仕事に向かう。

いつもの電車に乗りいつもすれ違う人に会い、いつもの様に吠えてくる犬を横目で見る。

これらが日々の習慣の様になっていた。
それももう少しで終わろうとしている。

いつもと違うのは、

「マネージャー、この書類にサイン下さい」

走らせていたペンをピタッと止めると、顔を上げた彼女は怪訝そうな顔を浮かべている。

「もう、その呼び方止めてよ」

「どうしてですか？」

「なんだかこそばゆくて」

昇格してからというものの、彼女は以前にも増して慌しい日々を送っている。

彼の兄も来日したようで、引継ぎ関係で彼もバタついているのか、あれから電話で話はするが中々会うことが出来ないで居た。

「ボス、打ち合わせ行つて来ます」

「あいよ！いつてらっしゃい！」

少し暖かくなった街に目を向けてみると、待ち行く人はこれから始まる新生活に期待で胸を膨らませていると思われる人がチラホラと居て、自分もその一人のはずなのに素直に喜びを表せない自分が居る。

「。。」

期待と不安が入り混じる感情を抑えながら、少し立ち止まり桜の木の下でひらひらと舞い降りる桜の花びらを見上げていた。

2週間後

いつもの様に待ち合わせ場所に先についた彼は、人込みの中の彼女を見つけた。

彼の顔から笑顔が零れ落ち、彼女に向けて上げようとした右手は、上がる事は無かった。

「、。。。。。」

俯き、溜息混じりにヒールを引きずるようにしながらやってくる彼女の姿を見て、彼は胸が締め付けられた。

「ちょっと散らかってるけど、適当にくつろいでね」

ソファーとデスクとベッド以外はダンボール箱で溢れていて、足の踏み場も無くなっている彼の部屋。その光景を見て彼女の表情が一気に暗くなったのを、彼は見て見ぬ振りをしてデスクへと向かう。

「カナは準備進んでる？」

「ん？うん、。。。ボチボチかな」

「ボチボチって。。。後1週間しかないよ？」

「ん。。。私はギリギリにならないと本気が出せない性質たちなの」
「。。。」

ソファーに腰を下ろした彼女の目は焦点が合っておらず、大きな溜息を零しているのもきつと自分では気付いていないのだろう。

デスクで片づけをしながら、彼女のそんな様子を見ていた彼は、

作業する手を止め彼女の隣に腰を落とした。

膝の上に丁寧に重ねられた彼女の手を、彼の大きな手の平に覆われた事で初めて彼が隣に座った事に気づいたのか、少し驚いた顔をしている。

「カナ、無理してない？」

「え？無理って？」

「本当はアメリカなんて行きたくないんじゃないの？」

「そ、そんな事ないよ！・・・ちよつと疲れてるだけ」

彼女の手を掬い上げると、その白い手の甲にそつと口付けた。

「そか・・・でも、本当に無理はしないでね」

「・・・うん、ありがと」

「。。」

いつもと違う彼女の態度に彼は不安を覚えた。

それ以上その話をしなかったのは、彼女の気持ちが揺れ動いていると感じ、日本に留まる事を選択されたく無かったからだだった。

最終的にどうするかを決めるのは彼女だ。

彼は彼女の気持ちを優先し、一緒にアメリカへ着いて来てくれるのを願うしかなかった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第27話 本当の気持ち

マンションの前に車が止まり、いつもの様に助手席のドアを開けて彼女を部屋まで送って行こうとした彼が、シートベルトを力チャリと外す。

「？」

車から降りる気が無いのか、俯いて重ねた自分の手をじっと見ている彼女が気に掛かる。

“ ああ、もうこれ以上引つ張るのは無理かな。 ”

今日、彼女と会ってから幾度となくこんな彼女を目撃しては、素知らぬ振りをして来たが、流石に自分でも意地が悪いと感じ、彼は半ば諦めたように彼女に問いかけた。

「どうした？」

彼が声を掛けると、まるで魚が酸素を求めているように、何度も息を吸っては口をパクつかせている。何かを吐き出そうとしてそれが上手く出来ないのか、苦しそうに顔を歪ませた。

彼はそれ以上何も言わず、ただ彼女が話し出すのを待っていた。言わんとしている事は、彼女が醸し出す雰囲気で察しがつくが、自分にとって喜ばしくはないであろう事を、わざわざ自分から促す気にはなれなかった。

「あ、のね？」

「ん？」

沈黙が流れる。暫くして彼女が大きく息を吸ったのを合図に、彼の目をしっかりと捉えると落ち着いて話し始めた。

「実はまだ会社に何も言っていないの」

「うん」

「驚かないの？」

「・・・驚いたよ」

彼は微笑みながらハンドルを抱え込み、“あゝあ、とうとう言われちゃったな”と心の中で呟き肩を落とした。

思っていたよりもリアクションの薄い彼女を見た彼女が、何故が一番驚いている。どうやら本当に彼は何も気付いていないと思っていたようで、寝耳に水と言った具合だろうか。

今度は彼の方があーっと大きな溜息を吐くと、ハンドルを抱えたままフロントガラスの向こう側を見つめた。

「で？どうするの？」

「わ、かんない・・・」

ソコまで言うておいて、『わからない』と言う。後わずか一週間で日本を経つと言うのに、まだ会社に黙っている時点でこの答えは既に出たのも同然だろう。彼女の方に顔を向けると、どうにも煮え切らない彼女に又悪い癖が出てしまった。

「・・・別れる？」

「それは嫌っ！」

即答で返事が返ってきて、クスッと穏やかな笑みを浮かべたが、内心は冷や汗ものだった。何度も確認したくなるほど不安になってしまふ自分に辟易する。そして、その度に彼女の気持ちはちゃんと自分に向いている事が判ると安堵した。

艶やかな彼女の髪に手を伸ばし、自分には無い柔らかくハリのある髪質にうつとりして指を滑らせる。

「僕も・・・嫌だ」

ポツリと呟いた彼の言葉に、言葉足らずだったと彼女はハツとして慌てて付け加える。

「あ、貴方と一緒に居たいって気持ちは本当なの。でも、今の仕事を放り出してアメリカへ行く事が出来なくて・・・。だけど必ず行くから！少し遅れるけど・・・1ヶ月、1ヶ月後には必ずアメリカに行くから！・・・って我俣すぎるよね？やっぱり・・・」

彼は頭を振りながら、黒髪を滑る自分の指先を見つめている。髪を撫でていたその指が彼女の頬を包み込み、親指で彼女の頬をそつと撫でた。

「大人になると、どうしても自分の気持ちを押し殺してしまう。でも、君はちゃんと自分の意見を持つてるし、周りに流されるような人間じゃない。僕はそんな君の正直な所が好きなんだ。だから・・・君の好きにしてくれていいんだよ？」

彼は精一杯の虚勢を張った。

彼女を丸め込む策は幾らでもあったのに、もうほんの少しの嘘も彼女には吐いてはいけないのだと、必死で自分を押し留めた。

ばあつと雲間から太陽が差し込んだ様に笑顔になつた彼女を見て、

皮肉な事に自分の決断は間違っていないのだと自覚する。

「ありがとう、ジャック」

「ん。」

彼女から自分の胸に飛び込んで来たと思ったら、久しぶりに名前を呼ばれ、ここぞとばかりに飴を与えられた。この時ほど、勝手に緩み始める自分の顔が憎い思ったことは無かった。

“ 1ヶ月・・・か・・・”

ステレオから聞こえてくるのは、ある意味、二人に運命的な出会いをもたらしたとも言える、初めて彼と会ったときに貰ったCD。

それを聴く事で初心に戻るかもと思った彼女は、ベッドの上でまとまらない頭を抱え込んでいた。

プルッ・・・プルルルル・・・プルルルル

突然鳴り出した携帯電話に体がビクツと跳ね、『つくりしたあ・・・』と一人ごちる。ディスプレイ画面を見て彼からの着信だと知ると、嬉しい反面複雑な気持ちになった。

「もしもし？」

（あ、僕だけ。今日・・・今から時間ある？）

「大丈夫だけど。貴方は仕事じゃ？」

(うん、今日はリハーサルがあるんだけど、良かったら見においでよ)

「リハーサル？」

電車を乗り継いで彼の仕事場へと向かった。リハーサルが行われるという会場に到着すると、聳え立つ近代的な大きな建物を目にして思わず溜息を吐いた。

「はあ、凄いなあ・・・って、　　どうやって中に入るんだろう」

入り口らしき所には警備員が配置されていて、どう考えても顔パスで入れる様には見えない。彼に電話して見ても、既に繋がらず途方に暮れた。

“ 困ったな、ちゃんと入り方聞いておくんだった ”

携帯電話を手にしながらウロウロと徘徊していると、肩を誰かに叩かれた。振り返ると彼のお抱え運転手のビルが立っていて、見知った顔にホッと胸を撫で下ろす。

「お迎えに上がったよ。その様子じゃ、どうせジャケットに何の説明もされてないんだろ？」

「あ、そうなんです、有難う御座います！」

ケタケタと笑うビルに釣られて彼女も笑う。ジャックに対する不満だか、愚痴なんだかを聞きながら、関係者入り口から中へと入る事が出来た。

最初のドアが閉まり、薄暗い廊下の中をしばらく行くと又、分厚くて頑丈そうな大きな扉が現われた。

扉の向こうでは、軽快な音楽に併せて時折歌声も聞こえる。その曲と独特な歌い方から、今回彼女がCDジャケットを担当した、'JASON' だと言う事が音楽に鈍い彼女でも判った。

「こつから先は関係者しか入れないから、あんたはここから中に入つて」

「あ、はい」

中が気になってしょうがない彼女に、ビルは半笑いしながらそう言つと、さっさと暗闇の奥へと消えていった。

重い扉を体重をかけて押し開けると、一気に中の空気がぶわつと彼女にぶつかり一瞬目を閉じた。

それと、同時に大音量の音楽が耳を劈き、ビクンツと肩を竦めて両目を瞑る。

「ひゃっ！、・・・？」

暗闇の中を目を凝らしてよく見て見ると、ステージの上で何やら指示を飛ばしている彼をそこに見つけた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第27話〜本当の気持ち〜（後書き）

こんにちは、まる。です。いつもご訪問下さり有難う御座います。
そして温かい拍手もいつも沢山頂き、喜びで一杯です。

さて、後、2話程で第3章が終わります。

3章が終わったら、途中でほっぽりだしてる『青い空の下で君を想
う時』の更新を先にやっつけようと思っています。

こちらは後10数話で完結しますので、宜しければお付き合い下さ
いませ^^

そして『運命の人』の方は一応、まだ続きがあったりするので、こ
のまま第4章でスタートしたいと思っています。

新しいキャラ（俺様紳士）が登場しますので、宜しければ又引き続
きご覧頂ければと思います。

それでは、これから『運命の人』を宜しくお願い致します。

第28話 最後の決断

「OK、これで行く」

曲が終わり、マイクを持った彼が一言そう言うと、他のスタッフが舞台セットの調整の為か、一斉にステージに上がり始めた。

他のスタッフ達と真剣な表情で話をしていた彼の側に、舞台袖から近づいたビルが彼に耳打ちすると、彼女に向かって親指を向けた。

彼女を見つけた途端、真剣な表情が一変し笑顔が溢れ出す。話をしてきたスタッフに人差し指を立てると、マイクをビルに手渡して彼女の方へと向かってきた。

「ああ、ジャック。ちょっと次のセット見てくれない？」

「ちょっと休憩したらすぐに行くよ。・・・あつと、それ、1枚頂戴」

今にもステージに連れ戻そうとしている女性スタッフをなんなくやり過ごし、彼女の元へとやって来た。

「良く来たね」

彼の顔から笑顔がこぼれる。彼女の前まで来るとそつと抱きしめて頬にキスをした。先程女性スタッフから受け取った物を手渡され、大声を上げそうになる。

「じつ、じつ、こ・・・」

「そう、今度のJASONのニューアルバム。まだ世に出回ってないから貴重だよ？」

CDケースをいとおしそうに撫でている彼女は既に声を失っている。頭の上から『凄く素敵なジャケットでしょ?』と自慢気と言う彼に、周りの目も気にせず飛びつきたい衝動に駆られた。

「あ、有難う!一生大事にする!」

「僕の方こそ有難う。優秀なデザイナーさんに出会えて僕は幸せ者だよ」

いつもは企業のHPの作成などが主な仕事だった彼女。そんな彼女が初めて取り組んだCDジャケットのデザインにより、彼と二度目の再会を果たした。そして今の二人を築いたのも、この仕事に携われたからだった。

二人の色々な想い出が詰まっているジャケットを見ながら、感動に浸っている彼女の傍らで、彼は何度も誰かに呼ばれては待たせていた。

「あ、ごめんなさい。何か凄く忙しそうだけど、私ココに居て平気なのかな?」

「こっちは大丈夫だけど、僕があんまり相手して上げられないから、君は退屈かも」

ぶんぶん頭を振った彼女に、彼が『良かった』と言って微笑んだ。

「だって、JASON居るんでしょ?!何処に居るの?お礼言いたい!」

彼の肩越しにステージの上を探すが、それらしき人影は見えない。

「困った事に、彼はまだ来ていないんだ」
「え？でも、さっき歌ってる声が・・・」

彼が腰に手を置き、ふーっと困った顔をした。先程チラツと聞こえた歌声と話し声は、明らかに録音されたものでは無いのに？
首を傾げてキョトンとしている彼女に、彼がプツと噴出した。

「ああ、ごめん、あれ僕」
「はいい?!」

又、一風変わった彼流の冗談なのかと思いきや、どうやらそうではないのか、彼女に判るように丁寧に説明をしてくれた。

「リハーサルだからと言っても、本人が歌うのが当たり前なんだけど、遅刻しててまだ来てないんだ。でもセットや照明、バンドとかの関係である程度感じを掴む為に、僕が代わりに歌わされてるんだよ。まあ、彼の曲の大半は僕が作った曲だし、声も本人と似てるから丁度良いみたい」

大きな目を丸くして、まだ信じられないと言った様子の彼女。記憶の底を探ってみれば、確かに、『ボイストレーナーをしたり、曲を作ったりもする』とか言っていたのを思い出して、ひとり小さく頷いた。

「僕だっていつも書類にハンコばっかついてるだけじゃないんだよ？」

得意気に笑ってみせる彼に、素直に尊敬の眼差しを向けた。

「そ、そうなの?! 凄い!!! 貴方の仕事って幅広いのね。・・・そ

れに比べたら私の仕事なんて、私が居なくても代わりはいくらでもいるもんね。あゝあ、さつさと辞めてアメリカ行く準備しなくちゃ」

苦笑いしている彼女からそんな言葉を聞いた彼は、彼女の手を両手で掬い急に真剣な表情を浮かべた。

「・・・あのね、その事で少し話があるんだ」

「話？」

「うん・・・あのさ」

彼が話し出そうとした時、ステージの周りに居るスタッフ達からどよめきが起こった。それに気付いた彼が話をピタツと止めて後ろを振り返ると、どうやらこのリハーサルの主役がやっと現れたようだった。

「ああ、彼が来たから手短に言うよ。

君は焦ってアメリカに

来る事はないからね」

「え？」

「辞めたくないんでしょ？仕事」

「あ、・・・いや、えーと・・・」

まるで本心をつかれたと言っているように、目を泳がせて途端に落ち着きが無くなった。そんな彼女に彼は一つ息を吐いて、にっこりと微笑みかける。

「ほんつと、君が正直な人で良かったよ。　　そうだ、もつとき
つぱり『行かない！』って君が思える様な話をしてあげるよ。実は、

アメリカで彼のライブが成功したらワールドツアーに出る話があるんだ」

「ワールドツアー？」

「そう。だからアメリカに君が来ても、それが本決まりになったら、僕はすぐ何処かに行かなきゃいけないんだよ。ライブプロモートの仕事も勿論だけど、忙しい彼だからさつきみたい代理をさせられる事もあるだろうし。彼もそれを見越して僕を頼ってくれてるんだと思う。ツアーは心身共に過酷だから君を連れて行くのも無理があるし、かといって君を一人アメリカに置いていくのはちょっと気がかりだし。・・・だから僕が落ち着くまで君はココで頑張るんだ、いいね？」

「・・・それっていつまで？」

「うーん、1年位かな？」

「い、1年？1年も会えないの?!」

落ち着いて話をする彼とは全く違い、彼女は動揺を隠し切れなかった。1年も会えないなんて、彼女のアメリカ行きが1ヶ月先に延びるとかの非ではない。しかも、彼の口振りを見る限りでは今度は彼女に選択権があるわけでもない様子だ。

「そ、んな・・・？」

慌てふためいている彼女の頬に、彼の手の温もりを感じた。

その手はいつも通り暖かく、次第に動揺していた心が落ち着きを取り戻していく。

「カナ、僕達なら大丈夫だよ、何も心配いらなから。」

「……。」

果たして、今の自分に彼と1年も会えないという事が耐えられるのであるのか？ 答えを出し渋っていると、遠くから又、彼を呼ぶ声が聞こえた。

「おい、ジャック！ 次の曲も代わりにやっといってくれっさ！」

「ああ、わかった！ すぐ行くよ！」

彼女の肩に手を置いて、俯きがちな顔を覗き込む。

「と、言う訳だから、いいね？ ……あ、そうそう。 次の曲は今の君にピッタリだと思うよ。」

そう言ってウィンクすると、足早にステージへと戻っていった。スタッフとしばらくやりとりをしてからスローな曲が流れ出す。彼女も耳にした事のあるその曲は、遠く離れた彼女を想う内容の歌であった。

君は一人じゃない

僕はいつも側に居る

切ない歌詞が胸を締め付け、気がつけば頬を濡らしていた。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第28話 最後の決断 (後書き)

明日(多分)で第3章終わりますm——(m

第29話 運命

昼食後に行われているいつもの退屈な会議。マネージャーと言う立場上、こういった会議にも出席する機会が増えてしまい、昇格するのも良し悪しだなと溜息を吐いたのも束の間、会議室の窓辺に差し込んだ春の穏やかな日差しをポカポカと浴びながら、いつしか落ちてくる瞼と必死に戦っていた。

リハーサルを見に行ったその日から、彼女は毎晩、足繁くあししば彼の家へと通っていた。日を追う毎に増えていくダンボールを見ては、彼の居ない毎日を想像して勝手に涙が込み上げてしまう彼女を、彼は黙って何度も抱き締めてくれた。

明後日になると、彼は一足先にアメリカへ発ってしまう。しばらく彼と会えなくなると思うと、1日、1時間でも多く、彼の時間を記憶に留めておきたかった。

「　　」

意識を手放しかけた時、ジャケットが小刻みに震えるのを感じた。ポケットに手を伸ばし、携帯電話を取り出して見ると、彼からの着信に一気に目が冴える。

慌てて会議室を飛び出しすぐに受話ボタンを押すと、電話の向こうからざわついた音が聞こえて外から掛けて来ているのだとすぐに判った。

「もしもし?」

(・・・ああ、そう。それ、うん・・・。 あれ？もしもし?)

「はいはい？」

(ああ、ごめんごめん、今大丈夫?)

「今、会議中なんだけど。どうしたの？」

(あゝそうだったの、ごめんね、用件だけ言わせて。実は今日、今からアメリカに急遽発つ事になったんだ)

「えっ?! 嘘でしょ??」

(いや本当。今朝急に決まって、チケットの手配やら荷物の準備やらでバタついちゃってさ、電話するのが遅れちゃったよ、ごめんね)

「遅すぎるよ！今からなんて・・・見送りに行けないじゃない！」

(はは。いいよ見送りなんて悲しくなるから)

「貴方が良くても私が嫌なの！ちゃんと『さよなら』言いたいのに！」

(やっぱり来て貰わなくて良かったよ。『さよなら』なんて言われ

たくないもの)

「そう言う、意味じゃなくて・・・」

急にしんみりとなってしまい、お互い言葉が途切れてしまった。

(Attention Please・・・)

電話の向こうから構内放送が聞こえ、それに耳を傾けている彼が、慌てて彼女に最後の言葉を告げた。

(あ、もう行かなきゃ・・・。 いかい？離れていても僕はいつも君の事を想ってる。大丈夫、僕達はきつと上手くやれるさ)

「……うん……」

突然過ぎる別れの言葉に、彼女は返す言葉が見当たらない。こんな時こそ、もつと気の利いた言葉を言えればいいが、残念ながら彼女の恋愛ポキヤブラリーは貧困過ぎて、全く役に立たない。

(又、向こうに着いたら電話する。 カナ?)

「……なに?」

(愛してるよ)

「うん、私も……愛して……ます」

(……フツかわいいなあ……)

「は、恥ずかしい……」

(じゃあ、又後でね)

「うん、気をつけて行ってらっしゃい」

(……。)

「……。」

(電話、切つてよ)

「え? 貴方が切つてよ」

(それが出来ないから言ってるのに!)

「私だつて!」

(お願い、君から切つて)

「……判った。じゃあ必ず電話頂戴ね」

(うん)

震える指でボタンを押した。携帯電話を両手で胸に押し当て目を

閉じると、彼に何度も洗脳されるように言われた『大丈夫、私達なら大丈夫』だと、彼女もまた自分に信じ込ませるようにして心の中で何度も呟き、いつか再会できる日を夢見て思いを馳せた

一年後

「ちょっと待ってよ、カナちゃん！」

その声に反応する様に、ピタッと立ち止まると眉間に皺を寄せながら勢い良く振り返った。

「『マネージャー』でしょ?!マ・ネ・・・ジャ・・・!」
「なんだよ!他の奴には『マネージャー』って呼ぶなって言っ
て」

拗ねた顔で口を尖らせている健人に、彼女はクスツと笑うと短くした髪をかき上げながら、オフィスのロビーをヒールを鳴らして歩き出す。

「ねえねえ、メシ行こうよ奢るからさ」

「あら、珍しい。随分羽振りがいいのね」

「じゃ、決まりね!」

「ダメダメ、今から英会話学校に行くんだから」

彼がアメリカに行ってから程なくして、お抱えアーティストのワ
ールドツアーが本決まりになり、彼は世界中を飛び回る事で次第に
時間の感覚がわからなくなったのか、電話も途絶え途絶えになっ
ていた。

不安に駆られながらも彼の言葉を信じ、いつか彼とアメリカで生
活する事を夢見て、彼女なりに準備を進めていた。

「そんなの休めばいいじゃんかよ」

「あのねえ、こういうのは休むと身につかなくなるのよ。わかる
？ 継続は力なり、よ」

「んなこと言わないでさあ」

そう言いながら、彼女の肩に手を回してきた健人の手の甲をぎゅ
っつつまみ上げた。

「はいはい、又今度ね」

「いつてっ!」

彼が日本を発ってから、もうすぐ1年が過ぎようとしている。最
後に電話で聞いた彼の話では、もうすぐ日本に戻ると言っていたの
を思い出し、それがいつになるかは判らないけれども、彼女はその
日が来るのを心待ちにしていた。

ビルのエントランスを抜けた瞬間、ふんわりと暖かい春の風が吹
き抜け、彼女の肩まで切った髪をサラリと揺らす。風によって鼻孔
を掠めたその香りに、彼女は思わず立ち止まった。

「やれやれ、相変わらずだな、君は」

聞き覚えのある柔らかい声が聞こえ、目を見開いて声のする方に目をやると、そこには車のボンネットに腰をもたげ、腕を組みながら苦笑いしている彼が居た。

長くウェーブのかかっていた髪をバツサリと切り、ストレートのサラ髪が春の風にふわふわとなびいている。

「・・・、ジャケット!」

抱きしめるように抱えていた英会話の教材が、バサバサツと音を立てて地面にこぼれ落ちる。勢い良く彼に向かって駆け出すと、そのまま彼の胸に飛び込んだ。

「ただいま、カナ・・・逢いたかったよ」

「おかえりなさいっ」

桜の花びらがヒラヒラと舞い降りては、春の風によって又舞い上がるのを繰り返している。そんな美しい春の光景の中、人目を気にすることも無く二人はいつまでもお互いの感触を懐かしむ様に、ただ抱きしめあっていた。

お互いを強く信じあう事で、二人は1年振りの再会を果たす。二人の運命の針は留まる事を知らず、刻々と同じペースで時を刻んでいた。

この時、抱き合いながら二人は同じ事を考えていた。

一枚のCDがもたらした二人の逢いがもはや偶然ではなく、出逢うべくして出逢ったまさに「運命」だったのだと言う事を・・・。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第29話〈運命〉（後書き）

こんにちは、まる。と申します。この度はご訪問下さり誠に有難う御座いました。

さて、以前何度かアウンスさせて頂いてましたが、この『運命の人』は本来ならここで完結でした。ですが、嬉しいかな、リクエストを頂きまして、続編を書いてしまいました。

続編も結構長く、思いのほかこの『運命の人』が私的には好調だったので、ここ（小説家になろう様）でこれ以上引つ張るのは、私が一番恐れている、『飽きられる』のではないかと、土砂降りの雨の中、捨てられた子猫のように震えていたのですが、かといってこのままお蔵入りさせるのも・・・と色々悩んだ末、このまま引き続き掲載して行こうかと思っています。すいません；

簡単にあらすじをご説明させて頂くと、キャラ（俺様紳士）が一人増える（正確にはもう一人出てきますが、登場回数少なし）のと、相変わらずジャックとカナがすったもんだする内容となっております。

宜しければ、又暇つぶしにでも読みに来て頂ければ幸いです。

そして、明日からは更新が止まっていた『青い空の下で君を想う時』を更新して行きたいと思えます。

ほのぼの系ですが、後半部分にちよつとした捻りをくわえております。かと言って、後半部分だけ見ると、何を捻っているのか判らないと思えますので、是非1話からご覧になって下さい^^
ちなみに、私は『運命の人』よりも『青空の下で君を想う時』の方が好きだったりします。

しかし悲しいかな、私が好きだからと言っても必ずしも読み手側さ

んと比例するわけではないんですね〜H A H A H A ^ ^ ;

おっと、つい喋り過ぎてしまいました。お話よりも後書きが長くなりそうなので、ここいらで失礼させて頂きます。

ご訪問有難う御座いました^^宜しければ又お越し下さい！

第1話　運命、再び

ハラハラと舞い落ちる桜の花びらの渦の中。

二人は互いの運命を感じながらも、突然の再会に喜びをかみ締めていた。

今まで得ようとしても得られなかったモノ。今、それが目の前にあるのだと言う事を肌で感じる。

「やっとカナを抱きしめられる事が出来たよ」

「もう・・・貴方はいつも突然現れるんだから」

車のボンネットに彼がもたれながら、‘もう離さない’と言わんばかりに、彼女をキツク抱きしめた。

生で感じる彼の声、彼の体温、彼の匂い。

全てがいとおしく、不足していた分を補うかのように、しばらく二人は、そのまま無言で抱き合っていた。

「君の顔をもっと良く見せて」

彼がそう言うと、彼女の肘を持ち少し距離を取り、見詰め合つとお互い自然と顔を寄せて行った。

「あゝ！ちょっとタンマ、タンマ！お取り込み中悪いんですけど・・・カナちゃん英会話学校に行くんじゃないの?！」

二人の世界に浸っていた所に邪魔が入り、眉間に皺を寄せて健人の方を振り返った彼は、冷たい言葉を浴びせた。

「何だ君。まだ居たの？」

「っな、何だよっ！居ちゃあ悪いのかよ！ったく、俺が先に誘ったんだぞ?!」

「君、悪いと思ってるんなら、邪魔しないでもらえるかな。僕達は忙しいんだ、会えなかった1年間分、彼女を抱きしめないとならないんだから」

そう言うつと、片手で健人を払いのける仕草をした。

「チツ、相変わらず、感じ悪い。 てか、カナちゃん。『継続は力なり』とか言ってたのはどうなったんだよ」

「馬鹿ね、ココに先生がいるじゃない」

そう言うつて、彼の顔を覗き込むようにして見上げていると、どんどん甘顔になっていく彼に、微笑みながら下唇を噛んだ。そして、その表情とは全く別人の様な顔つきで、彼が健人をじろりと見据えるつと、

「ここだとゆっくり出来ないから、僕達は失礼するよ」

「……。」

彼が助手席のドアを開けて彼女を車に乗せ、ボンネットに手を這わせながら、運転席側に回り込んだ。運転席のドアに手を掛けた時、

「……、ああ」

ふと、何かを思い出したのか、既に背中を見せていた健人を呼びとめるつと、

「健人君、1年間カナを守ってくれて有難う」

そう言って、ニッコリと余裕の笑顔を見せて、運転席に滑り込むようにして乗り込み、すぐにその車は走り去っていった。

「はあ、・・・俺って、正真正銘の大馬鹿野郎だな」

ポツン、と一人その場に残された健人は、1年前に彼と交わした‘約束’を、柄にも無く律儀に守っていた自分に嫌気がさした。

道端にばら撒かれた英会話学校の教材が、風に吹かれてパタパタとなびいているのを見つけると、何度も溜息を吐きながら、健人はそれらを拾い集めては肩を落としていた。

運転席のドアが開くと滑り込むようにして、彼がシートに身体を沈めた。

ブオンッ

「・・・?」

彼をじっと見つめる彼女に気付くと、エンジンをかけながらも彼

はニコリと微笑みかけてくれる。その笑顔に、呼吸をするのを忘れてしまいそうな位、つい、見とれている自分が居た。

これはもしかして、夢じゃないだろうか？1年もの間、ずっと会えずに居たのだから、今、この時間が現実のものなのかさえも、区別がつかなくなっていた。

桜が咲き乱れる街路樹をくぐり抜けるように、車がゆっくりと動き出す。彼女は変わらず、ただ彼の横顔をじっと見つめ、言葉を無くしていた。

やがて交差点に差し掛かり、赤信号で車が停車する。

「どうしたの？さっきからじっと見つめてるだけだね」

彼が溜息混じりにそう言うと、少し困った様な表情をしながら、彼女の方へ振り向いた。

「・・・あ、ごめんなさい！　　なんだか、夢を見ているみたいで」

瞬きする事すら忘れている彼女を見た彼の目尻が徐々に下がり初め、それと同時に口角が上がっていった。いとおいしい者を見つめるようなその視線は、少しづつ、彼女の口元まで下がり始める。

「　　髪、切ったんだね」

「うん」

「短いのも素敵だよ」

片方の手はハンドルの上部に掛けられたままで、彼のもう一方の手が、彼女の髪をすつと撫でつけると、その手が彼女の後頭部に回

されて、ゆっくりと引き寄せられる。

ブツブツ

「……。」

唇の先がほんの少し触れた途端、後方からクラクションのけたたましい音が鳴り響き、思わず体がビクツと跳ね上がった。

彼は大きく溜息を一つ吐くと、仕方なく彼女から離れ、右手の甲で口を軽く拭いながら、すぐに車を走らせた。

「なんだよもう！さつきから邪魔ばかり入るな……。せつかく一年振りに会えたって言うのに、これじゃあフラストレーションが溜まる一方だよ、ねえ？」

シフトレバーのロック解除ボタンを、左手でせわしなくカチカチと何度も押している。その彼の手の上に、彼女はそっと自身の手を重ねた。

「……？、」

手に触れた暖かいものを感じた彼が、手元に視線を落としてから彼女の方を見た。

「こうしてれば少しは落ち着く？」

少し照れながら彼女がそう言っていると、逆の効果をもたらしてしまったのか、彼は驚いて目を見開いたと思ったたらすぐに目を細め、彼女の予想と反した答えが返って来た。

「ダメ。余計落ち着かない」
「なんで？」

「このまま君に飛びついて事故ってもいいのなら、そのままにしておいてくれてもいいけど？」

片眉を上げて、上から彼女を見下ろすようにして、横目で睨まれた。そんな彼の言葉と態度に、彼女は思わず噴出しながら、

「プツ、ごめんごめん、まだ死にたくない」

慌てて手を放して、口を尖らせている彼を横目で見ては、クスクスと笑う。久しぶりのこんなやり取りに嬉しくなって、もっと触れたい。今はそれをグツと堪えて、彼の隣に居られる事に幸せを感じていた。

「・・・覚悟しておいてよね」

「え？」

「ああ、それはそうとさ、・・・」

一瞬だけ見せた艶かしい彼の表情に、何だか不吉な予感がしつつも、すぐに話題が変わった事であえて彼に聞き返す事はしなかった。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第1話〜運命、再び〜（後書き）

こんばんは、ご訪問有難うございます。

『青空の下で君を想う時』が最終話で（私的には）劇的な伸びを見せました。皆様のお陰です、有難うございました。

さて、第4章スタートします。

毎度、頭を抱えて苦戦しておりますが、なんとか頑張りたいと思いますので、宜しければ又お越し下さい^^

第2話〜理由〜

他愛の無い会話をしつつも、車はどんどん進んで行く。見慣れた町並みが見え初め、なんとなく何処へ向かっているか予想がついて、少しがつくりした。

「何処行くの？今日はお休みじゃないの？」

「このままちよつと会社に寄るよ。・・・実は、後1時間位したら又仕事で出ないといけないんだよ。時間があまりないから、いい？」

「そうなんだ、残念。私は別にいいけど、貴方は都合悪く無いの？
だって私、顔割れてるし」

「無問題」

彼女の心配も余所に、‘何か問題でも？’と言わんばかりの彼を見て、思わず以前付き合っていた男性を思い出してしまう。

学生時代にアルバイトをしていたレストラン‘ラ・トゥール’に、顔見せも兼ねて久し振りに食事に行った時、ギャルソンとしてその彼は働いていた。

『俺、なかむら まさひろ中村正博つてんだけど。番号教えて？』

半ば強引に携帯番号の交換を迫られ、気付いた時には彼の腕の中に落ちていた。最初の出会いこそ軟派な感じだったが、いざ付き合ってみると、同い年の割りにしっかりしている所が好感を持てた。

ただ、一つ、彼女がどうしても納得がいかなかったのが、ラ・トウールのスタッフには、二人の事は絶対秘密にされていた事だった。『仕事がい辛くなる』と言う理由だったが、隠す割には結婚願望が強く、『結婚したらさあ〜』が口癖の様になっていて、そんな彼に不信感を抱き始めた彼女は、次第に心を閉ざしていった。

“ ナツカシ・・・ ”

昔、そんな事があったのを思い出すと、今、自分がジャックにのみりこんでいる理由が一つ判った様な気がした。

彼は二人の関係を隠そうとはしない。むしろ、彼女の会社の前で抱きしめたり、キスを落としたりと彼女の方が慌てる程、赤の他人にまでオープンにしている。

外国で育った彼と、日本人の元カレ。

育った環境の違いなのだろうか、そんな彼にいつも動揺しつつも、心の奥底で愛されているという事を実感し、自然と笑みが零れ落ちた。

以前、何度か行った事のある彼の会社の正面入り口では、相変わらず沢山の人が往きかっている。

てつきり裏口や駐車場へ向かうものかと思っていたが、堂々と正面に車を止めキーを抜くと、颯爽と車から降り、それを見た警備員が慌てて飛んできた。

「あの！ココに車止められると困るんで。地下駐車場に停めてもら

えませんかね？」

「ん？いつからそんな決まりになったの？僕はいつつもココに車を停めるんだけどね」

「いや、そんな筈は・・・」

見るからに若い警備員は、怪訝そうな顔をして彼の行く手に立ち塞がると、彼は「参ったな」と言わんばかりに両手を広げた。

「・・・？ あ！今日お帰りでしたか！」

正面ドアの内側から、慌てて飛び出てきた年配の警備員がそう言うのと、手に持ったファイルを捲りながら駆け寄ってくる。

「おかしいですね、こちらに連絡が入ってなかった様でして・・・
すみません、こいつ新人なんです。ほら！この方はジャックさんだよ！ここの・・・」

年配の警備員が若い警備員の頭を掴み、何度も下げさせると、その若い警備員はやっと思い出したのか、急に青ざめた顔になり、自分の粗相を慌てて詫びた。

「し、失礼しました！」

「ああ、そうだ、慌ててたから今日戻るって伝えるの忘れてたよ。
こちらこそ、ごめん。あ、君も気にしないで。いい心がけだと思うよ？」

褒められたと思って照れている若い警備員に、年配の警備員が頭をパシントンとはたいている。それを横目で見て笑いながら助手席側に回り込むとドアを開け、『ごめんね、お待たせ』と彼女に呟いた。

彼女を車から降ろしてドアを閉めると、車の鍵を先程の若い警備員に向かって放り投げた。

「じゃ、僕の事を覚えてもらう為にも、この車、下の駐車場の、N O、う、に停めておいて」

「は、はい！……って、あっ、N O、う、って、確か……」

若い警備員が呟いた言葉を聞く前に、彼女の手を取り正面玄関から堂々と中へ入って行った。

L O V E I S M A G I C A L

第2話〜理由〜(後書き)

しばし、甘い時間が流れます・・・

第3話 繋いだ手

「やだ！あの人、素敵じゃない？」

「足、なっが〜い！」

彼を見つめる視線が歩数を増やすごとに増え、明らかに釣り合わない自分と繋がれた手が申し訳なく、思わず払い除けたくなる。

彼も周りの視線や黄色い声に気付いているはずなのに、当の本人は至って平然でそれどころか、

「う〜ん、一年居ないだけで随分様変わりしたな〜。僕が知ってる顔が居ないや」

そう言いながらも、彼を見て立ち止まる女性たちに、ニコリと笑顔を振りまくほどの余裕を見せている。

「・・・社長？お久しぶりで・・・、す」

彼はそう言ったが、それでも何人かは彼の事を知っている者も居た様で、時折話しかけられると、相手はすぐに視線を落とし、二人の繋いだ手を見ては最後の語尾が消える始末。そして、再度、手を伝って視線を上げるが、次の言葉を出す事が出来ないで居るのだ。

流石の彼女も、この羞恥に耐え切れず、程なくして限界を感じた。

「ね、ねえ・・・手、離そ？」

「何で？」

彼女の問いかけもちゃんと聞こうとせず、横顔を見せるだけでスタスタと歩いていく。

「だって、ここは貴方の仕事場でしょ？みんな変な顔で見てるもの、視線が痛いよ」

「却下。」

「いや、冗談じゃなくて・・・」

やっと話を聞く気になったのか、彼が突然ピタツと立ち止まり振り返った。キヨロキヨロと周囲を気にしながら、引つ張られるようにして彼の後をついて歩いていた彼女は、勢い余って彼の胸に飛び込む形となる。

「ひゃっ！」

すぐに離れようとしたが、背中に彼の手が回されて、どうやら離れる事を許して貰えない様だ。彼の胸元に手を置くと、頭の上にかかる甘い吐息の出所を見上げた。

長い前髪の間から見せる彼の大きな瞳がすぐそこにあり、彼女をじっと見つめている。何の迷いも無さそうなその目は、周りの雑音さえも掻き消す。

「あのね、カナ。別に僕はここで君を抱きしめる事も出来るし、なんならキスだってしてもいいんだよ」

「、ばっ！そっ！ダメに決まってるでしょ?!」

真剣な表情で何を言い出すかと思えば・・・。彼女は顔を真っ赤にして、首を何度も横に振った。

只でさえ注目を浴びやすい彼なのに、ロビーのど真ん中で、ずっ

と抱き締められた状態から、彼女は抜け出す事が出来ずに居た。周りの視線やざわつく声が益々酷くなって行くのを感じると、恥ずかしさで気が狂いそうになり、自然と涙目になる。

「何で？さつき、君の会社の前ではキスしてくれそうだったのに」
「あ、あれは、・・・」

痛いところをつかれ、そのまま口を閉ざした。

「思いがけず僕が居て嬉しかったんじゃないの？それで周りが見えなくなっただんじじゃないの？」

「う、ん・・・だと思う、・・・けどっ！それとコレとは、」

「違うないよ。僕はいつもそんな感情を君に抱いてるんだ。だから、いつでも何処でも君を抱きしめて、君に触れて君にキスしたいって思ってる」

「ジャック・・・」

彼の気持ちが嬉しかった。

そんな事を真顔で言ってくれる人なんて、例え血の繋がった肉親でも居なかったのだから。

「だからさ、手を繋ぐ位許してよ？でないと僕、おかしくなっちゃいそうだし」

彼は片手で自分の目を覆うと、天を仰いだ。一際大きな溜息を零すと、視線を又彼女に戻し、淀みの無い大きな双眸で彼女を再び見つめた。

「・・・判った、我慢する」
「酷いなあゝ、我慢、なの？」

彼が顔を覗き込むようにしながら彼女の手を掬い上げると、二人は又しつかりと手を繋いで歩き出す。

『我慢する』なんて、可愛くない言葉をつい発してしまったが、恥ずかしさの余りか、本当の自分の気持ちを必死でおさえ付け、つい、照れ隠しで出た言葉だった。

ずっとこのまま手を繋いでいたい

漠然と思ったその願いは、簡単に叶えられそうに思えて、実はそうではないのだと言う事を、この時、彼女はまだ気付いていなかった。

LOVE IS MAGICAL

第4話 欲しいモノ

彼は彼女をいつも感じていたと言う。

彼女の笑い顔、拗ねた顔、恥ずかしがっている顔、悲しい顔、怒っている顔……

どんな彼女でも彼は全部がいとおしく、全てを投げ出してもいいくらい、彼女にのめり込んでいるのが、自分でも信じられなくなっていた。

離れていた1年間もの月日が、尚も彼にそうさせるのである。以前にも増して、欲しがる、自分がソコに居た。

エレベーターに乗り込み、彼はすぐに最上階のボタンを押す。密室の奥へ進んだ彼女は、壁に背中を預け、彼が彼女の前で立ち止まるのを不思議そうな目で見つめている。

壁に左手をつき、右手で彼女の耳の上の髪をかき上げる。

密室で二人つきりになった途端、手を繋ぐだけでは物足りなくなり、彼女の「中」の温もりを感じたい衝動に駆られる。

このまま。

そう思った時、ガクンとわずかな振動を感じて慌てて扉の方を向くと、思った以上に早く扉が開いた事に、一瞬息を呑んだ。

「　　？　社長？社長じゃないっすか！ご無沙汰してます！お元気でしたか？いつ、こちらへ戻ってこられた　…　…　…」

箱の中に入ってくるなり、矢継ぎ早に質問攻めにして来た二人の若手社員に、彼は適当に答えながら、両手をぶつきらぼうにズボンのポケットに突っ込むと、そのまま彼女の隣にもたれかかった。

「…で、ですね　。」

扉が閉まっても、尚も話しかけてくるのがうっとおしかったのか、彼は背筋を直し扉横のボタンの上部にある数字を見つめた。

3・・・4・・・5と、エレベーターが上昇するのを確認しながら、右手をポケットから出すと、素早く「6」のボタンを押した。

すぐさま6階に到着したエレベーターは、扉が開いてもボタンを押した当の本人は勿論、誰も降りようとはしない。

尚も、話し続ける社員に彼は目配せをし、

「…どうぞ？」

右手をスツと扉へ向けた。

「え？いや、私達も最上階に・・・」

「おいっ！」

「え？」

もう一人の社員が彼女の方にチラッと目を向けながら、お喋りな社員に肘でこづく。やっと状況が飲み込めたのか、慌てて、

「あ、あ！そうだ、ええと・・・従食に行く予定だった・・・な？残業になりそうだし・・・」

「そうそう、じゃ僕達はこれで」

そう言つて、慌ててエレベーターから降りた二人に向かって、彼は笑顔で手を振っていた。

扉が静かに閉まり、又エレベーターが上昇しだすと、

「え？何？今のつて・・・」

一連のやり取りを、あっけに取られて見ていた彼女は、扉を指差し何度も彼と扉を交互に見ている。

彼は両手をポケットに突っ込んだまま、

「ん？何でもないよ？ちよつと、気を使つてもらつただけ」

「そ、・・・それつて、酷くない？！」

「いいの、いいの。さて、邪魔者は居なくなつたし」

横に並んでもたれ掛かっている彼女の頬に手を添えて、彼女を自分の方へと向かせる。顔を少し傾げて距離を縮めると、口唇に触れる寸前でピタリと動きを止めた。

「　　、ここにも邪魔者が居た」

天井に設置された、赤いランプが点灯している丸い物をしげしげと見つめ、ギリツと目を細めた。

「つたく！誰だ！こんな所に防犯カメラなんてつけたのは！」

諦めたのか、又壁にもたれると眉を顰め、うらめしそうに天井を

睨みつけた。

「さあ？」

「

笑うのを堪える様になっている彼女を見て、彼は少し頬を膨らませながら、もう一度、手持ち無沙汰になった手をポケットに突っ込んだ。

「。」「

二人きりになった途端、節操も無く彼女を欲しがる自分に、我ながら驚いた。遠距離恋愛なんて、自分には向いていないと以前は思っていたのに、彼女と出会ってから今までの自分は一体何だったのかと思わされる程、彼女が恋しくてたまらなかった。

1年もの間、ずっと彼女に触れたい気持ちで我慢していたのだから、こうなるのは自然の摂理なのだと思いに言い訳を始め、じっと液晶に映る階数表示を見つめていた。

第5話　欲情

あれほど二人きりになろうと躍起になっていたのが嘘のように、今では一秒でも早く、この四角い箱から飛び出たくて仕方が無いのか、さっきから液晶に映る階数表示を睨みつけては、腕を組みながら指をトントンと忙しく弾いている。

この密室では二人だけの世界だと錯覚してしまうが、きっと誰かがカメラ越しに高みの見物をしているのだろうと思うと、『この空間が逆に辛い』と彼がポツリと呟いた。

やがて最上階に着いた事を知らせる様に、一瞬体がふわっと浮く感じがした。扉が完全に開ききるのも待てず、彼は彼女の手を取ると、手で扉を押し開けた。

又、足早に廊下を歩き出す。

彼の長いコンパスでは、彼女は着いていくのがやっとだった。

右腕をぐっと上げ、ジャケットの袖から顔を出した腕時計を見ると、更に歩くスピードが加速する。彼女は危うく躓きそうになっているのも気にも留めず、黙々と歩いていった。

「ちょ、ちよつと待って」

「待てないよ」

スピードをゆるめずに振り返りながら彼女に微笑んだが、明らかに余裕の無さそうなその顔に、一体何をそんなに急いでいるんだろうかと、一抹の不安を感じた。

やがて社長室の扉が見え、その扉の横のデスクでいつもの様にジユデイスが座っているのが見える。

「、？」

人の気配を感じてジユデイスが顔を上げると、案の定驚いた顔を見せた。

「し、社長?! どうして・・・」

「やあ、ジユデイス。相変わらず綺麗だね」

「あ・・・ありがとうございます」

普段と違って今は余裕のない彼は、いつもの挨拶の言葉さえも棒読みになって居る事にジユデイスは気がつかないまま、口をすばませて照れていると、既に彼は社長室の扉に手を掛けていた。

「・・・!、あ、あの!ち、ちょっとお待ち・・・」

すぐに彼の後を追ったが、ジユデイスの話も聞かずに彼は部屋の中に入り、扉から顔を出しながら、

「僕がいつて言うまで誰もココに入れないでね。勿論、電話も繋がらないように。じゃ、よろしく」

「っあ!・・・の・・・」

一方的にそう告げると、無情にもジユデイスの目の前でボタンとその扉は堅く閉ざされてしまい、ガチャリと鍵を閉めた音も聞こえなかった。

ジュデイスは、行き場の無くなった伸ばした手を引っ込めると、首を振りながら又自分の仕事に取り掛かった。

薄暗い社長室

ひんやりとした空気が流れ、なんだか背筋がゾクツとした。心なしか、又どこかで誰かに見られているのかも・・・と、錯覚しそうな程ただならぬ気配を感じる。

いや、ゾクゾクするのは、この部屋の空気のせいじゃない。彼女を長椅子に座らせ、片膝を彼女の横に沈ませながら、ジャケットを脱いでいる彼に対して抱いているものなだと、すぐに判明する事となった。

脱いだジャケットを無造作に反対側のソファーに放り投げ、彼女の目をじっと見つめながらネクタイをゆるめている。

「そ、そのままにしてたら、スーツに皺がついちゃうよ」

何となく居たたまれなくなった彼女は、彼のジャケットをコートハンガーに掛けようと立ち上がるが、すぐに彼に制されてしまう。

両肩を押さえつけられ、もう一度ソファーに座らされると、そのまま彼の下に組み敷かれた。

「・・・っ！」

ボスツとソファーに沈み、思わず目を閉じた。

彼の髪の毛の甘い香りが鼻腔を刺激し、そっと目を開けると薄暗い中でも感じる彼の濡れた瞳に、又背筋がゾクツとする感覚が彼女を襲う。

何の言葉も発せぬまま、すぐに彼の顔が接近し軽く唇が触れ合った。2度、3度と啄ばむようにやさしく口付けられて、その度に漏れる濡れた音が、容赦なく鼓膜を刺激する。

「カナ、会いたかった」

ギュツと抱き締められながら、耳元で囁かれると、お腹の辺りがズクンッと締め付けられるような、軽い痛みが彼女を襲った。

彼の発したその言葉がスタートの合図の様に、一気に深い口付けが彼女の口内を侵し始める。彼女の温もりを感じ取ると、彼女を求めめる彼の劣情が、一気に加速した。

彼の利き手が肌に張り付いたカットソーの裾から侵入し、彼女の白い肌をじかに徘徊する。

「ま、待って・・・」

彼の胸を押し返しながら彼女が起き上がると、先程とは違う彼の顔つきに、どきりと胸の奥が疼いた。ソコにはいつもの柔らかい笑顔も無く、まるで獲物を捕食しようとする様子を伺っている、肉食獣の様な鋭い目つきの彼が居た。

「待てないよ」

今日、一体何度聞いたであろうその言葉が、ついに彼女を陥落させた。

地肌に入り込んだ手が背中に滑り込み、彼の指が器用に彼女のホックを外し、又ソファーに沈められる。首筋に顔を埋めた彼の吐息がくすぐったくて身を擦っている間に、大きな掌が彼女の双丘に触れた。

「いつ…やだ、こんなトコで…。すぐソコにジュデイスさんがいるのに…お願いだから、」

「シート。静かに」

「やつ、…んっ…」

彼女の頼みも聞き入れて貰えぬどころか、黙れと言わんばかりに彼自身の口唇で口を塞がれる。徐々に濡れて行く彼女の紅い口唇にもう抵抗はしないと肌で感じとると、彼は待ちきれずにカットソーを一気に捲り上げて、ソコに顔を埋めた。

大きく深呼吸をした彼の息が胸元にかかり、それが彼女の神経を狂わせる。彼の掌がふくらはぎから太ももを撫でつけて、少し冷えた体を彼の暖かい掌が這い回った。

溜息なのか吐息なのかも判らない甘い息づかいが、彼女の唇から小さく零れ落ち、それらを耳に入れる事が、高みに連れて行くのを助長する。

恥ずかしい筈なのに、もっと、もっと　と、どんどん貪欲になっっていく。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第6話 侵入者

誰も居る筈が無い社長室で、肌を触れ合わせた二人。心も体も蕩けてきたその時、思っても見ない悪夢にうなされる羽目になった。

口の周りに髭を蓄えた男性が、デスクから折り重なっている二人を物珍しそうに、じっと見ている。

これは・・・夢？現実？

一瞬、時が止まったかのように考え込んだが、それは夢ではなかったのだと、次の瞬間に知る事となった。

「久しぶりだな、・・・ジャック」

その人影が声を発し、やはりソコに誰かが存在しているのだと言う事を知らされた。

「・・・つき、・・・」

(きやああああああああああーーーー！！！！！！)

扉の向こうから彼女の悲鳴が響き渡り、すぐ側のデスクで業務をこなしていたジュディスの肩がびくんと上がった。

「……。」

扉の方を見つめ、だから止めたのに、と言わんばかりの顔をして、溜息と共に又頭を横に振り作業に戻った。

さっきまで彼の胸を押し返しても、全く微動だにしなかった彼が一瞬で彼女に跳ね除けられた。体を起こしその声の主の背を向けると、慌ててカットソーをずり下げて、太ももが露になったスカートを生地が破れそうな程、思いつきり膝まで伸ばしている。

“ど、ど、ど、どうして、人が居るの?! 見られた?! きつ、聞かれた?!”

動揺している彼女に、とどめを刺す様な科白が彼の口から聞かされた。

「ブ、ブランドン!! ココで何やってんだよ!? 勝手に入って来て隠れてるなんて……ど、どうかしてるんじゃないか?!」

いつも冷静沈着な彼の動揺の色が隠し切れない。

“……ブランドン、……って確か……、!!”

彼女の動きが一瞬止まり、サーッと血の気が引く音が聞こえそう

な程に、身体が硬直する。

「おい、おい、おい。どうかしてるのはジャック、お前の方だろ？
ココは今は俺が社長だろが？」

椅子に深く背中をもたげ、両手を広げた。

「、っあ・・・」

そう言われてみればそうだったと言いた気な顔をして、彼は口をポカンと開けた。彼の背中に隠れるようにして、背中中のホックを止めようとしているが、体にフィットしたカットソーだと、背中中のホックを留めようとすると上まで捲り上げないと留めにくいのか、ずり上がってしまうカットソーが気になって、中々上手く留める事が出来ず悪戦苦闘した。

「だ、だからと言って、僕達が入ってきた時、すぐに声掛けてくれればいいじゃないかっ！部屋も薄暗いし・・・」

あたかもこんな状況じゃ人が居ないと思うのは当然だと言わんばかりに、彼はブランドンを責め立てる。

「昼寝してたから、気付かなかっただよ」

パチッ

ブランドンが伸ばした手が、デスクにある部屋のライトのスイッチをオンにした。一気に室内が明るくなり、まだホックが留めていない彼女は、更に慌てだす。

「昼寝って・・・仕事中に昼寝なんかするなよ！」

彼女の様子を察した彼は、背で彼女を隠すようにホックを留めるのを手伝っている。

「ああっ！つるせえなあ！俺がいつドコで昼寝しようと、俺の勝手だろ？　　ったく、勝手に入ってきてコトを始めちまう方が、どうかと思うがなっ!？」

その科白を聞いて、二人ともカツと顔が赤く染まった。

さつきまでは薄暗く、顔の表情までははっきり見えなかったのが、明るいライトに照らされた今となっては、表情の変化は一目瞭然だ。

彼に手伝ってもらい、やっと身なりを整える事が出来ても、まとも顔を上げる事が出来ずに両手で顔を塞ぎ、彼の背中に隠れて小さくなっていた。

“ブランドン、・・・彼のお兄さんだ・・・。最っ低！挨拶どころかまとも顔も見れないじゃない！もう、どうしよう・・・早く帰りたいよ！”

いつもと違う位置に留められたホックのせいなのか、それとも今のこの現状のせいなのか判らないけれども、とにかく胸が苦しい。

一体、どうすれば、今のこのありえない状況から抜け出せる事が出来るのか判らず、悶絶した。

L
O
V
E

I
S

M
A
G
I
C
A
L

第7話　渦巻く不安

彼女は彼の背中の後ろで、腕を抱きしめるようにして背中を丸め顔を背けた。薄暗い部屋ではあるものの、裸を見られ、さらには、自分が喘いでいる姿を見聞きされたのだから無理も無い。赤の他人に、自分のそんなあられもない姿を見られる日がやってくるとは、夢にも思わなかった。

穴があつたら入りたい。

まさにこの言葉が、今の彼女には一番しっくりくる。普段の彼女なら、強く拒否できるはずなのに、彼女も又、彼との再会で心が浮ついていたのか、ここは彼の職場だと言う事を、どこかに置き去ってしまっていた。

ブランドンの視線が、彼からその後ろに隠れるようにしている彼女に注がれる。上から下まで舐めるようにして見定めた後、とんでもない言葉を浴びせられた。

「・・・ところでジャック。女を買うならもつと金をだせよ、ケチるな」

“っ?!”

ジャックに話しかけてはいても、自分に対しての印象を遠まわしに言われているのだと知り、肩が大きく震える。

「なっ！何を言ってるんだ?!彼女はそんなんじゃない!」

「なんだ?コールガールじゃないのか?んじゃ、その女はお前の何

なんだ？まさか、その辺で拾ってきたとか言うんじゃないだろうか？」

立て続けに彼女を侮辱するブランドンに、彼女は反論する勇氣も無かった。元々住む世界が全く違う二人の事だ、少々のことがあつてもくじけない強さが、いつの間にか備わっていた。

・・・と言うよりも、今はそれ所じゃないだけの様だが。

「彼女は・・・僕の大切な人なんだ。いずれ時が来たら、ブランドンにも紹介しようと思つてた」

「大切？ お前、カレンは・・・」

「っ！ Hey!!」

ブランドンがカレンの話を持ち出したと思つたら、彼は血相を変えて急に英語で話し出した。

彼とブランドンの間で、延々と繰り返される英語での会話。彼女にはれない様にする為にか、難しい単語を使っている様で、二人の話しを聞き取るのは容易ではなかった。

“ 何で急に英語でなんか・・・ ”

立ち上がってデスクに両手を付き、時々握りこぶしを作っている彼の背中を見て、ドコか遠い存在に思えてくる。

またか、と彼女は溜息をついた。

彼と離れていると会いたくて仕方無いのに、側に居ると遠く感じる。彼からは言葉と態度で愛を与えられていても、彼の周りの誰か

によつてすぐに不安にさせられる。その度に、彼は自分とは違つ位置に立っている人なのだと思感させられて来た。

1年の月日が経とうとしても、あいも変わらぬ現状に溜息が溢れ出す。

「まっ、とにかく」

ブランドンがデスクに手をつきながら、すつと立ち上がる。

「俺は今からちよつと出てくるから、しばらくここ使つてもいいぞ？
ただ、後始末だけはちゃんとしてくれよな」

「ブ、ブランドンッ！！」

意味深に笑いながら、彼の肩をポンツと叩いて通り過ぎて行く。扉から出ると、閉める間に、

「じゅっくり」

「・・・っ、」

そう言いながら、やっと顔をあげる事が出来た彼女へウインクをして、扉をパタンと閉めた。

似ている。

雰囲気こそは違えど、やはりそこは兄弟。背格好もそうだが、目元なんかは彼と瓜二つで、ウインクをする仕草でさえも酷似していた。

彼が落ち着かない様子で彼女の隣にボスツと座ると、膝に肘をつき拳で手を叩いている。

「あの、・・・ごめんなさい」

彼の性格を考えればこうなる予兆はあったのに、彼女は気付かぬ振りをした。心の何処かで淡い期待をしていた事に責任を感じ、こんなお披露目になった事を詫びるつもりで、そう言つと、彼女の言葉にハツとした彼は、俯いている彼女の顔を覗き込んだ。

「え？何で君が謝るの？カナは何も悪くないよ。　、謝る

のは僕の方だ、沢山嫌な思いをさせてしまつて・・・」

「そんな事・・・」

全く無いと言えば嘘になる。しかし、今の彼女には何て言っているのか判らなかつた。

彼の目を見ることが出来ず、俯く彼女。膝の上で重ねられた両手に、そつと彼が自分の手を重ねると、もう一方の手で彼女の頭を抱き寄せてこめかみにキスをした。

「ごめんね、彼の言った事は気にしないでいいから。　その、・・・

・カレンの事も含めて・・・」

言い辛そうにそう言つた彼が、どんな顔で言っているのか見てみたくて顔を上げる。

彼女の事を心配して、眉尻を下げてしている顔を見ると、いつまでも塞ぎこんでいては彼を不安にさせると思い、笑顔を見せてコクンと頷いた。

徐々に笑顔を覗かせる彼の重ねられた手が暖かくて。

彼の優しい言葉が嬉しくて。

伏目がちにした臉と共に近づいた唇に、そっと自身の唇も重ねた。

ガチャッ

「?!」「っ!」

突然扉が開き、二人は咄嗟に距離を取った。扉からブランドンがよきつと顔を出したかと思うと、

「言い忘れたけど、この部屋。俺がこっから居なくなると、アレ」
が動き出すからな?。」

そう言っつて、部屋の天井の角にある、黒くて丸い赤い点滅がついている物体を指差しながら、首からぶら下げたIDカードをちらつかせた。

「んじゃ」

それだけ言い残して、ブランドンは飄々と部屋を出て行った。

「　　っ?!そ、そう言っつのは、早く言えっつて、何度言ったらっつ
・!-!」

彼が柄にも無く、閉まった扉の向こうに居るであろう兄に対して、声を張り上げた。

LOVE
IS
MAGICAL

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8936u/>

運命の人

2011年11月1日23時58分発行